

朗と讀誦させ、誦誦するまでの愛を起させたいやうな氣もする。

□尙、「奥の細道評釋」(大正拾年七月初版、大同館書店發行)の著者小林一郎氏は、次のやうに言つてゐる。

△陸奥守の秀衡は、一諾を千金よりも重んじて義經を隠し、頼朝の勢力に抗して少しも恐るゝ所はなかつた。翁の性質として秀衡及びその三男忠衡の義勇の行ひに感激し、二十餘里を遠しともせずして、わざ／＼その遺趾を弔つたのは、さもあるべきことである。

△平生杜詩を愛誦して止まなかつた翁が、藤原氏三代榮華の趾を弔して、山河の勝は昔のまゝでありながら、城は空しき廢墟となり、勇士の功名も昔の夢となつたのを見て、「彼の國破れて」の名句を思ひ寄せて、この一段の妙文字を成し得たのは、その謂はれあることである。字句の上に何等の修飾も加へてはないが、精神氣力充ち満ちて、幾度誦するも飽くことがない。「夏草や」の一句また感慨無量、翁の集中屈指の佳句であらう。曾良のは、師の句に比べて著しく見劣りがするやうである。

□編纂の用意の條に述べたやうに、俳文はすべて、淡雅、勁健、輕妙、簡潔等の諸要素を具へてゐるが、この文は、わけもそれらの要素を多分に含んでゐる。今そのおもな部分を左に述べよう。

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。隠喩を用ひたところ、文にそれだけの強さがあらはれてゐる。

余もいづれの年よりか……杉風が別墅に移る。

この長いものがわづか二文になつて、緊迫した文章で、全くポーズをおく餘裕のないほど張りきつてゐる。心なき批評家ならば、破格だとか、文法上の誤謬があるとかいふであらうが、それはこの文にあらはれた芭蕉の精神に眼を閉ぢる人である。

十二日平泉と志し、……終に路踏みたがへて石巻といふ港に出づ。

このところ、普通の紀行文ならば、これの數倍にも詳細にうつすべきところを、わづか數語で敍べてゐる。

「人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ路、そこともわかず。」といふが如き、その簡明勁健の筆致、見逃してはならぬ。

「黄金花咲く」とよみて奉りたる金華山……竈の煙立續

きたり。

右の文の如きも、簡潔で雄健、しかも調子輕妙、流るゝが如くである。「黄金花咲く」の引用法も、省略法によつてくゞくしくない。

やう／＼貧しき小家に一夜を明して、明くれば又知らぬ道迷ひゆく。

超俗と徹底との内容が、眞に形式に合して、千金の響きを傳へてゐる。「知らぬ道を迷ひゆく」といふより「知らぬ道迷ひゆく」といふ方が文をひきしまらせ、筆力の強さを示す。常に作句に苦心してやまなかつた芭蕉翁は、助辭の一つをも決して忽せにはしなかつた。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなたにあり。

秀衡が墟は田野になりて、金雞山のみ形をのこす。右は過去と現在、人事と自然との對照。隨つて殆ど對句法に近い。「一炊の夢」の如き句は、省略的引用法。邯鄲の夢、黄粱一炊の夢の故事を説く必要がある。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて、苔

滑らかに……。

多くの道具を極めて見事に排列し、斐然として章をなしてゐる筆力の凡ならざるを看取せねばならぬ。

6 設問

- 1 この文で、芭蕉は幾たび涙を流してゐるか。その涙は各、どういふ風に異なつた涙であるか。
- 2 この文にあらはれた芭蕉の人格について語れ。
- 3 また、俳諧的趣味では如何なる方面が最もよく表れてゐるか。
- 4 旅の心細さ、或は旅愁といふことの窺はれる語句をあげよ。
- 5 特に巧な言ひ方と思はれる箇處はどこか。(引用語は除く)
- 6 「炙する」の「する」を文語として活用せしめて見よ。
- 7 次の語句の意義を問ふ。
イ、光をさまれるものから。
ロ、三代の榮耀一炊の夢。

ハ、閑かさや岩にしみ入る蟬の聲。

7 釋義

出立

【月日は百代の過客にして】 月日は永久に休まず旅をつづけてゐる旅人のやうなもので。

李白の春夜宴桃李園序に「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世若夢、爲歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也。」

【行きかふ年もまた旅人なり】 明けては暮れ、明けては暮れつゝ過ぎゆく年月も、またあけくれ歩みをつづけてゐる旅人のやうなものである。

【舟の上に生涯をうかべ】 一生を舟の上で送るもの、即ち船夫などの生涯をいふ。

【馬の口とらへて老を迎ふるもの】 馬方などして一生を送る者をいふ。

【古人も多く旅に死せるあり】 このいはゆる古人は、殊に旅を好んだ旅行詩人、即ち日本でいへば西行・宗祇、支那では李白・杜甫などをいふのであらう。

【片雲の風にさそはれて】 片雲(ちぎれ雲)が風にさそはれて西に東に流れたとようてゐるのを見て、おのづから、さうした定めぬ旅をすることに興味を感ずるに至つたことをいふ。

【漂泊の思】 ヘウハクのおモヒ。あちこち、あてどもなくさまよひ歩きたいものだといふのぞみ。

【海濱にさすらへ】 うみばたをさまよひあるき。

芭蕉は、前年二月伊賀の上野に歸郷し、三月吉野に遊び、高野山・和歌の浦に至り、四月須磨・明石に遊んだ。これまでの紀行を「吉野紀行」といふ。その後大阪・大津・岐阜にいった。七月鳴海に遊び、名古屋にとどまつた。八月名古屋出發、更科・姨捨山の月を賞て、善光寺に詣で、九月江戸に歸つた。この信州行の紀を「更科紀行」といふ。右の如く芭蕉は、七月以前には諸方の海濱に遊んでゐる。

「さすらふ」とは、よるべなくさまよふこと。さまよひあるくこと。流浪。漂泊。遊離。

源平盛衰記卷七、成親卿流罪の條に「知らぬ國、なら

はぬ旅にさすらひつゝ。

【去年の秋】 コゾのアキ。前年(元祿元年)の秋九月。この月、芭蕉は信州の旅から歸庵した。

【江上の破屋】 カウジヤウのハラク。大川のほとりの粗末な庵。こゝは隅田川のほとりなる江戸深川の芭蕉庵をさす。芭蕉が門人杉山杉風の別宅をゆづりうけたもの。今の東京市深川區萬年橋の東南、即ち西元町の西部あたりにあつたといふ。



芭蕉の甲子吟行に

「貞享甲子秋八月、江上の破屋を立ちいづる程。」

江戸名所圖會卷十八に「同じ橋萬年橋の北詰、松平遠州侯の庭中に在りて、古池の形今猶存せりといふ。」とある。

【蜘蛛の古巢を拂ひて】 久しぶりにもとの家なる芭蕉庵に

歸つたこと。巧みな筆である。

【やゝ】 やうく。

【春立てる霞の空に】 春になつて、霞の立つ頃に。

「立てる」は「春立てる」(春になつて)を「立てる霞」にかけたのである。

【白河の關】 昔福島縣西白河郡古關村大字旗宿の邊にあつた關。白河町の東南約三里。允恭天皇の頃陸奥の蝦夷に對する防禦として菊多剋(キクタノセキ)と共に設けられた軍事上の剋であつたが、承和二年(一四九五)に至り、奸偽の徒の陸奥國に逃入するを防ぎ、又俘囚の出入を取締らうとして通行人をも檢判勘過することとなつた。かくて、關として相當の効果を收めたが、律令政治の衰滅と共にその實を失ふに至つて、終に名のみを止むることとなつた。隨つて芭蕉の時代には全く荒廢してゐた。

【そゞろ神のものにつきて】 そゞろ神が、わが身にとつていて。

笠や杖などを見ても、そゞろ神がのりうつつてゐるやうに思はれるのである。

「そとろ神」とは、何となく人の心を誘惑する神。
「ものにつく」とは、もののけに憑(ヨ)りつかれること。
「もののけ」とは、死霊・生霊などのたゝること。又そのたゝり。

【道祖神】 ダウソジン。路上の悪魔をはらうて旅する人を守護する神。みちのかみ・さへのかみ・くなどの神・ふなどのかみ・たむけのかみ・だうろくじんなど多くの異名がある。伊弉諾神が、黄泉の國から逃げかへりますとき、追及して来た黄泉醜女に投げつけたまうた杖から生れました神であるといふ。

【股引】 モ、ヒキ。兩の股まで、膚につけて、足を通して穿(ハ)く狭い筒状の服。

【三里】 サンリ。灸點の名。膝頭の下の外側のや、凹んだところ。こゝに灸をすると、足が軽くなつて、歩行がらくになるといふ。

甲陽軍鑑卷十一、上に「すねの三里に灸をおろし申し候。」

【灸】 キウ。漢法の手術の一。もぐさを肌に點し、これに

火をつけて灼(ヤ)き、その熱氣によつて病氣を治療すること。きうてん。やいと。



【松島】 宮城縣松島灣内に散在する大小百有餘の島々及び灣岸一帯の景勝地。古來日本三景の一としてその景致を誇つてゐる。島々の周縁はすべて斷崖で、水面に接するところに深い凹入があり、その甚だしいものは洞門石柱の奇觀を呈する。岩上には青松が茂り、岩石の色が碧瑠璃の海波と相映じて、眺望が限りなく廣い。中にも全景を一眸のうちに收め得る好位置として、富山・扇谷山・多門山・大鷹森及び新富山の五箇所が數へられる。これを松島の五大觀と稱する。

【心にかゝりて】 氣になつて。芭蕉は心の中で既に松島の月景色を想像してゐるのである。

【住める方】 今まで住みつゞけたところ、即ち芭蕉庵。

【杉風】 サンブウ。杉山氏。名は元雅。通稱鯉屋市兵衛。

別號採茶庵・五雲亭・茶舎・養翁・養杖・鶴步・一元等。江戸

朝虎や

杉風

代々の日く暮

在乃出ま



の魚問屋に生れた。生來聾であるため、芭蕉に就いて俳道を學び、蕉門十哲の一

人となつて、芭蕉から東三十三箇國の俳諧奉行と呼ばれた。深川の芭蕉庵はじめその別荘であつた。享保十七年(一七三九)歿。年八十二。一説に七十八、又八十三であつたともいふ。

【別荘】 ベッシヨ。しもやしき。別荘。別宅。こゝは杉風の別荘なる採茶庵をいふ。

晋書の謝安傳に「與幼度圍碁、賭別墅。」

【草の戸も住みかはる代ぞひなの家】 この句にはいろ／＼の説があるが、左に萩原井泉水の句評を紹介する。これ

が妥當の見方であらうと思ふから。

「……さてそこに親しくはいつた人は、娘をもつてゐたと見え、時も丁度三月の節供に近いことなので、雛段をこしらへて、それが戸から覗くともなく見えたのであらう。それほど庵は狭くて、表も裏もないやうな草の庵なのである。かうした草の庵でも暫くは自分の栖かと思つてゐたのに、結局はそれも人に譲るやうな事になつた。人生は本當に旅だといふ氣持はこゝにもある。而して移つて来た人は自分のやうな世を捨てた侘人かといふに、さうではなくて、雛などを飾つてゐる。冬枯の野に春が来たやうな、さうした思ひがけぬ變化もやはり自然なのだといふ氣持もある。私はこの句の出來た動機をこゝに見たい。「住みかはる代ぞ」といふ強い言葉に人生に對する氣概がにじみ出てをり、その住みかはつたものは何かと思ふと「雛の家」だといふので、その明るく、軽く轉ぜられたる調子に、「自然に對する微笑がにじみ出てゐる。云々」

【表八句】 オモテハック。俳諧(連句)を書く懷紙の第一面

を表といふ。この第一面には、五十句以上の場合には、八句を記すのが例である。こゝは「草の戸を」の句をこの紀行の第一に吟じたので、あたかも連句の表八句の第一にあたるものであるから、かういつたのである。

【彌生も末の七日】 ヤヨヒもスエのナヌカ。東山天皇の元祿二年（二三四九）三月二十七日。

【彌生】は「イヤオヒ」の約。陰曆三月の稱。草木のいよ生ひ立つ月の義。

神武紀に「乙卯年春三月（ヤヨヒ）」。
古今集、春上に「やよひにうるふ月ありける年」。

【末】は下旬。中旬を「中」といふに對する語。

【曙の空】 アケボノのソラ。夜あけがたの空。

「曙」は、夜がほのくくと明けようとする時。しら／＼あけ。しのゝめ。

枕草子卷一に「春はあけぼの、やう／＼白くなりゆく。」

【朧々として】 ロウ／＼として。おぼろにかすんで。うすぼんやりとかすんで。ほんのりとして。

「朧々」は、又オボロ／＼ともよむ。意味は同じ。

吳融の詩に「非明非暗朧々月。」

源平盛衰記卷二十八、仙童琵琶の條に「暮春三の夜を相待つ處に、朧々として片雲無く。」

言繼集に「見渡せばおぼろ／＼とたちくるも消ゆるもわかぬ薄霧のそら」

【月は有明にて】 月はなほ夜ふけの空にのこつてゐて。

「有明（アリアケ）」とは、夜が明けても、なほ空にのこつてゐる月。陰曆十六日以後の月。残月。

萬葉集卷十に「白露を玉になしたるなが月の有明のつくよ見れどあかぬかも」

【光をさまれるものから】 月の光は消えてはゐるが。

「をさまる」とは、消えてなくなること。

源氏物語の柏木の卷に「月は有明にて光をさまれるものから、かげさやかに見えて。」

「ものから」は「ものながら」ではあるけれどもの意。

【幽かに見えて】 うつすらと見えて。

「幽か」は、しかとみとめ難きほどなること。ほのか。ほ

んのり。

源氏物語の明石の卷に「鹽やく烟かすかにたなびきて」

【上野】 ウヘノ。今の東京市下谷区上野公園の地。丘陵をなし、不忍池を控へ、寛永寺の所在として、又花の名所として古より知られてゐた。芭蕉の句に、

花の雲鐘は上野か浅草か

【谷中】 ヤナカ。上野の岡から西北につゞいてゐる地。今の下谷区谷中町あたり。こゝにも感應寺（今日の天王寺）があつて、花木が多かつた。

【花の梢】 櫻の花の梢。單に花といへば櫻をさす。

【又いつかはと心細し】 「またいつかは見ることを得んと心細し。」の略。

【睦まじきかぎり】 親しい間柄の人々は悉く。

【宵よりつどひて】 前夜よりあつまつて。

【千住】 センヂュ。今の東京市足立区千住町。荒川（隅田川の上流）の岸にあつて、江戸の東北郊に當る。舊幕時代は奥州街道の宿場として繁榮してゐた。今もなほ蔬菜その他の市場として賑はつてゐる。

芭蕉の草庵は、隅田川のほとりにあつたから、舟で隅田川を千住まで溯つたのである。草庵から千住まで、舟行で約二里半。

【前途三千里の思】 ゆく旅の空の遼遠なことを思つて、心に不安を感じることをいふ。

「前途」はゆくさき。ゆくて。前程。

大江朝綱の詩に「前途程遠、馳思於雁山之暮雲。」

「三千里」とは、前途の極めて遠いことを數字であらはしたるもの。

【幻の巻に】 マボロシのチマタに。幻のやうにはかない人生のわかれ路に。

幻は、眼前にあるやうに見えて、忽ち消えうせるもの。

【行く春や鳥啼き魚の目は涙】 萩原井泉水の評釋を左に掲げよう。

留別の句である。「鳥」が誰「魚」が誰と、はつきり喩へたのであるまいが、「鳥」は三千里の外まで飛んで行かうとする自分「魚」はそれを送つてゐる門人に比したのであらう。「鳥啼き」であつて「鳥泣き」とは書いて

越寺の遺趾がある。

ないけれども、下に涙とあるから、啼きは泣きであることとはわかる。別れを惜しんで、鳥も泣き、魚も涙ぐむ。留別の句としては、その感情が餘りにも感傷的に出すぎている爲、そこに一種の誇張味さへついて来る。

【矢立】 ヤタテ。墨壺に筆を入れる筒のついたもの。帯にさしこみなどして携帯用とする。

「矢立のはじめ」は、矢立をとり出して書いたその筆はじめ、こゝでは俳句のよみはじめの義。

【行く道なほ進まず】 名残が惜しまれて、あとをふりかへりふりかへりあるくので、道が一向にはかどらないのである。簡単な句の中に、無限の味がある。

平泉

【平泉】 ヒライヅミ。岩手縣西磐井郡平泉村。北上川の右岸に位し、一關町を距る北方七軒二。鐵道東北線の一驛。今は一寒村に過ぎないが、その昔藤原清衡以下三代の榮華を誇つたところで、その盛時は京都に擬し、結構壯麗を極めたといふ。奥御館・伽藍御所・高館・柳館等の廢墟があり、金雞山麓には中尊寺(金堂・經藏)及び毛



【十二日】 東山天皇の元祿二年五月十二日。

【姉齒の松】 アネハのマツ。陸前國(宮城縣)栗原郡澤邊村大字姉齒にあつた松。名高い歌枕。

伊勢物語に「栗原や姉齒の松の人ならば都のつとにいといはましを」

觀跡聞考志には「古松乃千四十餘年前枯槁。其松五葉。後人緣而所植新松也。」とあり、十符の菅薦に

は「尋ねたれども今はなし。」とある。

【緒絶の橋】 ヲダエのハシ。昔陸前國(宮城縣)志田郡古川町にあつた小板橋。今も町の中にこの橋の名が残つてゐるといふ。

左京大夫道雅の歌に「みちのくのをだえの橋やこれならむふみふますみ心まどはず」

大藪虎亮の「奥の細道新研究」に

あねはの松——これは次のをだえの橋と共に、奥羽街道にあつて、松島から石巻にいく道にはない。即ち松島から平泉と志すならば、道を西北に取つて奥羽街道へ出て、平泉へ進めば、間もなく古川宿に緒絶の橋があり、更に進めば、澤邊宿に姉齒の松があるのである。「平泉と志し、あねはの松、をだえの橋など聞き傳へて」と書いてゐるから、芭蕉はやはり右の名所をこの方向だと知つてゐたのだが、道をまちがへて石巻へ出たのである。又「聞き傳へて」とあるから、芭蕉は實際その地を踏んだのではない。蕉門桃庵が元祿九年にもした奥羽旅行記「陸奥千鳥」には、「行けば澤邊村、十五町南、川向ふにあねはの松あり、即ちこの邊栗原といふ。」といひ、又「緒絶橋、この古川の町中にある。」といつてゐる。以て元祿時代に於ける右二名所の位置を知るべきである。

と説明してゐる。

【人跡稀に】 人のあしあとの極めて少いこと。通行人の極めて稀なことにいふ。

「人跡」は、人のあしあと。人の往来。ひとあし。

史記の秦始皇本紀に「人跡所至、無不臣者。」

源平盛衰記、木曾謀叛の條に「長山遙に連なつて、禽獸猶希に、大河漲り下つて、人跡又幽なり。」

【雉兔芻蕘】 チトスウゼウ。「雉兔」は、雉兔を捕へるもの、即ち獵師。「芻蕘」は、牛馬の飼葉や薪。轉じてそれを採るもの、即ち牧夫・樵夫・草刈男の類。

孟子の梁惠王上に「文王之囿、方七十里、芻蕘者往焉、雉兔者往焉。」趙註に、「芻蕘者取芻薪之賤也。雉兔、獵人之取雉兔者。」

詩經の大雅「詢于芻蕘。」の疏に「芻飼牛馬之草。」説文に「蕘草薪也。」

【そこともわかす】 そこがどこともわからぬ義。はつきりとわからぬことにいふ。

【石巻】 イシノマキ。今の宮城縣(陸前國)石巻市。北上川の河口に位し、南に石巻港を擁してゐる。仙臺市の東

十三里。鐵道東北本線の小牛田(コゴタ)驛から石巻線を通じ、仙臺市からは宮城電鐵の便がある。東奥沿岸海運交通の要衝に當り、商業や水産業が盛である。

古昔は伊寺水門(イシノミナト)と呼ばれ、仙臺領唯一の門港で、その繁盛は時に仙臺を壓するほどであった。日和山公園長濱海岸をはじめとして、名所古蹟に富んでゐる。現時人口約三萬一千。

【黄金花咲く】 萬葉集卷十八、「賀陸奥國出金詔書」歌一首并短歌三首(大伴家持作)の最後の歌、「須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花佐久。」

聖武天皇の天平二十一年、始めて陸奥より黄金を獻じた。天皇は大いに悦ばせたまひ、元を改めて天平感寶元年とし、その金を以て東大寺盧舍那佛裝飾の料に充てさせられた。

その時の宣命に「三寶乃奴止奉天皇命盧舍那像大前仁奉賜都止奏久此大倭國者天地開闢以來黄金被入國獻用言波有聖毛斯地者無物止念都流仁開看國中能東方陸奥國主從五位上百濟王敬福伊部内少田郡仁黄金

在奏氏獻此還聞食驚伎云々」とある。

一首の意は「わが天皇さまの大御代がいよ／＼榮えさせたまふしるしに、あづまのみちのくやまに、黄金の花が咲いた。さて／＼有りがたいことかな。」

【金華山】 キンクワザン。陸奥國(宮城縣)牡鹿半島の南東端近くにある島。石巻港から海路三三軒。東西四軒、南北五軒。全島花崗岩より成り、草木繁茂し、約四百頭の鹿がゐる。島の西部に縣社黄金山(コガネヤマ)神社がある。島の中央部に時つ金華山は海拔四四五米で、頂に大海祇(オホワタツミ)神社の祠がある。太平洋を望んで眺望雄大、奇岩怪石の勝に富む。島の南東端鮑荒崎に燈臺がある。

志賀重昂の日本風景論に、本島について左のやうにのべてある。

西部海岸の一小片は變成的水成岩より成るも、他は悉く花崗岩より成る。古歌に「陸奥山に黄金花咲く」と詠み、島名を金華と喚び、島内に金山彦命・金山姫命を祀るなど、この島は黄金を産出するが如きも、實は然らず。唯花崗岩中に雲母の閃々たるを見て黄金を誤認せしものか。云々
吉田東伍の地名辭書に「金華山を黄金花咲く山といふに附會し

たるは、中世僧徒がこの島を開きて辨財天を祭りし以來の事か。云々。」

【廻船】 クワイセン。「回船」とも書く。旅客や貨物を運送するに用ひる船。廻漕船。

【入江】 イリエ。海又は湖の岸へ入りこんだ部分。こゝは入海。灣。

古事記卷下に「くさか江の入江のはちす花ばちすみのさかり人ともしきろかも」

【人家地をあらそひて】 人家の橋比してゐるさまをいふ。

【貧しき小家】 マドしきコヤ。たいそうみすばらしいあはらや。

【袖の渡】 ツデのワタリ。陸前國(宮城縣)桃生郡橋浦村にあつたといふ船わたし。

新後拾遺集、戀、題不知、相模、の歌に「陸奥の袖の渡りの涙川心のうちにながれてぞすむ」

名跡志に「橋浦袖渡也。河畔有山、曰衣袖嶺。其山下水流稱之淚川。一説牡鹿郡住吉渡口也。今考之、牡鹿

地、無衣袖嶺。想夫此地殆古名蹤歟。」

されど、本文では牡鹿郡の方があつてゐる。尙次の「尾駁の牧」の條に註した「陸奥千鳥」の文を參看せよ。

源重之家集に「阿武隈に霧たてといひし唐衣袖の渡に夜もふけにけり。」とあるによれば、地理が大いに異なつてゐる。

【尾駁の牧】 ヲブチのマキ。陸奥國(岩手縣)南部領に尾駁といふ地名があるが、地理が合はぬ。石巻の東一里に牧山といふ地があつて、眞野に近いから、その邊に小藤の牧といふがあつたかといふ。

後撰集に「陸奥のをぶちの駒も野かふには荒れこそまされなつくものかは」

安永年中の紀行なる「陸奥千鳥」といふ書には「牧山の道、船渡し、このあたりを袖の渡、小ぶちのみ牧。眞野の萱原は牧山のうらにあり、石の巻より一里行きて牧山、云々」とある。

【眞野の萱原】 宮城縣(陸前國)牡鹿郡稻井村大字眞野の地。石巻の東北約六里にある。

玉葉集、夏、草野秋近、前中納言定家の歌に「露分け
む秋のあさはけは遠からで都やいくか眞野の萱原」

【長沼】 陸前國（宮城縣）登米郡新田村の東南にあり、又
新田沼ともいふ。東西一里十二町、南北七町許、佐沼町
の西で、一丘を隔ててゐる。

大藪虎亮の「奥の細道の新研究」に

長沼——沼の名。これは石巻登米（戸伊摩）間にはない。登米
から平泉へと志して今の佐沼町（登米から西へ三里半）を通
して進めば、左方に細長い沼が見える。これが長沼で、面積は
四九七町歩ある。さて石巻から登米に向ふ途中には、廣淵沼
（六六一町歩）を始として大小の沼澤が多いから、「心細き長沼に
沿うて」と漠然と書いたものであらうとも思はれるが、なほ長沼
は固有名詞でもある。登米を戸伊摩と書いたのも文字を忘れた
ので、發音どほり字を當てたものであらう。云々。

【戸伊摩】 トイマ。陸前國（宮城縣）登米郡登米町。北上川
の西岸。この邊は古への登米郷の内である。石巻から約
八里、佐沼から東方三里半。平泉へ志すにしては、迂回
の様でもある。

【三代の榮耀】 サンダイのエイエウ。藤原氏の三代の榮耀

をいふ。嘉保元年藤原清衡は豊田城より平泉に移つた。
爾來平泉は清衡・基衡・秀衡三代の居館であつたが、四代
泰衡に至つて、時に後鳥羽天皇の文治五年（一八四九）源
頼朝に滅された。

【一炊の夢】 イッスキのユメ。次の故事にもとづいて、極
めてはかないたとへにいふ。

沈既濟の枕中記に、「唐の開元七年、道士呂翁、神仙の術を得た
り。邯鄲に遊ぶ。道中の邸舎に息ひ、少年盧生を見る。短褐を
衣て青駒に乗り、翁と言笑す。盧生その衣裳の敝れたるを顧み
て、乃ち歎じて曰く、「大丈夫世に生れて諧はず、困することは
の如し。」と。翁曰く、子談諧方に適してなほ其の困を歎ずるは何
ぞや。」と。生曰く、「吾常に學に志す。自ら惟ふ、青紫拾ふべし
と。今已に壯を過ぎて、なほ賦賦に勤む。困にあらずして何ぞ。
言ひ訖りて目昏み、寐を思ふ。時に主人方に黍を蒸す。翁乃ち
囊中の枕を採り、之に授けて曰く、「子吾が枕に枕せば、當に子
をして榮適志の如くならしむべし。」と。その枕青磁にして、そ
の兩端に窠あり。生首を俛してこれに就く。其の窠を見れば、
漸く大に明らかなり。即ち身を舉げて入る。遂にその家に至る。
數月にして清河の崔氏の女を娶る。女の容甚だ麗しくして、性
質命厚なり。明年進士に擧げられて登第す。褐を釋きて渭南の尉
に轉ず。俄に監察御史に遷り、起居舍人知制誥に轉ず。それより
果遷して同中書門下平章事となる。同列復邊將と交結して不軌

を圖ると誣ふ。制獄に下さる。中官これを保することをなして

死を減じて驪州に投ず。數年にして帝寃を知りて復進めて中書
令となし、燕國公に封ぜらる。五子を生む。孫十餘人あり。後、年
八十を逾ゆるを以て病みて薨す。盧生欠伸して寤むれば、その
身方に邸舎に偃し、呂翁その傍に坐し、主人黍を蒸して未だ熟
せざるを見る。生蹶然として興きて曰く、「豈それ夢寐なるか。」
と。翁生に謂つて曰く、人生の適も亦是の如し。」と。生愴然とし
て良久しうして謝して曰く、それ寵辱の道窮達の運、得喪の理、
死生の情、悉くこれを知る。これ先生吾が欲を窒ぐ所以なり。
敢へて教を受けざらんや。」と。稽首再拜して去る。

邯鄲の夢・盧生の夢・黃梁一炊の夢などいふは、皆これである。
【大門】 ダイモン。總がまへの門。外がまへの正門。總
門。

【秀衡が墟】 ヒデヒラがアト。藤原氏三代の館の址。もと
御所屋敷とも、平泉館とも、又伽羅御所ともいつた。今
平泉停車場の東北にその址が残つてゐる。

「藤原秀衡」は陸奥出羽押領使藤原基衡の子。度量が大きくて、
且沈毅であつた。嘉應二年（一八三〇）鎮守府將軍に拜せられ、
養和元年（一八四一）陸奥守に任ぜられた。平泉盛は秀衡を懐柔
し、その兵を借りて頼朝を伐たうとした。しかし秀衡はこれに
應じなかつた。平泉滅亡の後頼朝と交を修めた。はじめ源義經
が金買吉次に伴はれて奥州に赴いたとき、秀衡は厚くこれを

保護した。後義經が兄頼朝と仲違ひして再び奥州に赴いたとき

これを衣川館に留めて優遇した。文治三年（一八四七）卒。
【金雞山のみ形を遺す】 平泉館の西方、高館の西南にあた
れる假山。昔秀衡は、平泉の鎮護にとて山容を富士山に
擬し、高さ數十丈に築き上げ、雌雄の黄金雞を作つて山
上に埋めたといふ。山の名はこれに基づいたのであら
う。作者の行脚した時代には、その形がまだ存してゐた
やうだが、今は山らしいものはないといふことである。

回郷説には、秀衡が漆一萬杯に黄金二萬兩を混へてこゝに埋藏
したといひ、「朝日さし夕日輝く木の下に漆萬盃こがねおおく
く。」といふ歌を傳へてゐるけれども、もとより附會の説であら
う。山下の東北に熊野神社・金峯山・花館の遠山がある。また山
下の北面に破泉がある。この泉は清衡が盛夏の比、瓜を食はう
として、これを泛べたところだといふ。

【高館】 タカダテ。今の岩手縣陸中國西磐井郡平泉村字高
館（平泉驛の北凡そ六町。一邑の中心にあたり、中尊寺
の東、八町餘を隔ててゐる。）にあつた館舎。一に衣川館
と稱し、俚俗には又判官館ともいふ。もと安倍頼時の築
いた所だといふから、最古の遺跡にちがひない。源義經
の古蹟として有名である。文治中、義經は、秀衡に依つ

て、こゝに居た。同五年閏四月、頼朝は泰衡に嚴命し



平泉よりの高館及び北上川を望む

十間。當時は北上川が東山の麓を流れたやうだが、今はこの館址の下を流れてゐる。

て、義經を討たせた。

泰衡は亡父の遺言を忘れ、義經を

高館に襲つた。義經は

防戦力盡

き、妻子を

殺して自盡

した。館は

東西四百六

十間餘、南

北百三十間

餘、高さ五

地形は山上平坦の處が僅に十間より廿間に至り、東西南北は八十間許、高低三段になつてゐて、西北の高地に義經堂、東南に新山社がある。堂頭は樹木蔚々、堂後は斷崖絶壁、北上川は目の下を流れてゐる。當時東北に館門があり、一士邸があつて、市街に續いてゐたといひ傳へるが、今は殿宇の址もわからぬ。

正面社堂に詣る坂路は急でなく、下れば國道がある。この邊が當時の埤渠だといふ。山腹西に向つて馬場跡がある。新山社の東南麓を柳御所といふ。

辨慶の宅地の址は、高館の北にあるといふが、今は認め難い。同堂址は、中尊寺表坂の下にあつて、今は櫻川茶亭の庭内となる。其處の松を辨慶松といふ。樹下の一碑

色かへぬ松のあるじや武藏坊の俳句は素信の吟である。また南畔の薄墨櫻は辨慶の手植といふが、今のはその枯れた跡に植えた木である。

鈴木宅跡は、高館下の櫻川の下流にあつて、傍に松樹一株、鈴木松といふ。即ち鈴木生害の處と傳へてゐる。龜井塚は高館の西北二町餘の處、龜井六郎望清の墳墓で、

五郡の地に封ぜられて、今の青森縣三戸を居城とした。その後、その領土が廣められたり、狭められたりしたが、秀吉が奥州の封を定むるに及んで、殆ど奥州の北部一帯を南部領となすに至つた。

【衣川】 コロモガハ。平泉村の北を東流して北上川に會する川。長さ約四里。康平年中安部頼時父子の據つた衣川柵は、衣川村字下衣川にある。衣川を隔てて高館の北西一里俗並木屋敷といふ。

【和泉が城】 平泉のうち、秀衡の三男泉三郎忠衡の居つた城。戸河内の東北にある。もと琵琶柵といつた。觀聞志に「琵琶柵址、在中尊寺西、阻于衣川。貞任族兄成道之所、據、而泉忠衡亦居。仍稱三泉城。」

平泉志に「琵琶柵を泉が城と稱して泉三郎忠衡これに居れりと言傳へたり。諸書にこれを評して、東鑑の説に據れば疑なき能はずといへり。忠衡が義經に昵近せしを思ふに、始め平泉館の邊に居り、後こゝに移れるにや。」

【衣が關】 衣が關に新舊二つある。一は白島村（高館の北方）にあつた衣が關で、即ち平泉全盛時代に、南部方面に對する關門として設けた新關である。この關のことは

塚上の松は龜井松といふ。鈴木松と共に後世植ゑたものである。龜井塚の西、増尾權頭兼房の墓標は、高さ三尺餘、幅一尺餘の石塔で、文字ははつきりわからぬ。櫻川は昔の北上川の別稱。安倍頼時が數十萬の櫻を植ゑ、

春時、水面に花を浮べたといふが、歲月の久しき、今は水路が變じて高館の西に及び、櫻川の名は、僅に高館・中尊寺の間に流れる廣さ三間許りの小流に冠せられるやうになつた。

【北上川】 陸中の北境なる御堂山及び北上山から出て、南流して盛岡市を過ぎ、陸前に入り、鹿又附近で二分し、

一は東北に向つて追波灣に、一は南流して石巻灣に入る。（これは伊達政宗の開鑿に係るといふ）平泉附近では、秀衡時代には平泉の東方なる東稻山の麓、即ち今の長部村附近を流れ、平泉の市街は、現今北上川の流域となつてゐる處にあつたといふ。

【南部】 ナンプ。今の岩手縣盛岡市附近から北部にかけていふ。蓋し、南部氏所領の謂である。南部氏の祖光行は

文治五年源頼朝の奥州征伐に従つて功を立て、奥州糠部

文治五年源頼朝の奥州征伐に従つて功を立て、奥州糠部

文治五年源頼朝の奥州征伐に従つて功を立て、奥州糠部

文治五年源頼朝の奥州征伐に従つて功を立て、奥州糠部

有名な永正の古關(大日本史料所載)にも見えてゐる。一は中尊寺の西北にあつた衣が關で、衣川の關ともいふ。安倍頼時時代のもの、即ち舊關である。今もこの邊を關山といふのでもわかる。芭蕉のいふ衣が關は白鳥村にあつた新關であることは、「衣が關を隔てて南部口をさしかため」の一句でよくわかる。

【南部口】 南部方面から平泉へ入りこむ口。「南部」のことは前に出てゐる。

【さしかため】 警備して。警固して。

【夷】 エゾ。昔、奥羽から北海道にかけて住んでゐた人種。古くはえみしといひ、訛つてえびすといひ、蝦夷とも書く。

景行紀に「高夷之中有日高見國。其國人、……是總曰蝦夷。」

【義臣】 忠義の臣。義經の部下なる辨慶・兼房等を指す。泰衡の部下ではない。泰衡は源頼朝に攻められて、仙臺方面から平泉に退却したが、平泉に入ることが出来なかつたので、城に放火して更に北に逃れた。

【すぐつて】 えらびぬいて。よりぬいて。

「すぐる」は、えらぶこと。よりぬくこと。

宇津保物語の吹上の巻に「えらびすぐりたる上手。」

【この城】 高館の城。

【功名一時の叢となる】 「武士等の功名も、唯一瞬に消えうせて、その屍には、今や夏草がむしてゐる。」との意。「功名」(コウミヤウ、コウメイ)は、功を立て名を揚げること。

戰國策、齊に「成其道德、而揚其功名於後世者、堯舜禹湯、周文王是也。」

【國破れて山河あり、城春にして草青みたり】 國は滅びても、山河は依然としてもとにかはらない。城は廢墟になつてゐるが、春の草は、それを知らずかほに青々と茂つてゐる。

こゝは義經の籠つてゐた高館の滅亡をさすのであるが、義經を滅した泰衡もやがて頼朝に滅されて、さすがに全盛を極めてゐた平泉藤氏も滅びたので、その事をも兼ねて、いつてゐるを見てよい。なほこの語句は杜甫の春望の詩「國破山河在、城春而草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心。烽火連三月、家書抵萬金。」

白頭兼更短、渾欲不勝簪。」とあるによつたものであることは勿論である。

【笠打敷きて】 笠を尻にしいて。この一句によつて、芭蕉が夏草の中に、笠を尻に敷いて感慨にふけてゐるさまが、まさしくと目にうかぶ。

【夏草やつはものどもが夢のあと】 「夏草が青々としげつてゐるが、こゝは昔義經の忠臣辨慶兼房どもが功名の夢、それも一瞬、やがて草むす屍と朽ちはてた處である。」との意。義のため、功名のためといつても、要するに一睡の夢に過ぎない。時どり事變すれば、忽ち滅びてしまふ。然るに夏草は、人の世のはかなさをよそに青々と茂つてゐる。人生の夢のみじかく、自然の悠久なることが、十七字の上によみつくされてゐる。

【卯の花に兼房見ゆる白毛かな】 「こゝに咲いてゐる白い卯の花を見てゐると、その昔老軀をひつさけて奮戦苦闘した増尾權頭兼房の白髮姿が髣髴として目の前にうかぶとの意。

兼房の事について、義經記卷七、判官北國落の事の條に、

さる程に二月二日、まだ夜深きに、今出川を出でんしたまふに、西の妻戸に人の音しけり。いかなるものなるらんと御覽すれば、北の方の御乳人十郎權頭兼房、白き直垂に桐の袴着て、白髪まじりの髣髴引亂し、頭巾うち着、一年より候とも、是非とも御供申し候はん。」とて参りたり。北の方、「妻子をば誰に預けおきて來るべき。」とのたまへば、「相傳の御主を妻子に思ひかへ参らすべきか。」と申もあへず涙に咽びけり。六十二になりけるまゝに、よき丈な山伏にてぞありける。

【曾良】 ソラ。通稱は河合宗五郎、後薙髮して宗悟と號した。信濃國諏訪の人。芭蕉に従つて俳諧を學び、その奥秘を極めた。翁の奥羽行脚に同行した唯一の人である。寶永六年(二二六九)歿。年六十一

【かねて耳驚かしたる二堂】 かねて聞いてその華麗に耳を驚かしてゐた經堂と光堂。

【開帳】 厨子のとばりを開いて祓佛等を拜ませること。

【經堂】 キヤウダウ。又、經藏とも、納經堂ともいふ。一切經を藏する堂。中尊寺の經堂は金色堂の西北にある。

天仁元年清衡の建立。もと二階建の堂であつたが、建武四年の火災に上層が焼失したのが、その残基に修繕を加へた。これが今の經堂である。清衡・基衡の納めた經卷は、堂中の八架にあつて、今國寶となつてゐる。

本尊は文珠。なほ附屬の像もある。みな毘首羯摩の作で彫刻精妙、鳥羽天皇の勅願によつて下し賜はつたものだといふ。

【三將】 藤原清衡・基衡及び秀衡。

【光堂】 ヒカリダウ。金色堂の本名。白山社の南にある。

天仁二年藤原清衡の建立。三間四面、中の間七尺二寸、兩脇の間五尺五寸、柱の高さ一丈九寸、内外上下四面悉く龜布を掛け、黒漆でその地を厚くし、金箔を貼り、金色燦爛、光堂の名に背かね。

内部は鑄柱彫梁みな螺鈿珠玉を装ひ、中櫃の四隅には、七寶莊嚴丹青の柱を安置し、三櫃中には藤原氏三代の棺を納めてある。中央が清衡、左が基衡、右が秀衡。秀衡の棺側に忠衡の首桶がある。

鎌倉將軍惟康親王は堂宇の廢壞を憂へ給ひ、正應元年執

權北條貞時に命じて五間四面の套堂を建立させ給うた。以來時の國守が修補を加へたが、寛永初年、後水尾天皇は特に伊達政宗に勅して修復せしめられた。今は特別保護建造物となつてゐる。

本堂の傍に芭蕉の「五月雨の降り残してや光堂」の句碑がある。その他、寶堂以下の數堂がある。

因に記す、經堂も、光堂も、もとは中尊寺内にあつた。中尊寺は建武四年野火に延焼して烏有となつたが、經藏（經堂とは記同じもの）金色堂（これまた光堂と）の二字のみ、無事にたすかつたといふ。

【三代の棺】 清衡・基衡及び秀衡三代の遺骸を入れた棺。

堂の中央一間四方を内陣とし、そこに佛壇がある。その内に清衡の棺を納れ、遺骸を藏し、その後方にあたる左右の間に、各、佛壇があつて、左に基衡、右に秀衡の遺骸を藏してゐる。

【三尊】 中尊阿彌陀如來と脇士即ち側立の觀世音菩薩（右）及び勢至菩薩（左）。

【阿彌陀佛】は西方極樂世界の教主、梵音 Amita（無量の義）は Amitayus（無量壽）及び Amitayus（無量壽）の略。光明と

壽命との無限の意義を含んでゐる。この佛ははじめ四十八願を立て、これに應ずる大行を修し、その願行に酬報して成道したので、これを報身佛とする。四十八願中に至心に信業（シンゲウ）して往生せんと願ふものは乃至十念によつて必ず往生すべきを説く第十八願があり、この本願力によつて凡夫の救済疑なしといふところに他力教又は淨土教は成立する。この佛を主とする經は無量壽經・觀無量壽經及び阿彌陀經の三つである。これを總稱して淨土三部經といふ。

【觀世音菩薩】は梵語 Avalokitesvara（阿縛盧枳低濕伐羅）の舊譯で、一に光世音ともいひ、新譯では觀自在といふ。淨土教では勢至菩薩と共に彌陀の脇侍として慈悲の權化となし、法華經普門品では、この菩薩が三十三身を示現して普く苦惱の衆生を度脱することを説いてゐる。その淨土は南海の補陀落山であるといはれ、十方の國土に身を現じ、衆生がこの菩薩の名號を稱へれば直にその聲に應じて解脱を得しめるといふ。その行化の相形は多種多様で、六道に配して六觀音となる。その他七觀音三十三觀音等の種類がある。

【勢至菩薩】は梵語 Mahastha mahaprayta くはしくは大勢至といふ。「至」は至力の義。觀音と並んで、彌陀三尊の一として阿彌陀如來の右方に立ち、阿彌陀の智慧をあらはしたものだといふ。その像は寶冠の上に寶瓶を載せてゐる。胎藏界曼荼羅では觀音院中の一尊とする。

【七寶】 シツパウ。金・銀・瑠璃・磲磔・瑪瑙・玻璃・眞珠これ

を七寶といふ。但し經文によつて多少異同がある。

【珠の扉】 タマのトビラ。眞珠などをちりばめてこしらへた美しい扉。

【扉】 は戸片（トヒラ）の義。開き戸の戸をいふ。

【黄金の柱】 コガネのハシラ。金箔をはつて美しく裝飾した柱。

【頽廢空虛のくさむら】 荒れはてて、何一つも残つてゐないくさやぶ。

【頽廢】（タイハイ）は、くづれられること。やぶれたれること。

後漢書の翟龡傳に「大學辟雍……頃者頽廢、至爲三國林芻牧之處。」

【四面新に圍む】 伏見天皇の正應元年（一九四三）鎌倉第七代の將軍惟康親王が北條貞時及び宣時に命じて光堂に保護を加へ、鞘堂（覆堂、套堂）を作らしめ給うたことは、前の「光堂」の條にのべておいた。

【藁を覆うて】 イラカをオホうて。

「藁」は屋根に葺いた棟瓦。又、瓦葺の屋根。

和名抄卷十に「蔓、釋名云、尾脊曰蔓(伊良加)。在上覆(蒙屋)也。」

【千歳の記念】チトセのカタミ。センザイのキネン。末長く世につたはるべき遺物。古い記念。

「千歳」は千載とも書く。(一)千年。(二)多くの年月。限りなき歲月。こゝは(二)の意。

淮南子に「鶴壽千歳、以極其游。」

袁宏の三國名臣序贊に「千歳一遇、賢智之嘉會、遇之不能無欣。」

【五月雨の降り】のこしてや光堂。「空かきくもつて降りくらす五月雨の中に立つて、ひとり燦然たる光堂は、さすがの五月雨もよけて降つてゐるやうにおもはれる。」といふほどの意。實際は外に覆堂があり、内に昔時の美観はない。主観的の句と見たらよからう。

立石寺

【山形領】 ヤマガタリヤウ。山形藩。今の山形市地方。當時は堀田正矩の領分であつた。封祿は六萬石。

【立石寺】 リフシヤクジ。又リッシヤクジともいふ。山形

縣東村山郡山寺村山寺にある名刹。寶珠山と稱し、俗に山寺といふ。山形市の東北方三里、尾花澤から羽州街道を南下すると八里、今の天童町に達し、そこから道を東南に折れて行くこと二里にしてこの寺に達する。「その間七里」とあるが、ちと短すぎるやうに思はれる。清和天皇の貞觀二年(一五二〇)、僧圓仁(慈覺大師)の開基に係る。天皇は特に貞觀寺の號を賜つた。降つて佳持圓海のとき、最上義光がこれを中興した。徳川時代には守護不入の靈地に加へ、俗に奥の高野といつた。古來延曆寺の別院として東北に於ける天台宗の巨刹である。奇岩怪石が縦横に起伏し、三奇巖・七瀑・四十八瀑が各所に散在し、堂宇がその間に隱見して、景色が頗るよい。

「陸奥千鳥」に、「寶珠山阿所川院立石寺、(所のものは山寺といふ)城下より三里、慈覺大師の開基。山の頂上より曲峯の立石、碧落に登つて雲頭を踏む。嶮難百折の靈地、仍つて立石寺と名づけたまふ。對面石・文殘堂・藥師堂(毘沙門天・傳教大師)・金銅鑿口(これは守護義光朝臣寄進なり。(清和天皇御廟・三王權現・常行念佛堂(この本尊彌彌陀)・御手洗(即ち阿所川)・御枕石・眞似大師・御手掛石・無手佛、半途に十王・奥院(三十番神十羅刹女)・獨鈷木・骨堂・寶藏・胎内淨・十王堂・釋迦堂・卯の

松・慈覺堂・經堂・五大堂・白山堂・地藏堂・不動堂・十八坊・天狗岩・タチヤ川云々。」とある。

【山寺】 ヤマデラ。山中にある寺院。野中にある寺を野寺といふに對する語。

拾遺集、哀傷に「山寺の入相の鐘のこゑごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」

【慈覺大師】 ジカクダイシ。名は圓仁。延曆寺第三世の座主。下野の人。十五歳出家して最澄に謁し、天台の教義を學んだ。承和五年(一四九八)入唐し、十四年歸朝した。後比叡山を以て天皇の本命道場とし、文殊樓院・法華三昧院・常行三昧院を建立して大師の遺業を完成した。齊衡元年擧げられて延曆寺の座主となつた。貞觀六年(一五二四)入寂。年七十一。顯揚大戒論・守護國界章・法華秀句・法華實相義記等の著作がある。

【開基】 カイキ。佛寺を創建すること。又、その人。開山。

【清閑の地】 きよらかにして、ものしづかな土地。「清閑」は又「清閑」とも書く。

【尾花澤】 ヲハナザハ。今の山形縣北村山郡尾花澤町。附近農村の中心市場。兩羽街道の一驛で、鐵道奥羽本線大石田驛から尾花澤鐵道(二、六軒)を通ずる。越後の高田飛驒の高山と共に積雪の多い所として知られてゐる。

【取つてかへし】 あともどりして。最上川を下るため、尾花澤から西北に進むはずであるのに、立石寺へは、尾花澤から南方へ羽州街道に進まねばならぬので、「とつてかへし」といつたものらしい。

【麓の坊】 山すそにある僧坊。

【坊】とは、僧侶の居所、但しこゝは、參詣者などを宿泊せしめるために、寺院で特に設けた屋舎などをいふ。

【巖】 イハホ。大きな石。萬葉集卷二十に「高山のいはほに生ふる菅の根のねもころく、ふりおく白雪」

「岩に巖を重ねて」と字を異にして書いたのは、「いはほにいはほを重ねて」とよませて、語調を整へたのであらう。「岩」も「巖」も同意で、石の大きいものをいふ。しかし巖密にいへば、「ほ」は秀でてゐる意味であるから、「いは

ほ」は秀でそびえた岩のことである。
【松柏年舊り】 松や柏が、多くの年月を経て、古色をおびてゐること。

「松柏」は、松と、かや。共に常磐木。

論語の子罕に「歳寒然後知松柏之後凋也。」

荀子に「歳不寒無以知松柏之事不難無以知君子。」

【岩上の院々】 岩の上に建てられてゐる多くの寺院。前の「立石寺」参照。

【佛閣】 ブツカク。寺の建物。寺院。佛堂。

白居易の詩に「行行都門外、佛閣正岩臺。」

平家物語卷一、清水炎上に「佛閣・僧坊一字も残さず皆焼拂ふ。」

【佳景】 カケイ。好き景色。

黄庚の詩に「北山佳景勝南山。」

【寂寞】 セキバク。ひっそりとして、ものさびしいこと。寂寥。
楚辭に「山蕭條而無獸兮、野寂寞乎無人。」

【閑かさや岩にしみ入る蟬の聲】 あたり一面がしんとして物静かなので、折柄鳴いた蟬の聲が、かたい／＼岩にしみ入りさうに感ぜられた實景をそのまま句にしたもの。單に蟬の聲と岩とのみならば、暑い感じがするが、「しみ入る」の一語によつて、寂寞の感じをおこさせる。芭蕉佳作の一としてひろく喧傳されてゐる。

金澤

【金澤】 カナザハ。石川縣金澤市。俱利伽羅峠から西南方約五里。縣の中央に位し、犀川に跨る。前田氏百萬石の舊城地で、裏日本の代表的都市である。縣廳・第九師團司令部の外、醫大・四高・高工等の諸校があり、又本願寺別院・尾山神社等の社寺がある。市の中央なる兼六公園は日本三公園の一に數へられてゐる。絹織物・陶磁器・漆器その他の美術工藝品の産地として名高い。

【卯の花山】 富山縣礪波郡藪波村の南嶺で、越中から俱利伽羅越にかゝれば左方に見える山。その東麓に西野尻村があつて、そこに彌勒山安居寺といふ古刹がある。
奥細道、菅菰抄に「卯の花山は、くりから山のつゞき

にて、砥波山の東に見え、源氏が峯とて木曾義仲の陣所跡あり。」

夫木抄に「日かけさす卯の花山の小忌衣たれぬきかけて神まつりけむ。」

【俱利伽羅が谷】 クリカラがタニ。石川（加賀）・富山（越中）兩縣の境にある俱利伽羅峠の山中にある谷の名。峠は海拔二七七米に過ぎないけれども、古來此陸道の要衝とされてゐた。今鐵道北陸本線はトンネルによつて上下を通ずる。壽永二年（一一八四三）木曾義仲が平維盛と戦ひ、火牛の計を以てこれを破つた古戰場である。

【中の五日】 十五日。

【何處】 カシヨ。姓名未詳。

猿蓑集卷二に「病後」と題して「からりふやかしらふらつく百合の花」、同卷六に「里は今夕飯時のあつさかな」の句がある。

なほ一笑の追善の時の句は、次の「追善」の條に見えてゐる。

【それが旅宿を共にす】 その人（大阪より通ふ商人何處）

が、自分（芭蕉）と同宿したといふ意。「それ」は、こゝでは他稱の人代名詞として用ひられてゐる。

【一笑】 イッセウ。姓は小杉、名は新七、一笑はその俳號。

家號は茶屋といつたらしい。加賀金澤の人。高瀬梅盛の門人。元祿元年（一三三四八）歿。年三十六。

【この道にすける名のほの／＼聞えて】 俳諧の道を好んでゐるといふひやうばんが、ちらほらと世に聞えて。

【早世】 サウセイ。早く世を去ること。はやじに。わかじに。夭死。夭折。

左傳の昭公三年の條に「早世隕命。」

東鑑卷十六、建久十年八月十九日の條に「幕下薨去之後、不歴幾程、姫君又早世。」

【追善】 ツキゼン。追薦とも書く。死者の爲に、追ひて善事を修する義。（「追薦」は、死者のために福を薦める義。死者の冥福を祈るため、忌日などに佛事供養を營むことをいふ。）

本朝續文粹卷十二に「待賢門院奉爲三白河院追善。」

「西の雲」（一笑追善の集）に、「行年三十六。元祿初辰霜月六日かかげたる沙草の塚に、身は先達て消えぬ。聞く人哀れがりて泣

きぬる。明けの秋、風羅の翁(芭蕉)行脚の序に訪ひ来ります。ぬしは去りにし冬世を早くすと語る。あはれ年月我を待ちしとなん。生きて世にいまさば、越の月を見ればやとは何思ひけんとなん。泣く／＼墓にまうで、追善の句をなし、回向の涙しほりたまへり。遠近の人集ひ来り、席をならし。各悼二十餘句終りぬ。芭蕉のは「塚も動け」の句、曾良のは「供して詣でけるに、やさしき竹の墓印とて、靡き添うたるもあはれまさりぬ。」と前書して、「玉とそふ墓のかさしや竹の露。」何處のは「常住の蓮もありや秋の風。」と見えてゐる。

【塚も動け我が泣く聲は秋の風】「これ一笑君よ、自分が君の死をいたんで泣く聲は、秋の風のやうに悲壯な響をおびてゐる。君！若し靈があるならば、塚をも動かして来て、我がとむらひのこの一句を聞き給へ。」といふほどの意。

8 通釋

出立

月日は永久に過ぎ去る旅人であつて、去つたり来たりする年も亦旅人である。同じ旅人の中でも、舟の上で一生涯を暮す船乗や馬の口取をして年を寄せる馬方などは、毎日旅にあつて、旅の空をわがすみかとしてゐる。昔の詩人たちのうちにも、旅の空

で死んだものが多い。自分も、いつの年からか、風にたゞよふ雲を見ると、おのづとそれにながひかれて、どうかあの雲のやうに方々をさまよひあるきたいものだといふ氣が起つてたまらなくなつた。

去年(元祿元年)は、春から夏にかけて諸方の海岸をぶらつき、秋になつて、やつと隅田川のほとりの芭蕉庵に歸り、蜘蛛の古巢を拂つて、久しぶりに我が庵に落ちついたが、その年もやうやう暮れて、霞の立つ春になつたところが、白川の關を越えて奥州へいつて見たいといふ心がおこつた。それ以來、そぞろ神(自分をそゝのかす神)が、いつも自分にとりついて、わが心をくはし、道案内の神までも、しきりに旅をそゝのかすので、仕事も少しも手につかなくなつた。そこで、股引のやぶれを繕ひ、笠の緒をつけかへ、三里に灸をすゑて、せつせと旅の仕度をした。さうするうちに、松島の月の景色が先づ第一に心に浮んで来て、立つてもゐてもたまらなくなつた。そこで、いよ／＼思ひきつて、住家を或人にゆづり、杉風の別荘(探茶庵)に引つ越した。して、次の一句をものした。

草の戸も住みかはる代ぞ鎌の家

これを第一句として、次々に餘の七句を書きつらね、表八句を書きそろへて、庵の柱にかけておいた。

三月二十七日、いよ／＼門出することとなつた。折から夜あけの空はおぼろに白み、有明の月の光はもはや消えてしまつてゐたけれども、富士の山はなほかすかに見わたされ、上野や谷中の櫻の梢も、亦ほのかに見えてゐた。それにつけても、自分はいつまた江戸にかへつて、あの山を眺め、この花を見ることが出来てあらうかと思ふと、心細くて／＼しかたがなかつた。親しい人は、皆前の晩から草庵にあつまつて、今朝のいでたちを舟に乗つて一緒に見送つてくれた。千住といふ處で舟からあがると、遙に旅立つ悲しい思ひが胸一ぱいになつて、幻のやうにはかない人の世の別れ路に、訣別の涙をはら／＼流した。かくて、

ゆく春や鳥啼き魚の目は涙

の一句を旅の筆はじめに書きしるして、さて足をはこんだが、心がとかくあとにひかれて、道が一向にはかどらぬ。ふとふりかへつて見れば、見送りの人々は皆途中にたちならんで、こちらに目をつけてゐる。察するところ、わが後姿の見えるままでは、ねんごろに自分たちを見送つてくれてゐるのであらう。

平泉

十二日平泉へと志し、姉齒の松、緒絶の橋などいふ歌の名所を

聞きつたへながら行つたが、何分にも人通りが稀で、獵夫や草刈男や樵夫などしか通らぬやうな道だから、すつかり見當がつかぬ。そして、とう／＼道をふみちがへて、石巻といふ港に出た。昔大伴家持といふ歌人が、みちのくから黄金の出したことをことほぐのあまり、「すべろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山に黄金花咲く。」といふ歌をよんで、これを時の天皇様(聖武天皇)に奉つたと傳へられてゐるその金華山が、遙かあなたの海上に見え、數百艘の運送船が入江に集まり、人家がこみあつて、籠の煙がたちつといひある。思ひがけもなくこんなところへ来たことかな。」とつぶやきながら、どこかに宿を借らうとするけれども、一向にとめてくれる人がない。やつとのことで見すほらしい家に一夜をあかして、あくる日は、又知らぬ道をまよひながら行つた。袖のわたりとか、尾駈の牧とか眞野の萱原とかいふやうな歌の名所を遠く見やりながら、長い堤をあるいて行つた。心細い氣のする長沼といふ沼に沿うて、戸伊摩といふところ。つき、そこに一泊して、その翌日、目ざす平泉に到着した。その間の道のりは、二十餘里もあるやうにおもはれる。

さて平泉へいつて見れば、奥州の藤原三代(清衡・基衡・秀衡)に於ける榮華のあとは一炊の夢のやうに消えうせて、當時の館

の正門にあつたといふ大門の跡は、一里も手前にのこつてゐる。秀衡の住んでゐたといふ伽羅の御所の墟は荒野原となつてしまつて、金雞山といふ岡ばかりが、今なほ昔の形をのこしてゐる。先づ第一に、その昔源義経が籠つてゐたといはれてゐる高館にのぼつて見ると、北上川が眼下に横たはつてゐる。この川は南部方面から流れてくる大河である。衣川は和泉三郎忠衡の立てこもつてゐた城をぐるりととりまいて、この高館の下で、北上川に落ち合つてゐる。秀衡の子泰衡の住んでゐた館のあとが衣が關を隔ててむかふにある。思ふに、彼等はこの館で南部方面の入口を警備して、蝦夷の侵入を防いだらしい。さて彼の義経は、辨慶兼房など忠義一途のけらいどもをえりぬいて、この高館に籠つたが、時利あらず、遂に泰衡に襲はれて無慙な最期を遂げ、その功名の夢は一瞬に消えはてて、その址は今茫茫たる草やぶとなつてゐる。さて、感慨に堪へぬことかな。そこで、自分は「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と唐の詩人杜甫の「春望」の詩を口ずさみながら、頭にかぶつてゐた笠を尻にしいて、時のたつのもすつかり忘れて、懐古の涙を流した。そのときによんだ句は、

夏草やつはものどもが夢のあと
曾良のは

卯の花に兼房見ゆる白毛かな
をりから、かねて聞いてゐる美しさに驚歎してゐた中尊寺の經堂と金色堂とが開帳された。はいつて見れば、經堂には藤原氏の三將即ち清衡・基衡・秀衡の像が文殊の三將に象つて遣されてあり、光堂には、右三代の遺骸を中央と左右との三壇に納め、中央佛壇の上に阿彌陀三尊の像が安置してあつた。堂内に美しく飾りたてられてあつた七寶は散り失せ、珠をちりばめた扉は風に破れ、金箔をおした圓柱は霜や雪に朽ちて、そのまゝにしておけば、やがて草深い廢墟となつてしまふべきところを、成べくさうさせまいとして、堂の四面を新にかこひ、上に蔽ひをして、風や雨を防いでゐる。かやうにして、この光堂は、古い記念物として、こゝしばらくの間は保存されることとなつた。こゝによんだ句は、

五月雨の降りのこしてや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺がある。この寺は慈覺大師の創立されたもので、とりわけ清淨閑寂の靈地である。ちよつとおまゐりしたらどうかと人々がすゝめるので、尾花澤からあともどりして、こゝに立ち寄つた。その間の道のりは凡そ七里ばかりで

ある。

日がまだ暮れないので、麓の僧坊に宿を借りておいて、山上の寺にのぼつた。山は岩石が重なりあひ、松や柏の老木がそびえ、多くの年月を経た土や石が、滑らかな苔にとざされてゐる。仰ぎ見れば、岩の上に立つてゐる数々の佛堂の扉は嚴重にとざされてゐる。そしてあたりがひつそりとして、物音一つ聞えない。

かくて、自分たちは、岩壁をまはつたり、岩を這ひのぼつたりして本堂に参拜した。境内の山水はいかにも美しく、且ものしづかで、わが心のさわやかに澄んでゆくのが、しみじみと感ぜられた。そこで、興にまかせて次の一句をよんだ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

金澤

卯の花山・俱利伽羅ヶ谷を越えて金澤についたのは七月の十五日であつた。こゝに大阪から通つて商ひをしてゐる何處といふものがあつて、自分と同じ宿にとまつてゐた。一笑といふものは、かねてから俳諧に執心してゐるといふ評判がちらほらきこえて、その名を知つてゐる人もあつたが、去年（元祿元年）の冬わかじにをしたからとて、その兄が追善供養をいとなんだ。

そこで、自分も次の一句を捧げて、ねんごろにその靈を弔つた。

塚も動け我が泣く聲は秋の風

9 挿圖

出立 谷口蕪村筆

芭蕉が元祿二年三月二十七日奥の細道の旅に出でたち、千住といふところで船をあがり、いよく見送りの人々に別れて旅に上るときをさまを描いたもので、はるか向ふに見えるものは、いふまでもなく芭蕉と隨行の門人河合曾良とである。こなたで見送つてゐるのは、其角・風雪杉風など、蕉門の弟子どもであらう。

右肩に書いてある文字は、紀行文の一節で、次の通り。

千し（ち）ゆといふ所にて船をあかれは

前途三千里のおもひ胸にふさかりて

幻のちまたに離別の泪をそそぐ

行春や鳥啼魚の目は泪

これを矢立のはしめとして行道なを（は）

すゝます人々は途中に立ならひて後かけの

見ゆるまてはと見送るなるへし

筆者谷口蕪村の小傳は前課「青葉」の條に見えてゐるから、こゝには省く。

首途の芭蕉 小杉未醒筆

奥の細道に「陸まじきかぎりには、宵より集ひて舟に乗りて送る」とある場面を描いたもの。芭蕉と曾良とは、いよ／＼上陸して、見送りの人々と袂を分ち、みちのくの旅にといでたつ。見送りの人々は、舟の中で名残を惜しむ。當時の光景が、さながら目のあたり見るやうに感ぜられる。

芭蕉及び曾良の服装は、谷口蕪村のそれとは多少ちがつてゐる。共に想像の筆だから、いづれを正しいともいひ難い。

筆者小杉未醒は帝展系の畫家で、その獨特の滋味のある畫風を以て知られてゐる。

三尊佛

金色堂(光堂)の中壇に安置されてゐる阿彌陀三尊の像。その左右兩側の像は二天(帝釋天と梵天)、その後方の像は六地藏(延命・寶處・寶手・持地、寶印・堅固意)のうちの若干像である。

「三尊佛」については、「釋義」の中の「三尊の佛」參看。

金色堂一に光堂

藤原清衡がその妻女と共に建立した。伏見天皇の正應元

年(一九四八)、將軍惟康親王は北條貞時及び宣時に命じてその套堂を作らしめ給うた。なほ、釋義の中の「光堂」參看。

立石寺

山形縣東村山郡山寺村山寺にある立石寺の奥院の景。

右の方に見える建物は鐘樓、左の下方に見えるのは佛に手むける關加を汲む井戸であるなほ「釋義」中の「立石寺」參看。

一一 賴山陽

朝比奈 知 泉

1 解 題

「今世名家文」中に入れてある「賴山陽」の評論である。殊にその詩才を稱し、その詩才を十分に發揮し得なかつたことを惜しんだ論である。

「今世名家文」は、明治二十四年民友社の發行で、當時の名家の文を二二篇づつ抄録したもの。中に若干の漢文も交つてゐる。

2 作 者

朝比奈知泉 アサヒナ チセン。

政論家。號は碌堂、知泉はその名である。文久三年(二五二三)水戸に生れた。夙に帝國大學に入つて、政治理財の學を修め、秀才の譽があつたが、在學二年にして退學した。二十一年「東京新報」を發刊し、二十五年「東京日日新聞」の主筆となつた。明治二十七年八年戰役當時は、伊藤博文の顧問となつて、馬關に隨行した。最も議論文に長じ、毎に精勁・雄大の特色を發揮した篇をもつし、ひと頃は徳富蘇峯・陸羯南と相並んで、三大新聞記者と稱せられた。三十八年「日日」の主筆を辭した。曾て歐洲を漫遊し、

3 編纂の用意

大陸の事情にも通じてゐた。

本課は、史筆家として、勤王家として、又詩人として、書家として日本國民の大いなる誇とする賴山陽に對する朝比奈知泉翁の評論文である。その立論の雄大にして堂堂たる、その行文の遒勁にして流暢なる、流石に文壇當年の驍將たる翁の筆に恥ぢない。よろしく精讀心解せしめて、講讀の目的を十二分に達せしめたいものである。

4 要 旨

凡そ文運の振興は、詩人の活動に待たねばならぬ。賴山陽が、我が國近世の文運を振興するに恰好なる時機に遇ひ、且、その任に堪ふべき十二分の詩人的天才を有しながら、その時とその天稟とを思ひのまゝに利用し、發揮することをなさなかつたのは、惜しんでも／＼餘りある

ことであるといふのが、一篇の要旨である。この要旨を把握せしめるのが即ち本課の目的であるが、殊に源平以来、武門驕恣の跡を叙して勤王の士を感奮せしめた山陽、兵児諺に、蒙古來に男兒の意氣を歌つた山陽の詩才と人物とについて考察せしめ、又その詩人山陽に對して熱烈なる同情と愛惜とを感じてゐる作者の力ある筆を十分に味ははしめなければならぬ。

5 概説

第一節（七一頁—七二頁二行） 頼山陽の一生を考へるに、總べてが詩である。性格・實行・著作、皆詩である。
第二節（七二頁三行—末行） 日本外史は一篇の敘事詩であるといふ。

第三節（七三頁） 同じく外史の敘事詩たる所以を論じた。

第四節（七四頁一行—七行） 論策・文章といふもの、亦詩詞のみと評す。

第五節（七四頁八行—七五頁末行） 更に詩そのものに關しては、山陽の自らの持論も彼が詩人たることを證してゐる。これにつけてもその天才を詩作に展ばさなか

つたのは惜しいといふ。

第六節（七六頁—七八頁二行） 山陽の詩人とならなかつたのを惜しむ理由として、その天稟の詩才、その創見的卓識、その尊王愛國の熱情、その經營刻苦の氣力の四項を擧げて説いた。

第七節（七八頁三行—七五頁） 更に山陽が經濟實用を學問の本旨としてゐた常套的思想を遺憾とし、詩の人心を感發すること、到底史に比すべからざる所以を論じ、最後にその師父が山陽をして修史に志すに至らしめたことを歎惜して論を結んだ。

6 取扱上の注意

評論文として立論がいかにも雄大である。山陽に對する着眼も高い。そして行文が明快で、論旨も徹底してゐる。全篇の要旨、その各節についての要旨の如きも、一讀して會得することが出来る。かういふ課は、生徒自らをしてその大意やら論旨やらを把握せしめる教材としても極めて恰好であると考へられる。

部分的に見れば多少の變化はあるが、大體が演繹的論法

で、命題の後に證明的章句が來てゐる。かういふ點にも着眼せしめて、議論文をものする時の一用意とさせるやうにしたい。

内容からいつて、「要旨」にも述べたとほり、この文は要するに、山陽の専ら詩人とならざりしことを歎惜した論である。もし山陽の生前にかういふ論をするものがあつたらば、山陽は何といつたらう。

眞の批評はそれが対象を非難する場合であつてさへ、普通に否定的であるとせられてゐる非難の場合であつてさへ、それが眞の批評である限り、その対象を眞に生かして行く。缺點や弱點を指摘して誤らないとともに、必ずその性質や由来や意味を明らかにすることによつて、既にそこから一層深い境地を指し示す。批評を受ける者に取つては弱みであるが、併し喜びでもある。たゞむやみに痛みを弄ばれ、搔廻されることではなく、その痛みを脱する道が示されるからである。批評はこの場合一面否定であつて、直に肯定である。打つことであつて、同時に培ふことである。暗黒の指摘は即ち明るみに向けることである。批評はこの意味でいつでも必ず光を示し、光に向ける。一つの指し示す力である、動かす力である。批評はいつでも力である、明るみへ誘ひ出す力である。眞の批評はどんな強烈な非難を含んでゐても、必ずその中に新鮮な朝の光を孕んでゐて、

人に眞實と感謝と喜悅とを感じさせる。この力とこの光とを持つたない批評は、眞の批評ではないのである。（大觀—片上伸）
かういふ「生かす批評」の説を讀むにつけても、編者は、山陽の生前に、この課のやうな評論を彼に聽かせてやりたかつたといふ氣がしてならないのである。

尙、原文には序説として先づ徳川末期の文運の趨勢が歐洲第十七世紀末のそれと相似たるを説き、この期に一偉才が出現したならば、我が文學の黄金時代は必ずや三四十十年前に來たであらうと斷じ、次に文運を振興するものは常に詩人である、その振興の任に當るべくして當り得なかつた人は實に頼山陽であると論じて、後にこの課の文に入つてゐる。作者の立論の堂々たる點は、實はその序説から讀んで來なければ十分には理會出來ないのである。

右の序説の部分は次の通りである。

頼山陽

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に在りては、文學再興して、古文辭その盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の

餘習已に脱して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學詞藝その秀を鍾め、その華を競ひたれども、わが近世文學は幾かに萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は獎勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

つら／＼各國文運の振興を考ふるに、その先を作すものは大抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チヨースー・スベンサー・ミルトン・シエクスピアの英文學に於ける、コルネイユ・モリエール・ラシーヌの佛文學に於ける、ゲーテ・シルレル・レッツングの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或はその道に適せず、才或はその志に合はず。是を以てその勢力の及ぶところ局限せられて、未だ文學の全體に向つてその積衰を振ふこと能はざりしを見る。余はかの諸家の外に於て、その才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤りたる爲に日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠する

に絶世絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、「萬能達して一心足らず」といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾てその人とその才とを痛惜せざらばならず。余は今日、世人が猶その人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所なきにしもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更に深く惜しむ所なかるべからず。その人を誰とかする。山陽頼氏はなり。

7 設問

- 1 この論文の主旨を手短に言うて見よ。
- 2 評論文として、この文章から學ぶべきはどういふ點であると思ふか。(この文を讀んで、批評といふものはどうあるべきだと思ふか。)
- 3 この文に現れたところから、作者はどういふ人であると思はれるか。
- 4 作者の情熱のはすんでゐる所は、どういふ句法で知られるか。
- 5 生徒として直に山陽に學ぶべき點は如何。
- 6 次の語の意義を問ふ。
イ、詩は別才なり。
ロ、吟域を撤して諸生を待つ。

ハ、無韻の敘事詩。

ニ、創意の才は刻苦の力と相待つて後始めて絢爛の華彩を發すべし。

7 次の文字の書取。

俯仰低回。感慨淋漓。博引旁搜。造詣。新機軸。意匠慘澹。等々。

8 釋義

【頼山陽】 ライサンヤウ。名は襄、字は子成、通稱は久(ヒサ)太郎。山陽はその號。別に三十六峯外史とも號した。彌太郎春水の長子。安永九年十二月大阪に生れた。資性孝悌にして聰明剛邁。幼より學を好み、博く經史に通曉し、詩文を善くし、書に巧に、卓見博識、自ら一家を成してゐた。父春水が廣島藩の儒員に召さるゝに當つて、江戸に留學し、尾藤二洲の塾に學んで、當時の碩儒に接した。弱冠京にあるの日は、その行動が往々豪放にわたり、一旦國を脱して父の怒に觸れ、終にその家に監禁された。仍つて一切の家累を絶ち、専ら讀書に耽つた。文化六年備後神邊の菅茶山に招かれて、その塾生を監督した。同

八年私に塾を去つて大阪に遊び、ついで京都に卜居し、子弟を集めて學を授けた。初め新町・車屋町・二條等に住んだが、文政六年三本木に移居し、名づけて水西莊といつた。その子弟を訓ふるや、忠孝の道を明らかにし、君臣の分を正しうし、古來の學弊を一洗して士道の推勵に力めた。山陽はかくして世道人心を興起し、皇統の正閏を正し、尊皇卑朝を唱へ、以て天下の統一をはかつたが、當時幕府の權勢がなほ隆盛で、これを實地に發表するところが出来なかつた。そこで刻苦勵精、志を著述に寓し、後人に傳へた。

山陽は又常に名勝古跡を探り、山河を跋渉する癖があつて、到るところ懷を詞藻に寄せた。
著書に日本外史・日本政記・通議・日本樂府・山陽文稿・山陽遺稿・山陽小品・山陽詩抄等がある。就中日本外史は全國の津々浦々に愛誦せられ、尊皇の精神を鼓舞して、明治維新の原動力となつた。
天保三年(三四九二)九月二十三日薨。年五十三。
明治二十四年十二月正四位を追贈せられ、昭和七年更に

從三位を追贈せられた。

【詩は別才なり】 詩は一種特別の才能で、誰でもが容易に上手になれるといふものではない。

陰浪詩話に「詩者別材也、非關書也。」

【詩】は文學の一種。主として情によつて成立ち、律語で書かれる。随つて詩の特質のおもなものは律格であり、その内容は主観的・主情的及び詠歎的である。

詩はその内容によつて抒情詩・敘事詩・劇詩に分れる。漢字で書かれたものは漢詩、散文で書かれたものは散文詩といふ。

詩に長じたものはこれを詩人といひ、詩の形式を論ずる學問はこれを詩學といふ。

詩は音楽と造形美術との中間にあるものとされてゐる。

【詩人は生る成るにあらず】 詩人は天才的のものである。勉強工夫したからとて、とても詩人にはならぬ。

この語は、恐らく西洋語の翻譯であらう。

【東西一般の金言】 洋の東西を通じて一般に唱へられてゐる金言。

「金言」とは、龜鑑とすべき言語。貴重すべきことば。名言。格言。

白居易の寄微之書に「金言自消鑠。」

狂言、箕かづきに「聖賢の金言がある。」

【性格】 セイカク。その人特有の性質。もちまへ。たち。品格。品性。

李中の詩に「性格孤高、世所稀。」

【童歳】 ドウサイ。子供の年頃。幼童時代。

【夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり】 山陽は十三歳の元正に、

「黄鳥啾啾曰載陽。辛盤遙拜向東方。」

霞關應侍春風座。曾否回頭憶故郷。」

の七言絶句を作つて、江戸の邸にある父に贈つた所が、

柴野栗山はこれを見て驚歎し、「千秋子あり。」といつたといふ。江木鰐水の山陽先生行狀に、

「年甫十三、春水先生祇役在江戶。作詩寄之。柴野博士見之大加歎賞。曰千秋（春水字）有子、不教之爲爲實材、乃欲使爲詞人乎。宜使其讀史知古今事。而

史自通鑑綱目始。」

「夙成」は、年若くして老成人の如く、才智のおとなびてゐること。「晚成」の對。

後漢書の袁術傳に「聞幼主明智聰敏、有夙成之德。」

なほ、山陽が十三歳の時の詩として、

十有三春秋、逝者已如水、天地無始終、人生有生死、安得類古人、千載列青史上

といふのが、傳はつてゐる。

【柴野栗山】名は邦彦。稱は彦輔。別號は古愚軒。當時尾藤二洲（良助）、古賀精里（彌助）と共に幕府の儒官として「寛政の三博士」・「寛政の三助」と稱せられた。栗山は朱子學を復興してこれを正學とした功が最も大であるといはれる。文化四年（二四六七）卒。年七十四（或はいふ七十二）雜學類編・聖賢圖像考・資治概言・冠服考證等の著作がある。

明治四十四年六月從四位を追贈せられた。

【北馬南船】 諸方に旅行することをいふ。支那の地、北支那は水利に乏しいから馬背により、南支那は長江をはじめ水流が多いから船による。故にいふ。

【行李卸さざる所なく】 これは旅行中の手荷物、すなはち柳行李の類を處々で卸し、そこに滞留したことをいふのである。

「行李」は、もと使人の意に用ひた。次の例を見よ。

左傳の僖公三十年に「行李之往來。」

同襄公八年に「不使一介行李告于寡君。」

【遊展】 イウゲキ。木屐（木履）をはいて各地を遊歴すること。

「屐」は、木履。下駄。

【畛域を撤して諸生を待ち】 師たる威嚴を持せず、同輩として門弟に接するをいふ。

「畛（シン）」は、井田の間の陌、即ち田圃の小路。故に畛域は界のこと。これを撤するとは、師と弟との界をとりはづしてしまふことである。

莊子に「泛々乎若四方之無窮、其無所畛域。」

山陽は醉餘に乗じ、時に戯にみづから外史を講じたことがある。その時、手拭をもつて鉢巻をなし、はたきをもつて采配となし、かつ説きかつ揮ひ、ほとんど講釋師のやうであつたといふ。これらもその一つであらう。

【禮貌を外にして王公に接す】 禮容を修めずして王公に接すること。

「禮貌」は禮儀を正し、容貌をととのへること。禮儀正しき容貌。

孟子の告子下に「禮貌未衰言不行也則去之。」

日野大納言がかつて都下の諸儒者を招いた時、山陽も招かれたが、固辭して應ぜず、「野人禮にならず、もし野服の出入を許し、賜與の際臣禮に類するなくば、敢へて命を奉ぜん。」といったので、大納言はこれを許した。諸儒が聞いてその傲慢を議したので、山陽は書を作つて宴に赴くを辭した。その辭がますます不遜であつた。大納言はいよいよその不屈を愛し、その後は、ひとりこれを招いて宴を賜うたといふ。

【政記】 日本政記。十六卷。神武天皇より後陽成天皇まで百八世二千年間にわたる漢文の編年史で、山陽晩年の作。要所ごとに自己の議論を載せてある。

【外史】 日本外史。二十二卷。史記の世家を範に取つて、源平二氏より徳川氏までの武家諸家のことを記した漢文の歴史。獨力拮据二十年にして始めて成り、これを家に藏してゐたが、松平定信(樂翁)がこれを聞き、禮を厚う

して稿本を請ひ、はじめて世に公にしたといふ。政記よりも人に知られ、永く天下に愛讀されてゐる。

【平凡】 ヘイボン。つねなみで、少しもすぐれたところのないこと。又そのもの。なみ／＼。平々。平々凡々。

朱熹の齋居感興詩序に「願以思致平凡、筆力萎弱、竟不能就。」

【事實】 眞實の事わけ。實際の事柄。

史記の莊周傳に「率皆虛語無事實。」

【誤謬】 ゴビウ。あやまり。まちがひ。

吳志の章曜傳に「懼有誤謬、數々省讀、不覺點汚。」

【體裁】 テイサイ。又、タイサイ。ありさま。かたち。すがた。

鄧文源の詩に「上下漢唐觀體裁。」

【偏失】 ヘンシツ。中正を失つて、缺點の多いこと。

【筆墨の靈妙活動】 筆がよくまはつてゐること。文章のたつしやなこと。

【天馬空を行く趣あり】 文章の變幻出沒、さながら天馬の羈絆すべからざる趣あるをいふ。

「天馬」は、天上界に棲む馬の義。大宛國より産する非常な駿馬をいふ。千里の馬。

史記の大宛に「名大宛馬曰天馬。」

源平盛衰記第三十五、高綱宇治川を渡る條に「崑山の鬼栗毛も天馬の駒とはやりしかども。」

【敘事】 ジョジ。事實を有りのまゝにのべしるすこと。又、その詩文。

【脈々の餘情】 顯れずして存し、絶えたるが如くにして絶えない情、即ち盡きせぬ餘情をいふ。

「脈々」は、絶えず感ぜられるさま。

溫庭筠の詩に「花情羞脈々、柳意悵纖々。」

【餘情】(ヨジャウ)は、なごりの風情。言外の情趣。餘韻。

何遜の詩に「琴上聽餘情。」

【翳々の餘韻】 デウ／＼のヨキン。細く、長く、絶えようとして絶えない餘音。

「翳々」は、(一)風のそよぐさま。(二)長くしなやかなさま。

(三)音響の長く曳いて絶えないさま。(四)趣味が長くあとまでのこるさま。こゝは(三)(四)の意。

「餘韻」は、残るひびき。餘音。残るあぢはひ。餘情。

蘇軾の前赤壁賦に「餘韻嫋々、不絶如縷。」

【戰爭を敘すれば云々】 日本外史にある一の谷の戦・千劍破城の戦・湊川の戦・四條畷の戦、川中島の戦・嚴島の戦より征韓軍の活躍に關する記事などに至るまで、一として讀者をして汗を握らしめないものはない。

「汗を握る」とは、危急の場合を傍觀して精神をこらすことにいふ。

北條九代記卷二に「宿老たちは皆共に汗を握りて周章せり。」

【別離を敘すれば云々】 主として櫻井に於ける楠公父子の訣別をさす。

「別離」とは、別れること。はなれること。離別。

屈原の九歌に「悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知。」

【敘論】 ジョロン。本文の序言に代ふべき議論。序論。緒論。

こゝは日本外史の卷首にかゝげた論文をさす。

【俯仰低回】 フギヤウテイクワイ。うつむいたり、あをむいたり、ゆきつもどりつしたりして、感慨を催すこと。

【俯仰】は、又「俛仰」とも書く。うつむくとあをむくと。昔家後章に「俯仰天神與地祇。」

【低回】は、又低徊とも、低徊とも書く。心に思ふところあつて、首を垂れめぐらして、ゆきつもどりつすること。

史記の孔子世家に「余低徊留之、不能去。」

【感慨淋漓】 カンガイリンリ。感慨の情が溢れてぼたりぼたりと滴り落ちんばかりなること。

【感慨】とは、物事に感じて慨くこと。

劉楨の詩に「秋日多悲懷、感慨以長歎。」

【淋漓】は、水又は血などのしたるさま。たら／＼。ぼたぼた。

韓愈の詩に「赤龍拔鬚血淋漓。」

【一唱三歎】 イッシャウサンタン。「唱」は「倡」に同じ。「倡」は歌句を發すること。琴音一たび倡へ、三人これに和するをいふ。

禮記の樂記に「清廟之瑟、朱弦而疏越、一倡而三歎、

有遺音者矣。」

但し、今は幾たびも歎賞する意に用ひてゐる。こゝもその意に用ひたのであらう。

【博引旁搜】 ハクインバウサウ。博く諸事を引き、あまねく事實をさぐること。

【博引旁證】といふも、略々同意の語である。

【明證確説】 メイシウカクセツ。明確な證據にもとづいて説き明かすこと。

【了悟】 レウゴ。さとること。がつてんすること。

吳澄の詩に「談邊了悟蟬蛻殼。區中局促鳥在籠。」

【靈動】 レイドウ。靈妙に活動すること。こゝは筆がよくまはつて、文章の巧妙を極めることにいふ。

【感激】 カンゲキ。深く感じ入つて奮激すること。感奮。諸葛亮の出師表に「由是感激、終許先帝以驅馳。」

【正記】 こゝは日本外史の本筋の記事。日本外史編次の大體は左の通である。

- 卷一 源氏前記
- 卷二 源氏正記
- 卷三 源氏正記
- 卷四 源氏後記
- 源氏上
- 源氏下
- 北條氏

【矛盾】(ムジユン)は、事の前後そろはぬこと。自家撞着すること。

韓非子に「楚人有下鬻楯與矛者。鬻之曰、吾楯之堅、莫能陷也。又譽其矛曰、吾矛之利、於物無不陷也。或曰、以子之矛陷子之楯、何如。其人弗能應也。」

【半生】 一生の半ば。

牟融の詩に「爲客囊無季子金、半生踪跡任浮沈。」

【精力】 心身の活動力。精神の能力。根氣。氣根。元氣。漢書の匡衡傳に「尤精力過人。」

【無韻の敘事詩】 ムキンのジョジシ。原文に「無韻の本事詩」とあるのを通俗に従つて改めた。

「無韻」とは、韻をふまないこと。又、その文、即ち散文をいふ。

「敘事詩」は英語 Epic の譯語。詩の一種、抒情詩及び劇詩の對。作者自身の感想を沒却して、主に現實又は假作の事件を客觀的に敘述する詩をいふ。ホメロスのイリアッド、ダンテの神曲の如きは、即ちこれである。

【標準】 ヘウジュン。「標」は木表、「準」は水準(ミヅモリ)の義。めじるし、めあて。まと。

孫綽の文に「信人倫之水鏡、道德之標準也。」

【前後の矛盾を來す】 あとさきにくひちがひが出來て、つじつまのあはぬこと。

卷五 新田氏前記 楠氏	卷十四 德川氏前記 織田氏中
卷六 新田氏正記 新田氏	卷十五 德川氏前記 織田氏下
卷七 足利氏正記 足利氏上	卷十六 德川氏前記 豊臣氏上
卷八 足利氏正記 足利氏中	卷十七 德川氏前記 豊臣氏下
卷九 足利氏正記 足利氏下	卷十八 德川氏正記 德川氏一
卷十 足利氏後記 後北條氏 上杉氏	卷十九 德川氏正記 德川氏二
卷十一 足利氏後記 武田氏	卷二十 德川氏正記 德川氏三
卷十二 足利氏後記 毛利氏	卷二十一 德川氏正記 德川氏四
卷十三 德川氏前記 織田氏上	卷二十二 德川氏正記 德川氏五

日本外史は外形は詩ではないが、精神は立派な詩である、即ち無韻の敘事詩ともいふべきものである。

【論策】 時事又は時政を論ずる文章。時事問題などについて、その策略を論じた文章。

【民政・市糶・水利・邊防】 ミンセイ・シテウ・スキリ・ヘンバウ。民政とは、國政・法政に對して、公共の安寧を維持し、國民の幸福を増進することを主要目的とする政務。

【市糶】とは、米の賣買。轉じては廣く商業をいふ。

【水利】とは、水を使用し利用して、水運を通じ、又は田畑に灌漑すること。

【邊防】とは、邊境の防備に力を用ひること。

【民政】以下は山陽が蘇軾(東坡)の論策に擬して作つた新策の十餘篇の題目である。晩年これを改訂したものが、即ち「通議」である。

【迂疎空濶】 ウツクウクツ。まはりどほくうということ。世情に通ぜぬこと。迂濶。

【比々】 いづれも／＼といふほどの意。

戰國策、秦に「犯_レ自_レ双_レ蹈_レ煨炭_レ、斷_レ死_レ於_レ前_レ者_レ、比_レ々_レ逸、磊落_レ驚_レ人_レ。」

しい觀念を作ること。

【雄健】 ユウケン。たけくすこやかなること。雄大にして剛健なること。

朱熹の許侍郎詩卷の跋に「觀_レ其_レ長篇大句_レ、固_レ自_レ雄_レ健_レ豪_レ逸、磊落_レ驚_レ人_レ。」

【典雅】 テンガ。たゞしくみやびやかなること。たゞしく上品なること。

魏文帝の與_レ吳_レ贊_レ書に「辭_レ義_レ典_レ雅、足_レ傳_レ于_レ後_レ世_レ。」

【遒麗】 シウレイ。つよくしてうるはしいこと。南史の柳惔傳に「惔_レ非_レ徒_レ風_レ韻_レ清_レ爽_レ、亦_レ屬_レ文_レ道_レ麗_レ。」

【輕妙】 ケイメウ。軽くして巧なること。輕快にして妙味あること。あつさりとして面白いこと。

邊讓の章華賦に「美_レ繁_レ手_レ之_レ輕_レ妙_レ、兮_レ喜_レ新_レ聲_レ之_レ彌_レ隆_レ。」

【歌行】 カカウ。行も亦詩の一。白樂天の琵琶行、山陽の大風行の類。文體明辨に「步驟馳騁、疎而不滯者曰_レ行。」漢書の司馬相如傳の註に「師古曰、行謂_レ引_レ、古樂府、長歌行・短歌行、此其義也。」

是也。」

【熱情】 ネットジャウ。熱烈なる情。

【大聲放語】 タイセイハウゴ。大きな聲で、かつてきまなことをしやべりちらすこと。

【精華】 セイクツ。(一)すぐれてはなやかなこと。又、そのもの。(二)きつする。正味。楚辭に「揚_レ精_レ華_レ以_レ炫_レ耀_レ兮。」

【寸鐵人を殺す】 短くて警拔な語句の、人の急處を衝くたとへにいふ語。鶴林玉露に「曾子之守_レ約_レ、寸鐵殺_レ人者也。」

【小品】 セウヒン。「小品文」の略。みじかい文章。世説文學に「有_レ北_レ來_レ道人_レ、與_レ林_レ公_レ相_レ遇_レ。于_レ瓦_レ官_レ寺_レ、共_レ講_レ小_レ品_レ。」

【本質】 ホンシツ。本來の性質。固有の性質。本體。實質。薛直衡の詩に「娥眉_レ非_レ本_レ質_レ、蟬鬢_レ改_レ眞_レ形_レ。」

【想像】 サウザウ。おもひやること。おしはかること。あてずりやう。心理學上では、經驗又は記憶を材料として、心の中に新

【樂府】 ガフ。漢詩の一體。漢の武帝のとき樂府を設け、歌謡を制定してこれを音樂にのぼせたところから、後世、その格調に擬して作つた詩の稱となるに至つた。我が國では白樂天の作が最も行はれたから、直にその作の稱となるに至つた。文體明辨、六に「按_レ樂_レ府_レ者_レ樂_レ官_レ肄_レ習_レ之_レ樂_レ意_レ也。蓋_レ自_レ鈞_レ天_レ九_レ奏_レ、葛_レ天_レ八_レ閔_レ、樂_レ之_レ來_レ尙_レ矣。……今採_レ漢_レ以下_レ諸_レ辭_レ、分_レ爲_レ九_レ品_レ、而_レ別_レ之_レ。」李白にも、古樂府がある。それは古の調をまねて時事を諷詠したものである。山陽にも、日本樂府一卷の作がある。

【史傳】 歴史や傳記。鄭方の傳に「慷慨有_レ志_レ節_レ、博_レ涉_レ史_レ傳_レ。」

【余詠物を欲せず……】 江木鰲水の作にかゝる山陽先生行狀に「余不_レ欲_レ詠_レ物_レ、詠_レ物_レ不_レ若_レ詠_レ史_レ。史_レ中_レ有_レ無_レ數_レ好_レ題_レ目_レ、隨_レ讀_レ淺_レ深_レ皆_レ可_レ成_レ新_レ詩_レ。舍_レ之_レ而_レ曰_レ雁_レ字_レ驚_レ後_レ、無_レ爲_レ也。」

「詠物」とは、鶯・梅・硯・筆・山・水など、何にてもあれ凡て品物を題として詠じた詩をいひ、「詠史」とは、史實を題として詠じた詩をいふ。

「江木野水」名は鶯、字は晉戈、通稱は繁太郎。野水はその號。安藝の人。篠崎小竹・頼山陽に従つて専ら儒學を修め、擢でられ、福山藩の教授となつた。明治十四年（二五四一）歿、年七十二。

【雁字鶯梭】 ガンジアウサ。詩文などの字句を飾ること。

「雁字」は、雁の列をなして飛び行くさまを字と見なしたのである。

蘇軾の詩に「據樓百尺橫、滄海雁字一行書、絳霄。」朱熹の詩に「據鞍又向岡頭望、路日天風雁字斜。」

「鶯梭」は、鶯の枝間を飛ぶさまが機を織る梭（ヲサ）に似てゐるといふのである。

張養浩の詩に「柳岸鶯梭巧織藍。」

また「燕剪鶯梭」などの對語もある。

【持論】 チロン。かねてより主張する議論。固く主持する意見。

漢書の嚴助傳に「朔阜不根、持論上頗俳優者之。」

【その戯に作れる今様】 左の今様歌は山陽の作と稱せられてゐる。

花より明るみ吉野の、春の曙見渡せば、
もろこし人もこま人も、大和心になりぬべし。

「今様」は、今様歌の略。諺物（ウタヒモノ）の一種。弘法大師の「いろは歌」を嚆矢とすると傳へ、平安朝から鎌倉時代に盛に行はれた。歌女・遊女・白拍子等が主にこれを歌ひ、公卿・僧侶にも及んだ。歌體は普通七五調四句。歌想は神・佛・愛情をはじめ種々雑多で、庶民の實生活の描寫にも及んでゐる。歌詞の例、

舊き都に來て見れば、淺茅が原とぞなりにける。
月の光はくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。

（徳大寺實定）

春の彌生のあけぼのに、四方の山邊を見渡せば、
花盛りかも白雲の、かゝらぬ峯こそなかりけれ。

（慈鎮和尚）

【跌宕】 テツタウ。常規にかゝはらぬこと。豪放なること。磊落なること。

蜀志の簡雍傳に「性簡傲跌宕。」

【飄逸】 ヘウイツ。飄然として身を世外におき、俗事にかかはらぬこと。うき世ばなれのしてゐること。

【不群の趣】 フグンのオモムキ。群類にぬきんづるおもむき。多くのものにぬけ出てゐるやうす。

漢書の十三王傳に「夫惟大雅卓爾不群。」

【嗜好】 シカウ。たしなみ。このみ。

韓愈の詩に「嗜好與俗殊酸鹹。」

【馳驟縦横】 シシウジュウワウ。たてよこ十文字にかけまはること。こゝは自由にその得意の筆を走らせることにたとへていふ。

「馳驟」は、はやあしに走ること。

宋史の郭從義傳に「善擊毬、嘗侍太祖于便殿。命擊之。從義易衣跨驢、馳驟殿庭、周旋擊拂、曲盡其妙。」

【奇想を天外に飛ばし】 めづらしいおもひつきを巧に文筆にうつし出すことのとへ。

【拘泥】 コウデイ。かゝはりなづむこと。一つの事に執着して、變通の道を知らぬこと。

程史に「翦々拘泥、不レ得即決。」

【演義述作】 エンギジュウサク。事實を敷衍して、おもしろく述べ作ること。

演義三國志の潘岳の文に「靈壑、川以止、闕、晉演義以獻說。」

論語の述而篇に「子曰述而不作、信而好古、竊比於我老彭。」

禮記の樂記に「作者謂之聖、述者謂之明。明聖者述作之謂也。」

【造詣】 サウケイ。深く學問の奥義を極めること。「造」も「詣」も共に「至る」といふ義。

晉書の陶潛傳に「未嘗有造詣。」

【李北地】 名は夢陽、字は獻吉、北地はその號。別に鯉洞とも號した。明代復古學の大家。詩は何景明と共に李何と並稱せられ、その氣魄の雄大な點に於て、明代第一と稱せられてゐる。

【嚴海珊】 ゲンカイサン。清代の大詩人。浙江、烏程の人。雍正二年進士に擢でられ、累官して雲南知事に進んだ。

乾隆の頃、詩名が大いに高くなつた。

【題詠】 ダイエイ。題を設けて詩をつくり、又は歌をよむこと。

【潛心】 心を一事にひそめること。心をひそめて考へること。

漢書の董仲舒傳に「仲舒下帷發憤、潛心大業、令後學者有所統壹、爲群儒首。」

【好案】 カウアン。よい考案。よい工夫。

【研精】 研究を積んで精微に至ること。

後漢書の盧植傳に「學好研精、不守章句。」

孔安國の尙書序に「研精覃志、博考經籍。」

【心血を傾倒(ケイタウ)す】 心血をかたむけつくすこと。精力のあらんかぎりを出すこと。

【心血】は、精神。精力。氣魄。

【詩賦】 シフ。詩と賦。

「詩」のことは、前に記してある。

「賦」も亦詩の一體。韻語を用ひ、心に感じたまゝを敘するもの。

簡野道明の故事成語大辭典に左の如く解説してある。

「賦」はもと詩の一體にして、韻語を用ひ、直にその事を賦敘するものなり。されども司馬相如が上林・子虛の二賦、揚雄が甘泉賦、班固が兩都賦より張衡が兩京賦、左思が三都賦の如き、歴代の作家多く力を此に用ひ、遂に文の一體となるに至れり。文選に載ずるを見ても、その盛を推知すべし。藝文志にいふ、「不歌而論、謂之賦。登高而賦、可謂大夫。言感物造端、材知深美、可與圖事、故可爲大夫也。」と。蓋し古昔周の盛時に當りては、諸侯卿大夫以下皆微言を以て相感じ、聘問歌詠の事、列國に行はれず、詩を學ぶの士は隠れて民間に在り、而して賢人志を失ふの賦由りて作るあり。楚の屈原忠を含み涙を履みて世に容れられず、耿介の志道るところなく、之を辭に發し、竟に後世賦體の法門を開き、その弟子宋玉の徒、その遺響を嗣ぎて賦體全く成るに至れり。我が國に在りても、貞觀・延喜の盛時の如き、苟も文章を作る者は、皆賦を以て主要とせざるはなし。所謂駢體の文は蓋し亦賦より轉じ來れる者に似たり。後世清の沈德潛が唐宋八家文を撰するに當り、賦を以て古詩の流となしてその撰本に采入せざりしは、頗る古義に合せりと雖も、これを古今に通觀するときは、稍と偏執に失するの憾なき能はず。されども爾來八家の文世に盛行するに隨ひ、賦體の文は漸く衰微に歸するに至れり。

【儼然】 ゲンゼン。「儼然」と通じて用ひる。おごそかなさ

ま。いかめしいさま。

論語の子張篇に「望之儼然、卽之也溫。」

源平盛衰記卷四十、法輪寺の條に「尊相儼然として異香芬馥せり。」

【風靡】 フウビ。草木の風になびくやうに、なびきしたがふこと。

史記の淮陰侯傳に「燕從風而靡。」

史記の儒林傳に「天下之學士、靡然鄉風。」

【僻(ヘキ)して】 かたよつて。偏して。

【固有の天才】 生れながらその身にそなへてゐる才能。

「固有」とは、もとよりあること。自然に所有すること。

孟子の告子上に「仁義禮智、非由外鑠我也。我固有之也。」

「天才」とは、天性の才能。自然にそなはつてゐる才能。

北史の李德林傳に「識度天才、必至三公卿。」

【萎縮】 キシク。なえちぢむこと。なえちぢませること。

【經濟の學】 こゝは經世済民の學、即ち國を治め民を救ふことを研究する學問をいふ。

嚴維の詩に「還持經濟學、來問道安師。」

【功力】 コウリキ。ほねをり。努力。ちから。

「功力」は、別にクリキとよみ、功德の力といふ意味に用ひることがある。

曾我物語卷十、禪師自害の條に「法華經讀誦の功力に
より……安樂世界に迎へ取り給へ。」

などは、後の例である。

【詩才敏妙】 シサイビンメウ。詩を作る才能が極めてさといこと。

「敏妙」は、俊敏で精妙なこと。さとくしてたへなること。

【天稟】 テンピン。天よりうけた性質。うまれつき。生得。天資。天性。

宋史の溫益傳に「從微至著、無片善可紀。至其狡獪傳合、蓋天稟然。」

【新機軸】 シンキチク。新工夫。新考案。

「機軸」は、(一)機關の軸、車輛の心棒など。(二)地球の廻轉する中心となるべき軸。(三)くみたて。計畫。工夫。方法。(四)物事の活動によつておこる中心。こゝは(三)の

意。

【卓識】 タクシキ。他にすぐれた見識。高い見識。卓見。
 【愛情の熱肺腸】 純愛に燃えてゐる肺や腸。熱烈な愛情。
 【面に益(アフ)れて背に淡(アマネ)し】 面にも背にもみちあふれてゐる。全身に充ちあふれてゐる。
 孟子の盡心上に「其生心也、倅然見於面、益於背、施於四體、四體不_レ言而喩。」

【表彰】 ヘウシャウ。あらはしてあきらかにすること。善行などを褒めあらはすこと。
 後漢書の光武帝紀に「感_二致神祇_一、表_二彰德信_一。」

【山陽先生行狀】 サンヤウセンセイギヤウジャウ。頼山陽一生の行事を記した書物。山陽の門人江木鰐水著。

【才子】 才智のすぐれた人。才能ある人。才人。才物。

左傳の文公十一年に「昔高陽氏有_二才子_一八人。」

潘岳の西征賦に「賈生洛陽之才子。」

【我を悉(ツク)さざる者なり】 わが人となりを十分に言ひつくしてゐない者である。

【刻苦】 コクク。たいそう心身を勞してつとめること。苦

勞を積むこと。

宋史の孔文仲傳に「少_二刻苦問學_一、號_二博洽_一。」

【詩稿】 シカウ。詩の草稿。詩のしたがり。

【苦心經營】 クシンケイエイ。こゝは、心を苦しめ、工夫をこらして文章をつくることにいふ。

「經營」は、(一)繩ばりして營み造ること。構へ造ること。(二)工夫をこらして物事をいとむこと。計畫。こゝは(二)の意。

詩經の小雅に「旅_二方剛_一、經_二營四方_一。」

【一句も苟(イヤシク)もせざりし實迹を審かにし】 一句をもなほざりにしないで、その推敲添削に力を用ひた實際の形跡をくはしく知つて。

【古賀穀堂】 コガクダウ。名は燾。穀堂はその號。精里の子。佐賀藩の儒者。はじめ學を父に受けた。ついで父に隨つて江戸に出で、柴野栗山・尾藤二洲・中井竹山・頼春水等と交り、終にこれら名儒とその名を齊しうするに至つた。天保七年(二四九六)歿。年五十九。

【千言立成】 千言の詩文が立ちどころに成る義。詩文を作

ることのたつしやで早いことにいふ。

【敏才】 (一)俊敏な才能。(二)さとき文才。こゝは(二)の意。

【文稿】 ブンカウ。文章の草稿。文章のしたがり。

【依然】 イゼン。もとのまゝなるさま。舊に依つてかはらぬさま。

南史の沈文季傳に「其郡依然猶有_二故情_一。」

【改削】 カイサン。詩文などのよからぬところを改め、不用なところを刪(ケツ)り去ること。詩文を訂正すること。刪正。添削。改竄。

【與し易し】 クミシヤスシ。相手にし易い。恐れるに足らぬ。

【逸事】 イツジ。軼事とも書く。普く知られない人の事蹟。史記の管晏傳に「至_二其書_一、世多有_レ之、是以_レ不_レ論_二其軼事_一。」

【意匠慘澹】 イシヤウサンタン。事物を施爲するにあつてさまざまと工夫をこらすこと。

杜甫の詩に「意_二匠慘澹經營_一中。」

【忍耐】 ニンタイ。たへしのぶこと。こらへること。耐忍。

がまん。

【坐に】 ソマロニ。何といふわけもなく心のすゝむさまにいふ語。こゝは、おぼえず、知らず識らず、などの意。

【景慕】 ケイボ。あふぎしたふこと。仰慕。

梁の簡文帝の文に「矧_二彼前賢_一、寧_二忘_二景慕_一。」

【創意の才】 はじめて物事を考へ出す才能。

【創意】 は、はじめて考へ出すこと。おもひつき。かんがへつき。もくろみ。

【絢爛の華彩】 きらびやかないろつや。りつばな光。

【絢爛】 (ケンラン) は、(一)「きら／＼と光りかゞやくさま。(二)詩歌文章などのみごとに修飾されて立派なさま。こゝは(二)の意。

蘇武の與_レ姪書に「凡_二文字_一、少小時、須_二令_二氣象崢嶸_一、采色絢爛。」

【華彩】 (クッサイ) は、はなやかないろつや。美しいあや。立派な光。

【儒者】 ジュシヤ。儒學即ち支那の孔孟の學を講ずる人。孟子の滕文公上に「儒者之道、古之人若_レ保_二赤子_一。」

史記の汲黯傳に「天下方招文學儒者」

【經義に耽り】 經義の研究に深く心をいたすこと。

「經義」は、經書即ち四書五經などの意義。

漢書の張敖傳に「講論經義」

【章句訓詁の末を争ふ】 文章の眞の精神を求めないで、徒に語句の細事を詮議すること。

「訓詁」(クンコ)は、字句のよみかたや、わけ。訓はよみ、詁は句意。

漢書の揚雄傳に「雄少而好學、不爲章句訓詁通而巳」

後漢書の東平王蒼傳に「蒼上光武受命、中興頌。帝以其文典雅、特使校書郎賈逵爲之訓詁」

【唯一本旨】 ユキイツホンシ。たつた一つの本旨。二つとない根本の趣旨。

【常套を襲ふ】 ジャウタウをオソフ。普通陳腐なことを繼承すること。

「常套」は、つねのしわざ。きまつたかた。ありふれたしかた。

【才幹】 又材幹。(一)事を爲す才能のあること。又、その才能。(二)有爲の伎倆をそなへてゐること。又その伎倆。

史記の淮南王傳に「騎上三下山、若畫材幹絶人」

源平盛衰記卷四、白山神興登山の條に「權中納言匡房は和漢の才幹世にゆるされ」

【吏務】 官吏の職務。又、その職務を執ること。

【區々たる論策】 つまらぬ論策。

「區々」は、瑣細なさま。つまらぬこと。

史記の陸賈傳に「欲以區々之越、與天子抗衡爲敵國」

太平記卷一、玄慧文談の條に「悲しむらくは、公のただ古人の精粕をあまなつて、空しき一生を區々の中に誤ることを」

「論策」の解は、前に出てゐる。

【輟め】 ヤめ。

【名聲】 メイセイ。ほまれ。評判。きこえ。

【一世を鼓舞す】 その時代の人心を上げますこと。

「鼓舞」とは、鼓をうつて舞はしめること、轉じて人の氣

をふるひたしめること。

易經の繫辭に「鼓之舞之、以盡神」

楊子に「鼓舞萬物者、其唯風雷乎。鼓舞萬民者、其唯號令乎」

【維新中興の遠因】 明治維新皇室中興の間接の原因。

「明治維新」とは、慶應三年(二五二七)の大政變をいふ。慶應三年十月十四日、將軍徳川慶喜は内外の形勢を察し、上表して大政奉還を奏請した。明治天皇は直にこれを嘉納したまひ、十二月九日王政復古の大令を發布せさせられた。こゝに於て徳川幕府は十五代二百六十五年で倒れ、さきに源頼朝が武家政治をはじめから六百八十四年で政令が再び朝廷から出ることとなつた。世にこれを明治維新、王政復古又は王政維新といふ。

【中興】とは、盛に興る運にあたること。一説に、一旦衰へたものを中ごろに至つて再び興す意だともいふ。

詩經の序に「任賢使能、周室中興焉」

漢書の宣帝紀に「功光祖宗、業垂後嗣。可謂中興。仲德殷宗周宣」

【感發】 感激發憤させること。感奮せしめること。

【散文】 英語 Prose の譯語。語の數、配列音の抑揚等に何等の制限もなく、表現の自由な文章即ち普通の文章をい

ふ。韻文・律文・詩歌等の對稱。

【敷衍】 フェン。のべひろめること。おしひろめること。

又、意義をのべひろめて他におよぼすこと。

【靈妙】 レイメウ。不可思議にして、はかり知るべからざること。くすしくたへなること。

【史學】 歴史を研究する學問。

宋史の楊億傳に「長于史學」

【小説】 セウセツ。文學の一種。作者の空想によつて事實を構成し、世態・人情・人物の性格等を文字を以て敘した散文體の物語をいふ。

【實錄】 ジツロク。有りのまゝの事實を書いた記録。正實な記録。

漢書の司馬遷傳の贊に「有良吏之名、其文直、其事該、不虛美、不隱惡、故謂之實錄」

【不可思議物】 フカシギブツ。ふしぎなもの。えたいのわからぬもの。珍妙不思議のもの。

【名目】 ミヤウモク。ものごとのとなへ。名稱。稱呼。

【完璧】 クワンペキ。完全にして疵のなき璧。轉じて、指

摘すべき些少の缺點でもない完全な事物。

史記の蘭相如傳の中に、「臣請完壁而還云々」といふ語があるが、こゝにはあたらぬ。こゝはたゞ字の通りに解してよい。

【上乘】 ジャウジョウ。佛語で最上等の意。

傳燈錄に「禪有深淺階級。悟我空偏眞之理。而修者、是小乘禪、悟吾法空所顯眞理。而修者、是大乘禪、若頓悟自心本來清淨元無煩惱、無漏智、不自具足。此心即佛、依此而修者、是上乘禪。」

【純然】 ジュンゼン。純粹で、まじりけのないさま。純乎。

【實材】 經濟實用の事にたけたる材幹。又、その材幹ある人、即ち實際の役に立つ人物。

【詞人】 詞藻に長じた人、即ち詩賦文章に長じた人。「詩人」よりも意味がひろい。

【嘆賞】 「歎賞」に同じ。感心してほめはやすこと。嗟稱。感賞。

唐書の劉仁軌傳に「仁軌之辭、非臣所能、帝歎賞之。」

【春水】 シュンスキ。頼氏。名は惟完、字は千秋・伯栗。

通稱は彌太郎。春水はその號。別に霞崖・拙巢・和亭等の號がある。享翁の子、山陽の父。廣島に生れ、大阪に出て片山北海に學んだ。二十四歳江戸堀に家塾を開

來投多酒一居移日長
老翁以流名其人稱
地乃心及巨海水

き、又詩社混沌社を起して詩文に名聲を馳せた。後程朱學を修めて藩侯淺野重晟の嗣子齊賢の侍讀となり、勤続十一年の久しきに及んだ。その間幕命を受けて書を昌平覺御學問所に講じ、程朱の幽明を發揮して、一時を緊張せしめたといふ。世子が封を襲ぐに及んで、累進して侍臣に班し、俸三百石を給せられた。天性純篤、忠孝を以て自ら任じ、風格峻整、妻子眷屬といへども、未だ嘗てその愴容を見たことはなかつた。しかも人に接するに懇切を極めて、深くその心服を得たといふ。文化十三年(二四七六)二月十九日卒。年七十一。師友志・在津紀事。

東遊紀行・負劍錄・藤衣・竹原文集・春水遺稿等の著作がある。大正四年三月、從四位を追贈せられた。

【時流を脱せず】 當時の風潮から離れないこと。

「時流」(ジリウ)は、(一)當時の一般普通の輩。(二)當時の風潮。

南史の蔡廓傳に「年位竝輕、而時流所推重。」

こゝは(二)の意と見てよからう。

【修史の業】 シウシのゲフ。歴史を編修する事業。

隋唐嘉話に、「不得修國史。」

【再四】 いくたびも。しばしば。たびたび。

普通に「再三再四」と熟して用ひる。

【嘆惜】 歎惜とも書く。なげきをしむこと。非常に惜しくおもふこと。

9 挿圖

頼山陽像

山陽晩年の像である。

頼山陽未定稿

眠驚船底響 寒潮 天宮洋中夜襲 櫻

太白一星光似月

波間照見巨魚跳

山陽先生眞蹟西遊詩

「天草洋」は、長崎縣肥前國天草島の西方一帯の海。

「橈」は、音ダウ。舟のかい。又、さを。かぢ。

「太白」は、金星、即ち明星(ミヤウジャウ)。ことはあけの明星と見るがよい。

一首の意は、「はつと目がさめて見たら、船そのあたりに冬のつめたい潮のさざめきが聞えた。それは、或夜橈(かい)をつないで天草洋上に假泊してゐたときの出来事であつた。ふと見たせば、あけの明星は月のやうにかゞやいて、波間にをどる大きな魚の姿をはつきりと照らし出してゐた。」

山陽先生眞蹟西遊詩は、全一冊。頼山陽が九州に遊び、薩摩國阿久根(阿頼嶺)の河南源兵衛の家に逗留してゐたとき、旅行中に得た詩五十二首を書して與へたもの。明治十九年これを石版刷にして發行した。その詩はいづれも未定稿で、山陽詩抄に載せてあるものとは大いに異つてゐる。

頼山陽筆蹟 前の未定稿が推敲されて定稿となつたものである。

雲耶山耶吳耶越 水天髣髴青一髮 萬里泊舟天草洋 煙
横蓬窓日漸沒 瞥見大魚波間跳 太白當船明似月

この詩は、山陽詩抄に、「泊^ス天草」と題して見えてゐる。「吳」は「越」(エツ)は、共に支那の古の國名。今の江蘇・浙江兩省の地方にあたる。

「水天髣髴」(スキテンハウフツ)は、水か空かの見わけのつかぬこと。

「蓬窓」(ホウソウ)は、船のまど。「蓬」はとま。船などのおほひとして用ひるもの。

「瞥見」(ベキケン)は、ちらりと一目見ること。

「太白」は金星、即ち明星(ミヤウジャウ)。こゝは、宵の明星と見たい。

一首の意は、「ひとみを放つて、ひろくとした海上を眺め渡せば、空や水、水や空とも見わけのつかぬあたりに、かすかに髪一すぢほどの青いものが見える。あれはいつたい雲であらうか、山であらうか、それとも亦支那の吳の地方であらうか、越の地方であらうか。ともあれわれらは今しもこのはてしない天草の海洋に舟がかりしてゐるのである。とかくするほどに、夕けむりが舟の窓になびき横たはつて、日もはや西山に入りかけた。この雄大な景に打たれてあちこちを見わたせば、大きな魚は波間にとびはねて夕方の寂寞をやぶり、よひの明星は月よりも明らかにわれらの船を照らして、實に

いひ知らぬ莊嚴なながめであつた。

一二 水 蓼

萩 原 廣 道

1 解 題

竹柏漫筆に收められてゐる萩原廣道の文を探つた。

本課の教材に對して、同漫筆中の一箇「水蓼」のはじめに次のやうに記してある。

「源氏物語評釋」の著述に努力してゐた萩原廣道は、中風に罹つた爲に、その畢生の精神を注いだ事業も、「花の宴」の巻に止まつて、完結を見ることが出来なかつた。彼は病と窮迫とのうちに世を終へた。その著述は、稿の成るに隨つて出版するといふやうな境遇であつたので、草稿さへも残らなかつたといふのは、まことに遺憾のきはみである。

この「源氏物語評釋」が未完の書ながら、源氏に關する最も秀れた評釋で、不朽の名著たることはいふまでもない。源氏の註釋といへば、誰しも季吟の「湖月抄」をいふが、これは全註ではあるが、創見がない。それは時代の早いにもよるが、主として彼の學風によるのである。それに對して、廣道の評釋は、その總

論及び一卷ごとのはじめに加へた評論は、所謂眼光紙背に徹するといふべきものである。

廣道は、一生を通じて、生活の上からは恵まれた人ではなかつた。文化十二年備前岡山に生れ、藩に仕へ、藤原濱雄といつたが、後故あつて浪人し、大阪に出て、萩原廣道といつて人々を教へ、文久三年に世を去つた。その若かつた頃は、上道郡龍口山の麓を毎日通つて仕へに出た。その頃の事を自ら書いたものに、彼が二十三歳の夏、天保八年に記した「水蓼」といふ文章がある。若くより窮乏の間にも中世の物語ぶみを好み讀んで、その文體に親しんで居つた多感の青年のおもかげが忍ばれるのみならず、その父とたゞ二人のわびずまひに、老いたる父をおもふ切情は、讀むものをして感泣せしめる。こゝにその全文を紹介しよう。

竹柏漫筆 チクハクマンビツ

竹柏園主人佐々木信綱博士の漫筆「國歌君が代と正月元日讀歌」長慶天皇御在位確認の史料に就いて「外六十餘篇と、そ

の夫人雪子刀自の隨筆「西片町より」の短文二百五十篇とを合せて公刊したもの。昭和三年六月、東京、實業之日本社發行。

2 作者

荻原廣道 ハギハラ ヒロミチ

徳川時代の國學者。備前岡山の人。はじめ藩に仕へて藤原小平太濱雄といつたが、やがて浪人して荻原鹿藏と名のり、後また鹿左衛門と改め、霞沼、出石居、鹿鳴草舎、蒜園などと號した。幼時より國書を讀むことを好み、野々口隆正、前田夏繁等の指導を受けつゝ、獨學を以て遂に一家を成した。浪人の後は大阪に住んだ。はじめは北野村に居り、伏見堀に移り、高麗橋に轉じ、次いで江戸堀、心齋橋に卜居し、更に北濱白子町に轉じて、文久三年(二五二三)十二月三日その邸に歿した。年四十九。

著書は、源氏物語評釋、本學提要、心の種、心の種拾遺、小夜時雨、遺文集覽、且爾手波略圖義解、手爾波波保辭辨、萬葉集略解補遺、玉匣補遺、百首意見摘評、古言譯解等、無慮數十種に及ぶ。中でも、源氏物語評釋は北村季吟の湖月抄以來の研究を集大成し、特に總論二卷に於てその所見を披瀝し、最も出色ある好著として世に推されてゐる。又、嘉永二年蒜園散人の名で、曲亭馬琴作の開卷驚奇俠客傳の後をつぎ、その第五輯五卷を著して、往くところとして可ならざるなきその文才に一世を驚かした。

3 編纂の用意

本篇は徳川時代に於ける國學者中の一異材荻原廣道のものとした擬古文である。この種の文は、上級學校の入學試験に應ずるものに取つては特に講讀の必要がある。わけでもこの文は、純正にして典雅、流暢にして平明、その盛るところの内容亦めでたく、寔に文想雙絶とも稱すべき佳篇である。若しそれ廣道が父に對して菽水の歡をつくすに至つた經路並に心境の變化に至つては、誰か強くその胸を打たれぬものがあらう。かゝる教材こそ讀本教材として最も理想的のものである。これ本篇をこゝに採擇した所以に外ならぬ。

4 要旨

水蓼は暑氣を拂ふに効驗があるといひ傳へられる草である。人の親の心は、すでに人並に成長した我が子の上を案じて、その仕事通ひの暑さの途中の用意にと、手づからこれを摘取つて子に與へる。子は父親の心盡しをさほどの事にも思はず、勿體なくも萎れさせた水蓼を、歸途にあやふくも袖の中に見出して、今更のやうに父親の慈愛に泣く。それにつけて、夙くから父の手一つに育てら

れた恩を思ひ、貧しい生計の中の父の苦を顧み、この父に何等報いようともせずして來たわれを反省して、始めて苦しい中から酒肴を調へて、父にまゐらせ、せめても孝を盡くすといふのである。水蓼はその孝心の醞酵素である。孝道への一念發起の契機を與へたものである。その點に着眼して、作者の心境轉向の狀を味讀せしめたい。

5 概説

第一節(八〇頁—八三頁) 天保八年夏の頃、仕へるために一里餘の道を他所に通つてゐた作者は、或日暑氣拂ひの藥として父が手づから取つてくれた水蓼を、何ばかりの事とも思はずながら受けて家を出かける。

第二節(八一頁四行—八三頁) その日の歸途、あまりの暑さに、今朝父から賜はつた水蓼のしをれたのを袖の中から見出して、今更のやうに父の心の有りがたさを思ひつゝこれを食ふ。そして尙も夙くから一人となつた父の我に對する慈愛をおもひ、家計の不如意から時には不平さへも言ひ、酒をたしなむ父を諫めなどした

過去の自分の心根をくやししく思ふ。
第三節(八四頁—八六頁) 更に歸途を御野川まで來て、偶々鱒の大漁を聞いて、それを土産に買ひ取り歸つて料理し、かつ、父に知られぬやうに、單衣を賣つて酒まで買ひ來り、これを父に進らせて、互に楽しく語りひながら盃を取交はし、夕食しつゝ、やがて轉び眠る父を蚊帳の中に抱き入れ、ば、いさゝかはわが心もやはらぐといふのである。

6 取扱上の注意

□この種の文は、作者の如何なる人であるかといふことが相當にわかつてゐなくては興を惹かない。先づ作者の傳に就いて、頭註以上に語りたいものである。

□「親の心、子知らず。」といはれてゐるが、この文では、先づその事實が語られてゐる。「何ばかりの事とも思はずりしかど云々」といふ作者の態度は、後節への伏線としても、輕々に讀ましめてはならない。心ない人の子は、親の心づくしを「何ばかりの事とも」思はぬのみか、却つてそれを恨みにさへ思ふ。そして、それが眞にわかる

時は、すでに報ゆべき親はこの世にないといふやうなことが古來の例である。つまり、「子の心」といふものを、各自に反省させて見るのに、この一節の終は殊に恰好の材料となる。

□「しをれてぞ出で來たる」といふ語は、父親から折角賜つた水蓼を、實は忘れてゐたといふことを表した言ひ方であることに注意させたい。「かくしなぶるまで忘れてはたる心こそは云々」と、後に自らも咎めてゐる。

□「夏の日のあつきめぐみを水蓼の云々」の詠歌を中心として、作者が自らの心を描いてゐるのが、本文での味はひどころである。「親の心」に對して、「子の心」はどうあるのが世間の常であるか、また、どうあらねばならぬかといふことを、一般的に考察せしめたい。

7 設問

- 1 次の語句は如何なる意味か。
イ、はしたなきわたらひわざ。
ロ、忝しとも思ひたらず、なか／＼老人のならひとさへに思ひあさむ。

ハ、心ゆかぬ折々は、いかでかうはなどうちもつぶやく。

ニ、魂きゆる心地して、ほれたるやうにてついゐたるを見そなはず。

2 夏の日のあつきめぐみ……の歌について、特に掛詞を説明せよ。

3 この文の作者の、父親に對する心の變化の著しく表現された點をあげよ。

4 水蓼は、この文の内容に取つて、どういふはたらきをしてゐるか。

8 釋義

【水蓼】 ミヅタデ かはたで。やなぎたで。くれう。蓼科蓼屬の一年生草本。莖の高さ二三尺。分岐が少い。葉は廣披針狀、花序は穗狀で多少下垂し、初夏花を粗生する。本邦各地の水邊に産する。

【天保の八年】 テンパウのヤトセ。仁孝天皇の天保八年。(二四九七)

【はしたなきわたらひわざ】 つまらない世わたりのわざ。

「はしたなし」は、こゝでは、卑しい、淺ましい、つらいなどの意。

伊勢物語に「おもほえず、故郷にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。」

「わたらひ」は、世わたりのための生業、世わたり。なりはひ。すぎはひ。活計。

大和物語卷四に「年ごろわたらひなどもいとわろくなりて、家もこぼれ、使ふ人なども徳ある所にいきつゝ。」

【上つ道の郡】 カミツミチのコホリ 岡山縣上道 (ジャウタウ) 郡。岡山市の東に隣接してゐる大郡。

【龍口山】 タツノクチャマ。岡山縣上道郡高島村湯迫 (ユハザマ) の東北にある小丘。



上道郡の平地を下瞰してゐる。こゝに舊城塞がある。戦國末、宇喜多直家が謀を以て龍口山城主攝所修理亮元常を撃殺したことが備前軍記に見えてゐる。

【まだき】 まだその時期に達せぬ時。こゝは「あさままだき」即ち早朝、未明をさしていふ。

伊勢物語に「夜もあけばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなを遣りつる」

拾遺集、春に「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜のまの風のうしろめたさに」

【歸さ】 カへさ。「かへるさ」に同じ。かへるとき。かへりしな。

枕草子卷三に「祭のかへさ見るとて。」

後拾遺集、春上に「山櫻心のまゝにたづねきてかへさぞ道の程を知らるゝ」

【おとに聞く】 うはさに聞く。おとさたに聞く。「おと」は音。たより。おとづれ。おとさた。風聞。

萬葉集卷五に「おとに聞き目にはいまだ見すさよひめがひれふりしとふきみまつら山。」

【駿河の富士のねの云々】 萬葉集卷三、雜、高橋連蟲麿の詠(長歌)の反歌なる「富士のねに降りおける雪は六月の望に消ぬればその夜降りけり。」の意を取つて書き出でた

ものである。

一首の意は、「富士の嶺に降りつもつてゐる雪は、六月の十五日に消えると、その夜又降つて、千秋萬古、山のいたゞきに雪の絶えるときはない。」

【六月】 ミナヅキ。陰暦の六月。「水無月」の義か。

【望】 モチ。陰暦で月の十五日の稱。「モチ」は「ミチ」の音轉で、月の満ちる日、即ち満月の日を意味するといふ。

爲忠百首に「かぞふればもちに二日は足らねども光は空に満てる月かな」

【道のほど】 道の距離。道の長さ。みちのり。道程。

【あしき氣(ケ)】 からだをそこなふ惡氣。毒氣。こゝは暑さの氣。あつけ。暑氣。

【驗】 シルシ。きゝめ。効驗。

【門邊】 カドベ。かどのほとり。かどわき。

謡曲、西王母に「百官・卿相・雲客……四方の門邊にむらがりて市をなし。」

【ほにいづ】 穂さきに實を結んで引き出でること。又、人目につくやう、外にあらはれ出ること。

古今集、秋上に「今よりは植えてだに見じ花すゝき穂にいづる秋はわびしかりけり」

【よき程に摘みとらして】 いゝかげんの長さに摘み取つて。

【みけしきあしからむ】 御機嫌がわるいであらう。(父がわざわざ手づから摘み取つて、これをもつてゆけとてお授けになつた水蓼をうけとらぬとあつては)

「みけしき」は、御氣色。御機嫌。

伊勢物語に「おほやけのみけしき悪しかりけり。」

【さる面持もせで】 そのやうな(いやなやうな)顔もしないで。

面持(オモモチ)は、おもかけ。かほつき。顔色。

枕草子卷二に「所え、いみじきおももちして、事を行ひなどするよ。」

源氏物語の紅葉賀の卷に「同じ舞の足ぶみ、おももち、よに見ぬさまなり。」

【彼處のいとなみ】 かしこのしごと。自分のつとめさきの仕事をいふ。

【土さへさけて】 餘りの日照りに、大地さへひゞわれてゐることをいふ。

堀河百首、夏に「土さけて照る日も知らず消えもせぬ氷室は夏の外にやあるらむ」

【行手】 ヌクテ。さして行く先方。行きむかふ方角。行くさきの道。

新勅撰集、春上に「玉ぼこの道のゆくての春風に誰が里知らぬ梅の香ぞする」

【道芝】 ミチシバ。道のほとりに生ずる芝草。又、單に芝のことをいふ。

宇津保物語の俊蔭の卷に「葉末こそ秋をも知らめ根をふかみそのみちしばはいつか忘れむ。」

【しなえよられ】 しなびて、よぢれてゐること。

【田のおも】 「田面」。田のおもて。田のおも。たのむ。

夫木抄卷三十に「山もとの竹より奥に家居して田のおもを通ふ道の一すぢ」

【すだく】 集ること。群がること。群集すること。

萬葉集卷十九に「大君は神にしませば水鳥のすだくみ

沼を都となしつ。」

【隈々】 クマム。こゝかしこのすみ。すみく。

源氏物語の柏木の卷に「おもほし煩ひて、かゝるくまぐまをも尋ね給ふなりけり。」

【息づく】 長いいきをつくこと。ためいきをつくこと。

古事記卷中に「みほ鳥のかづきいきづき。」

【塘】 ツ、ミ。「堤」と同意の語。水を圍み又は水に沿うて、その水のあふれぬふせぎに土を築いたもの。どて。

【たどりゆく】 路に迷うて尋ねてゆくこと。但しこゝは、おぼつかない足どりですゝみゆくことにいふ。

【手拭】 タノゴヒ。「テヌグヒ」の音轉。

和名抄卷十四に「手巾、太乃古比。」

靈異記下卷に「披敷布巾(太乃古比)。」

【とうでける】 「とりいでける」の約略。

【いたう】 「いたく」の音便。たいそう。はなはだ。

伊勢物語に「雨もいたう降りければ。」

【いとも畏かりけり】 まことにおそれ多いことであつた。ほんたうにもつたいたいなことであつた。

【畏し】とは、恐れ多いこと。もつたいないこと。萬葉集卷十八に「かけまくもあやにかしこじすめろぎの神の大御代に。」

【人の親の心ほど世にもあはれに隈なく足らひたるものはあらじ】人の親の心ほど、その子に對して、まことにすみずみまでゆきとどいて、少しの手落ちさへもないものはあるまい。

【人の親】は、人たるものの父母。鳥獸などの親と區別していふ。

後撰集、雜、藤原兼輔の歌に「人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまどひぬるかな」

【世にも】は、世の中にとりわけて。殊の外に。世になく。萬葉集卷十二に「あまをとめかづきとるたふ忘貝よにも忘れじいもが姿は」

【隈なし】は、かくれるところのないこと。ゆきとどかぬ處のないこと。すみずみまでゆきわたること。

【足らひ】は「足り」の延音。十分なこと。不足のないこと。満足なこと。

【たけだち】丈立。立つた身のたけ。丈の高い程合。

宇津保物語の初秋の巻に「たけだちよきほどに、姿のきよらなること、さらにならびなし。」

【はつかなる道の程】わづかなるみちのり。

【はつか】は、わづかに同じ。いさゝか。すこし。古今集卷九に「はつがりのはつかに聲をきしより中ぞらにのみ物をおもふかな」

【夜光るらむ玉はものかは】世にこの上もなき寶と稱せられる夜光の珠なども物の數であらうか、物の數ではない。(反語)

【夜光の珠】は、古昔、支那で暗夜に光を放つといふ貴重な珠。

戰國策、楚に「遣使車百乘、獻雞駭之犀、夜光之璧於秦王。」

雪女五枚羽子板卷中に「下和が三度足切られ、本意を磨く夜光の玉。」

【いかならむ寶位】いかなる尊貴な位。

【寶位】は天子の御位を申す語。但しこゝは尊い位といふ

ほどの意と見るべきである。

易經、繫辭に「聖人之大寶曰位。何以守位。曰人。」魏書、肅宗紀に「朕以冲眇纂承寶位。」

保元物語、新院御謀叛思召立の條に「萬乘の寶位を忝くす。」

【たぐふ】「比ふ」「類ふ」などの字をあてる。くらべること。ならべること。

【思ひたらず】「思ひてあらず」の約。

【なか／＼】かへつて。けつて。

宇津保物語、樓上、下に「たゞいとおいらかにはづかしうきこえ給へば、なか／＼のたまふべき事もなし。」

【思ひあさみて】思ひいやしめて。

【あさむ】は、賤しめること。嘲ること。

徒然草に「これを見る人あざけりあさみて、世のしれものかな。」

【かくしなぶるまで】このやうに(水蓼が)しをれてしまふまで。

【あさましなどはおろかにて】あさましいなどいつたくら

ゐでは、言ひ足らぬことで。

【あさまし】は、(一)浅はかなこと。思慮の深からぬこと。

(二)意外のことに驚くこと。肝のつぶれること。(三)興のさめること。あきれかへること。けしからぬこと。(四)いやしいこと。きたないこと。さもしいこと。卑劣なこと。こゝは(三)の意。

竹取物語に「まことに蓬萊の木かところ思ひつれ、かくあさましきそらごとにてありければ。」

【おろか】は、「言ふもおろか」の略。言ふまでもないこと。

枕草子卷二に「月の頃は寝おきて見いだすもいとをかし。やみも亦をか。有明はたいふもおろかなり。」

【我ながらいたういぶかしけれ】自分ながら、まことにふしぎでたまらぬ。(父のわざ／＼)摘み取つて、手づから授けられた水蓼を、手拭につゝんだまゝ、しなびてしまふまでうちやつておいたことが。

【いぶかし】は、「訝」の字をあてる。疑はしいこと。不審なこと。

【はふれ落ちて】 はらくと落ちて。

「はふる」とは、はらくと散りみだれること。外に「あふれる」(溢)ことをいふが、こゝは前の意と見るべきであらう。

【あまたたび】 數多度。いくたびとなく。たびく。

古今集、釋族に「夜をさむみおく初霜を拂ひつゝ草の枕にあまたたびねぬ」

【ひたもの】 ひたすら。ひとむき。一途。

【夏の日のあつきめぐみを云々】「おとうさまが夏の日のあつさの氣にかゝらぬやうにといふあつい思召でわざわざ摘み取つてお恵みくださった水蓼の穂のことをすんでのことに忘れてしまふところであつたが、やつと思ひ出して、このやうにいたゞいて(たべて)、折角の御志を空しうせずすんだ、まあくこれでほつとした。」といふほどの意。

【あつき】は、夏の日の「暑き」に、厚き恵の「厚き」をかけた語。

【水蓼のほとく】の「ほ」は、水蓼の「穂」をほとくの

「ほ」にいひかけたもの。

「ほとく」は、今少しで。すんでのことに。ほとんど。

【さと】「さつ」と同じ。(一)にはかに吹きくる風の音の形容。(二)急に。にはかに。こゝは(二)の意

【ほどばしり出づ】 たばしり出る。

「ほどばしる」は、「迷る」の字をあてる。飛び注ぐこと。飛び散ること。とびはしること。たばしること。

平治物語、三條殿發向の條に「灰燼地にほどばしりければ。」

【笠ゆりかたぶけて】 笠をゆすぶつて傾けて。

「ゆる」は、「揺る」の字をあてる。ふるひうごかすこと。ゆるがすこと。ゆさぶること。

菫村句集に「酒十駄ゆりもて行くや夏木立」

【つらく】「熟」情の字をあてる。念を入れて事をするさまにいふ語。つくく。ねんごろに。よくく。

徒然草に「つらく思へば、ほまれを愛するは人の聞きをよろこぶなり。」

【來し方】 過ぎ來し方。既往。過去。

新古今集雜下に「こし。かたをさながら夢になしつればさむるうつゝのなきぞかなしき」

【このひとところ】「この一所」。この御一方。こゝでは父をさしていふ。

【そのほどの御慈愛】 その間(母を失つてから今日まで)の父上のおんいつくしみ。

「慈愛」(イックシミ)は、かはいがること。大切に育てること。うつくしみ、いつくしび、など、皆同意の語である。

謡曲、難波に「普きみ心のいつくしみ深うして、八島の外まで波もなく。」

【つゆ】 こゝは、少しも、更に、ちつとも、などの意。

枕草子卷三に「殿上人のつゆ知らで、よりきて物いふなどもあるを。」

【水し女】 ミヅシメ。水仕事をする女。臺所働きの女。はしため。下女。

【くだくしく苦しげなる家の内の事ども】 めんだうくさくて、苦しさうな、一家内の雑事ども。

「くだくし」とは、繁雜で厭はしいこと。めんだうくさいこと。しつこくわづらはしいこと。

源氏物語、夕顔の卷に「このほどのこと、くだくしければ、例の漏らしつ。」

【心ゆかぬ折】 氣づくはぬをり。心のすゝまぬとき。氣分のむしやくしやする折。

【いかでかうはなどうちつぶやき】 どうして、こんなに不整頓なのであらうなど、ぶつくと小言をいつて。

「つぶやく」は、「吐く」の字をあてる。ぶつくと小言などいふこと。くどくといふこと。

源氏物語、須磨の卷に「たはぶれにてもあるまじき事なりといふを、入道いたくつぶやく。」

【性】 サガ。うまれつき。天性。性質。性分。源氏物語、推本の卷に「いとくまなき御心のさかにて、おしはかりたまふにやあらむ。」

【こよなう】「こよなく」の音便。この上もなく。殊の外に。格別に。別段に。

宇津保物語、藏聞、中に「それは、年はわれにこよなく

このかみにてぞおはせし。」

【なま賢しげ】 なまじひにかしこぶるさま。小利口なさま。

古今著聞集卷九に「なまさかしき事しいではあしかりなむ。」

【ひがくしき心】 「僻々しき心」ねぢけまがつた心。

源氏物語、末摘花の巻に「君のかくまめやかにのたまふに、きゝ入れさらむも、ひがくしかるべし。」

【かきみだりて】 思ひ惑うて。わづらひなやんで。

この「みだり」は自動詞で、ら行四段に活用してゐる。それゆゑ、「みだれ」と同じ意味と見てよい。

【現し心】 ウツシゴコロ。うつしき心。常の心。正氣。正體。

萬葉集卷十一に「ますらをのうつし心もわれはなし夜晝わかすこひしわたれば」

【のゝしり騒ぐ】 高聲にさわぐこと。

「のゝしる」とは、やかましく言ひたてること。聲高く言ひさわぐこと。さわぎたつこと。

竹取物語に「われこそ死なめとて、泣きのゝしること、

いとたへがたげなり。」

土佐日記に「とかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。」

【御野川】 ミノガハ。備前國朝日川（東大川）の支流。御津郡（御野・津高兩郡合併後の郡名）を流れて朝日川に注ぐ。

【堤】 ツ、ミ。前の「塘」に同じ。その條参照。

【やすらひて】 休憩して。いこうて。やすんで。

源氏物語、椎本の巻に「こゝにやすらはんの御心も深ければ、うちやすみたまひて。」



【鱒】 マス。鯉骨類の海産魚。喉鱚類に属する。體は長さ二尺に達し、紡錘狀で側扁、鱗は細小、背部は濃青色に微褐色をおび、側線以下は銀白色をなす。體側には不正な黒斑が並列してゐる。北海道から東海道及び奥羽・北陸・山陰の海中に棲息し、五月より河川をのぼり、八九月頃急流の砂礫中に卵を産む。はらあか。

【多かなり】 「多かるなり」の約。

【珍らかなるもの】 めづらしいもの。

「珍らか」は、めづらしいさま。珍奇なさま。

宇津保物語の樓上の巻上に「空のけしき……珍らかなる雲たちわたる。」

【待ちつけおはして】 待ちうけていらつしやつて。

「待ちつく」とは、待つて、その人又はその時に遭ふこと。待受けること。

枕草子卷二に「驗者もとむるに、……待ちどほに久しきを、からうじて待ちつけて。」

【勞れたらむを】 この「を」は感動の助詞と見るべきであらう。

【いかばかりわびしうおはしけむ】 どのやうに心さびしくござつたであらうか。

【わびし】は「侘し」の字をあてる。うらさびしいこと。ものさびしいこと。心さびしいこと。

後撰集、冬に「霰ふるみ山の里のわびしきは來てたはやすく訪ふ人ぞなき」

伊勢物語に「皆人ものわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。」

【胸つとふたがる】 胸がつつとふさがる。胸がつつとつまる。

「つと」は、急に。何より先に。突然。つつと。ぐつと。宇津保物語の國護の巻下に「宮きこしめして、女君をつとかきよせてのたまふやう。」

「ふたがる」は、ふさがる。「塞」に同じ。源氏物語の桐壺の巻に「御胸のみつとふたがりて」

【からうじてまぎらはしつゝ】 やつとのことでもまぎらかしなからうじては、からくしての音便。やつと。やうく。やうやくのことで。からく。わづかに。

竹取物語に「火鼠のかは衣、からうじて人を出して求めて奉る。」

【鱈】 ナマス。細く薄く切つた魚肉を酢に和したるもの。

【いかばかりうるはしき饗なりども】 どんなによい馳走であつても。

【饗（アヘ）は、饗應。馳走。

神代記卷上に「貯ニ之百机ニ而饗之。」

【さらぬやうにて】それと心づかれぬやうにして。

【肆】イチ。まち。市街。いちば。

【單衣】ヒトヘギヌ。略してヒトヘ。裏のつかぬきもの。ひとへもの。

和名抄卷十二に「單衣（比止閉岐沼）」とある。

齊明紀に單衫をヒトヘギヌと訓ませてある。

【しかく】「云々」。かくく。かやうく。

落窪物語卷一に「このたびだに御かへりきこえたまへしかく。なむのたまひて。」

【いとさはに】たいそうたくさんに。

「さはに」は、おほく。たくさんに。多数に。

古事記卷中に「おさかのおほむろやに人さはにき入りをり。」

萬葉集卷三に「いそのさき漕ぎたみゆけば近江のみやその湊にたづさはに鳴く。」

【めし給ひなむや】おめしあがりになりませんか。

「めす」は、(一)呼び寄せること。(二)とりよせること。(三)食ふ。飲む。着る。乗るなど、人の所作事にいふ語。(四)受け入

れること。(五)買ふこと。

こゝは(三)の意であること、申すまでもない。

【とくく】この下に「こゝに持ち來れ。」又は「われにすすめよ」などの語を補つて見よ。

【笑(エ)みまけたまひて】笑ひ興じたまうて。

「笑みまく」とは、(一)思ひ設けて笑むこと。(二)笑みて待つこと。(三)たいさうゑつぽに入ること。(四)笑ひ興じること。こゝは(三)の意。

落窪物語卷一に「うれしくいみじと思ひて、口は耳もとまで笑みまけてゐたり。」

源氏物語の末摘花の卷に「かく世に珍しき御けはひのもり匂ひくるをば、なま女房などもゑみまけて。」

【おもほす事もなげにのたまふ】何の心配ごともなさうにおほせられる。

「おもほす」は「おぼす」に同じ。「思ふ」の敬語。

「おもほす事」は御心に案じ煩ひ給ふ事柄。御心配ごと。

【常にしもかくてあらむよしもがな】「いつもくこのやうにして父上をお喜ばせ申す方法があればよいなあ。」

といふほどの意。

「よし」は、よすが、よるべ、たより、ゆかり、つて、てだて、手段、方法。

【さいつ年】「さきつ年」の音便。先年。

【惱ましうせさせ給ひたるけにや】御病氣におかゝりなされたためであらうか。

「けにや」の「け」は、故・爲などの意。

竹取物語に「千たびばかり申したまふけにや。あらむ、やうく神なりやみぬ。」

貫之集に「……詠みて奉れる歌なり。そのけにや、馬の心地もやみにけり。」

【いたうくづをれたまひて】たいそうやつれおとろへなされて。「くづをる」とは、よわること、ひるむこと、やつれおとろへること。

【人なみくの貧しさ】世間普通の貧しさ。

「人なみく」は、普通一般の人のなみ。世間なみ。尋常。源氏物語の帚木の卷に「人なみくにもなり、少しおとなびんにそへて。」

枕草子卷三に「ねすもちの木、人なみくなるべきさまにもあらねど。」

【いかばかりもせむやうのありなむを】何とでもしやうがあらうものを。どうとでもする方法があらうのに。

【魂(タマ)きゆる心地】たましひが消えてしまふやうなところもち。命が絶えさうな心もち。

【ほれたるやうにて】ほけたやうなさまをして。失心しややうなさまで。

「ほる」は、「恍」「惚」などの字をあてる。ぼんやりすること。うつとりすること。ほけること。失心すること。

落窪物語卷一に、「いかなること出で來むと思ひ歎きて、つら杖をつきて、ほれてゐたるを。」

源氏物語の若紫の卷に「つらう、いみじうおもほしほれて。」

【ついゐたるを】つくぼうてゐたのを。うづくまつてゐたのを。

「ついゐる」とは、つくばふこと。かしくまること。うづくまること。

枕草子卷三に「たがぞと問ふに、つゝいゝて、なにがし殿のと言ひて行くはいとよし。」

宇津保物語、初秋に「仲正、簀の子につゝいゝる。」

【見そなはして】 御覽になつて。

「見そなはす」は、「見る」の敬語。

古今和歌集の序に「今もみそなはし、後の世にも傳はれとて。」

【面持の常にしもあらざるは】 かほいろがふだんのやうにないのは。

「面持」(オモモチ)は、かほいろ。

「常にしも」の「し」は、意味を強めるために添へた助詞。

「あらざるは」は、「あらざるなるは」の「る」が省かれてゐるのである。

【心地やなやましき】 気分でもわるいのではないか。

「心地」(ココ、チ)は、こゝろもち、きぶん、きもち。

竹取物語に「翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。」

【すぐして】 すぐに。たゞちに。早速。すみやかに。

【今更】 イマサラ。今あらためて。今また更に。今となつて、こと新しく。

萬葉集卷十五に「遠き山せきも越えきぬいまさらにあふべきよしのなきがさぶしき。」

【やう／＼にのどめて】 やつと心をおちつかせて。やつと心をしづめて。

「のどむ」は、おちつかせること。しづめること。

源氏物語の夕顔の巻に「心地もさわぎまどへど、思ひのどめて。」

【何くれのをかしき物語】 いろ／＼さまざまのおもしろい物語。

「何くれ」は、何やかや。かれこれ。何のかのいろ／＼。さまざま。

源氏物語の帚木の巻に「よろづの御よそほひ、なにくれとめづらしきさまに調じ出で給ひつゝ。」

「をかし」は、おもしろいこと。よろこばしいこと。興のあること。趣味のあること。

枕草子卷一に「夏はつとめて……間もなほ螢とびちが

ひたる、雨などの降るさへをかし。」

【夕食】 ユフゲ。夕の食事。ゆふめし。夕食(ユフシヨク)。

晚餐。

夫木抄卷十九に「千代までも民のけぶりや絶えざらむ

鳥羽田のおものあさげゆふげに」

【ころぶしつゝ】 ころんでねながら。

「ころぶす」は、「轉臥」の字をあてる。ころびふすこと。

萬葉集卷二に「わが大君の立たせれば、玉藻の如くころぶせば。」

【熟睡】 ウマイ。ぐつすりとおよくねいること。じゆくする。

萬葉集卷十二に「白たへの袂ゆたけく人のぬるうまいはねすやこひわたるらむ」

【そこら】 そのあたり。そのへん。そこいら。

狂言、貫掣に「そこらあたりを尋ねますれど、居りませぬ。」

【つま戸】 「妻戸。」端戸(ハンド)の意。一に小脇戸ともい

ふ。板戸を兩開きにして、開くときは外の方へ開き、その戸を掛金でとめおき、閉ぢるときは内の掛金でしめおくもの。

【少しは心ものどまるやうにて】 この下に、「ありき」などの語を補つて見よ。

「少しは心もおちつくやうであつた。」といふほどの意。

「のどまる」は、のどかになる、ゆつたりとなる。しづまる。おちつく。

源氏物語の蜻蛉の巻に「心ものどまらず、目もくらき心地して。」

8 通 釋

天保八年といふ年の夏の頃、自分はつまらない世渡りの仕事のために、上道郡の龍口山のふもとに毎日通つてゐた。朝早くから起きて出かけて、歸るのは、いつも晝過ぎる頃であつた。今日は音に聞く駿河の富士の嶺の雪さへも消えるといふ六月の十五日だから、暑さは譬へようがないほどであるけれど、いつものやうに起きて、笠の紐を結びなどしてゐると、父君が仰せられるやうにこの暑い日にさらされて、一里に餘

る道中を歸つてくると、忽ち暑氣にあたつて、重い病氣になるかも知れん。この蓼といふ草は、その暑氣を拂ふものだと昔から人も言ひ、又、實際きゝめのあるものだから、これを持つて行きなさい。」とて、御自身で、門のほとりにある蓼の少し穂先に實を結んでぬき出でるものを、よいかげんの長さには摘み取つて、お渡し下さつた。自分は何ほどの事とも思はなかつたけれど、これを受けないと、父君の御機嫌がわるからうと思つたので、いやな顔もせず受取つて、袖の中に入れて出て行つた。

先方での仕事をすませて歸りかけると、何しろ、この頃は、幾日も雨が降らず、土さへ裂けて照り續いてゐるので、行く道々の芝もなえよられ、田の面にすだく蛙でさへこゝかしこの隅々に隠れてためいきをついてゐるほどだから、何とも言ひやうがないほど暑かつた。小川の塘をとぼくとあるいてゐる中、額の汗をふかうとして袖の手拭をとり出すと、そのとたんに、父君の下された蓼の穂のたいそうしをれてゐるのが、ばら／＼と出て來た。思へばまことに勿體ないことであつた。人の親の心ほど、その子に對して、まことにすみずみまでも行きとゞいて、少しの手落さへもないものはあるまい。もはや成人して、身だけが人なみになつてゐる子のわ

づか一里ばかりの道中をさへ、深く御心におかけなされて、この蓼までも下された御志は、世になき寶といはれてゐる夜光の珠はいふまでもなく、どんな尊い位にもくらべる事が出来ぬほど貴いものである。然るに、それを忝いとおもはず、却つて、老人のならひだとさへ思ひいやしめて、かやうにしなびるまで忘れてしまつてゐた不孝の心は、あさましいといつたくらゐでは言ひ足らない。自分は、どうしてまあこんな不孝をしでかしたらう、われながらふしぎでならぬと思ふと、涙がはら／＼と落ちて、勿體なくて／＼たまらぬやうな氣がした。そこで、そのしなびた水蓼を一つ／＼引きのばして、幾たびとなくおしいたゞき、その半分ほどを、ひたすらにかみしめて食ひながら、

夏の日のおつきめぐみを水蓼のほと／＼忘れはつべかりけり

とよみつゞけると、涙が更にさつとほどばしり出た。こんなに涙を出してゐては、途中で行き逢ふ人々が、ふしぎがるだらうと思つたので、笠をゆすぶつて、かたむけて、わが顔をかしくしながら、なほつら／＼とわが身の過ぎこし方を思ひつゞけてゆくと、七つといふ年の秋、母上がおなくなりなされてから後は、自分はこの一とところ(父君)のお陰にかくれて多く

の年月を思ひのまゝに成人した。その間の御慈しみは、どれ程であつたらう。それなのに、少しもその鴻大無邊な御恩に報い奉らうとは思はず、女中の一人も使ふことの出来ぬほどの貧乏ぐらしであるので、面倒くさい一家の雜事を父君お一人におさせ申しながら、氣のむしやくしやる折々は、どうしてこんなに家の中が不整頓なのだらうなどと、ぶつ／＼小言をいつて父君にあたりちらし、御性分としてこの上もなくお酒がおすすきでいらつしやるのに、一獻をおすゝめ申すところか、なまじひに賢ぶつて、異見がましいことを申し上げたなど、すべて、どういふ不孝のしうちであつたらうなどと、いろ／＼と後悔のあまり、心がかきみだれて、正氣を失ふかとさへおもはれた。

人がやかましくさわいでゐる聲にふと心づいて見れば、早くも御野川の堤に來てゐた。わたし舟を待つ間、木陰に休んであたりを見わたしてゐると、今年は鱒がかくべつに多いといつて、里人どもは、網をひきながらそれを捕つてゐた。いつもは見うけぬ珍しい魚だから、懐の錢を残らずとり出して、中でも大きなのを買ひ取つて、薬に包んで歸つて來ると、父上は待ちうけていらつしやつて、「今日はたいそう早かつたね。暑いのに、ようまあ。さぞ勞れたらう。さあ一休みする

がよい。」と、いつものやうに機嫌よく仰せられた。それに付けても、「この長い日を、たゞ一人、毎日自分の歸るのをお待ちちうけになつてゐるのは、まあどんなにおつらい事だらうと思ふと、胸がつかつかさがるのをやつとまぎらはしながら、あの魚を取出して、焼いたり鱒にもしたりしてさしあげようと思ふとき、どんなによい馳走があつても、酒がなくては。」といつもおつしやつてゐるのにと思ひ出したが、悲しや、その酒を買ふ錢がない。そこで心づかれぬやうにして、まぢに出かけていつて、單衣を一枚賣つて少しの酒を買ひ取り、徳利に入れて、さげて走り歸つて、「今日はかやう／＼、御野川で漁夫が鱒をたいそう澤山とつてゐましたので、珍しく思ひまして買つて持ち歸り、酒さへ買つておきました、おめしあがりになりませんか。」といふと、「それは珍しいことだ。はやうはやう。」と仰せられて、手許にお召しよせになり、「どんなに入らせられて、何の物おもひもなさうにおほせられるので、「かやう／＼にしてとりませう。」などお話し申しながら、盃を取つておすゝめ申すうちにも、「どうか、いつも／＼、このやうにして父君をお喜ばせ申す方法がありたいものだ。先年おわづらひになつたためであらうか、お年のわりあひには、た

いそうおやつれなされて、お弱くていらつしやるのに、こんなに貧乏して、お心のまゝにお樂しませ申し上げる方法さへ絶えてしまつたことは、まことに恐れ多く、悲しいことである。世間普通の貧乏ぐらゐなら、どうにでも方法があらうに、さはなくて、貧も貧、貧のどんぞこへおちこんでゐる一家の今の有様こそ、悲しくくやしきはみであるとおもふと、消えいるやうな心地がした。そこで何だか氣がほけたやうになつて、そこにつくばんでゐると、父上はそれを御覽になつて、「かほいろがいつものやうにないが、氣分でもわるいのではないか。さあ一杯のんで、早くねなさい。」といつて、盃をくだされたので、今更のやうに、つと胸がふさがつて、涙がはら／＼とおちてくるのを、やつとのことでお心をおちつけて、何やかやとおもしろい物語などして、ひたすら父君をお慰め申し上げた。さうするうちに、夕暮が近くなつたころが、父君はたいそうお酔ひになつたと見えて、夕食をお召しあがりになりながら、ころりとねころんで、ぐつすりと寢ておしまひになつた。たいそうお弱くおなりなされたはいとお見受け申すにつけても、何ともいひやうがないほどつらいおもひがした。そこで蚊帳をつつて、だきかかへて床の中にお入れ申し、あたりをかたづけつてゐると、月の光が涼しげに

澄みわたつて東のつま戸からさして來たので、少しは心のおちつくやうな氣がした。

9 挿 圖

萩原廣道畫

立春 もろこしは猶冬ならし今ぞや、
わがひのもとに初日さすなる 廣道
「立春」は、春の節に入つた第一の日、大抵二月三四日頃。
「もろこし」は、古昔我が國で支那を呼んだ稱。
「ならし」は、「なるらし」の略。「にてあるらし」であらうなどの意。
「やゝ」は、稍。次第に。やう／＼。だん／＼。そろ／＼。
「初日」は、元日の朝日。
一首の大意は、
今やう／＼我が大東の日本に初日影がさして來た。して見れば、西の方もろこし(支那)のあたりは、まだやはり冬の季節であるだらう。

一三 千里が竹

近松門左衛門

1 解 題

近松門左衛門の傑作、時代物「國性爺合戦」第二段中の節録である。

2 作 者

近松門左衛門 チカマツ モンザエモン。

「國性爺合戦」は曾我會稽山・雪女五枚羽子板と共に近松の三傑作と稱せられるもので、正徳五年十一月、彼が六十三歳の時の作である。これが興行は、三年越十七箇月續いて大人であつたといふ。明の亡命客鄭芝龍が、田川氏を娶つて生んだ鄭成功即ち和藤内を主人公とし、この父子が明國の恢復を謀らうとした事を戯曲化したもので、和藤内は明國の亂から逃れて日本に來た皇妹梅檀皇女をば、妻小陸に託し、父母途をかへて明へ赴くのであるが、本課はその船が彼の地に着いたところから始つてゐる。吳將軍甘輝は異母妹錦祥女の掣であるが、和藤内は彼の居る獅子城に達しようとして、途に逆臣李昭天の虎狩の一隊に會する。和藤内は虎と格闘してこれを威服せしめ、遂に一隊の將士を降して引率し、獅子城に赴かうとするのである。

姓は杉森、名は信盛、平安堂・巢林子・不移山人などの號がある。承應二年の生れであるが、生地については諸説紛々、今も定説がない。就中長州萩の産で、肥前唐津の近松寺に遊學し、因つて近松と稱したといふ説と、京都に生れ、三井の近松寺にゐたとする説と最も廣く世に傳へられてゐる。初め京都上方に任官して從六位に敘せられたが、やがて致仕し、延寶五年廿五歳にして初めて近松門左衛門と稱し、都萬太夫座のために連年脚本を作り、既に狂言作者として名聲を馳せ、その作の今に傳はるもの十餘種に及んでゐる。又宇治加賀掾・井上播磨の爲に淨瑠璃を作つたが、元祿四年大阪に轉住し、爾來専ら竹本義太夫(筑後掾)の淨瑠璃作者となり、その作物は次第に老成圓熟の域に進み、元祿十六年初めて當時の事實を仕組んだ心中物「曾根崎心中」を出すに及んで、益々その戯曲的天才を發揮して、世間の大喝采を博するに至つた。その後、或は世話物に、或は時代物に、年々述作の筆を絶たず、その作前後通じて百十數番の多き上つた。その文學史上の地位については「我が國の沙翁」と推稱せられるのを以

でも知らるべく、その藝術の價值については、すでに世評の動かすべからざるものがあるので改めて贅するを要すまい。
享保九年(二三八四)十一月歿、年七十二。

3 編纂の用意

徳川時代の最も著名な劇作家大近松の作にかゝる「時代物」中、最も廣く當時に行はれ、今尙劇壇に持囃されてゐる「國性爺合戦」の中から「和藤内虎狩」の一節を採録した。これ畢竟、その作を通してあらはるゝ日本精神と、その天馬空を行く底の快筆とに感激せしめ、併せて劇文學の何ものたるかを知らしめたいとの企圖に外ならぬ。

4 要旨

自己の力を伸ばすことは愉快である。支配の欲望を満たすことは會心事である。これは個人的に見ても、國家的に考へても、心ののびくすることである。史實に於ける和藤内父子の企圖は、この意味に於てどこまでも成就させてやりたかつた。近松はこの父子の企圖を藝術化して、天馬空を行くが如き想像力と、彼れが獨得の縦横自在な美化力・詩化力とを以て、思ふ存分に、和藤内の爲

に、日本の爲に、萬丈の氣焰と壯絶快絶の勇猛心とを發揮させてくれたのである。「國性爺合戦」が三年越し十七箇月の大入叶といふ古今無類の大盛況を續けたのも眞に故あることである。本課ではその大傑作の一齣を味はせ、延いては文豪近松の文學史上に於ける地位及びその作品の價值などの一斑を知らしめ、近松の戯曲に關する大體の知識なども收得させたい。

5 概説

第一段(八七頁—八八頁一行) 神風の擁護によつて無事に海を渡つて、唐土の地についた老一官は、本國の形勢を妻子に語り、これから甘輝の城を指して行く手はずを打ち合せる

第二段(八八頁末行—九二頁七行) 父と別れた和藤内は、父の教に任せ、母を背負つて道を急いだが、遂に千里が竹に迷ひ込んで當惑した。をりから虎狩に巻き立てられた猛虎に出會ひ、劇しい格闘の末、遂に虎を打ち負かす。

第三段(九二頁六行—九六頁) そこへあらはれたのは逆

賊李踏天の部下。和藤内は彼等を相手に奮戦して完全にこれを克服した。かくて降伏した支那兵を部下として虎に乗つて獅子が城を指して行く。

6 取扱上の注意

「國性爺合戦」の梗概や、文學史上の評價や、實演當時の評判などを語り聞かせることは、本課を通讀させる前か、或は後かに必ずなさるべきである。殊に「船路の末も知らぬ火の」といふ冒頭の一句を説くには、少くとも、原文「もろこしぶね」の條の梗概を語り、都合によつては更にその前の「はまづたひ」の條なども話したいものである。

凡そ戯曲の興味は、漸層的に局面の展開して行く處に在るのであるから、一段を取扱ふにしても、前後の梗概を語ることは大切な仕事である。

この課だけで見ても、その和藤内の「いひぐさ」、「仕ぐさ」に、その虎の舉動に、更に兩者格闘の活劇に、近松の想像力の旺盛なことが感ぜられ、その舞臺面の敘景には、美化力・詩化力の非凡なことがうなづかれる。文章

の流動の圓滑自在なこと、形容的修辭の剴切で奇抜なところ、讀者を魅せしめずにはおかない。

西鶴は聯想を以て勝り、或は聯想だけに止つてゐるが、近松は聯想力もあるが、想像力の旺盛なこと無類といつてもいゝ位である。かういふ風に想像力を働かせ、かういふ風に筆力を自在に働かせることは、いかに愉快なことであらう。芥川氏の「戲作三昧」の快味が、かういふ課を讀むと、またつくづく想像されるのである。

試みに修辭上から考察すると、本篇全體の調子は流れるが如く面白い。或は七五調に、或は懸詞に、或は頭韻法に、或は脚韻法に、又對句法に、あらゆる修辭的方法を巧みに用ひてある。

「船路の末も知らぬ火の筑紫は

「あとに擁護の神風ヤ

「方角とでもしら雲の

「神はわが身にいすゞ川

「譽は異國・本朝に踏跨げたる鞍鎧

これらは七五調あり、懸詞あり、重義法あり、文に妙趣

を含めてある。

「千波萬波を押切つて Sempa Bampa 脚韻法。

「故郷へ歸る唐錦 Kokyo e Kaeru Karanishiki——頭韻法。

韻法。

「二十四孝の楊香は孝行の徳に因つて……脚韻法。

「揉むや揉まずに無理無體。…… Momu Ya Moma-

zuni Muri Mutai——頭韻法。

「噓々、村雨々々。 Kusame Murasame——脚韻法。

尚、本文に於て特に注意すべき修辭は美化法である。蓋

し美化法は、邦文特有の修辭で、直接に露骨に表現せず、

これを美化して讀者に柔い感じを與へ、春の夜に朧月を

眺めるが如き感を起さしめる特徴がある。一例をあげれ

ば、

「かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知ら

ぬ身が、育てば育つ草木の雨露の恵に長する如く、天

地の父母の助にや……。

かくて人生無上の悲しみも柔かくひびいて讀者の胸にや

心わりと迫り、自然にホロリとさせる。この他本文中に

はげしい戦の敘述があるが、凡て美化法によつてこれを
朧化した手腕、流石に巢林子の文である。

「やあく、うぬはいづくの風來人……しやくわんく、

李蹈天とやら、石花菜とやら……。

あゝ、申し御勘忍。御免々々……。

噓々、村雨々々。

ちやぐちや左衛門……占城次郎・ちやるなん四郎・ほ

るなん五郎・うんすん六郎・すん吉郎・もうる左衛門・

ちやが太郎兵衛……。

これらは何れもユウモア(諧謔)の上乗なものである。

7 設問

1 この文の中で「日本」といふ語がどういふ場合に用
ひられてゐるか。

2 日本精神がどういふ點で發揮されてゐるか。

3 最も痛快な點はどこにあるか。

4 最も滑稽な點は。

5 最も情味のあらはれた點は。

6 語句の調子のなめらかなところは。

7 次の語句の意味を問ふ。

かひなくし。浩々たり。相伴。勢子の者。凄じななど

もおろかなり。ひるむ。しをらし。ほさく。數鐘。向

後。供廻り。

8 釋義

【船路の末も知らぬ火の筑紫】 船路の末を知らぬといふこ

とを筑紫の枕詞なる「知らぬ火」にかけて文をなしたの

である。さて「知らぬ火」を筑紫にかけていふことは、

昔景行天皇が筑紫(今の肥前・肥後の地方)におはし

て、海の上に何とも知れぬ火の燃えてゐるのを見そなは

し、火の國と名づけ給うたことから起つたといふ。今も

筑紫瀧即ち有明沖のあたりで、夏の暗夜に見える燐光を

俗に千燈籠といふ。

萬葉集卷五に「しらぬひ つくしのくにに なくこな

す したひ來まして。」

【あとに擁護(オウゴ)の神風や】 あとにあふ(逢ふ)を擁護

(オウゴ)の擁(オウ)にいひかけたのである。和藤内(鄭

成功)は皇妹梅檀皇女を妻小睦に託してこの土(肥前の

平戸)に留らしめ、父母(父鄭芝龍及び母田川氏)と道

をかへて、明國に赴いたので、神明の加護によつて再會

を得ることを頼みとし、おのれらを擁護せんために神の

吹かせたまふ順風に乗じ、千波萬波を凌いで、父子の船

がそれく唐土に到着したといふのである。

【唐土】 モロコシ。我が國で支那を指していふ。これをモ

ロコシとよむことは、「諸越の地」の字を文字讀にしたの

であらうともいひ、或は「諸物が海を越す」意かともいふ。

【鄭芝龍一官】 テイシリウウイックン。和藤内の父。淨

瑠璃では、芝龍は明帝を諫めて用ひられず、日本に亡命

して名を老一官と改めたとしてある。次の「和藤内」の

條参照。

【故郷に歸る唐錦】 錦を着て故郷に歸ること。立身出世し

て故山に歸ること。

南史の劉慶遠傳に「遠爲雍州刺史。帝餞于新亭。謂

曰、「卿衣錦還郷、朕無西顧之憂矣。」

南史の劉之遴傳に「遷除南郡太守。武帝謂曰、令卿

衣錦歸郷盡榮養之理。」

史記の項羽本紀に「富貴不還故郷、如衣繡夜行、誰知之者。」

白樂天の詩に「君不見、買臣衣錦還故郷。五十身榮未爲晚。」

【装束ひきかへ】 装束をあらためること。服装をかへること。こゝは旅装束にきかへたことをいふのであらう。

【装束】(シャウゾク、サウゾク)は、(一)盛装すること。衣冠をつけること。(二)身仕度すること。いでたち。(三)衣服。着物。こゝは(三)の意。

【妻子】 妻田川氏及び子藤内。次の「和藤内」参照。

【わが本國】 わが生國。自分の生れそだつた國。

【時移り代變り】 時勢がうつりかはること。

陳鴻の長恨歌傳に「時移事去、樂盡悲來。」
徒然草に「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にあれば、時移り事去り云々。」

【李蹈天】 リタウテン。「國性爺合戦」中の假作人物。明國の大臣で、右將軍であつた。ひそかに韃靼王と結んで明國を顛覆せんことを謀り、遂に帝(思宗烈皇帝)及び皇

后(華清夫人)を弑し、皇族・忠臣などを滅して、自から國王となつた。後、國性爺のために捕へられて酷刑に處せられた。

【引き入れ】 誘惑といふ程の意であらう。

【韃靼夷】 ダツタンエビス。元が滅びた後、その宗族が漠北に走り、遂に元の國號を去つて韃靼と稱した。可汗本雅失里は明及び瓦剌に攻められて大いに衰へたが、瓦剌の也先の死後達延汗が立つに及んで、國運が復興つて、後大いに明を苦しめた。その孫俺答の時益、明の北邊を攻掠したが、清が興るに及んで、その諸部は皆これに降附した。

【司馬將軍】 司馬は戎馬の事を司る官。

周禮の大司馬の註に「司馬總武事官。」

尙書に「司馬掌邦政、統三六師、平邦國。」

【吳三桂】 ゴサンケイ。次の「和藤内」参照。

【ありか】 在處。あるところ。所在。

古今集、雜下に「風の上にありかさだめぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり。」

【義兵】 正義の爲に起す兵。

史記の酈食其傳に「聚徒合義兵、誅無道秦。」

【去んぬる天啓五年】 「天啓」は明の熹宗皇帝の年號で、その五年は實に我が後水尾天皇の寛永二年(二二八五年)に當る。

【二歳になりし娘の子】 いはゆる錦祥女。次の「和藤内」の項參看。

【當座に】 タウザに。すぐその座で。即座に。

狂言、雙六僧に「相手を切り殺し、その身も當座に相果て申され候。」

【八重の汐路の中絶えて】 遠く八重の汐路を隔てて、娘と相見る機會のないことをいふ。

「八重の汐路」は、遙なる潮路。たいそう長くて遠い海路。やしほぢ。

後拾遺集、春上に「はるくと八重の汐路におく網をたなびくものはかすみなりけり」

【草木の雨露の恵に長ずることく云々】

このあたりは、謡曲、熊野(ユヤ)の「草木は雨露の恵み、

養ひ得ては花の父母たり。」などの句をおもひあはせて文を綴つたものであらう。

【天地の父母】 萬物を生々仕育せしむる天地(大自然)を父母になぞらへてかやうにいつたのである。

書經の泰誓に「天地萬物父母。」

【成人する】 セイジンする。幼年者が成長すること。おひたつこと。

狂言、比丘貞に「某倅を一人持つてござるが、殊の外成人いたしてござれど。」

【吳將軍甘輝】 錦祥女の夫。次の「和藤内」参照。

【和藤内】 戯曲「國性爺合戦」中の人物。「和藤内」は蓋し「和でも唐でもない。」といふ義から取つたのであらう。父は唐土、母は日本の生れだから。母は肥前國松浦郡平戸の漁夫の女田川氏、父は明の忠臣大師大爺鄭芝龍。

芝龍は明帝を諫めて容れられず、去つて 本に來り、名を老官と改め、平戸の漁夫の女田川氏を娶つて和藤内を生んだ。明國が亂れ、皇妹梅檀皇女が日本に連れて來つたので、その言に依つて明國は逆臣のために韃靼夷の侵すところとなつたことがわかり、和藤内は梅檀皇女を妻小睦に託し、父と途をかへて明

に赴いた。吳將軍甘輝は異母妹なる錦祥女の婢である。乃ちその獅子城に達せんと欲し、途で逆臣李滔天の虎狩の一隊に會つた。和藤内は虎と戦つてこれを威服せしめ、遂に一隊の將士を降して引率し、獅子城に到つた。そこで錦祥女に明を恢復するの志を告げ、母を質として甘輝に謀らしめた。錦祥女は和藤内に約束して、「事が成立したら白粉を解いて城外の濠中に流さう。成立しなかつたら、紅を流さう。」といつた。甘輝は錦祥女及び母の言を聞いて、心素より大義に歸してはゐれど、妻の縁に引かれて武道を捨てるといふ譏を懼れ、錦祥女を殺して和藤内に與しようとする。母は驚いてこれをとどめる。甘輝は已むを得ずしてその請を斥け、母を城外に出して、和藤内に還した。錦祥女はこの間に、心既に決し、忽ち匕首を胸に貫いて斃れた。その血が流れて彼の濠中に浮んだ。和藤内は之を見て事の成らざるを知り、急ぎ城中に入つて甘輝に面し、その親縁を無視するを責めた。甘輝は頑として心を變へない。錦祥女始めて死を告げ、義に依つて甘輝を説き落した。甘輝は遂に意を定めて和藤内に従つた。和藤内はこれより大將軍となり、諸侯王に準へて延平王國性爺といひ、鄭成功と號した。母は大いに喜び、直に匕首をとつて自ら咽喉を刺し、死を以てこれを勵ました。甘輝・國性爺は奮然として起ち、韃靼王をば母と妻との仇敵と目さしてこれを攻め、進んで石頭城を抜いた。

虎・右龍虎は國性爺と知つて應じないのみか、却つてこれを執へようとした。國性爺は乃ち勇闘して關門を破り、頻に數城を陥れて北州長樂城に入つた。時に天下の五十餘城は皆國性爺の威に服し、明の王化は漸く四方に及んだ。
こゝに於て明の遺臣吳三桂は、太子を奉じて九仙山より出で、小陸は皇女を擁護して平戸よりやつて来た。たま／＼父一官は南京城に逼り、逆臣李滔天を殺さうとして却つて擣となつた。國性爺はこの報を得て大いに驚き、甘輝・吳三桂と共に走つてその城に達し、勢を盡くして攻めた。城が陥らうとするとき、韃靼王並に李滔天は父一官を縛して國性爺の眼前に出し、「汝が屠腹するか、或は日本に還るかしなければ、汝の父は速に斬つて了ふぞ。」と呼ばはつた。國性爺はこれに逡巡してよう前まぬ。父は大義の係る所を以てこれを勵ました。國性爺が決然として直に前まうとすれば、李滔天が劍を父にさしつけるので、又進まれない。甘輝・吳三桂は、こゝ一大事と見てとつて、韃靼王に欺き告げ、「我等が運命は窮まつた、願はくば我等の命だけ助けられよ。速に國性爺の首をさしあげよう」と曰つた。王が心弛んで欣然たる所に、二人は速に起ち、王を蹴倒してこれを縛した。國性爺もまた急に立つて父の縛を解き、李滔天を捕へて酷刑に處し、王を咎うつて本國の獄に囚へた。こゝにおいて太子は位に即き、永曆皇帝と稱した。

【參考實傳】 鄭芝龍 字は飛黃、泉州府南縣の人である。父を紹祖といふ。長じて穎悟、膽略が人に超えてゐた。萬曆の末海に航

して日本に來り、又しば／＼海上を往來し、後海賊の羣に投じた。崇禎元年明の國內が大いに亂れた時、福建の左布政司蕭文燦の招に應じて黨を以て歸順し、兵を擁して清兵に抗し、轉戦して屢々これに克ち、飛虹將軍と號した。後太祖の遺裔華劍を奉じて南方に據り、平國公に封ぜられた。既にして勢が稍々衰へ、永曆七年遂に清に降り、同十五年榮市に斬られた。(二三三二)

鄭成功 初名は森、字は福松。芝龍が日本に來て平戸に寓し、田川氏を娶つて生んだ子である。風儀整秀、頗る威容があつた。崇禎十一年明に歸つて大學に入つた。王觀光がこれを一見して芝龍にむかひ、「この兒は英物で汝の及ぶ所ではない。」と言つた。隆武元年、芝龍は、太祖の遠孫唐王を立てて恢復を謀つた。唐王は成功を拜して防禦中軍都督となし、忠孝伯に封じ、朱姓を賜うた。因つて國性爺と號した。二年、芝龍は清に降り、唐王は殺された。成功は泣哭して儒服を焚き、永明王を奉じて明祚を繼ぎ、猶清に抗した。清は芝龍をして書を爲つて成功を招かした。成功は之を却けて従はなかつた。永明十二年延平王に封ぜられ、招討大將軍に拜せられた。やがて大舉して南京を襲つたが、不幸にして敗北した。そこで南して海に浮び、臺灣に據り、猶明の正朔を改めなかつた。時に明の朱舜水も亦亡命して日本に來り、水戸侯に仕へてゐた。成功は舜水と謀り、兵を日本に借りて明室の恢復を計らうとしたが、事ならず。十六年(清の康熙元年)病歿した。年三十九。(二二八四—二

三三二) 吳三桂 明將。初め明のために出でて清軍を拒いだが、叛賊李自成が北京を陥れるに及んで、清に降り、清の兵力を藉りて李自成を破つた。後、清の爲に南方を平げ、功を以て雲南に封ぜられた。降つて清の聖祖の時耿精忠等と共に清に叛し、自ら天下都招討兵馬大元帥と稱し、四川・貴州を侵した。後漸く強大となつたが、康熙十年病歿した。(二三三八)

【承引】 シ。ウイン。うけひくこと。うけがふこと。承知。承諾。
魏書の刑罰志に「或拷不承引。」
保元物語、内府昇見の條に「御承引もなければ、重ねて申すに及ばず。」
【母を具し】 母をともなつて。母をつれて。
【具す】は、ともなふこと。つれだつこと。
夫木抄卷八に「澤水にほたるのかげの數そふは、わがたましひやゆきてぐすらむ」
【頓智】 トンチ。臨機に出る智慧。早速の智慧。機智。
曾我五人兄弟卷一に「さても頓智の重忠やと、各、どつとほめたまふ。」

【千里が竹】 假設の地名。次のやうな俚諺・俚歌などより思ひついたのであらう。

虎は千里の藪に棲む。(俚諺)

虎は千里の藪さへ越すに障子ひとへがまゝならぬ(俚歌)

えらべたゞ千里をかへる寅の時(松永貞徳の附句)

支那にはこれに類する俗説はないらしい。

【潯陽の江】 ジンシャウのカウ。今は九江といふ。支那江西省の開港場で、鄱陽湖の長江に注ぐ所。水陸運輸の便に富み、商業が盛で、漢口・福州と相並んで支那の三大市場と稱せられてゐる。この地は白樂天が琵琶行の名詩を残したかどで、夙く世に知られてゐる。

【猩々】 シャウジャウ。支那でいふ想像の獣の名。よく物を言ひ又酒を好むといふ。謡曲「猩々」には、潯陽の江のほとりに於て、海中に棲む猩々が出て酒を飲む場面を描いてある。

別にスマトラ・ボルネオ等の地に棲息する猿猴の類をもしかといふ。全面に長い毛が粗生し、耳は小さく、口

は圓く突出し、尾及び臀に無毛の厚皮部がなく、性質が緩漫である。

【赤壁】 セキヘキ。支那湖北省黃州府黃岡縣の附近にある地。蘇東坡の前後赤壁賦によつて名高い。



赤壁の地名は、黃州府の外に、凡そ四ヶ所ある。即ち漢陽・漢川・江夏・嘉魚の赤壁がこれである。周瑜が曹操を困しめた赤壁は湖北省武昌府嘉魚縣の東北に在る。

東坡は神宗の朝、王安石と争つて罪を得、黃州に

配流された。東坡はこゝに配流中、元豐七年壬戌七月十六日の夜、赤壁に遊び、同年十月十五日夜、再遊した。

竹添井々の棧雲峽雨日記に「坡遊赤壁實在北岸。小岡臨江如削。賦中所謂斷岸千尺、要不過文士虛誇一耳。」とある。

【東坡】 トウバ。蘇東坡。名は軾、字は子瞻、東坡はその號。蘇洵の長子。仁宗嘉祐の進士。宋朝の文學者。博く

經史に通じ、文を屬する日に數千言、所謂唐宋八大家の一人である。英宗の朝大理評事簽書に除せられた。神宗の朝、王安石と合はず、作るところの詩が忌諱に觸れ、黃州團練副使に貶せられた。哲宗の朝召還せられ、累官して翰林學士・兵部尙書となつた。徽宗の建中靖國元年(一一七六一)卒。年六十。後大師を贈り、文忠と諡された。著す所に東坡集といふがある。

【配所】 ハイシ。配流せられたところ。流罪に處せられたところ。諡所。

北史に「元坦、配北州營、死配所。」
續日本紀卷九、神龜元年三月庚辛の條に「定諸流配處遠近之程。」

【獅子が城】 この城は甘輝の守つた城となつてゐるが、恐らくは假作の名であらう。「千里が竹」の虎に對して、獅子を持つ來てこれを對せしめたものとおもはれる。

【示しあはす】 互に相圖をして知らせあふこと。

天神記卷一に「示しあはせて、思ふまゝに本望を遂げさせ申すべし。」

【方角とても白雲の云々】 方角とても知らぬの「しら」を白雲の「白」にいひかけたのである。

「白雲の日影」は、白雲に照りはえてゐる日影(日光)といふほどの意味であらう。

【かひなくしく】 「甲斐甲斐しく」の字をあてる。いさましく。けなげに。いきほひよく。

源氏物語の早蕨の卷に「人の御上にてさへ袖もしぼるばかりになりて、かひなくしくぞあひしらひきこえ給ふめる。」

【たづきも知らぬ岩巖石】 取りつくすべも知らぬほどの大きな岩。

「たづき」は、手着の義か。取りつくべき方。たより。よるべ。よすが。

萬葉集卷十二に「あづさゆみ末のたづきは知らねども心は君によりにしものを」

「巖石」(ガンジャク)は、いはを。これをガンセキとよま

せないで、わざ／＼ガンジャクとよませたのは、語調をつよめるためであらう。一語・一句・一言をも苟くもしない大近松の心づかひを生徒に知らせたいものである。

【根ざし】 根のさし出ること。又、その根。

源氏物語の明石の巻に「岩に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。」

【瀧つ波】 タギつナミ。沸き上る波、逆巻く浪、などの意。

「たぎつ」は「たぎる」といふ意。タキと清んで讀むのは後世の轉訛である。

萬葉集卷九に「落ちたぎち。流るゝ水の磐に觸り。澱める澱に月の影見ゆ」

【大明國】 ダイミンコク。こゝは領土のひろい明の國の義で、明國を敬つていつたのではないことは勿論である。

「明」(ミシ)は支那の國號。太祖朱元璋が金陵(南京)に據つて群雄を破り、皇紀二〇二八年帝位に即き、尋いで元を滅して天下を一統したに始まる。成祖の時都を北京(今の北平)に遷し、國威が甚だ盛であつたが、中頃以後、内には宦官が跋扈して黨争が劇しく、外には北虜南倭の患があつて、國勢が大いに衰へ、遂に流賊が蜂起し、二三〇四年、毅宗の世に至つて關賊李自成の爲に滅された。以後鄭成功をはじめ明室の恢復を圖つたもの

もあつたが、成功しなかつた。世を受くること十七代、二百七十七年。

【人里】 ヒトザト。人の住んでゐる村里。

太平記卷五、大塔宮熊野落の條に「その道の程三十餘里の間には絶えて人里もなかりければ。」

【浩々】 カウ／＼。ひろ／＼としてゐるさま。水などのひろびろとみちた／＼へてゐるさま。

書經の堯典に「浩浩滔天。」

【ほうど我をぬかし】 「ほうど」は、ほと／＼、全く、非常に、などの意。「我」は我意の略。茫然として拍子抜けのしたさまをいふ。

【母ぢやひと】 おのれの母を呼ぶ詞。封建時代武士の間に行はれた語。文語で「母なる人」といふのを、口語にくづしたもののらしい。

壽門松、上に「許して下され母ぢや人。」

【この脚骨(スネボネ)に覺えたり】 この脚骨のつかれぐあひで、わかりました。

「脚骨」は、脛(スネ)の骨。

島原蛙合戦、二に「冥加知らず、罰當り、このすねぼを戴け。」

【魅(バカ)さば魅せ】 だまさうとおもふならだませ。

「魅す」とは、人の精神を迷はしほけしめること。たぶらかすこと。だますこと。

狂言、狐塚に「狐塚の狐が出てばかすといふほどに、ばかされぬやうにして番をせい。」

【小豆の飯の相伴】 古から狐を稻荷明神の使とし、これに小豆飯及び油揚などを供へることがあるから、かやうに言つたのである。「狐がもし俺を化すなら化せ。そのかはり、きさまの所へ行きつき次第、小豆飯の相伴にあづかるぞ。」といふのである。「相伴」は陪食・伴食の意。



【根笹】 禾本科、山竹(メダケ)屬の竹類。桿の高さは數寸に過ぎず、葉は帯白緑色で質が薄い。各地の庭園に栽培し、觀賞用に供せられる。根がよく蔓延して繁茂するから根笹の名を得るに

至つたといふ。千里竹。

【攻鼓・鼓太鼓】 セメツツミ・セメダイコ。敵軍に攻めかゝる時相圖にならす大形の鼓や太鼓。

平家物語卷十一、遠矢の條に「平家みかた勝ちぬとて、頻に攻鼓を打つてをめきさけんで攻め戦ふ。」

蘆名家記に「攻太鼓を打つて摺上原に打つて出づ。」

【ちやるめら】 哨哨。葡萄牙語。樂器の一種。喇叭に似て



孔が七つある。頭尾は銅、管は木で造る。唐人笛。太平簫。(和漢三才圖

會參看)

二代男卷八に「喇叭・ちやるめら萬の物の音までもゆたかに。」

【高音(タカネ)をそらし】 「そらす」は、「逸」の字の義に近い。高音を發して遠方に達せしめる意。

【惘然】 バウゼン。あきれさるさま。

江淹の詩に「酒至情蕭瑟、憑尊還惘然。」太平記卷五、相模入道田樂を弄ぶ條に「惘然として更

【ちつとを隠せず】 少しもおそれひるまず。少しもおそれたじろかず。

【讀めたり〜】 わかつた〜。合點がいつた〜。

【異國】 イコク。とづくに。外國。

李陵の答蘇武書に「遠托異國、昔人所悲。」

平家物語卷五に「異國の軍をしづめさせ給ひて。」

【鉦】 カネ。たゝきがねの略。又、ふせがね・ひらがね、ともいふ。地に伏せ、撞木(シ・モク)を用ひてたゝきならすもの。

枕草子卷六に「すきやうの鉦の音、われなめりと聞けば、たのもしくきこゆ。」

源氏物語の夕霧の卷に「不斷の經よむ時、かはりてかねうちならすに。」

【勢子】 セコ。責子の意かといふ。又、かりこ。獵の時に鳥獸を驅り出す夫卒。列卒。

新六帖卷二に「明けわたるもと山遠くせこたてて夜ごめの鹿の行く方ぞなき」

【虎嘯けば風起る】 古樂府に「虎嘯谷風起、龍興景雲浮。」淮南子に「虎嘯而谷風至、龍興而景雲屬。」易經の文言傳に「雲從龍、風從虎。」

【二十四孝】 元の郭居業の選といふ二十四人の孝子。大舜・漢文帝・曾參・閔損・仲由・董永・刻子・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭巨・楊香・朱壽昌・庾黔婁・老萊子・蔡順・黃香・姜詩・王褒・丁蘭・孟宗・黃山谷の二十四人。この二十四人の選定の當を得てゐないことは公論である。

【楊香】 ヤウキヤウ。晉の人。年十四の時父と共に田にゆき、粟を穫つた。父は虎の爲に曳き去られた。時に楊香は手に寸鐵も帯びてゐなかつたが、たゞ父あるを知つて身あるを知らず、勇躍して向ひ前み、虎の頸をひきしめた。虎はくなくとして死んでしまつた。父はこれが爲に害を免れた。

【勇力】 ユウリク。いさましい力量。つよい力。

周禮の夏官司右に「國之勇力之士、能用五兵者屬焉。」日本後紀卷二十一、弘仁二年五月丙辰の條に「田村麿、赤面黃鬚、勇力過人。」

【神力ます〜日本力】 神の通力がます〜加はつて、和藤内の日本力がます〜その威を發揮したといふ意。

【神力】(シンリク・ク・シンリキ)は神の通力。神の威力。

源平盛衰記卷四十二、與一扇を射る條に「挟みて立てたる扇なり、神力既に指し副ひたり。」

【大人氣なし】 おとならしからぬこと。こどもつばいこと。砂石集卷六に「おとなげなく彼を打たんとして、倒れて侍るねたさにこそ申し候ひつれ。」

【虎はおろか】 虎は申すもおろか。虎はいふまでもなく。【一挫ぎ】 ヒトヒシギ。一度にひしぐこと。むさふさにひしぐこと。

日本振袖奴卷四に「一挫ぎに取つて伏せ。」

【尻ひつからげ】 「尻ひきからげ」の音便。衣服の裾をからげること。

【身繕ひ】 ミヅクロヒ。身じたくをすること。源平盛衰記卷十五、宇治川合戦の條に「水の上にて身繕ひすな。」

【母をかこつて】 「母を圍ひて」の音便。その身を以て母を

蔽うて。

【西天の獅子王】 サイテンのシ、ワウ。「西天」は印度を指す。獅子は百獸の王者とされてゐるから、獅子王といつたのである。

无量壽經に「如獅子王、无所畏故。」智度論に「又如獅子四足獸中獨步无畏能伏一切佛亦如此。」於九十六種外道中、一切降伏。故名獅子。」

【恐れつべうぞ見えてける】 獅子王は何物をも恐れぬが、たゞこの和藤内だけには畏れたやうに見えた。

【案に違はず】 推量に違はず。おもつたとほり。あんのじやう。果して。

古今著聞集卷二十に「湯を穴の中に汲み入れたりける程に、案にたがはず、蛇出でて。」

【節根】 フシネ。むすばれてふしのやうになつてゐる樹木の根。わだかまつてゐる根。盤根。

【頼】 ユラ。顔の兩傍、即ち目の下の部分。ほ。

【いがみかゝる】 怒つてかみつくこと。

「いがむ」は、「唯む」の字をあてる。

倭訓栞に、「犬猫などの怒り鳴るをいへり。法華經の唯喙をよめり。虚堂錄にも『千猿唯喙』と見えたり。童蒙頌韻に『猿』をよめり。いがみづらなどもいへり。」とある。

【弓手】 ユンデ。ユミテの撥音便。弓を持つ方の手。左手。又、左方。

保元物語、新院の御所各門々固の條に「ゆんでの肘めでに四寸のびて。」

【馬手】 メテ。馬の手綱を持つ方の手。右手。又、右方。

保元物語、親治等生捕の條に「伊藤・齋藤、弓手・馬手より馳せよつて。」

【もぢつてかゝれば】 虎がからだをねぢつてとびかゝつてくれば。

「もぢる」は、「捩」の字をあてる。ねぢりもとらすこと。すぢること。よぢること。

宇治拾遺物語卷一に「すぢり、もぢり、えい聲を出して。」

【身をかはし】 身をひるがへして相手を避けること。

【撓めば】 タワめば。こゝは虎がそのからだをまげゆがめるといふほどの意で、前の「よぢつてかゝれば」に對する語である。

【命競べ根競べ】 命と根氣とのくらべあひ。(和藤内と虎ととが)。

【えい／＼／＼】 力を入れるとき發すること。『えい』を重ねていつたもの。

狂言、どぶかつちりに「つぶてを打つて見よ……えい。えい。やつとな。」

【怒り毛】 獸類などの怒つて逆だつ毛をいふ。太平記卷二十八、漢楚合戦の條に「獅子の怒り毛の如く巻きて。」

【大童】 オホワラハ。髪結びが解けて亂れ垂れたもの。古は童は髪を結ばなかつたから、小兒を「わらは」ともいふ。わらく・はらくなど、皆散亂の意で、同源の語である。亂髪。がつそう。

【筆られ】 ムシられ。つかんで引き抜かれること。

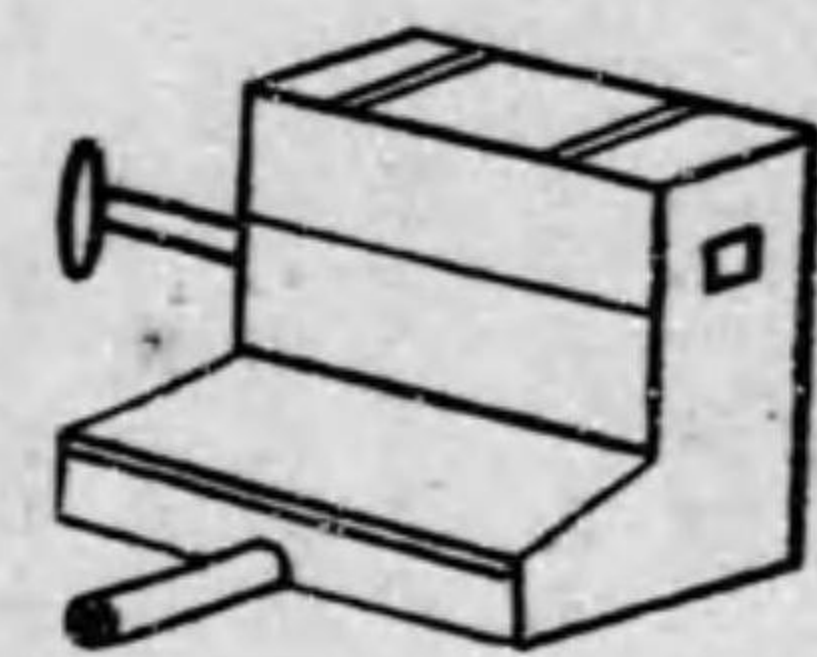
宇治拾遺物語卷四に「雉子……いけながら毛をむしらせければ。」

【小首を投げ】 少し首をうなだれて。

「小首」は、くび。かしら。かうべ。

古今著聞集卷十に「手合はせして、長居、畠山が小首を強く打ちて、袴の前腰を取らんとしけるを。」

【轆】 フィガウ。「フキカハ」(吹革)の音便。鍛冶が火をおこすに用ひる具。押しつ、ふくらしつして空気を驅り、これを孔から吹出させて火をおこす。



【神國】 神のつくられせられた國の義。我が國人が自國を誇稱する語。

北畠親房の神皇正統記に「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へたまふ。我が國のみこの事あり、異朝にはそのたぐひなし。故に神國といふなり。」

【神より受けし身體髮膚】 神さまからさづかつたこのからだや、頭髮や、はだへ。前に「神國に生れて」といひ出し

たから「神より受けし」といひつゞけたのである。「身體髮膚云々」については、

孝經の開宗明義章に「身體髮膚受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。」とある。

【畜類】 チクルキ。(一)家に畜ふけもの。家畜。(二)畜生のたぐひ。獸類。こゝは(二)の意。

源平盛衰記卷八、法皇三井灌頂の條に「天魔……聊か通力を得たる畜類なり。」

【力立て】 力のあることを見せかけること。力自慢。

日本振袖初卷二に「力だてする天稚彦が細首ひきぬき、手足をもぎ。」

【怪我するな】 正しくは「怪我すな」とあるべきだが、原文を尊重して、そのままにしておいた。

「怪我」(ケガ)は、(一)あやまち。過失。そさう。(二)過失によつて負傷すること。又、その負傷。こゝは(二)の意。

釋迦如來誕生會卷一に「早速參る筈なれども、臍をちとけが致し。」

【神はわが身にいすゞ川】 神はわがみにいますの「い」を伊勢皇大神宮の鎮座地を流れるいすゞ川にいひかけたのである。

「いすゞ川」(五十鈴川)は三重縣度會(ワタラヒ)郡にある川。一に御裳瀧川・宇治川。俗には大川ともいふ。水源は二つ、一は逢阪山から出て皇大神宮の南を繞り、一は神路山(カミヂヤマ)から出て諸溪流を合はせ、神宮の南西に至る。二流はこゝで相會し、再び相分れて伊勢灣(二見が浦)に注ぐ。伊勢内宮の神域を流れてゐるので、特に名高い。參詣者は多くこの川で手を淨める。流域三里二十町。

【大神宮の御祓】 伊勢大神宮で受けた災難よけの御守札。

【納受などか無からんや】 どうしておうけいれがなからうか、あるにきまつてゐる。(反語)

【納受】(ナフジユ)はうけいれること。聞き入れること。

漢書の王尊傳に「上初納受章言。」

源平盛衰記卷十一、小松殿の夢に「この社に參りて、千夜通夜して祈り申す旨ありき、その御納受到にや。」

【肌の護符】 ハダのマモリ。はだにつけるまもりふだ。

太平記卷三、赤坂の城軍の條に「觀音經を入れたりける膚のまもりに矢あたつて。」

【神國神祕のその不思議】 神國の神祕といふほどの意。句調をよくするために、更に「不思議」といふ文字を加へた。不思議にも直に神の感應があつたことをいふ。

【岩洞】 ガンドウ。岩のほらあな。

謡曲、龍虎に「竹林の岩洞は虎のすみかにて候。」

【尾筒】 ヲツツ。尾の上の圓くふくれたところ。

曾我物語卷八、新田、猪に乗る條に「をづつを手綱に取り。」

井筒業平河内通卷一に「のら犬めと尾筒を取つて引き戻し。」

【ひるむ】 なえたわむ。くじけてぢぢむ。萎縮。

【天の斑駒素戔男尊の神力】 素戔男尊が、天の斑駒を捕へて、その皮をお剥ぎなされた故事を採り來つて、和藤内が虎をひしいた事に比したのである。

【斑駒】(フチコマ)とは、さし毛のある馬をいふ。上古の音には濁音がないから「フチコマ」と讀むのが正しい。

今は多く「ブチゴマ」とよみならはしてゐる。

【天照らす神の威徳】 かく容易に虎をひしいたのは、人間業でなく、偏に天照大神の御威徳であると、神恩の高きに感佩した義である。

「威徳」(キトク)とは、威光と靈徳。又、威光があつて徳の高いこと。

謡曲、西王母に「今この御代に至り花咲くこと、たゞこの君の御威徳なれば。」

この一段は次の如く語を補つて見るといふ。「虎を打ち伏せ打ち伏せ、そのひるむ所をつけこみて、これに乗りかかり、足下にしつかとふまへしは、神代の昔、天の斑駒を逆剝にしたまひし素戔男尊の神力にも劣らず。げに我が身を守りたまふ天照大神の御威徳ぞありがたき。」

【うぬ】 きさま。相手を卑しめていふことば。「おのれ」の約轉。

【風來人】 フウライジン。何地よりも知られず、風に吹きよせられたやうに來た人。漂到の人。浮浪の人。

【高名】 カウミナウ。(一)名高いこと。評判の高いこと。(二)

武功。戰場で敵の首を取ることを。

平家物語卷九、一二のかけの條に「保元・平治二箇度の軍に先懸けて高名したる武藏國の住人平山の武者所季重と名乗つて。」

【異議に及ばば】 異存をとなへるならば。

「異議」(イギ)は他に異なつた議論。異論。

後漢書の耿弇傳に「每有四方異議、輒召入問籌策。」

【しやくわんく】 意味がよくわからぬ。頭註にあるやうに、上官の訛で、將士などの意であらうか。

「なには土産」には「射官なるべし。火砲弓箭を射る役なり。」とある。すれば「射官よ、直にうち殺せ。」とでもいふことか。

【笑壺に入り】 エツポにイリ。深く笑み興すること。

保元物語に「龍顔頗る笑壺に入りておはします。」

【餓鬼も人數】 つまらぬ者でも多數といふ點で役に立つといふ意。「枯木も山の賑ひ」などいふと同類の諺。

故事要言に「これは物の數にも成らぬものといへども、時あつては便となる事ありといふ心なり。」

後撰夷曲集卷九に「お召しには餓鬼も人数と聞くからに、腰折れながら集を望めり。」

「餓鬼」は(一)餓鬼道に住する亡者。飲食物に乏しくて皮肉が枯槁し、常に餓渴に苦しむといふもの。(二)餓鬼道の略。(三)子供の賤稱。こゝは(一)の意。

【しをらしい事ほさいたり】 殊勝なことをぬかしたな。

【しをらし】とは、行爲の賞すべきこと。可憐なこと。殊勝なこと。

狂言、笠の下に「あゝそれはしをらしい事かな。」

「ほざく」は、べちやくとしゃべり立て、又は情をかくさずしてもいふをいやしめていふ語。辯舌よくいろくにいひなすことをいやしめていふ語。

平家女護鳥卷四に「口あるまゝにほさいたり。」

【身が生國】 ミがシャウコク。自分の生れた國。

薩摩歌卷上に「わつちが生國は陸奥の國。」

【舌長し】 漢語の長舌から出た語で、言ひすぎすものを罵倒するに用ひる語。

詩經の大雅、瞻卬篇に「婦有長舌維厲之階。」

【石花菜】 トコロテン。トコロテングサで製し、おもに夏

季に用ひる。食するにあたり、トコロテンツキと稱する一寸許の方柱状の器に容れ、突棒で突くと、器の先端にある金網のために、トコロテンは細き饅頭状のものとなる。これに醤油・酢などをかけて食ふ。この語は、「踏天」と國音が近いから、「李踏天」を賤めていふに用ひ、且つ次の語の「つき出し」をきかせたのである。



原料は普通「天草」と稱する。天草は紅色藻類に屬し、磯濱

或は海底の岩礁に産出する。静岡・和歌山の二縣が第一、其

の他長崎・青森・大

分・宮崎・高知・徳島・愛媛・島根・千葉・三重の諸縣並に北海道・臺灣等より産する。種々あるが、オホブカ・キヌセグサ・ヒラモグサ・オンモグサなどがおもなるものである。これを漂白して釜などで煮、濾して滓を去り、液の冷えぬ中に槽に移して放冷すれば、透明無

色、海月の體に似たものが出来る。これを一定の形に切り、冷やしておき、食するときに前文の如くする。

【詫言】 ワビゴト。謝罪の挨拶。わびのことば。

大藏流狂言、武悪に「幾重にも御詫言を申し上げまする。」

【いかなこと】 「いかなることありとも。」の略。どんな事があらうとも。斷然。

【ねめつくる】 睨み付ける。強く睨む。疾視する。

【ものないはせそ】 「ものをいはせるな」といふ意味をつよくいつたもの。

「だまれ」などいふと同意。

【太刀差翳し】 タチサシカザシ。太刀を高く頭上にふりあげて。

【差】は接頭語。「翳(カザ)すとは、頭上におほふこと。頭上におくこと。

【八方無盡に】 縦横無盡に。自由自在に。

【撫でまくる】 撫でぎりにしようとして斬りまくること。まくし立てて撫でぎりにすること。

【安大人】 アンタイジン。捕卒の頭。「大人」は彼の土で呼ぶ敬稱。

【官人引具し】 役人たちをひきつれて。

【老耄(オイボレ)餘さじと】 おいぼれどもをうちもらしはしまいぞと。

「老耄」とは、年が老いて、心のにぶくなること。又、そのもの。こゝは和藤内などをいやしめていふ。

禮記の曲禮に「八十九曰耄。」註に「耄、悖忘也。」

【一文字に】 こゝは「わきめもふらずに」といふほどの意。

【神明擁護の驗(シルシ)】 神さまがおまもり下さる効驗があらはれること。

「神明」は、神。神祇。

易經の繫辭に「始作八卦、以通神明之德。」

我が國では、特に天照大神を敬つて申す。こゝもその意。

【かり鉾】 よくわからぬ。雁股鉾(カリマタホコ)の略語でもあらうか。それとも、獵(カリ)に用ひる鉾といふ義か。

【數鎗】 カズヤリ。「數槍」とも書く。足輕などに數多持た

せる鎗の汎稱。

日本武尊吾妻鑑卷二に「二つ道具の行列に、毛槍、數槍、大鳥毛。」

【自在】 ジザイ。物事の束縛なく、さはりなく、おもひのまゝなること。自由。

漢書の王嘉傳に「大臣舉錯、恣心自在。」

源平盛衰記卷十一、梶原逆櫓の條に「船に逆櫓と申すものを立て候て、軍の自在を得る様にし候はばや。」

【宙】 チウ。空。虚空。空中。

源氏十二段長生島臺卷二に「如何なる天魔・鬼神なりとも、宙につかんで微塵になし。」

【微塵】 ミチン。こまかきちり。轉じてきはめて微細なものを。の。

太平記卷三、笠置軍の條に「櫓の板を微塵にうちくだかるゝのみに非ず。」

【打物】 ウチモノ。打ちきたへたもの。刀・槍等の總稱。

保元物語、白河殿夜討の條に「恐らくは、弓矢とつても、打物とつても、われこそあらめ。」

【色めき立つて】 敗れ崩れるきさしがあらはれて。潰亂の微候が見えて。

太平記卷八、摩耶合戦の條に「寄手少し射しらまかされて、……色めきける氣色を見て。」

【どつこい】 相手をおさへるときなどに發する聲。

【素首】 ソクビ。ソクビの撥音便。頭を罵つていふ語。「そ」は發語ともいひ、又、「其」の意ともいふ。

【熟柿】 ジュクシ。木になつたまゝよく熟した柿の實。よくうんだ柿の實。きさはし。

狂言、成上物に「澁柿が熟柿になりあがりませす。」

【五體】 (一)筋・脈・肉・骨・毛皮の稱。又、頭・首・胸・手・足の稱。又、頭と兩手・兩足との稱。(二)總身。全身。こゝは(二)の意。

保元物語、法皇熊野御參詣の條に「巫も五體を地に投げ、肝膽をくだきければ。」

【仁王立】 ニワウダチ。仁王の如く勇猛に立つたさま。「仁王」とは佛教守護の二神の稱。左輔を密迹金剛といひ、右弼を那羅延金剛といふ。共に勇猛獯惡の相をして

ゐる。通例、寺門の左右に安置する。

【手並】 テナミ。うでまへ。わざまへ。てぎは。技倆。手腕。

保元物語、白河殿夜討の條に「手なみのほどを見せたれども。」

【我こそ……老一官が悴】 この下に「にして」の三字を加へて見よ。

【音に聞えたる】 うはさにきこえてゐる。

「音」は、うはさ。おとさた。風聞、などの意。

萬葉集卷五に「おとにき。目にはいまだ見ずさよひめのひれふりしとふ君まつら山。」

【悴】 セガレ。我が子の賤稱。又、子が自ら謙つていふ稱。

谷川士清の鋸屑譚に「今俗、我が子を稱してセガレといふは瘦枯の略なり。……憔悴をいへり。廣韻に憔悴は瘦也といへり。又西人わが女をも稱して、憔悴といふ。共に自ら讓る辭なり。」とある。或は悴(副也、遊悴、悴之末仕者)の訛かといふ。

【平戸】 ヒラド。長崎縣北松浦郡平戸町。平戸島の北東端

に位し、平戸瀬戸に臨む。中世以後松浦氏居住の地で、常に日支外交の衝に當つてゐた。天文以後は、ポルトガル人・オランダ人・英人等相次いで來航し、寛永年間まで對外貿易の中心として繁昌した。

【梅檀皇女】 センダンクウヂ。戯曲「國性爺」の筋によれば、大明の第十七代思宗烈皇帝の皇妹。逆臣李滔天はこれを獲て妻にしようとしたが、吳三桂はこれを遮り止めた。後李滔天は皇帝を弑した。吳三桂の妻柳歌君は亂離の中に皇女を舟にのせ、何處ともなく流しやつた。この舟が九州の平戸に漂着した。鄭芝龍はこゝに偶然皇女と邂逅して故國の亂を聞き、妻田川氏と共に藤津の浦より明國に渡つた。和藤内も亦別路を取つて、明國に渡つた。皇女は和藤内の妻小睦がこれを預つたといふことになつてゐる。

【三世の恩】 サンゼのオン。前世・現世・來世の三世にわたつて縁のある主従の恩をいふ。

佛説によれば、親子は一世、夫婦は二世、主従は三世の縁があるといふ。

【否か應か】 いやか、承知か。
狂言、針立雷に「いやでもおうでも、今取らねばならませぬぞ。」

【詰懸くる】 ツメカくる。近く迫り寄る。つめよる。

唐船斬今国性爺卷下に「互に柄に手はかけながら、詰めかけく。」

【のう】 人を呼びかけるに用ひることば。通例「喃」の字をあてる。

【向後】 キャウコウ。キャウゴともよむ。この後。今後。

【お情頼み奉る】 おなさけをおかけ下さるやう、おたのみ申します。

【でかしたく】 こゝは勢子のもどもが和藤内に降服したのをほめていつた語。「よく降参したく」といふほどの意。

「でかす」とは、効果を奏すること。しとげること。しおほせること。成功すること。

狂言、あかがりに「おゝ一段でかした。」

【月代】 サカヤキ。(一)冠の下髪を半月形に剃ること。月代ツギシ

ともいふ。(二)應仁の亂頃より武士は日常胃を用ひたから、額より頂にかけて髪を長く剃つたが、後には土民上下の髪風となつた。こゝは後者の意。

【差添】 サシゾへ。刀にそへて佩く短い刀。わきざし。

太閤記卷十二、小田原御進發の條に「御太刀、さしぞへなど、ことごとくしく若やかにものしたまひしよそほひなれば。」

【元服】 男子が始めて頭首に冠を加へ、大人の服を着け、成人となる禮。概ね男子が十五六歳に達する時これを行ふ。加冠者を烏帽子親といふ。鎌倉時代には六七歳でも行つた。後世男子の額髪を剃り、女子の眉を落し齒を染めるをもいふことになつた。

字義に就いては二説ある。(一)元は頭首、服は冠を着せしめる意。依つて又元服を始冠・冠禮・首服・首飾・初冠等ともいふ。又加冠した人を冠者といふ。(二)貞丈雜記に「元はハジメ、服はキモノとよみ、幼き者成長して始めておとなの衣服を着るをいふ。」とある。前説の方がよからう。

【鉢】 頭蓋骨を俗に「ハチ」といふ。但しこゝこの「鉢」は頭蓋骨と實の鉢、即ち月代を剃るに際し、髪を揉むに要する水を入れた水鉢とを兼ねていつたのである。

【こぼつ】 これまた前の鉢といふ字にかけて見るがよい。

頭髪を剃るのみでなく、頭を傷つけこぼつのである。

【絲髪】 イトピン。徳川

時代の中頃に行はれた男子の髪の結ひ方。月代を大きくし、額より髪にかけて剃り落し、髪の髪を細くして結つた髪の風。

好色一代男に「世の風俗も絲髪にして。」

【厚髪】 髪の髪を剃りおとさずに、頭の中央部

より額にかけて狭く剃り落し、髪の髪を長くして結つた髪の風。

嬉遊笑覽卷一下に、箕山が大鑑を引きて「髪の厚きは賤しからねど、初心めきたり。絲髪に剃り下げたるは健かに見ゆれども、凡卑なり。細くして手先の上りたる猶賤し。髪はたゞ厚からず、細からずして直なるがよし。」とある。

【二櫛半のばらけ髪】 髪を結ふに十分にすくことをせず、粗略に手早くするを「二櫛半」といつたのであらう。随つて髪附油を用ひて髪を固めることもなく、ばらけ亂れたまゝである。

【冷つく】 ヒヤつく。ひやくする。

【嚏々村雨々々】 クツサメ／＼ムラサメ／＼。クサメは鼻神経と呼吸神経との交感により、急に呼吸を起すもの。この時、吸氣は口腔から入り、呼氣は突然鼻孔から出る。急に寒氣を催す時、或は鼻粘膜を刺戟すべきものを吸入した時にこの作用がある。クツサメクツサメ村雨村雨と、嚏の後に「村雨々々」と呼ぶのは、何故かわからぬ。恐らくは、たゞ尾韻をあはせる作者の手段であらう。邦



本多

絲

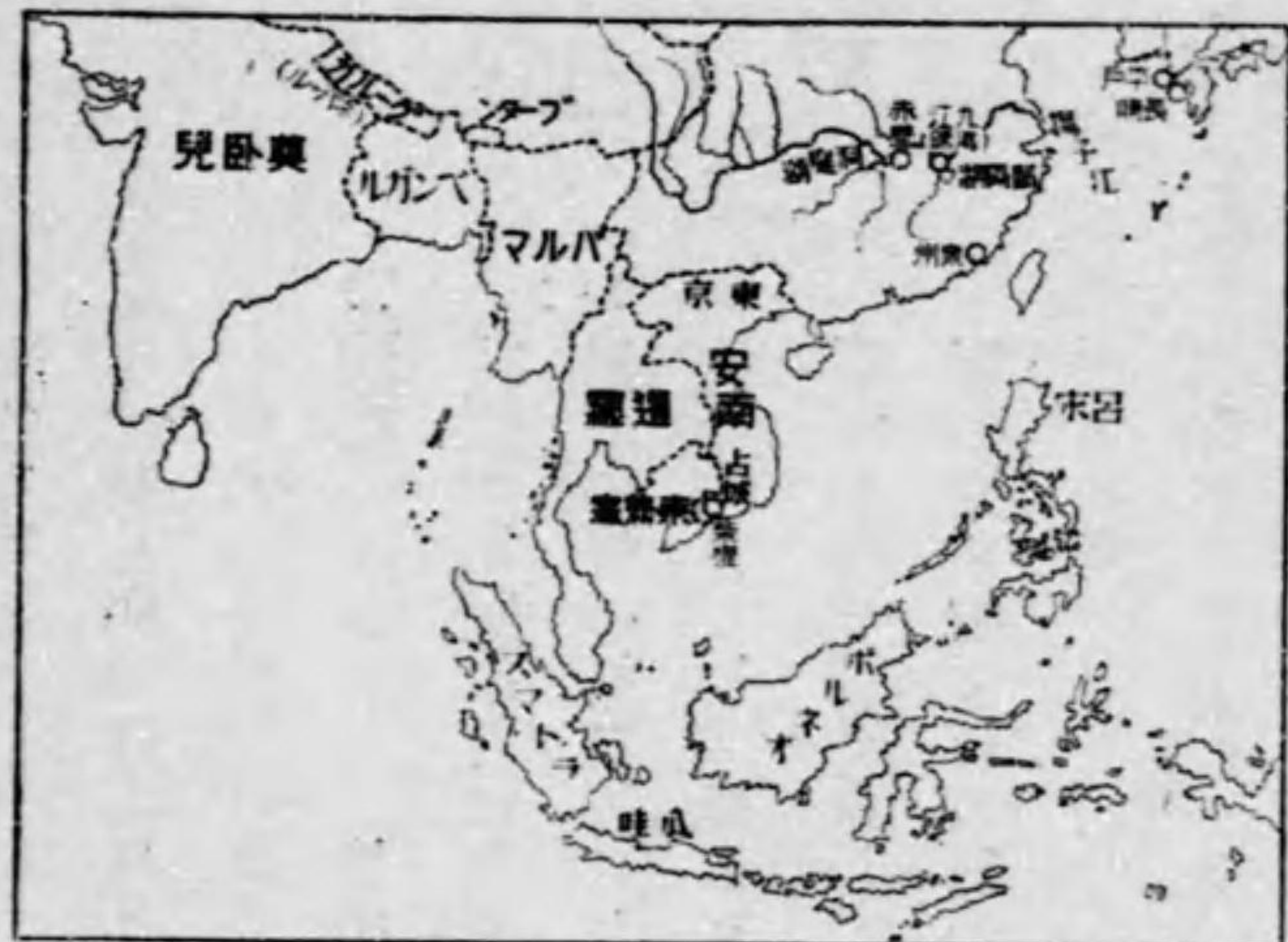
厚

俗、迷信家は、噫を以て、陰言をいふものがあるから起つたとしてゐる。倭訓栞に「枕草子には、はなひて誦文する人と見え、徒然草には、くさめくさまじなふと見えたり。休息命の訛言也。(案するに、こは休息命よりクサメの語出でたりとするが如し)拾芥抄に、噫の時の頰に「休息萬命急急如律令といへる是也。」と見えてゐる。

【供廻り】 供人の群れ。供勢。

大織冠卷一に「御供廻りかろくと、わざと忍びの町乗物。」

【面々】 おの／＼。めい／＼。各自。



延暦本平家物語卷一、成親卿の北方、備前へ使を遣はさる、條に「若宮・姫君も面々に父の許への御ことづてとて。」

【國所】 クニドコロ。くに。くにざと。郷國。

【頭字】 カシラジ。文章又は字句のはじめにある文字。かしらもじ。おやもじ。

【おつたてろ】 さあ行け／＼と逐ひ立てよ。忠臣蔵に「逐ひ遣つて仕舞つた。」といふことを「ぼつたててしまつた。」とある。

【お先手の手振の衆】 おサキテのテフリのシウ。先陣をうけたまはつた供人の衆。

【先手】は先陣。鎌倉大變紙に「成氏方の先手小山・結城の兵、一戦にうち負け。」

【手振】は、ともびと。從者。

宇津保物語の祭使の卷に「御馬どもひきたて、手ふりどち立ちなみたり。」

【ちやくちう】 不明。このころチンチウ (Chincheo) とい

ふは泉州で、厦門附近をいつたらしい。チャグチウの音は聊かこれに近い。

【東蒲塞】 カボチャ。(Cambodia)。「甘字智」眞臘等の漢字をもあてる。印度支那半島の王國で、今はフランスの保護國(一八六三年)。

【呂宋】 ルスン。ルゾン。(Luzon)。比律賓群島中最大の島。首府はマニラ。今は米領(一八九六年)。

【東京】 トンキン。(Tonking)。印度支那最東北の平野を占める王國。首府をハノイといふ。古の交趾の地。今はフランスの保護國(一八八三年)。

【暹羅】 シアム。(Siam)。印度支那の一王國。今は東西から佛・英に壓せられ、疆域が次第に減じた。

【占城】 チャンパ。(Champa)。今の佛領印度支那交趾の首府サイゴン附近の地を指す。小鶏のチャボは、この地の産である。

【ちやるなん】 不明。印度の利兀兒國か。茶字稿の名はこれからおこつた。

【ほるなん】 不明。ホルトガルのホルを取つたのか。

【うんすん】 不明。昔、外國から渡つたカルタに、ウンスンガルタといふのがあつた。葡萄牙語では一をウンといふ。スンは不明。ウンスンガルタといふも、カルタの用法などから名づけたものらしい。それを地名としてこゝに用ひたのであらう。

【すん吉郎】 不明。これはウンスンにつれて、口拍子にまかせ、出たらめにいつたのではなからうか。

【もうる】 モゴル・モンゴル・ムグリ。(Monghol また Mongghul)。古は「莫臥兒」の漢字をあてた。英人の手に歸せない前の印度帝國をいふ。

和漢三才圖會に「按、莫臥兒、南天竺之内最大國也。人物似暹羅、而色稍黑、四季同干暹羅。」

【ちやが】 ジャバ。(Java)。普通に瓜哇と書く。マライ諸島の一で、和蘭領。その首都バタビヤの舊名をジャガタラ (Jacatra) といふより同地方をジャガタラといひ、そこを経て傳はつた馬鈴薯をジャガタラ芋(略してジャガ芋)などといふ。

【さんとめ】 「聖多默」と書いたのもある。

和漢三才圖會に「佐牟止女、即南天竺莫臥爾之近國。人品亦同于莫臥爾。未_レ來_二於日本_一。其土產、暹羅及中華人往々交易來_二于日本_一。」

又同書に「佐牟止女國土產、鮫・木綿綬・織物・鹿草。言海に「サントメジマ、棧留稿、初め印度東境の地聖多默(San Thomas)より來りしが故に名とす。」

【今參】 イママキリ。新參。奉公人の新しきうちの名。俚諺に「今參三十日。」

枕草卷子二に「今參のさしこえて、物知り顔に教へやうなることをいひ。」

【引馬】 ヒキウマ。古昔、貴人の儀從に鞍覆をかけて引きゆく馬。

東鑑卷四、元暦二年五月十七日の條に「能盛引馬、駘_二基清之所從_一。」

【虎斑】 トラフ。虎の背上の毛のやうに黄赤色で太い黒線の斑文あるもの。虎毛。

口取る】 こゝは、引馬や虎斑の駒の縁語として言ひ出たもので、別に意味のある語ではない。たゞ筆のすゝむ

まゝに書きつけて、文の調子をととのへたまでであると見てよからう。

【本朝】 ホンテウ。我が國の朝廷。轉じて、我が國。

砂石集卷一上に「當社は本朝の諸神の父母にて。」

【鞍笠】 クラアブミ。馬の鞍と笠。

「鞍」は、馬具の名。馬の背に置いて人又は荷物をのせる具。くらぼね。

「笠」は、足踏(アシフミ)の略。馬具の名。鞍の兩わきに垂れて、乗る人の足をふみかける具。

【威勢】 キセイ。たけいきほひ。

管子の明法解に「人主之所_二以制_三臣下_一者威勢也。」

9 挿

和藤内 鳥居清滿筆

和藤内が千里が竹で猛虎をひしいでゐるところ。

本文の中にある「虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ見づくろひ、母をかこうて立つたるは云々」の状を描いたものである。

うしろに立つて大神宮の護符を捧げてゐるのは、いふまでもなく和藤内の母田川氏である。

筆者「鳥居清滿」(トリキヨミツ)は鳥居派三世の畫家。通稱は半三。清倍(キヨマス)の子。家風を守つて畫をよくした。江戸歌舞伎の繪看板及び一枚摺の江戸繪、草雙紙の版下等を描いて名聲を馳せた。天明五年(二四四五)四月三日歿。年五十一。

「鳥居派」は浮世繪の一派。鳥居清元を始祖とし、その子清信によつて大成された。よつて、普通に清信をこの派の初世とする。その畫風は始め勇健粗剛であつたが、清長に至つて大いに柔和清緻となつた。この派は専ら芝居の繪看板を畫いた。

その系譜は次の通り。



一四 浦の秋風

賀茂 眞淵

1 解題

賀茂眞淵の作にかゝる「岡部日記」中の一節を採録したものである。

題名は本文に見えてゐる作者の自詠「旅人は衣手さむししばしなほこゝろして吹け浦の秋風」の中の一句を採つたのである。

「岡部日記」ヲカベニッキは一卷。作者が櫻町天皇の元文五年（二四〇〇）閏七月八日江戸を出發してその故郷なる遠江の岡部に歸省し、序を以て遠江の各地を巡遊してまた江戸に上つたときの紀行で、一名を「東歸」といふ。別記「西歸」に對し、東より歸る義によつてかやうに名づけたものであらう。

2 作者

賀茂眞淵 カモノ マブチ。
徳川時代中期の國學者。國學四大人の一。姓は賀茂、氏は岡部、幼名は三四、通稱は衛士。神魂命の孫鳴武津奴見命の裔、京の賀茂の神官成助の末。父與三郎定信は遠江國濱松の庄、岡部郷、

伊場村（今の濱松市東伊場町）の神人で、兼ねて農を營んでゐた。長ずるに及び、出でて濱松の旅籠屋梅谷氏へ養子にいつたが、生來の好學心にまかせ、萩生徂徠の門に入つて漢籍を修め、讀書三昧に耽つてゐたので、養父は不機嫌勝であつた。この妻は思慮ある女性で、深く夫の志を酌み、それほど學問に御熱心ならば、幸ひ一子もあることゆゑ、家の事に心をこさず、しつかり勉強して名を天下にあげて下さい。」と勧めた。眞淵は深く妻の志に感じ、享保十八年（二三九三）三十七歳のとき上京して荷田春滿の門に入り、孜々學にいそむること五年、業成つて江戸に下り、古學を以て一家を成した。延享三年（二四〇六）五十歳のとき荷田在滿（春滿の養子）の後をうけて田安宗武に仕へ、その寵遇を得た。寶曆十年（二四二〇）十一月仕を退いて家を養子定雄にゆづつた。明和元年（二四二四）濱町に轉居し、居を故郷の田舎風に構へて縣居（アガタキ）と號した。その門人を縣門といふのも、これがためである。爾來いよ／＼研學と講説とにその力を致し、遂に「眞淵の前に眞淵なく、眞淵の後に眞淵なし。」とまで人々にあがめられ、明和六年（二四二九）十月三十日、及門子弟の哀惜悲歎のうち、その一生を終へた。年七十三。
眞淵は夙に古學を唱道し、初めて萬葉の風を鼓吹した。又古言を

綴つて文を成すに長じ、蔚として一家を成した。及門の士實に三百餘人。小野古道・加藤美樹・村田春郷・掛取魚彦・加藤千蔭・村田春海・本居宣長・荒木田久老・山岡俊明・清水濱臣の如きは、いづれもその俊筆である。

著書には、歌意考・国歌三説・国歌論叢説(以上歌學)、源氏物語新釋・萬葉考・祝詞考・古今集打聞・伊勢物語古意・冠辭考・日本書紀調考・延喜式詞解(以上註釋書)、古器考・古冠考・車服沿革・神樂東遊考(有職故實)、論語紀聞・書經辨解・詩經辨解(漢籍)などがある。これらは今いづれも、國學院編輯部編、賀茂百樹校訂の「賀茂眞淵翁全集」の中に收められてゐる。

明治十六年一月特旨を以て正四位を追贈せられ、同三十八年十一月、更に一級をすゝめて従三位を追贈せられた。

3 編集の用意

徳川時代に於ける國學四大人中の最高峯として學界に重んぜられてゐる賀茂眞淵の作によつて擬古文讀解の力を養ふと共に、景情兼ね羨れる文の妙を味得せしめ、且孝子親を慕ふの至情に感ぜしめて、各自が反省修養の資たらしめたい。

4 要旨

江戸に移り住んだ初のほどは、老母のことなど日毎に案

ぜられてゐたが、やがて忘れるともなく紛れて過すやうになつた今、いよ／＼歸郷にあつては、別を惜しむ人への名残よりも流石に先へと心が進むといふ、これが出立の感想である。品川から藤澤までの旅程では「浦の秋風」の歌にも興はこもるが、富士の山を眺めての心持に故山への旅らしい所を見せてゐる。それから三島に出るまでに於ては、箱根を中心として敘景と敘事との筆をふるひ、作者の學殖と詞藻の才とを示してゐる。この一節が本篇での中心でもある。

5 概説

江戸に在住する作者が、故郷に歸る際の紀行で、出立から三島までの抄録である。

第一節(九六頁—九八頁四行) 出立に當つての感想。

第二節(九八頁五行—九九頁) 品川から程ヶ谷を経て藤澤の驛に宿るまで。

第三節(一〇〇頁—一〇二頁) 藤澤を立つてから三島に到るまで。箱根の敘景を主とする。

6 取扱上の注意

□かう言ふ文では「豫めの理會」の必要上から、原典の解題といふことが或點まで試みられなければなるまい。又作者の傳記的事をも適宜に語り聴かすべきである。

□「あからさまながら」「人やりならぬ」などはともかくも、「年のはに」などいふ萬葉集の用語も交へられ、語句の上にはゆる擬古の度が可なり濃厚に現れてゐるので、文法的にも語彙的にも辭様の吟味に力を注ぐことを要すると思ふ。わるくすると、「おもしろさ」よりも「むつかしさ」の方が印象として生徒の頭に殘るやうにならぬとも限らぬ。

□「袖が浦」と「ときあらひぎぬ」と「衣手」とは、地の文から歌詞にかけて互に縁語をなしてゐると見られるが、當時の習とは言ひながら、いさゝか言葉のあやを弄び過ぎてゐるやうに思はれる。

□藤澤で阿夫利山を水上と考へて仕立てた一首の歌は、地理的に錯誤があるやうである。

□箱根山の敘景は、最も面白くはあるが、「いぶせかるべき

ものごのみなめり」といふ評が、この文章そのものにも、あて嵌りさうである。

7 設問

1 次の語句の意味を問ふ。

イ、あからさま。年のはに。人やりならぬ。世のさが。うつたへに。うまや。ときあらひぎぬ。

ロ、このあらましいふころ、人々別れ惜しむ。

ハ、富士の山はひつじさるの空に見ゆ。

2 「さのみもあらざりしを」「さのみ」とは何を指していふか。

3 「こたびはうれし」の「こたびは」と斷つたのはなぜか。

4 母及び父の枕詞は何といふか。

8 釋義

【都にありつる程は】 京都にゐた頃は。眞淵は享保十八年(二三九三)、三十七歳の時京都に赴いて荷田東滿の門に入り、五年間こゝで學をばげんだ。その間のことをいふ。

【あからさまながら】 かりそめながら。ついちよつとではあるが。

「あからさま」は、かりそめ。ついちよつと。

古今著聞集卷五に「あからさまと思ひけるに、その年も空しく暮れにければ。」

【年のには】 年ごとに。毎年。

萬葉集卷五に「としのにはに春のきたらばかくしこそ梅をかざしてたぬしく飲まめ」

【故郷】 フルサト。自分の生れぞつた土地。こきやう。郷里。故山。

古今集、夏に「ほととぎす鳴くこゑきけばわかれにしふるさとさへぞこひしかりける」

【さのみもあらざりしを】 さほど故郷がしたはしくもなかつたけれど。

【千里のをち】 千里もはなれてゐる遠方。

「千里」(チサト)は、多くの道程。遠い道程。必ずしも千里などいふ文字に拘泥するには及ばぬ。

六帖卷五に「はるくと千里のほどをへだててはまれ

の使もうれしかりけり」

「をち」は彼方・遠などの字をあてる。場所のへだたること。又、そのところ。あち。かなた。

古今集、離別に「白雲の八重にかさなるをち。にても思はむ人に心へだつな」

【老いたるたらちね】 年をとつた親。こゝは年をとつていらつしやる母上。

「たらちね」は「垂乳根」の字をあてる。母又は父の枕詞。又は直ちに父母の稱。親(オヤ)。

續古今集、雜下に「たらちねの心の闇を知るものは子を思ふときの涙なりけり」

【とみの事】 急の事。にはかの事。

「とみ」は、「疾み」の義。にはかなること。急なること。早速。

古今集、雜上に「母のみこのもとより、とみの事とて文をもてまうで來たり。」

【今やいかなる事かあらむ】 今、母上の御身の上になんか事があるだらうか。(母上は今どんなにしていらつしやる

であらうか。)

【いかなる心にかますらむ】 母上は今どういふおきもちでいらつしやるであらうか。

【人やりならぬ】 他よりするわざでないこと。人ごとでないこと。自ら思ひ立つてすること。

源氏物語の帚木の巻に「をりく人やりならぬ胸こがるゝ夕もあらむと思ひはべる。」

【胸騒がれつること】 むねがどきくすること。むなさわぎのすること。

【世のさが】 世のならはし。世のならひ。

源氏物語の柏木の巻に「あはれなることは、その常なき世のさがにこそは。」

【うつたへに】 ひたすらに。ひとへに。ひとむきに。一概に。

萬葉集卷四に「うつたへにまがきの姿見まくほりゆかむといへや君を見にこそ。」

【忘るとはあらねど】 母上の御ことを忘れてゐるわけではないけれども。

【友垣】 トモガキ。ともだち。朋友。朋輩。

【高き卑しきゆきかひしけるに】 身分の高い人や低い人と互に往來して交際してゐたところが。

「ゆきかひ」は、これ行き、かれ來ること。ゆきき。往來。古今集の序に「たとひ時うつり事去り、たのしびかなしびゆきかふとも。」

【二つなき心】 かけがへのない、たつた一つの心。こゝは一心に母をおもふ心。

曾我物語卷一、伊東調伏の條に「二つなき命を取り。」

【いでや】 人を誘ひうながすとき又は自ら思ひ立つ時などに發する聲。

こゝは後者の意。

【はらから】 同母の兄弟姉妹。同腹。同胞。轉じて、一般に兄弟姉妹の稱。

萬葉集卷三に「問ひさくるうからはらからなき國にわたりきまして。」

伊勢物語に「いとなまめいたる女はらから住みけり。」

五年(二四〇〇)閏七月八日。

「七月」(フミヅキ)は陰曆の七月。「文月」とも書き、「ふづき」ともいふ。穂見月(ホミヅキ)の轉か。

参考のため陰曆の月の雅名を左に。

- 一月 むつき(陸月)
- 二月 きさらぎ(衣更着)
- 三月 やよひ(彌生)
- 四月 うづき(卯月)
- 五月 さつき(五月・皐月)
- 六月 みなづき(水無月)
- 七月 ふみづき(文月)
- 八月 はつき(八月・葉月)
- 九月 ながつき(長月)
- 十月 かなづき(神無月)
- 十一月 しもつき(霜月)
- 十二月 しはす(師走)

【つとめて】 早朝。

土佐日記に「九日つとめて、大湊より那波の泊りを追はんとて。」

枕草子卷一に「冬はつとめて、雪のふりたるはいふべきにもあらず。」

【あらし】 あらかじめ心に思ひはかること。豫定。心あて。

堀河百首、雜に「はかなきをおもひしらすはなければどもあらしにのみ日を暮らすかな。」

【からやまとの歌】 からうた(漢詩)とやまと歌(和歌)。

【それはこもの記しつ】 それらのからやまとの歌は、別の紙にかきしるした。

【こもの】は異物。ほかのもの。こは、ほかの紙といふほどの意。

枕草子卷四に「こものは食はで、佛のおろしをのみ食ふか、いと尊きことなり。」

【友垣の名残なきにしもあらねど】 友だちとの別れがなごりをしくないわけではないが。

【契りおく日数いくばくならねば】 先方(故郷)へ約束しておいた滞在日数が至極少いので。

【先進まるゝ心】 さきを急ぐ心。故郷への出立を急ぐ心。

【いたしともおもほえず】 つらいともおもはぬ。悲しいともおもはぬ。

「いたし」は、心に感じてくるしいこと。惱ましいこと。悲しいこと。

萬葉集卷十七に「そこもへば心しいたしほとゝぎす聲にあへぬく玉にもが」

【品川のうまやわたり】 品川の驛の附近。

「品川」は今の品川区品川町。舊東海道五十三次の第一宿。

品川灣に臨み、海晏寺・東海寺等の名刹がある。その御殿山は眺望に富み、古來櫻の名所として知られてゐる。

「うまや」は馬屋の義。昔街道の往來に、旅人の便利をはかり、駄馬・人夫



を備へおき、その求に應じて、つぎたてをしたところ。

うまつぎ。宿場(シクバ)。宿(シク)。驛。

新六帖卷二に「旅人の山こえわぶる夕霧にうまやの鈴の聲ひびくなり」

「わたり」は、あたり。邊。附近。

【海のつらゆほびかなり】 海面がひろやかである。

「ゆほびか」は、ゆたかでひろくとしてゐるさま。

源氏物語の若紫の卷に「明石の浦……海のおもてを見わたしたる程なむ、あやしきこと所に似ずゆほびかなり所に侍る。」

【相模の岬】 相模國(神奈川県)三浦郡三崎。三浦半島南西端の岬角。前面に城が横たはつてゐる。

「相模」は東海道の一國。修して相州といふ。關東地方の南西隅にあつて、西は伊豆・駿河・甲斐と界し、北東は武蔵に接して關東平野に連なり、南東の三浦半島は房總半島と相對して東京灣の口を扼してゐる。全國神奈川県所管にかゝる。

【安房の大山】 千葉縣安房國安房郡嶺岡(安房郡の西偏なる山野の汎稱)の峯巒。平塚村に屬してゐる。もと大山寺といふ僧院があつて、不動明王を祀つてゐたが、近年これを改めて、大山神社とした。

國志に「大山神社は大山の南面中腹にあり。もと高藏山大山寺と稱す。傳へいふ、神龜元年甲子、良辨僧正の創建にして、今の社殿は足利氏の築造なりと。大山祇神を祭る。云々。」
「安房國」は關東地方の南東隅の一國。修して房州といふ。房總半島南端の丘陵地。北は房總分水嶺を以て上總を界し、他の三面は海に面してゐる。沿岸は氣候温暖、風光明媚にして、保養に適し、又海産物に富んでゐる。全國千葉縣に屬し、安房一郡をなしてゐる。

【青田かく奴】 青田をすきかへす作男ども。

「青田」(アヲタ)は苗が生ひたつて青々と見える田。

源平盛衰記卷三十三、木曾洛中狼藉の條に「青田を刈り取つて秣に飼ひ。」

「かく」とは、田畑などをすきかへすこと。耕すこと。

奴(ヤッコ)は、人に驅使せられる身分いやしきもの。奴婢。こゝは作男(サクヲトコ)といふほどの意。

【みだりにいふはをかしきものから】 出だらめにいふのはをかしくはあるけれども。

「ものから」は、「ものながら」ものではあるけれども「な」どの意。

【うづくにまれ】「うづくにてもあれ」の約略。どこであら

うとも。

【ときあらひぎぬきむ日】 解洗衣を着る日。こゝは汗まびれの旅衣をぬいで、こざつぱりと洗濯したきものをまとい、故郷におちつく日をさしていふ。

「解洗衣」とは、ときほどいて、洗ひ張りして仕立てたきもの。ときあらひごろも。

萬葉集卷七に「つるばみのときあらひぎぬのあやしきもことにきほしきこのゆふべかも。」

【その名のゆかしきや】 袖の浦(袖の裏にかけていふ)といふ名が、いかにもしたはしくなつかしいことよ。

「ゆかし」は、何となくしたはしいこと。なつかしいこと。枕草子卷二に「つゆばかりのこともゆかしがり聞かまほしがりて。」

「や」は感動の助詞。

【いとどしく】 いよ／＼甚だしく。

伊勢物語に「いとどしく過ぎゆく方のこひしきにうらやましくもかへる波かな」

後撰集、秋上に「いとどしく物思ふ宿の萩の葉に秋と

告げつる風のわびしさ。

【旅人は衣手さむし云々】「衣手」(コロモデ)は、そで。

「こゝろして吹け」は、心を用ひて吹け。氣をつけて吹け。

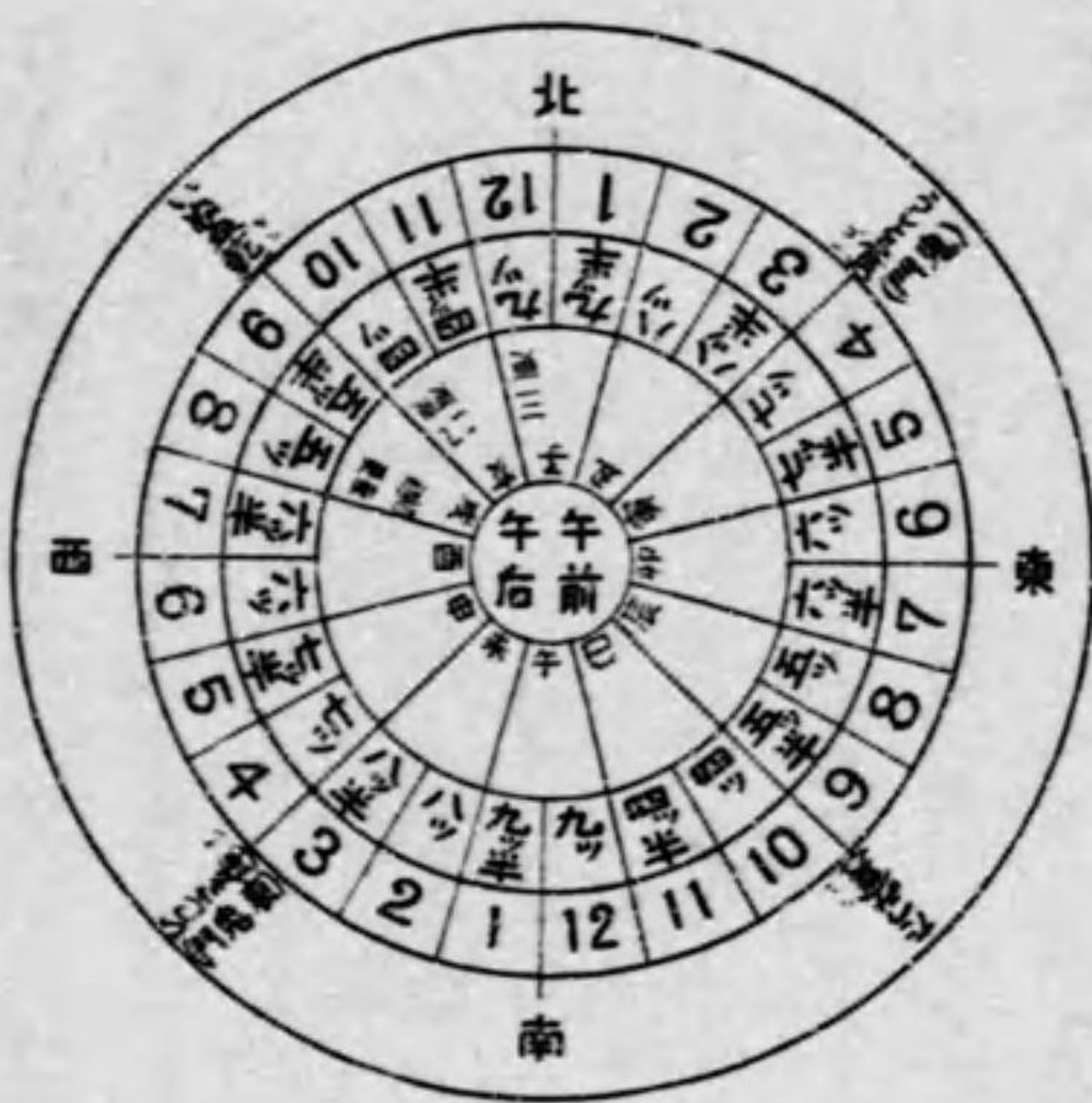
一首の意は、「旅人なる自分は、そでのあたりがさむくてしかたがない。これ袖の浦の秋風よ、こゝしばらくの間はよく氣をつけて吹いてくれ、たのむぞよ。」

【關吹越ゆるなどよみけむ思ひ出でらる】 在原行平卿が須磨の浦で、「旅人は衣涼しくなりにけり、關吹きこゆる須磨の浦風。」など

とよまれた昔のことが思ひ出される。

【ひつじさる】 未申。方角の名。西と南との間。

【おのが眺むる方】 自分が眺めわた



してゐる故郷(遠江國濱松)の方。

【こなたをこそと思ふ】 こちらの方を眺めわたして自分の歸るのを待つてゐるだらうと思ふ。

【こたひはうれし】 今度の旅では嬉しい。次の「限りなく遠くも來にけりとわびつるにはかはれり。」に對していふ。

【をちつとし】 「遠つ年」の義。昨年の前年。一昨年。をととし。

こゝは、櫻町天皇の元文三年(二三九八)。

【東に來にけるほどに】 江戸に來たときに。

「東」は、關東地方の汎稱。こゝは江戸を指す。

【東路にありと聞きつる云々】 「東路」(アヅマチ)は、京都から東方奥羽に至るまでの路すぢの汎稱。

一首の意は「東路にあると聞いてゐた富士山を、西の方夕日の照りはえてゐる大空たかくかへりみて、その莊嚴の景に心を打たれることかな。」

【限りなく遠くも來にけり】 「さても／＼、はてしのないほど遠い處までやつて來たものだはい。」とさびしがつた一昨年の旅とは、すつかりちがつて、うれしくてならぬ。

こゝは伊勢物語なる次の文の一句を採つたものである。

…富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降り。時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪の降るらむその山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、形は鹽尻のやうになむありける。

なほゆき／＼て武藏の國と下總の國との中に、いと大きな川あり、これを隅田川といふ。その川のほとりに群れゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守、「はや舟に乗れ、日も暮れぬ。」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人もわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつゝ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、「これなむ都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやとよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

【程ヶ谷の宿】 ホドガヤのシユク。今は横濱市の一區。舊東海道神奈川宿の次の宿。横濱市の發達によつて市街が續き、昭和二年九月、市域擴張と共にその一區となつた。

【空曇りみ晴れみたらねば】 空が曇つたり晴れたりして、いつもの様子とちがふから。

「曇りみ晴れみ」は、曇つたり晴れたりすること。「み」は接尾語。重ね用ひて、あゝしたり、かうしたりするといふ意に用ひる。

源氏物語の宿木の巻に「怨みみ泣きみ聞えたまふ。」「たゞならぬ」は普通ならぬこと、ふだんとちがふこと。

【雨(アマ)づつみ】 雨のため外出しないで、内にひつこもつてゐること。

萬葉集卷四に「ひさかたの雨もふらぬか雨づつみ君にたぐひてこの日くらさむ」

【けしきやみにけり】 こゝでは、曇りみ晴れみたらねばやうすが一變して、よい天氣になつたことをいふ。

【藤澤のうまや】 今の神奈川縣高座郡藤澤町。舊東海道五十三次の一驛。鐵道東海道本線と小田原急行電鐵との便を有し、時宗の本山なる遊行寺即ち清淨光寺を以て知られてゐる。その大字鶴沼(クゲヌマ)及び辻堂は京濱各地の紳士どもの別荘の多い保養地である。

【しなの坂】 品濃坂。神奈川高座郡川上村にある坂嶺。戸塚驛の東北に連なり、久良岐郡との分水嶺となつてゐる。

【山もと】 山のおもと。山麓。

古今集、雜上に「あかすして月のかくる、山もとはあなとおもてぞこひしかりける」

【いたく降りにけるなりけり】 たいそう降つたのである。

【大山】 神奈川縣の中部にそばだつ山。一に阿夫利(アフリ)山ともいひ、雨降山とも書く。丹澤山塊中の一峻峯で、山勢が頗る秀絶である。山中には縣社阿夫利神社が鎮座し、頂上にはその奥宮及び前社がある。又、その中腹には大山寺があり、山麓には大山町がある。近時登山綱索線を通じて頗る便利となつた。標高一、二五三米。

【今も降りぬべき雲のふるまひなり】 今にも降り出しさうな雲の活動ぶりである。

「ふるまひ」は、振舞、舉動、行爲、しわざ。

こゝでは、「活動ぶり」といふほどの意に解してよからう。

【阿夫利の神】 阿夫利神社。縣社。神奈川縣中郡大山町大山(一名雨降山)に鎮座。祭神は大山祇命。又木之花開耶姫命の御父である國津神だとも傳へられてゐる。創祀の年代不詳。延喜式内の古社で、當國十三社の一。天平



勝寶の末年、僧良辨が入山以來、靈石の由緒を以て石尊と稱し、又大山寺と號した。俗には大山不動といふ。明治元年石尊權現及び大山寺の稱を廢して現稱に改めた。例祭は七月二十七日から八月十七日まで。大山詣で(石尊參り)と稱して、夏季には參拜者が多い。

【藤澤や野澤にこりて云々】 「野澤」は野中にある澤。「澤」とは低くて草などの生ひしげつた濕地をいふ。「水上」(ミナカミ)は川の上流。

一首の意は「藤澤の野中のさは水がにごつてゐる。道理で、水源のあふりの山に、雨雲がかゝつてゐるはい。」

【つとめて】 こゝでは、「その翌朝」といふほどの意。

【従者わぶめり】 とものものが、たいそうこまつてゐるや

うだ。

「從者」(ズサ)は、ともものもの。ともびと。じゆうしや。

大和物語卷四に「かゝる心ばへにてふりはへきたれど、わがむつまじきすさもなし。」

「わぶめり」の「わぶ」は、おもひわづらふこと。思ひなやむこと。當惑すること。

「めり」は「みえあり」の約、推量の助動詞。

【大磯・小磯】 昔の餘綾郡伊蘇郷。今は共に神奈川縣中郡大磯町の内。

「大磯」は神奈川縣中部の小市街。鐵道東海道線の一驛がある。湘南地方中著名の保養地で、避暑避寒の好適地である。附近に鴨立澤・高麗山等の名所がある。

新編風土記に「大磯・小磯は和名抄伊蘇郷の地なり。大小を以て分ち唱ふることもや、舊き事にや。源平盛衰記・平家物語・東鑑にその名散見せり。且古くより相繼ぎて驛路たるゆゑ、行客の事跡も又諸記に往々見えたり。

貞應二年海道記に「大磯の浦・小磯の浦をはるくと過ぐれば、雲のかけはし波の上にかみて、鶴のわたしもり天つ空に遊ぶ。あはれさびしき旅の路かな。ながめなれてや人は行くらむ。大磯や小磯の浦の浦風にゆくとも知らずかへる袖かな。

【よろきが磯】 「洵綾磯」・「餘綾磯」などと書く。

神奈川縣中郡大磯附近一帯の古名。

吉田東伍の日本地名辭書に「餘綾郷、和名抄餘綾郡餘綾郷、訓與呂木。今の國府村是なり。霜見郷と伊蘇郷との間とす。餘呂伎の濱とはこの海磯にて、東は大磯・小磯より西は國府津の邊までを大方に唱へたるならん。

相模治(サガムヂ)の餘呂伎の濱のまなごなす兒らくかなしく思はるゝかも。(萬葉)

【夕づけて】 夕方になつて。日ぐれがたになつて。

宇津保物語の俊蔭の卷に「日のくれつれば、いとくちをしかりつるに、夕づけて。」

【箱根山】 神奈川縣足柄下郡の西部にある火山の總稱。富士火山系に屬する一箇の獨立火山である。最初は圓錐形のコーン型をなしてゐたが、火山灰と熔岩の噴出との爲に中央に大きな陥没火口を生じた。今の明星・明神・金時・乙女峠・長尾峠・三國・鞍掛・淺間等の諸山は外輪山で、當時の火口壁である。その火口の大きさは南北約十三軒、東西約六軒である。この火口中に活動によつて新火山を生じた。神山(一四三八米)・臺ヶ岳・小塚山・上下雙子・

駒ヶ岳はこれである。外輪山と中央火山丘との間に仙石原・宮城野・湖尻(ウミジリ)があり、その低所に水を湛へたものが即ち蘆の湖である。山中の水は早川・須雲川となつて流れ、その溪谷及び火口には温泉が湧出する。

道路がよく發達し、交通が頗る便利で、天然の美と人工の美とが相俟つて一大遊樂境を現出してゐる。最近富士山と合はせて國立公園の一に選ばれた。

【箱根の關】 徳川時代に東海道の箱根山中に設けられた關所。三島・小田原兩宿の



中間、箱根宿東北の入口にあつて、北は蘆の湖に面し、南には山を負ひ、無比の要害であつた。小田原藩主がこれを預り、特に女人・武器の出入を嚴重に取締つた。その址は今箱根町の東端に残つてゐる。

【秦】 ハタ。今の神奈川縣足柄下郡湯本町畑宿(ハタジク)。湯本より箱根宿まで二里半の中間にあたる。

【夜寒】 秋など、夜になつて寒くなりゆくこと。又、その寒さ。

拾遺集、秋上に「さ夜ふかく旅の空にて鳴く雁はおのが羽風やよさむなるらむ。」

【瀧の音鹿の聲うちこめたる山の秋風】 瀧の水音や鹿のなきごゑをうちこめて吹く箱根山の秋風。

【ほのくくと】 ほんのりと。うすくと。宇津保物語の藏開の卷上に「ほのくと明けはなるゝ程に。」

【山の峽】 ヤマのカヒ。山と山との間。和名抄に「峽、俗云山之加比、山間、陝處也。」

【湖】 ミヅウミ。こゝは蘆の湖をいふ。蘆の湖は箱根火山の火口原湖。富士八湖の一。三日月形をなす。湖面は長さ六・六軒、幅一乃至一・五軒。その水は北に溶れて火口瀬早川となる。湖面は海拔七二六米、最大深度四六米。周囲の翠巒と相俟つて風光絶佳。北岸の湖尻(ウミジリ)から箱根町まで遊覽の發動機船が通じてゐる。

【三巴(サンバ)といふや似つらむ】 支那四川省の三巴といふところの景色は、この蘆の湖に似てゐるだらう。

「三巴」は支那四川省の白水の別名。その流が曲折して三たび廻る巴の字のやうなので起つた雅名であるといふ。

【蠶叢に擬したる人は誰ばかりなるや】 この箱根を支那四川省の蜀になぞらへた人は、どういふ連中であらうか。

「蠶叢」は、もと支那四川省蜀の王の氏。それより轉じて蜀の異名に用ひるに至つた。

「蜀」は支那四川省の成都平原を中心とする地方の稱。古くは蜀國と呼ばれた。秦の世蜀郡が置かれ、成都を治所とし、漢より隋に至るまで皆これに據つた。その周圍は山嶽重疊、謂はゆる蜀の棧道を以て知られてゐて、頭註にある唐の大詩人李白の詩のやうに崎嶇(キキウ)山路などのけはしいこと)として行き易からぬ處であるが、その内部は富饒の地として名高く、三國志には、「蜀地富貴。」と見え、華陽國志には、「蜀沃野千里」と見えぬ。

【その後いくばくの人か望み見けむ】 その後、この箱根の景色を望み見た人が、我が國に幾人あるか、さだめて多數の人が望み見てゐるであらう。

【この湖にさせる聞えなきぞあやなき】 この蘆の湖にさしていふほどのよい雅名などのないのは、どういふわけや

ら、さつぱりわからぬ。

「させる」は、「さしたる」に同じ。さしてこれといふべきほどの。さほどの。

和泉式部集上に「われもさぞおもひやりつる夜もすがらさせるつきなき宿はいかにと」

「聞え」は、うはさ。評判。とりさた。こゝは雅名など。源氏物語の桐壺の卷に「御かたちすぐれたまへるきこえ高くおはします。」

「あやなし」は、道理(スヂミチ)のたゞぬこと。わけがわからぬこと。

古今集、春上に「春の夜のやみはあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくる。」

【貢物】 ミツギモノ。みつぎとして奉るもの。みつぎとは、諸國より朝廷に、一定のときたまつてまつる財物の稱。

【さりあへぬまで】 立ちのくことが出来ぬほどまで。

「さる」はこゝで、立ちのく、離れゆく、遠ざかる、などの意。

【ふりさけ見らるゝ海山の興あるにも】 ふりむいて遠くな

がめわたす海山のけしきのおもしろいさまを見るにつけても。

「ふりさけ見る」とは、ふりむいて遠く見わたすこと。

古今集、彌旅、安倍仲磨の歌に「あまのはらふりさけ見れば春日なるみかさの山に出でし月かも」

【過ぎし頃云々】 一昨年(櫻町天皇の元文三年即ち皇紀二三九八年)江戸へ赴くとき、雨を冒してこの山を越えたりをりの事が思ひ出される。

【み山】 (一)山。「み」は接頭語。(二)奥深き山。深山。奥山。

古今集、大歌所の歌に、「み山にはあられ降るらし外山なるまさきのかづら色づきにけり。」

【雨ばかりあはれなるはなし】 雨ほどおもしろみのあるものはない。

「ばかり」は、他の語に添へて、ほど、くらゐなどの意をあらはすことば。

萬葉集卷五に「かくばかりすべなきものか、世の中の道。」

「あはれ」は、感賞にあたひすべきこと。あつばれ。

【こゝかしこくゆり出づる雲】 こゝかしこから、ちやうど煙がくゆり出るやうに出てくる雲。

「くゆる」は、薫るの字をあてる。燃えて煙の立つこと。ふすぼること。

大和物語卷二に「たきもののくゆる心はありしかどひとりたえてねられざりけり」

【面影】 オモカゲ。ちら／＼と目さきに見える姿。やうす。伊勢物語に「人はいざ思ひやすらむ玉かつらおもかげにのみいと見えつゝ。」

【人面より起ると吟じて云々】 「山は人面より起る云々」と李白の詩を吟じながら山を越えたが、もちろん苦しくないわけでもないけれども、それよりは山越の興味の方が勝つて、あゝおもしろいといふ氣持がしたよ。」といふ意。

「あなをかし」は、「あゝおもしろい。」といふほどの意。「見しは」の「は」は、感動の意を示す助詞。

【例のひがごころにこそ】 それは、いつものひがごころとさふものではないよ。

「ひがごころ」とは、ひがんだ心。ねぢけた心。つむじまがりの心。

源氏物語の若菜の巻に「ひがごころにて、我が身をさしもあるまじきさまにあこがらしたまふ。」

【いぶせかるべきものごのみなめり】 いやなものすきといふものでござらう。

「いぶせし」は、こゝでは、いとほしい、いやな、けがららしい、などの意。

「ものごのみ」は特殊の物事をすき好むこと。ものすき。狭衣物語卷三上に「いとほなやかにものごのみしたまふ御本性にて。」

【龍に乗るらむ山人にやあつらへまし】 「龍のせなかに乗つて空をとびかけるといふ仙人に申し入れて、空の旅行をなされてはどうですか。」といふほどの意。

「龍」(タツ・リョウ・リウ)は想像上の動物。巨大な爬蟲類の姿をなし、胴は蛇に似て剛い鱗を具し、四足を有し、強い翼がある。深い淵や海の中に潛んでゐるけれど、時に天空に飛翔して雨や雲を呼ぶ。支那では鱗蟲の長としてこれを崇め、天子になぞらへる。

てこれを崇め、天子になぞらへる。

「山人」は(一)山に住む賤しい人。(二)仙人。こゝは(二)の意。

「仙人」とは、人間界を離れて山中に住み、不老・不死で、神變の術を得てゐるといふ想像上の人。

「あつらふ」は、「誂ふ」の字をあてる。頼んで我がおもふとほりにさせること。申し入れること。

古今集、春下に「吹く風にあつらへつくるものならばこの一もとはよきよといはまし。」

【辛うじて】 「辛くして」の音便。やうやくのことで。やうく。やつと。からく。わづかに。

竹取物語に「火鼠のかは衣、からうじて、人を出して求めて奉る。」

【三島の驛】 ミシマのウマヤ。今の静岡縣田方郡三島町。

舊東海道五十三次の一驛。箱根山の西に當り、人馬の往來が繁く、舊時甚だ繁榮を極めたが、鐵道東海道本線の車驛が町を離れたところにあるため、町勢がやゝ衰へてゐた。然るに本年(昭和九年)十一月一日、丹那隧道が

開通して、この町に停車場が置かれたので、頓にその繁盛を恢復するに至つた。

官幣大社三島神社はこの町に鎮座します。

【ちゝの實の父】 父。「ちゝの實の」は、父の枕詞。次の「木の實」参照。

萬葉集卷十九、慕^カ振^ツ勇士之名、歌一首并短歌に、
ちゝのみの。父のみこと はゝそばの 母のみこと おほろかに 心つくして おもふらむ その子なれやも ますらをやむなしくあるべき 梓弓 すふふりおこし なぐやもち ちひろいわたし 劍太刀 こしにとりはき あしびきの やつをふみこえ さしまくる 心さやらず 後の世の かたりつぐべく名を立つべしも

反 歌
ますらをを名をし立つべし後の世にきゝつぐ人もかたりつぐがね

【木の實】 コのミ。樹木の果實。「ちゝのみ」とは銀杏の實のことだといはれてゐる。

【ふるさとのはゝそのかけは云々】

「はゝそ」は榊(カシ)の異名。こゝは、母にかけていふ。

「ちゝのみ」は前に出てゐる。但しこゝは、「ちゝ」(銀杏)

の實」を「父のみ」にかけていふ。

一首の意は「ふるさとのはゝその樹陰は問ひたづねてゆくことが出来たが、ちゝのみ(銀杏の實)ばかりは、いくら問ひたづねても見あたらない。まことに悲しいきほみである。(久しぶりに故郷にかへつて、なつかしい母上にはお逢ひすることが出来たが、已にあの世に旅立たれて、もはやこの世にましまさぬ父上には、お逢ひすることが出来ぬ。まあ、何といふ悲しいことか。)

9 通 釋

あゝ、自分が京都にいつて學問をしてゐたころは、ついちよつとの間ではあるが、毎年故郷に歸りなどしてゐたから、さほど故郷がなつかしくは思はなかつたが、江戸に住んでゐる今は、容易なことでは故郷に歸るまいと覺悟をきめてゐるので、とかく故郷がこひしくて、遠いあなたの空にお残し申してある年のよつた母上の御身に、たとひ急な事があつても、どうしてこれを知ることが出来よう。よしんばこれを知ることが出来たとし、どうして急にお見舞申し上げることが出来よう。何はともあれ、母上は今どうしていらつしやるであらうか、又どうい

ふおきもちでいらつしやるであらうかなど、毎日人ごとでなくむなさわぎがしてしかたがない。しかるに、浮世のならひといふものはまことにつらいもので、母上の御事をつゆいさゝかも忘れてゐるわけではないが、友人なども次第に出来て、貴賤上下の人々と互に往来してゐるうちに、二つない親思ひの心が、ともすればものにまぎれやすく、覺えず知らず、そこぼくの年月を過した。

この秋はさそふ人さへあるので、どれ、母上をもがみ、妻子や兄弟にも逢ひたいものだ決心して、閏七月八日の早朝に、いよいよ故郷をさして出立した。その旅行の豫定を親しい人々に知らせたところが、皆々漢詩や和歌をおくつて、別れを惜しんでくれた。その詩歌の数は、かれこれ百首ばかりもあるだらう。それらは別の紙に書きしるしておいた。これらの親しい友だちとの別れが名残りをしくないわけではないが、故郷の人々と約束しておいた滞在日数がわづかしかないので、先をいそぐ心にまぎれて、別につらいとおもはなかつた。

品川のうまやのあたりは海面がひろくとしてゐる。ゆうべから降つてゐた雨が晴れて白雲が多く海の空にかゝつてゐるのは、相模の岬と安房の大山とである。あたりの青田をすきかへしてゐた作男が「こゝは袖の浦といふところす。」などと出た

らめをいつたのはをかしいけれど、よしそれが出たらめとして、いよ／＼故郷にかへりついて、汗まびれの旅ごころをぬぎすて、こざつぱりと洗濯したきもの（ときあらひぎぬ）を着てうちくつろぐ日くるまでは、この袖の浦（裏）といふ名が、いかにもなつかしく感ぜられることよ。をりから朝風がたいそう身にしむので、

旅人は衣手さむししなほこゝろして吹け浦の秋風
といふ一首をよんだ。それにつけても、その昔在原行平が、須磨の浦で、

旅人は衣涼しくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風
とよんだ昔のことが思ひ出される。富士の山は未申（西南）の空に見える。この方角こそは自分が故郷の空として眺めてゐる方角であるのに、故郷の人々はかへつてこちらの方を眺めてわが歸るのを待ちこがれてゐるであらうと思ふのも、今度は一昨年とうつてかはつて、嬉しい。一昨年東（江戸）に下つた時、東路にありと聞きつる富士の嶺を夕日のそらにかへりみるかな

と眺めて、まあ、かぎりもなく遠くも来たことかなとさびしくおもつたときは、その心境がすつかりちがふ。
程ヶ谷の宿を過ぎる頃、空が曇つたり晴れたりして、たゞなら

ぬ模樣であるので、しばらくひつこもつて雨の晴れるのを待つてゐたら、しばらくして、そんなやうがなくなつた。今夜は藤澤の宿にとまらうと目あてをつけて出立し、しなの坂といふ坂を下ると、田の上や山のふもとなどに濁つた水がたいそうみちあふれてゐた。察するところ、このあたりにも大雨が降つたのであらう。大山は今にも降りだしさうな雲の活動ぶりである。この大山こそは昔にきこえてゐる阿夫利の神の鎮座まします山なのだ。こゝで

藤澤や野澤にこりて水上のあふりの山に雲かゝるなり
といふ即興の一首をよんだ。

かくて藤澤の宿に一夜を過し、翌早朝出立した。夜來の雨に道がたいそう悪くなつて、ともものどもは困つてゐる様子だ。大磯・小磯のあたりは昔の上ろぎの磯であらう。夕方になつて箱根山の山越にかゝつた。箱根の關までゆきつくのは難儀だといふので、途中の秦といふところにとまつた。夜氣が身にしみてたいそう寒く、一向に眠られないので、瀧の音や鹿の聲をうちこめて吹きすさぶ箱根山の秋風を夜どほし飽き足るほど聞いて出立した。ほの／＼と明けゆく山の谷間からふりかへつて見ると、朝霧が白く立ちわたつてゐる。そのけしきは、ちやうど海でも見るやうな心地がする。關を越える頃、朝日がさしのぼ

つて、湖（蘆の湖）の水面がのどかに見わたされた。山をあちこちとりまいてみちたゞへてゐる湖水の面は、ちやうど巴の形をしてゐる、支那の蜀の四川にあるといふ三巴のけしきは、さだめてこゝのけしきに似てゐるであらう。いつたい、この箱根のけしきを支那の蠶叢（蜀）の景色になぞらへたのは、どういふ人だらう。又、その後幾何の人がこの箱根の景色を望み見たことだらう。もちろん多くの人が、箱根越をするたびに、この景色を見てゐるはずである。しかるに、かくも美しいこの湖水に、さしたるきこえもなく、雅名さへもない（支那の蠶叢に於ける三巴といふ雅名のやうに）のは、なぜであらうか、一向にわけのわからぬことである。

今日はなにがしの國から貢物を送つてくるといふので、立ちのくことすら出来ぬほど難沓して、人があちこち往来してゐる。ふりむいて遠く眺めわたす海山のけしきのおもしろいさまを見るにつけても、一昨年江戸に赴くとき、雨をかしてこの山を越えたをりのことが思ひ出される。すべて山は雨ほど興味のあるものはない。こゝかしこから煙がくゆり出るやうにわき出てくるうすい雲や濃い雲におほはれて、山々はたゞそのおもかげばかりがうすぼんやりと見える。『雲は人面より起る。』といふ李白の詩などを吟じながら山越しをしたのは苦しくないことはない

が、しかし一面からは、さて／＼おもしろいけしきよと思つた。」などと高言をいふと、これを聞いた人々は、「それこそいつものひがごころといふものでせう。ほんにいやなものずきです。ね。どうです、龍のせなかに乗つて大空をとびかけるといふ仙人に申し入れて、空でもお飛びになつては。」といつて笑つた。かれこれするうちに、やつと三島の宿にゆきつた。古い歌に「ちよのみのちよ」とつゞけてよんでゐるその「ちよのみ」といふのは、一種の木の實で、この遠江の國にはその實物があるといふ人があつたから、たづねて見たけれど、誰一人知つてゐるものはなかつた。それにつけても、今この故郷に、はよそばの母上がおはしますばかりで、ちよのみの父上のおはしますぬのが寂しくてたまらぬので、覺えず次の一首を口ずさんだ。

10 挿 圖

賀茂眞淵 橋千蔭筆

賀茂眞淵翁晩年の像をその門人橋千蔭のうつしたものであることは、圖中に見えてゐる「弟子橋千蔭謹寫」の文字で明らかである。

筆者橋千蔭は、徳川時代の國學者。加藤氏。通稱は又左衛門。字は常世鷹(トヨヨマロ)、又徳與鷹とも書く。號は朮(ウケラ)園又は芳宜(ハギ)園。世々江戸の興力となり、八丁堀に住んでゐた。賀茂眞淵に就いて古學を究め、詠歌を修めて終にその精妙に至つた。又浦本松堂について大師流入木道(ジュボクダウ)の筆傳を受け、書道の奥秘を極めた。特にその假名は近世その右に出づるものなく、千蔭流と稱せられて、世にもはやされてゐる。文化五年(二四六八)歿。年七十四。萬葉集略解・萬葉新探百首・うけらが花等、多くの著作がある。

補 註 安藤廣重筆

安藤廣重の筆にかゝる「東海道五十三次」の中の箱根越の景である。巖石峩々たる箱根の難關、「一夫これを守れば萬夫も越ゆるなし」の概は、よく畫面にあらはれてゐる。右わきの隘路に人影のつゞいて見えるのは、江戸へ參觀する大名の行列であらう。

筆者安藤廣重は江戸末期の浮世繪師。幼名徳太郎。後十右衛門。江戸八重洲河岸の定火消、同心徳右衛門の子。一立齋と號した。はじめ岡島林齋に就いて狩野風を學び、後豊廣の門に入つて歌川廣重と名のつた。最も浮世繪の山水に長じ、そ

の遠景寫法の妙に至つては天下獨歩と稱せられ、遠く泰西の畫家にまでその影響を及した。江戸名所百景・東海道五十三次・都名所百景等の名作がある。安政五年(二五一八)歿。年六十二。

東海道五十三次とは、徳川時代、江戸の日本橋から東海道を經て京都の三條大橋に至る間にあつた左の五十三の宿驛をいふ。

- 品川(東京府)・川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚・藤澤・平塚・大磯・小田原・箱根(以上神奈川縣)・三島・沼津・原・吉原・蒲原(カシハラ)・由井・興津・江尻・府中・丸子・岡部・藤枝・島田・金谷(カナヤ)・入坂(ニッサカ)・掛川・袋井・見附・濱松・舞坂・新居・白須賀(以上靜岡縣)・二川・吉田・御油(ゴユ)・赤坂・藤川・岡崎・池鯉鮒(チリフ)・鳴海(ナルミ)・宮(以上愛知縣)・桑名・四日市・石薬師・庄野・龜山・關・坂下(以上三重縣)・土山・水口(ミナタチ)・石部・草津・大津(以上滋賀縣)。

一五 江戸時代の文學

1 解題

嚴密な意味の文學史としては、今日各時代それ／＼専門史家の著述も刊行されてゐるのであるが、本課以下、本教科書各巻に配置された各時代の文學史的教材は、何れもその巻、その學年の生徒に適するやうに編者が執筆したものである。故に作品の取捨や項目の立て方、又その敘述説明の繁簡の如きも、純然たる或文學史の縮約と見らるべきではなく、どこまでも教科用として按排考慮したものである。しかし各時代の概観や各作品の評論等も、概ね専門家の間に定説となつてゐる所に従ひ、敢へて異を立てた點はない。その最も負ふところが多いのは、藤岡作太郎博士の「國文學史講話」と藤村作博士の「國文學史總説」との所説である。

「江戸時代の文學」に限らず、すべて時代の思想的概観を序説とし、以下は文學の各種類によつて項目を別にして敘述する方針に従つてゐるが、本課では教科としての性質上、小説・脚本等

の項に於て、特に思ひきつて省筆せざるを得なかつたことをここに記しておく。

2 編纂上の用意

徳川時代の文學作品として本巻までに掲げられてゐるものは左の諸篇である。

- | | | |
|----|-------------------|------|
| 卷一 | 一二 泉の三郎(雲萍雜志) | 柳澤洪園 |
| | 二八 八幡太郎(原漢文、日本外史) | 頼山陽 |
| 卷二 | 八 阿閉掃部(駿臺雜話) | 室鳩巢 |
| | 一九 心の洗濯(鳩翁道話) | 柴田鳩翁 |
| | 二〇 近江聖人(東西遊記) | 橋南齋 |
| | 二四 山田長政(原漢文) | 齊藤拙堂 |
| 卷三 | 九 蒲の花がたみ(兎園小説) | 瀧澤馬琴 |
| | 一一 羽州の鬼(東西遊記) | 橋南齋 |
| | 一八 曾呂利が頼才(常山紀談) | 湯淺常山 |
| | 二六 本多重次(藩翰譜) | 新井白石 |
| 卷四 | 三 日月(和歌) | |
| | 一一 柳生宗矩(藩翰譜) | 新井白石 |

一六	梅津文禪(書牘)	榎本其角
一七	進學(駿臺雜誌)	室鳩集
二一	板倉重宗(常山紀談)	湯淺常山
三	残る御影(菅笠日記)	本居宣長
七	早蕨(狂歌)	
一七	夏(樂訓)	貝原益軒
卷六	八 案山子(川柳)	
一七	誠(梅園叢書)	三浦梅園
一九	芳流閣(八犬傳)	瀧澤馬琴
二五	源頼朝論(讀史餘論)	新井白石
三	花を惜しむ(琴後集)	村田春海
四	みよや春(書翰華山全集)	渡邊崋山
九	青葉(俳句)	
一〇	奥の細道(奥の細道)	松尾芭蕉
一二	水蓼(竹柏漫筆)	萩原廣道
一三	千里が竹(國性爺合戦)	近松門左衛門
一四	浦の秋風(岡部日記)	賀茂眞淵

本課はこれらの諸作家及び諸作品を通じて、江戸時代に於ける文學の一斑を知らしめんが爲めに外ならぬ。

3 要旨

江戸時代の文學は、特殊階級の手から庶民階級の手に引きおろされたところに特色がある。俳諧も淨瑠璃も小説

も皆庶民の文學である。固よりこれらの文藝思想を支配してゐる精神は儒教が主であり、又、社會的には四民の階級が嚴であつた爲に、一種の傾向に妨げられ、全くの自由を得てゐない點もあるが、それでも漸次經濟的地歩を獲得して武家に肉薄して行つた町人の鬱勃たる意氣と、階級の力の及ばない精神生活、乃至或世界に於ける一般民衆の自由な氣分とは略、遺憾なく文學の上に反映してゐる。一方で古學復興の精神が堂上家の學風を覆さうとしたのも、やはり庶民が自己の力を認識した精神と相通するものがあつて、然らしめたのである。かくの如き行き方で發達した江戸文學について大體を考察させたものである。

4 概説

序説(二〇二頁—二〇四頁) 江戸時代は文學の領域が著しく擴張せられたこと、及びその原因に言及し、更に、その文藝界を指導した精神について主として記した。

一、古學復興と歌道 この兩者の關係を説き、又、兩者の

それ〴〵について、學者と作者との業績を述べた。

二、俳諧文學

俳諧史の大略を述べ、川柳と狂歌についても一言した。俳人としては芭蕉と蕪村との外に、宗因をやゝ重く見てゐる。

三、小説

當時代の小説を概観しようとしたのであるが、實は元祿期の浮世草子と江戸後期の讀本との紹介が主となつてゐる。

四、淨瑠璃

近松と義太夫との事を中心として、淨瑠璃の發達とその本質とを概説し、終に演劇の脚本について附言した。

5 取扱上の注意

文學の思想の流は、文學の形態や種類の境界に遮られるものではないことは勿論である。随つてその思想の發達や展開を如實に述べて記して行くのが本當の文學史であるべきことも亦勿論である。けれども、本課では「解題」に述べたやうな理由で、敢て文學形態によつて分類記載した。それも各作品の内容思想を通觀して評論するといふ暇もなく、纔かに書目の解説や作者の紹介に終つ

たやうな點もあつて、決して理想的な説き方ではないが、初歩の者には、抽象的に思想を説くよりは却つてこれがよいと考へられる。

たゞその分類排列の記載順序が、直にその文學の發達順序であると誤解せしめないやうに注意ありたい。各項それ自體は史的順序で述べてあるが、各項目間の先後は互に交錯してゐること言ふまでもない。例へば俳諧と同時に小説も淨瑠璃も共にそれ〴〵の方面に於て事實發達しつゝあつたのである。

江戸文學として文學史的に評論的に學ぶのは本課が初めてであるが、實際の作品にはこれまで幾程か接してゐるのであるから、先づそれら既習の課についての記憶を喚び起してかゝることが教授上便宜である。

6 設問

- 1 江戸文學の特質を説明せよ。
- 2 江戸文學を支配してゐた精神の主なものは何か。
- 3 古學研究の大家の名をあげよ。
- 4 江戸文學の種類をあげよ。

- 5 俳諧文學の上に名高い人々をあげよ。
- 6 小説界に名高い人々をあげよ。
- 7 淨瑠璃の發達に特に功績のあつた人は誰々か。
- 8 次の人々を大體年代順に並べよ。
一茶。竹本義太夫。賀茂眞淵。瀧澤馬琴。鶴屋南北。蕪村。西山宗因。近松門左衛門。河竹默阿彌。荷田東滿。釋契沖。大隈言道。本居宣長。上田秋成。芭蕉。也。西鶴。守武。村田春海。等々。

7 釋義

【江戸時代】近世期・徳川時代ともいふ。この時代の區劃は子細にいふと學者間に異説があるが、慶長八年（二二六三）家康が征夷大將軍となつてから、慶應三年（二五二七）慶喜の還政辭職までをいふのが普通である。大數ではこれを三百年といひ、二百六十年といひ、二百五十年ともいふ。但しこの時代を前後二期にわけて、前期を「上方時代」又は「京阪時代」といふに對して、後期を「江戸時代」または「江戸期」とも稱することがあるので、これと紛れないやうにしたい。

【題材】文學の題目となり、材料となるもの。例へば源義經・豐太閤・遊女・船頭などと言ふのは、題目ともなり、或は材料ともなる。

【形態】文學として仕上げられる形式。例へば和歌とか、俳句とか、小説とか、戯曲とかをいふ。

【品類】例へば小説の中にも、その精神によつて、その内容によつて、或はその取材によつていろ／＼品わけが出来る。歴史小説とか滑稽小説とかいふ例がそれである。戯曲でも世話物とか時代物とかといふ。

【佛教を骨子とせるもの】佛教思想を中心として作られてゐる文學。例へば、因果應報の理を説いた「因果物語」（鈴木正三作、寛文元年刊）や、法華經の功德を専ら説かうとした「糺物語」（日心作、承應三年刊）や、無常厭世の思想を濃厚に表した「二人比丘尼」（鈴木正三作、寛文三年刊）などの假名草子類をいふ。

【儒佛二教の感化を受けたるもの】儒教的の處世訓と佛教的の談義とを内容とした文學。「爲愚痴物語」（曾我休自作、寛文二年刊）や、「草葉物語」（作者不詳、慶安元年

刊）その他がこの例に屬する。

【陽に三教一致を説けるもの】三教とは儒教・佛教・道教をいひ、又は神道と儒佛二教をもいふ。その三教の理は一致するものだといふ思想を説いた文學である。例へば「八町記」（如備子作、寛文四年刊）は儒・佛・道の三教を説いたもので、一教に一理（一里三十六町）をあて、三教を合せて百八町になるといふ意味を題名に持たせたものである。「陽に」と言つたのは、かくの如く書名にまでその意を示したのもある故である。「大佛物語」（作者不詳、寛永十九年作）は、神・儒・佛の三教の理や世道を説いたものである。

【陰に心學の思想に據れるもの】心學とは前項に掲げた三教の後者の方、即ち神・儒・佛の三教の理を俗耳に入りやすく説いたものの稱である。「心學」の名はこの時代の初から見えて、書目にも「心學五倫書」「心學教訓書」その他があげられ、決して後の石田梅巖や柴田鳩翁などにのみ説かれたものではない。かくて以上の如く明らかに心學と銘を打つた教訓書もあるが、文學としては、「陰

に」即ちそれとなく心學の思想教訓を取入れて作られたものがあるのである。例へば、寛永年間に出た「長者教」（作者不詳）に對して「大福新長者教」と又の名を稱した西鶴の「日本永代藏」（貞享五年刊）の中の教訓は、即ち心學から來てゐると見られる。その外通俗の教訓を含んでゐる文學書で、特に儒・佛などの一方に偏してゐないものは、大抵この心學の思想に支配されてゐるとも見られる。

【主情主義】感情を主とした文學の傾向をいふ。即ち情念を偏重し、情趣とか「物のあはれ」とかいふものを描き出すのが平安文學の特色であつた。

【神祕的・宗教的】知性で思議することが出来ない、言葉で説明することが出来ないものを神祕的なものといふ。室町期の文學のうち、例へば謡曲に於ける精靈能といふのは、死して迷つてゐる魂魄を出現せしめて主要な役割を勤めさせてゐるが、そこにはいかに神祕的な氣分が漂ふ。その演出の技巧上にも詭ひ方にも、口で説くことの出来ぬ妙處があるといはれるのは、やはり神祕的であ

る故である。更にその精靈を僧侶が出て来て弔ひ之を成佛させるのは、即ち宗教的であるといふ例にもなる。又、鎌倉期の平家物語の中には無常厭世の佛教思想が濃厚に出てゐるので、これ宗教的であると謂はれる。

【因襲的】 古い、あり来りのことになづんでゐることの形容。何事も舊のまゝを受けついで改めないさま。

【堂上】 地下の庶民に對して、公卿の家をいふ。歌道では二條家とか、冷泉家とかを指す。

【國學】 主として支那の學問即ち漢學に對して、日本の事についての學問即ち皇國の學といふ義に用ひられた。當時の國學は、時代的に言へば古代の國民精神、古代の文化を研究することであつた故に、その點から「古學」とも呼ばれた。書物について言へば、古典の學問の謂であつて、神道・歌道・歴史・律令等の研究をすべてかく稱した。

【戸田茂睡】 トダモスキ。本姓は渡邊、名は恭光(ユキミツ)、通稱は茂左衛門。梨本庵、また寒露軒と號した。駿府の人。伯父戸田氏に養はれ、後、本姓に復した。本多

忠國に仕へ、梨本集を著して舊來の歌學の病弊を指摘した。(梨本集)の條参照。著作「戸田茂睡全集」十八卷は國書刊行會本一冊となつてゐる。なほ佐々木信綱博士著の歌學論叢に「戸田茂睡論」がある。寶永三年(一三六六)歿。年七十八。

【下河邊長流】 シモカウベ、チャウリウ。長流は長龍とも記す。だからナガルとは讀むべきでない。萬葉集管見。萬葉集鈔を初め、歌道の著が多い。今、長流全集二卷に收められて、契沖全集に附卷として刊行されてゐる。貞享三年(一三三六)卒。年六十四。大正四年十一月贈正五位。

【梨本集】 ナシモトシフ。五卷。元祿十一年成り、同十三年刊。歌論の書であつて、その論旨は、堂上家殊に二條家の歌學で唱へて來た所の制詞・禁詞などが歌にあるべき筈なく、「歌は大和こと葉なれば、人のいふといふ程の詞を、歌によまずといふことなし。」と主張したところに特色が存する。この書は、同じ著者の「百人一首雜談」・「僻言調」等と共に近世歌論の初期のものとして最

も注目すべきものである。

【造詣】 ザウケイ。何れもイタルと訓む。學問などの研究。また、その研究の深いこと。

【莫逆の友】 バクゲキのトモ。(又はバクギヤクのトモ)。互に心に逆ふことなく、意氣の相投合してゐる友。

莊子に「四人相視而笑、莫逆于心、遂相與友。」

【萬葉代匠記】 マンエフダイシヤウキ。二十卷。萬葉集の註釋書である。「代匠」といふは、「師匠に代る」義。長流と著者の契沖とは友達關係と見られるが、契沖としては長流に師事してゐた心から、長流の果さなかつたことを師に代つて成就したといふ義を含めたものと思はれる。初稿本と精撰本となつて、今共に契沖全集に收められてゐる。その註は詳細であり、卓抜な見地に富んでゐて、實に斯界の名著・大著と稱されてゐる。

【國語學上の業績】 例へば「和字正濫抄」(元祿六年成る)の如き著述によつて歴史的假名遣を正した功は偉大なものである。

【復古神道】 外來の儒佛二教に影響せられない、古來の姿

に復つた神道。神道は元來、神ながらの道を骨子とした日本國民の生活原理であり、政治の道でもあつたが、儒佛二教が入り來つて、それらの感化を受け、大部不純なものになつてゐたのを、荷田春滿は古學復興の精神によつて、儒佛二教の影響を排して、古來の「神ながらの道」なる神道を唱道したのである。

【創學校啓】 國學校を創設して戴きたいといふ幕府への建白書。「啓」はマラスと訓む。名詞としては、上書・上申書の義。初に「謹請下蒙鴻慈、創設國學校上啓」と題して、「誠惶誠恐頓首頓首、謹聞。伏惟、神君勃興山東、霸功一成、平三章天下。草上之風、執越三君子之志。云々」と本文に入り、先づ將軍家の徳風を稱へ、儒佛二教の盛況を述べ、轉じて「國家之學」の日に衰へて行くことを歎じ、伏此請望、或京師、伏陽之中、或東山、西郊之間、幸賜三頃之閑地、斯開三皇國之學校。云々、悲哉、先儒之無識、無三及三皇國之學。痛哉、後學之鹵莽、誰能歎古道之潰。云々、古語不三通則古義不明焉。古義不三明則古學不三復焉。先王之風拂三迹、前賢之意近三荒、一由三不三講三

語學。是所_レ以_レ臣終身精力_ヲ用_ニ盡_ス古語_ニ也。伏以_レ斯文之興_ヲ之與_レ廢_ハ、固在_ニ此學之取_ニ與_ニ捨_ニ。願閣下留_ニ意_ニ幸_ニ察_ニ。臣東麻呂誠惶誠恐頓首頓首謹言_ニ續々群書類從第十、教育部に所收の文による_レといふのである。時に年は六十歳であつた。

【國史・律令を究む】 國史や律令を研究したことは、神代卷荷田氏抄・日本書紀訓釋等の著書、及び令義解剖記・令集解剖記・令問答等の著書によつて知られる。

【萬葉調の雄健なる歌】 例へば
百くまの荒き箱根路こえ來ればこよろぎの磯に波のよる見ゆ
鳩鳥のかつしかわせの新しぼりのみつゝをれば月かたぶきぬ
信濃なる首の荒野を飛ぶ鷺の姿もたわに吹くあらしかな
播磨がた迫門の入日のすゑはれて空より歸る沖のつり舟

【多士濟々】 タシセイセイ。多くの賢才が盛に出てゐるさま。

ま。濟々多士ともいふ(詩經)。

「濟々」は衆くして盛な貌。
詩經に「濟々有_レ衆。」

【加藤千蔭・村田春海】 カトウ チカゲ。ムラタ ハルミ。二人とも、當時のいはゆる江戸派の歌人。千蔭には歌文集に「うけらが花」等があるが、その外に「萬葉集略解」の著が名高い。春海には歌文集として「琴後集」(ことじりじふ)が最も名高く、他にも「五十音辨誤」「假字大意抄」等の語學書や又歌學書もある。

【古事記傳の大著】 「傳」は註釋・講義の義。古事記の註釋書たる古事記傳は、全部で四十八卷、四十八冊。明和元年(著者三十五歳の時)から著手、三十五年の後、寛政十年(著者六十九歳の時)に至つて業を了へた。古事記に關する研究としては空前絶後の大著であり、名著である。

【萬葉集・源氏物の註釋】 前者の例には「萬葉集玉の小琴」「萬葉集問抄」、後者の例には「源氏物語玉の小櫛」がある。

【國語學上の諸著作】 例へば「てにをは紐鏡」「詞の玉緒」「御國詞活用抄」「字音假字用格」「漢字三音考」その他がある。

【神ながらの道】 太古の神々が示された道。建國の大本、政治の軌範、敬神崇祖の念、忠君愛國の心、尙武の精神などは、皆この「神ながらの道」に含まれてゐる。

【物のあはれ】 漢語にすると「情趣」といふやうなことになる。宣長は「源氏物語」の中心をなすものとしてこれを説いたが、これはまた歌の理想をなすものとも解されてゐる。今、その内容を主として言へば、壯美よりは優美を重んじ、力強さよりは物とかい美を尊重したものである。その形式との關係を言へば、すべて形式を尊重するが、それが單に技巧や形式だけでなく、眞情を伴なふ技巧で、そこには完全な調和といふことが必要だとされた。情の高まる時、それを技巧的に表現するやうになるのは自然であり、また情の高まる時、それを人に傳へたくなるのも自然である、その爲に技巧的にもなるのだと解される。

【古道の講説】 篤胤の古道講説の書としては、「古道大意」(文化六年講、文政七年刊)が最も名高い。
【堂上家に學び】 はじめ冷泉爲村の門人となつたのでいふ。

【清新獨得の境】 この境地を示す例歌を次にあげる。
爛漫と咲きぬる見てぞ霜にまだしほめる老も春を知りぬれ
小鳥追ふ鳴子の繩に手をかけて竹のは山の夕日をぞ見る
里の犬の聲のみ空の月によみて人は靜まる宇治の山かげ
古へは大根はじかみにらなすびひるほし瓜も歌にこそよめ

【上田秋成】 その「歌文集」には「藤葉冊子」(つばらぶみ)が名高く、「學者として」の著作には「冠辭考續貂」「靈語通假字篇」その他があり、「創作家」としての著には「雨月物語」「世間妾形氣」「癩癩談」その他なほ多い。文化六年(二四六九)歿。年七十八。

【香川景樹】 カガハカゲキ。もとの名は純徳。鳥取池田の藩士林善太兵衛の二男。後、京都に出て、香川景柄の門に入り、歌才を認められて香川家の養子となり、景樹と改名した。桂園・梅月堂その他の號がある。門下の歌人としては木下幸文・熊谷直好・八田知紀等が名高い。天保十四年(二五〇三)卒。年七十六。

明治四十年十月、贈正五位。

【古今集を宗とし云々】 古今和歌集を大本とし、模範とし、歌道の第一の書として尊重して、「しらべ(調)」を主として説を立て、歌は歌のために存在するもので、他の用のためではないとした。歌詞としては、現代語を使用すべきを論じ、しかも、歌品を重んじ、姿態調和のために洗煉といふことを必要とした。かくて桂園派の歌風は、明治の新派が起るに及んでも、なほ一方に行はれた。例歌、埋火の外に心はなけれども對へば見ゆる白雪の山(題しらす)

大井川かへらぬ水にかけ見えて今年もさける山櫻かな

【井手曙寛】 キデアケミ。その歌風は下にはゆる「雄健」

を一特色とする。例へば、
國を思ひねられざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな
羽鳴らす蜂あたゝかに見なざるゝ窓を埋めてさく薔薇かな

【釋良寛】 その歌風は下にはゆる「純真」を一特色とする。例へば、

風は清し月はさやけしいさ共にをどり明かさむ老の名残に

歌やよまむ手鞠やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつゝ

【大隈言道】 オホクマコトミチ。その歌風は下にはゆる自由を一特色とする。例へば

傘させるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雪のはれがた

ゆく人を田舎童の見るばかり立ち並びたるつくづくしかな

【古風俳諧】 或は「古俳諧」といふ。廣くは芭蕉が新生面を開いたといふ正風俳諧に對して、それ以前の俳諧を呼

ぶが、特に松永貞徳を中心とする一派の作をいふ。俗語を用ひながらも種々の法式に捉はれ、多くはその趣味が幼稚低劣な遊戯氣分に安住してゐる。例へば、俳諧では、

ふもと田のわせもおくてもよう伸びて 貞徳

思ふやうにぞ雨もふりける "

十五夜の月にはさはる雲もなし "

きつかりきかりわたる雁がね "

といふ如く俗言が入り、俳句では、

鳳凰も出でよのどけき酉の歳 貞徳

うましとて口をもたゝく若葉かな 同

の如く洒落を言つてゐる。

【談林派】 「談林」とは、もと佛教でいふ「談義の林」の義で、僧徒の學場を稱した語である。寺院の尊稱を壇林ともいふ所から轉じた語であらうといふ。江戸の田代松意の「談林十百韻」の序に「この席をば我等ごときの俳諧談林とこそ申すべけれどたはぶるゝよりおこりて、皆人談林と言ひならはす。」とあり、又、同書巻頭の宗因の發句

に、「さればこゝに談林の木あり梅の花」ともある。「談林風」・「談林俳諧」などいふも、類語である。

【近世文學の各分野】 俳諧のみならず、淨瑠璃にも、小説類にも、談林俳諧の影響があつたのでいふ。

【近世的なるもの】 平民的で、破格的で、自由で、滑稽で、愉快で、現世的で、自然よりも人事的興味に富んだといふやうなところに特色があるものをいふ。

【遊戯的氣分を脱せざりし】 例へば宗因の「西翁十百韻」にしても、

世の中のうさ八幡ぞ花に風

彦の山くくれくれの春

大天狗かすみの衣ぬぎ捨てて

礫ふりさけあくるしののめ

いづくより追出され行く時鳥

短慮にめぐる村雨の空

といふやうな程度で、洒落てふさけてゐる。

【談林より出でて】 芭蕉もその蕉風を開拓する以前、例へば延寶三年宗因が江戸下りの折には、宗因一座の百韻

興行に加はつてをり、談林風の俳諧を吟じたものであ
る。

【藝術的法悦】 藝術を味はふことによつて得るところの高
尙にして俗ばなれのした悦樂。「法悦」は元來佛教の法に
よつて得る悦であるが、それにも似た貴い精神生活上の
愉快をこゝでは意味してゐる。

【甲子吟行】 「野ざらし紀行」ともいふ。芭蕉が貞享元年
八月から、門人千里を伴つて、翌年の四月まで九ヶ月
に亘つて、試みた、歸省をかねての旅の紀行文である。
第八課参照。

【七部集】 委しくは「芭蕉七部集」と呼ぶ。冬の日集・春の
日集・曠野集・ひさご集・猿蓑集・炭俵集・猿蓑集を
さす。

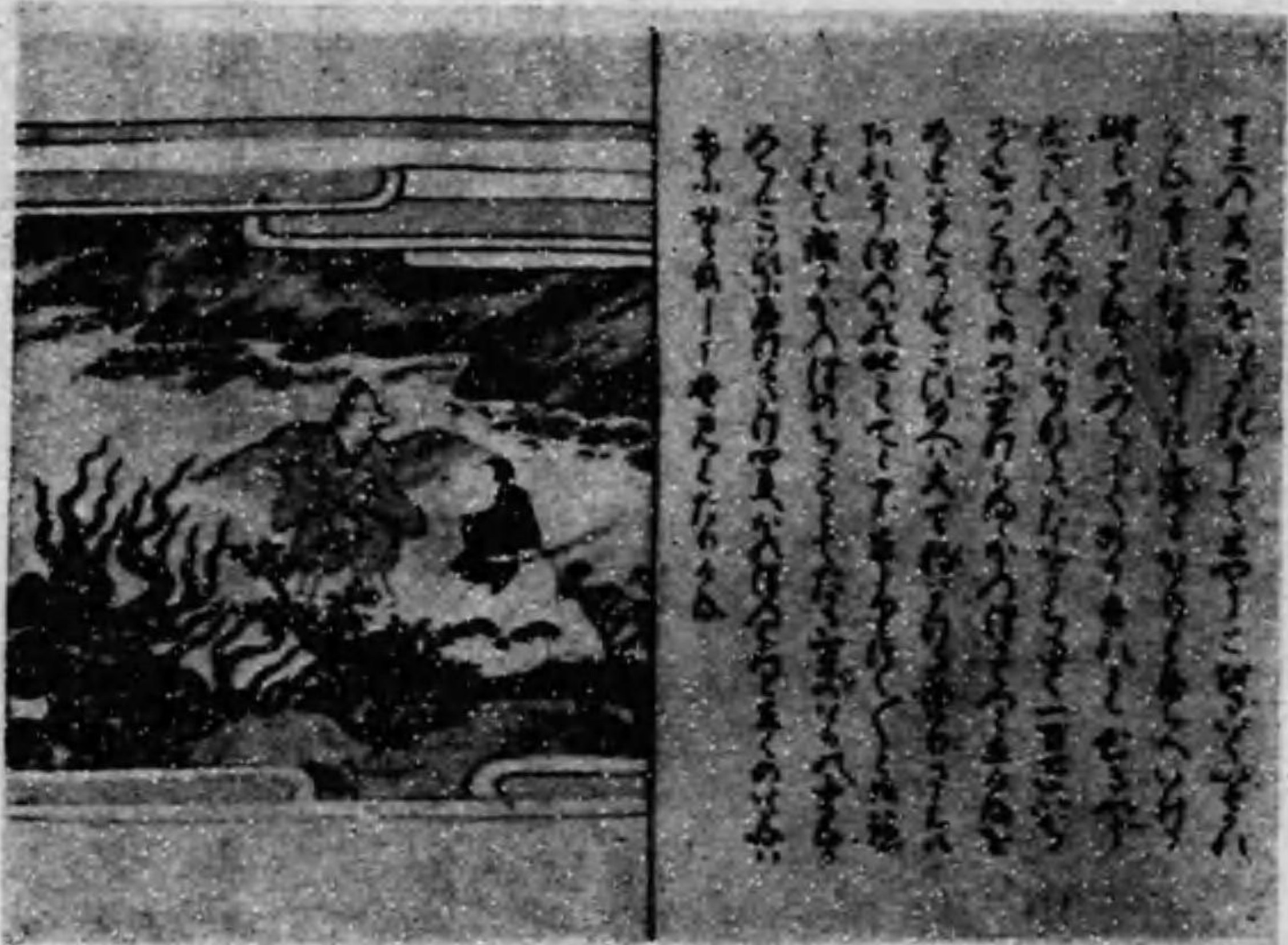
【鶉衣】 ウツラゴロモ。横井也有の俳文集。十二冊。前篇
に天明五年の跋があり、續篇に文政六年の序がある外、
刊年未詳。天保十二年に四冊本として再版された。今日
では更に新しい單行本もあり、俳諧文庫や、俳文學大系
や、有朋堂文庫その他の叢書にも收めてある。

【假名草子】 主として假名で書いてある草子(本)。それを
眞字本や漢文書に對して呼ぶ名である。しかし、江戸時
代文學の一種、



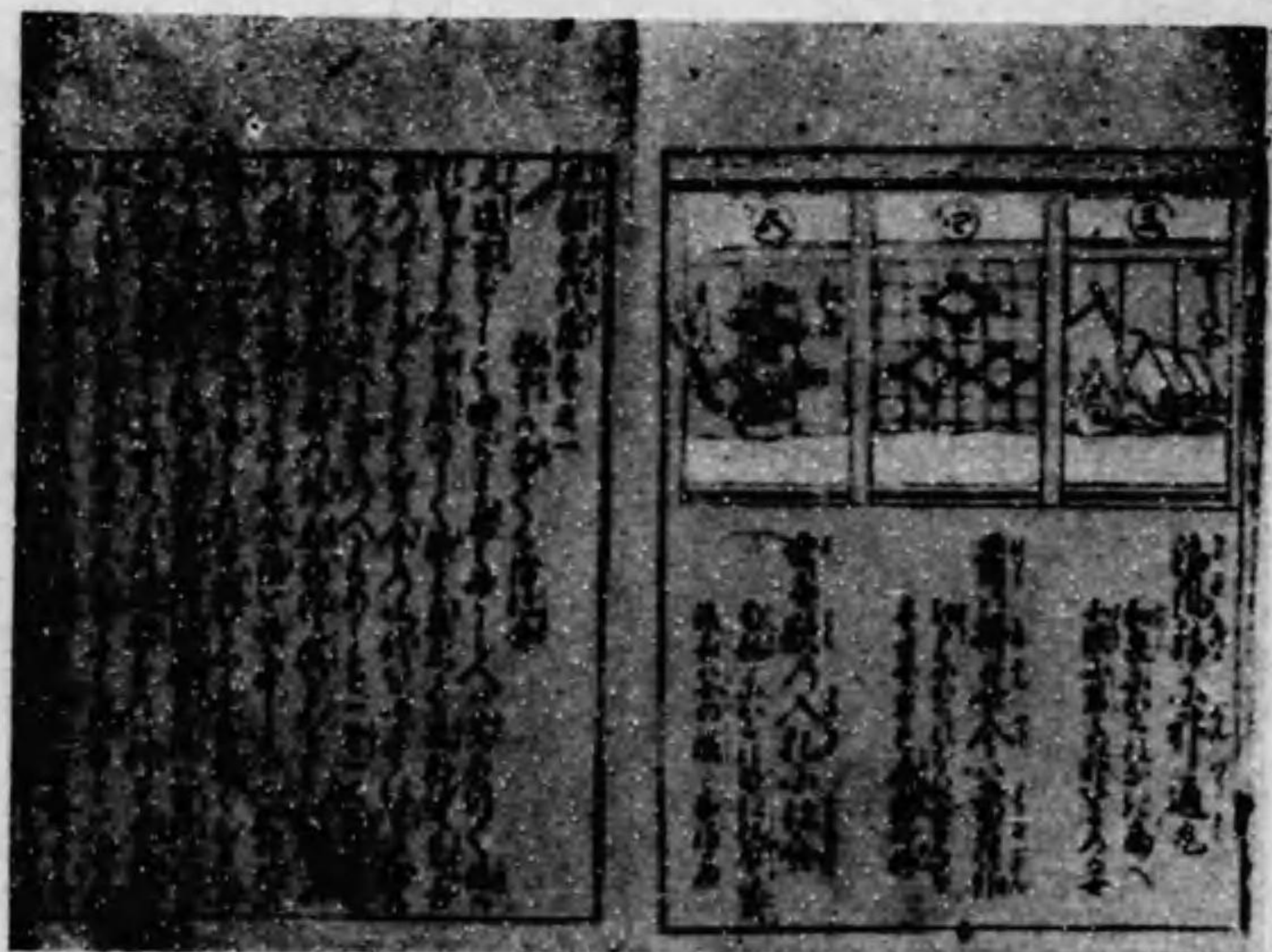
即ち「浮世草子」
の出現に先立つ
て現はれた文學
的書物で、當時
の書目では一般
に「假名書」と
も言つた。内容
は物語・小説に
當るものが多い
が、説話集や隨筆風の作その他を含む。今、教科書本文
に擧げた題目・内容によつて例示すると、
歴史的な事件を題材としたものに「信長記」や「太閤記」

地理書的小ものに「竹齋」や「東海道名所記」、
古文學に擬したものに「尤の草紙」や「犬徒然草」、
佛書を俗譯したものに「戒殺物語」や「繪入往生要集」、
漢籍に據つたものに「智恵鑑」や「大和爲善録」、
などがある。



【お伽草子】 一
種の短篇小
説。主として
室町期に出た
ものに用ひる
稱呼である
が、その起
原は明らかで
ない。「鉢かづ
き」・「物臭太
郎」・「一寸法
師」など、皆こ
れに屬する。

【啓蒙的】 ケイマウテキ。稚蒙なものを教へ導いて行くと
いふ態度で作られてゐるといふ形容。



【浮世草子】 或は「浮世本」とも謂はれた。假名草子が前
述のやうに、と
かく現世を離れ
て傳統的な古い
ものに取材して
ゐるのに對し
て、「浮世」即ち
當世の實際的事
件を題材とし、
その執筆態度も
啓蒙的・教訓的
よりも寫實的・
文學的になり、
藝術的趣味を濃

厚に描き出すに至つたものである。

【逸足】 イツク。とびはなれてすぐれたところがある弟

興行に加はつてをり、談林風の俳諧を吟じたものであ
る。

【藝術的法悦】 藝術を味はふことによつて得るところの高
尚にして俗ばなれのした悦樂。「法悦」は元來佛教の法に
よつて得る悦であるが、それにも似た貴い精神生活上の
愉快をこゝでは意味してゐる。

【甲子吟行】 「野ざらし紀行」ともいふ。芭蕉が貞享元年
八月から、門人千里を伴つて、翌年の四月まで九ヶ月
に亘つて、試みた、歸省をかねての旅の紀行文である。
第八課参照。

【七部集】 委しくは「芭蕉七部集」と呼ぶ。冬の日集・春の
日集・曠野集・ひさご集・猿蓑集・炭俵集・續猿蓑集を
いふ。

【鶉衣】 ウヅラゴロモ。横井也右の俳文集。十二冊。前篇
に天明五年の跋があり、續篇に文政六年の序がある外、
刊年未詳。天保十二年に四冊本として再版された。今日
では更に新しい單行本もあり、俳諧文庫や、俳文學大系
や、有朋堂文庫その他の叢書にも収めてある。

【假名草子】 主として假名で書いてある草子(本)。それを
眞字本や漢文書に對して呼ぶ名である。しかし、江戸時
代文學の一種、



殊に小説の一種
として考へる時
は、當代初期、
即ち「浮世草子」
の出現に先立つ
て現はれた文學
的書物で、當時
の書目では一般
に「假名書」と
も言つた。内容
は物語・小説に
當るものが多い

が、説話集や隨筆風の作その他を含む。今、教科書本文
に挙げた題目・内容によつて例示すると、
歴史的な事件を題材としたものに「信長記」や「太閤記」

【啓蒙的】 ケイマウテキ。稚蒙なるものを教へ導いて行くと
いふ態度で作られてゐるといふ形容。

【浮世草子】 或は「浮世本」とも謂はれた。假名草子が前



述のやうに、と
かく現世を離れ
て傳統的な古い
ものに取材して
ゐるのに對し
て、「浮世」即ち
當世の實際的事
件を題材とし、
その執筆態度も
啓蒙的・教訓的
よりも寫實的・
文學的になり、
藝術的趣味を濃

厚に描き出すに至つたものである。

【逸足】 イツソク。とびはなれてすぐれたところがある弟

地理書的のものに「竹齋」や「東海道名所記」、
古文學に擬したもの「尤の草紙」や「犬徒然草」、
佛書を俗譯したものに「戒殺物語」や「繪入往生要集」、
漢籍に據つたものに「智慧鑑」や「大和爲善録」、
などがある。

【お伽草子】 一
種の短篇小
説。主として
室町期に出た
ものに用ひる
稱呼である
が、その起
原は明らかで
ない。「鉢かづ
き」・「物臭太
郎」・「一寸法
師」など、皆こ
れに屬する。



子といふほどの意。

【類型的】 どれもこれも同じ型にはまったといふ形容。

【犀利】 サイリ。もと武器の鋭い形容。轉じて文章、又は眼光のするどいことにいふ。

漢書に「羌戎弓矛之兵耳、器不犀利。」

犀は獸の名。又、兵器堅しと説かれてゐる。

【時勢粧】 ジセイサウ。國語では今様姿(イマヤウスガタ)といふ。今の世のありさま。

白氏文集卷四に「時世粧」、名義抄、米部に「時勢粧、イマヤウスガタ」(大言海)

【一種道義の念】 西鶴の作品の中に、儒教的精神に基づいた教訓的語句或は心學的な訓誡など見出されることをいふ。例へば「武家義理論語」の如く、武士の義理を骨子とした物語は言ふまでもなく、「日本永代藏」の如きに於ても、「世の仁義を本として神佛に祭るべし」(一卷一章)とか、「内證は人知らねばとて、天の咎もあるべし」(三十卷二章)とかいふ言葉は到る處に挿入されてゐる。

【一脈無常の感】 これも例へば「日本永代藏」の巻頭に「浮

世は夢幻といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。」といひ、又「世は無常なり、この男五十八の冬のはじめ、霜の朝、風といふばかりにむなしくなりぬ」といふ如き言葉は、各作品の中に決して珍しくない。

【八文字屋本】 浮世草子の一種。もと京都駄屋町八文字屋といふ書肆の發行にかゝる浮世草子の稱。後には同時代同種の他書肆出版のものを含めて呼ぶ。作者には江島屋其碩・八文字屋自笑・同其笑等が代表的である。

「傾城色三味線」・「風流曲三味線」・「傾城禁短氣」などが名高い。

【浪漫的】 英語(Romantic)の譯語。寫實的であるのと異なつて、作者の空想によつて、實人生よりも誇張した世界を描き出した作者を形容していふ。

【讀本】 ヨミホン。「讀む本」の義。繪を主にして、僅に假名で會話や話の筋などを記入したといふ程度に過ぎない本、即ち、繪を見る本(草雙紙の或もの)が當時に行はれてゐたが、それに對して、繪もあるが、讀むことを主にして、多くは歴史などに取材し、その文章の程度も高

めた一種の小説をいふ。これにも初期讀本と後期讀本とがある。「雨月物語」は初期の一例であるが、讀本として最も價值高く、且つ最もよく行はれたのは後期のものがある。精神的内容は儒教的、道德的であつて、馬琴の如き武士道的教訓を甚しく高調し、その點から見て、いはゆる傾向小説として著しい色彩を見せてゐる。

【雨月物語】 ウゲツモノガタリ。正しくは「近古奇談雨月物語」といふ。自序によると、「明和戊子晩春、雨霽月朦朧之夜」に脱稿したので名づけたといふ。「近古奇談」とある如く、一種の怪談小説であり、「白峯」・「菊花の契」・「浅茅が宿」・「夢應の鯉魚」・「佛法僧」その他すべて九篇より成るが、何れもその構想に神祕的なところがあり、一種凄愴の氣が漲つてゐる。

(参考、新雨月物語詳釋 鈴木敏也著)

【山東京傳】 京傳の小説は多方面に亘つてゐるが、讀本としては、「忠臣水滸傳」・「昔話稻妻表紙」・「善知鳥安方忠義傳」・「櫻娘全傳曙草紙」その他がある。

【椿説弓張月】 チンセツユミハリヅキ。源為朝を題材にし

た作で、「里見八犬傳」よりは文學的價值が高いとも謂はれる。

【その他傑作多し】 例へば

新編水滸畫傳・石堂丸刈萱物語・松浦佐用媛石魂録・頼豪阿闍梨怪鼠傳・三七全傳南柯夢・雲妙間雨夜月・夢想兵衛

道中旅果毛(十五卷一九)

唯時子二載

壬戌五陽古且

十通舎一九誌



胡蝶物語・皿
皿郷談・近世
美少年録・
俠客傳等々。
【滑稽本】 一九
の「東海道中
膝栗毛」・三馬
の「浮世風呂」
「浮世床」・瀧
亭鯉文の「花
簪八笑人」等
等、すべて滑
稽や笑を中心

対象とした文學作品をいふ。製本上からは「中本」と稱する。半紙本と小本（半紙半裁判）との中間にある大いさの本の義。

【草雙紙】クサザウシ 廣義に於てはその表紙の色によつていふ赤本・黒本・黄表紙などや、又、合巻と稱するものを總



稱するが、狭義では最後の全巻のことをいふ。毎頁に

必ず挿繪があるので、しかもその繪が文よりも鑑賞の主要対象となるので「繪草紙」とも呼ばれる。「雙紙」は冊子の音便から來た當字であり、「草」は雜多とか猥雜とかの意を有する「くさ」の當字である。

【柳亭種彦】草雙紙の作者として、殊に「修紫田舎源氏」を出したので名高い。

【淨瑠璃十二段草子】或はこれを「お伽草子」の一種とも見る。淨瑠璃姫と牛若丸との情事を題材としたもの。内容を十二段に分けたのでこの名を生じたといふ。作者は未詳、小野お通作とするは信じがたい。



【金平淨瑠璃】淨瑠璃の一派。坂田金平の武勇談を主題としたものが盛に行はれたので、その種の總稱となつた。語り手は和泉太夫が

代表者であつたので、「和泉太夫節」ともいひ、その詞章の書いてある本（正本）をば「金平本」といふ。内容が武勇談である上に、その語り口が非常に強く豪快なものであつたといふ。

【時代物・世話物】時代物は歴史的材料によつたもの、世話物は當時の出來事を題材として仕立てたもの。兩者の中間を行つた例もあるが、大體この二者に分けて考へられる。近松の世話物は「曾根崎心中」をはじめ二十數篇あるが、他の百餘篇はすべて時代物である。

【虚實皮膜の藝術論】虚と實との間を行くものが藝術であるとの論。なほ「淨瑠璃文句評註」の書として名高い。「なにはみやげ」（穂積以貫著）の序（發端）に、近松の言葉であると引いてある所を次に記す。

藝といふは實と虚との皮膜の間にあるもの也。成程今の世實事によくうつすを好む故に、家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとは雖も、さらばとて眞の大名の家老などが立役の如く顔に紅脂白粉をぬる事ありや。又眞の家老は顔をかざらぬとて立役がむしやくと髯

は生なり、あたまは禿なりに舞臺へ出て藝をせば、慰みになるべきや、皮膜の間といふが此也。虚にして虚にあらず、實にして實にあらず、この間に慰みが有るもの也。云々（圈點は編者が施す）

【紀海音】キノカイオン。その作は

時代物——鎌倉三代記・義經新高館・齊仁親王嵯峨錦・東山殿室町合戦・傾城無間鐘、等。

世話物——椀久末松山・お染袂の白しぼり・心中二つ腹帯・八百屋お七、等。

すべて五十篇に達してゐる。

【脚本は近松にその作多けれども】演劇に用ひたる役者と詞と科（しぐさ）とを書いた本。「狂言本」とも「劇」とも「戯曲」ともいふ。近松の作例には、

大名なぐさみ曾我・夕霧七年忌・一心二河白道・傾城佛の原・姫藏大黒柱 等々

これら二十數篇は、高野辰之博士校訂「近松歌舞伎狂言集」に收めてある。

【化政度】文化から文政にかけての年度。

【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。

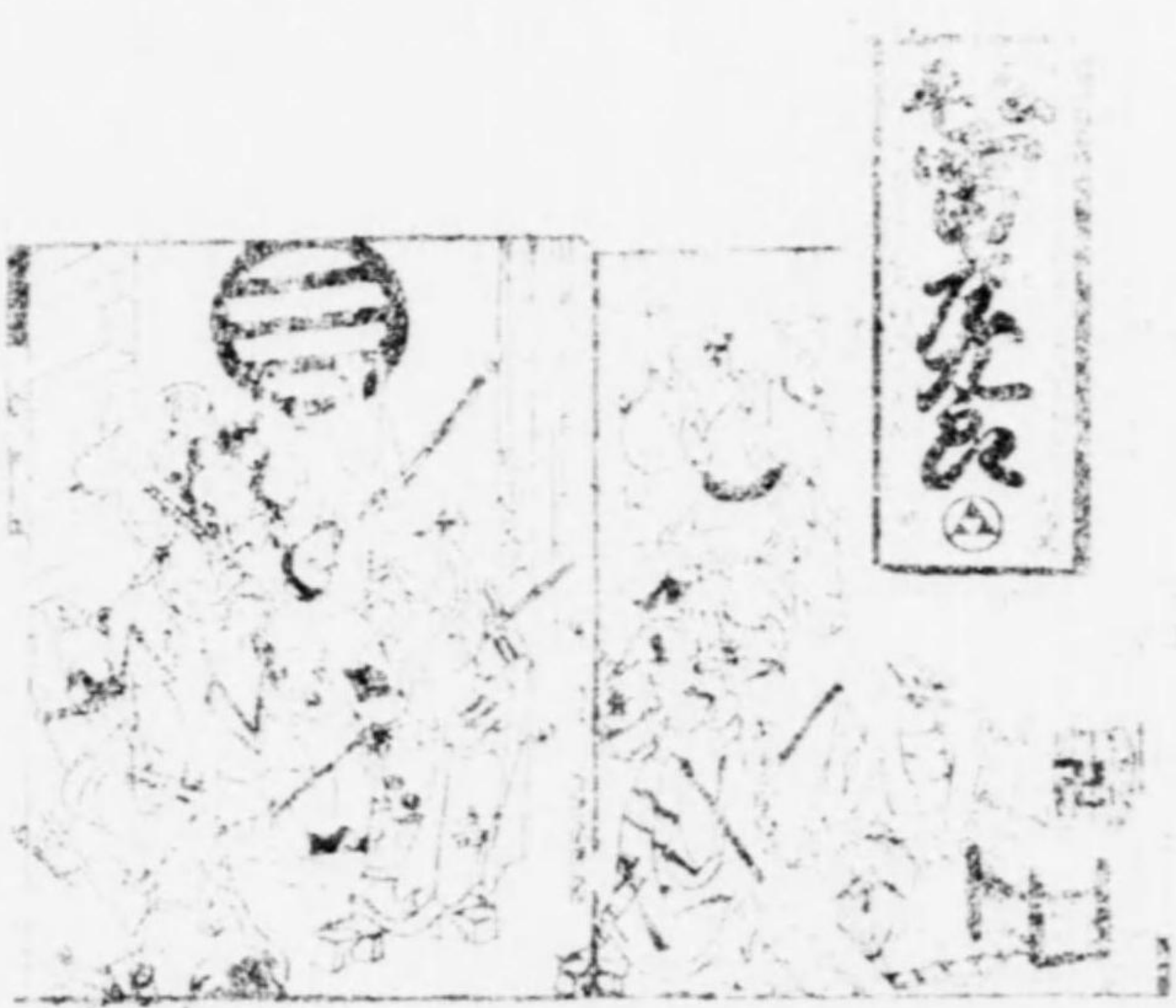
【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。



本庄の文学の発展を示す一コマの挿絵。左側に座す人物は、右側に立つ人物と対峙する。背景には伝統的な装飾が施されている。

【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。

【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。



本庄の文学の発展を示す一コマの挿絵。中央に立つ人物は、上部の円形シンボルと関連している。背景には伝統的な装飾が施されている。

【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。

【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。

【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。

【本庄】 本庄の文学は、江戸時代を通じて、中世の文学から、近世の文学へと変遷を遂げ、その特色を打ち出した。特に、小説の分野では、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。その代表として、『源氏物語』の精神を継承し、独自の発展を遂げた。

【鶴屋南北】 ツルヤナンボク。「南北」と稱する脚本作者には幾人かあるが、その内、四代と五代とが殊に名高い。本文のは頭註のやうに四代南北である。その作の、現在世に行はれてゐるものは百數十篇に及ぶ。今、「大南北全集」十七卷が刊行されてゐる。例へば

東海道四谷怪談・櫻姫東文章・彩入御伽草子・勝相撲浮名花觸、等々。

【河竹默阿彌】 カハタケ・モクアミ。古河默阿彌ともいふ。

生前は「河竹默阿彌」とは言はなかつたといふ。前名は勝諺藏・柴晋輔・二代河竹新七などいふ。代表作としては

雪駄直し・文彌殺し・鼠

小僧・小猿七之助・黒手組助六・十六夜清心・三人吉三・

縮屋新助・因果小僧・村井長庵・腕の喜三郎

等が数へられる。その作長短すべて三百六十種に達する。今「默阿彌全集」二十七卷が刊行されてゐる。



一六 光頼卿の参内

1 解題

平治物語卷一、「光頼卿参内の事並許由の事」の條から、末段だけを省いて採録したものである。

公卿會議の催によつて参内した光頼が、甥信頼を威壓し、弟惟方を叱責し、宮中の有様を見て慨歎して引揚げる次第を敘したもので、平治物語の中では、「待賢門の軍」と共に名高い文である。

「平治物語」(ヘイヂモノガタリ)は全三卷。平治元年十二月に於ける戦亂を主とし、その前後の事情をのべたもの。その文章は簡潔遒勁、しかも情趣に富んでゐる。

作者は「保元物語」と同一人であらうといはれてゐるが、その何人たるかは詳かでない。(但し叡山に關係あるものと推定される。)又、その成立年代もよくわからぬ。平家物語より前か後かの問題も疑問とされてゐるが、今日では、平家より後に出来たものであらうとの説が有力である。

水戸徳川光圀の命によつて今井弘濟の校訂した「参考平治物語

(参考館本は五異本と對校し、三十九種の参考資料を照合して出来た善本である。圖書刊行會第四期本として刊行されたのはこれである。

註釋には左の諸書がある。

内藤恥叟、平井頼吉 參訂平治物語講義
今泉定介 平治物語講義

2 編纂の用意

我が國民道德の眞髓たる臣道の權化とも見られる藤原光頼卿の言動に關する平治物語の一篇を味讀せしめ、次課「人臣の道」と相俟つて、臣道並に國體に關する觀念を涵養し、併せて戦記物語の讀解に關する正確なる知識を與へたい。これ本課をこゝに採録した所以である。

3 要旨

光頼卿の徹底的覺悟から出た嚴肅公明な態度、動作及びその言語によつて、その人物の毅然たる眞面目を窺ひ、

更にこれによつて、大義名分の念を高め、忠誠の至情に共感せしめたい。又、記事と挿圖と相俟つて、舊御所・服飾等に關する一斑の知識を會得させたい。尙、文章そのものから見れば、光頼の動作・態度に關する敘事或は記事の巧、並にそれらと光頼の詞との間の連絡の妙によつて表された光頼對他の人物との對照のおもしろさなど、殊に玩味に價する。

4 概説

第一節(一七頁—一八頁六行) 光頼卿東帯を繕ひ、覺悟をきめて、從者を連れて参内する。いよ／＼公卿會議の座に臨み、信頼の上座に着く。

第二節(一八頁七行—二〇頁) 着座後の光頼卿の態度と發問。これによつて、一座は沈黙してしまつたので、光頼卿は座を起つ。庭上に立ち満ちた兵どもが、この光頼卿の言動に驚嘆して私語する。

第三節(二二頁—二五頁) 光頼卿は惟方を招きて参内の次第を語り、且、少納言入道の首實檢に關する不都合を叱責する。惟方の一言の返答に對して更に堂々

と意見を述べ、進んで朝家の安穩なるべきやう注意すべしと警戒し、最後に、主上のおはす所から順次に御所の様を問ふ。遂に信頼の住む所を聞くに至つて、慨嘆は極點に達し、果ては朝家の爲に悲愁の念を抱いて退出する。

5 取扱上の注意

□文勢に變化があり、記述の形式の一律ならぬところが、内容と相待つてこの文の生命を躍動させてゐる。幾度繰返しても、教へごたへ、讀みごたへのする文の一例として推奨してよからう。

□元來平治の亂は、區々たる小人の手によつて醸された。清盛の留守にこそ／＼と姑息的にやつてゐる。そこへ洞察あり、霸氣あり、主義あり、しかも剛膽な光頼が威風堂々と参内し、こそ／＼の密議のなかに臨むところは、如何にも痛快である。作者の精神は、力あつて正常なものと、力のないくせに、まがつてゐるものとの痛快なる面接にあらう。しかも時は事前にして、正に暗雲低迷、いつ戦雲をまき起すともしれない。この過飽和のなかに一

の光頼を投げ出したことは、うまく捕へてゐるところで

あり、よく利いてゐて、正に晴天の霹靂である。思想及び技巧の上でいへば、前には、光頼の威風はあたりをはらつて信頼を壓し、その餘威は、弟惟方の上にあふれてゐる。後には、主上の御いたはしきさまをきいて、落涙數行、實に鬼神を泣かしむるの概がある。

□信頼卿の上にもずと着き給ふ(二八頁)

悪しう参つて候ひけりとてしづ／＼と歩み出でられけり。(二九頁)

前代未聞の不思議かなと、のろ／＼しげに憚る所なくくどきたまへば。(二四頁)

動作を修飾する副詞の用語に特別の注意を拂つた點を看取させたい。

□「さて主上は何處におはしますぞ」以下の所は、以上、滔滔と流るゝが如き辯舌を承けて、かくぼつり／＼と問答に入つてゐるので非常な妙味があることを知らせたい。

□本課の文の後に續く原文のうち、こゝに關係のある部分だけを左に抜萃しておく。この條の全文は更に出典にあ

たづて見られたい。

誠に漢朝の許由は、富貴の事を聞きてだに心に厭ひ思ふが故に、悪しき事を聞きたりとて耳を洗ひき。いかに況やこの光頼卿は、朝家の諫臣として惡逆無道の振舞を見聞き給ひて、耳目をも洗ひぬべく思ひ給ふぞ理なる。(下略)

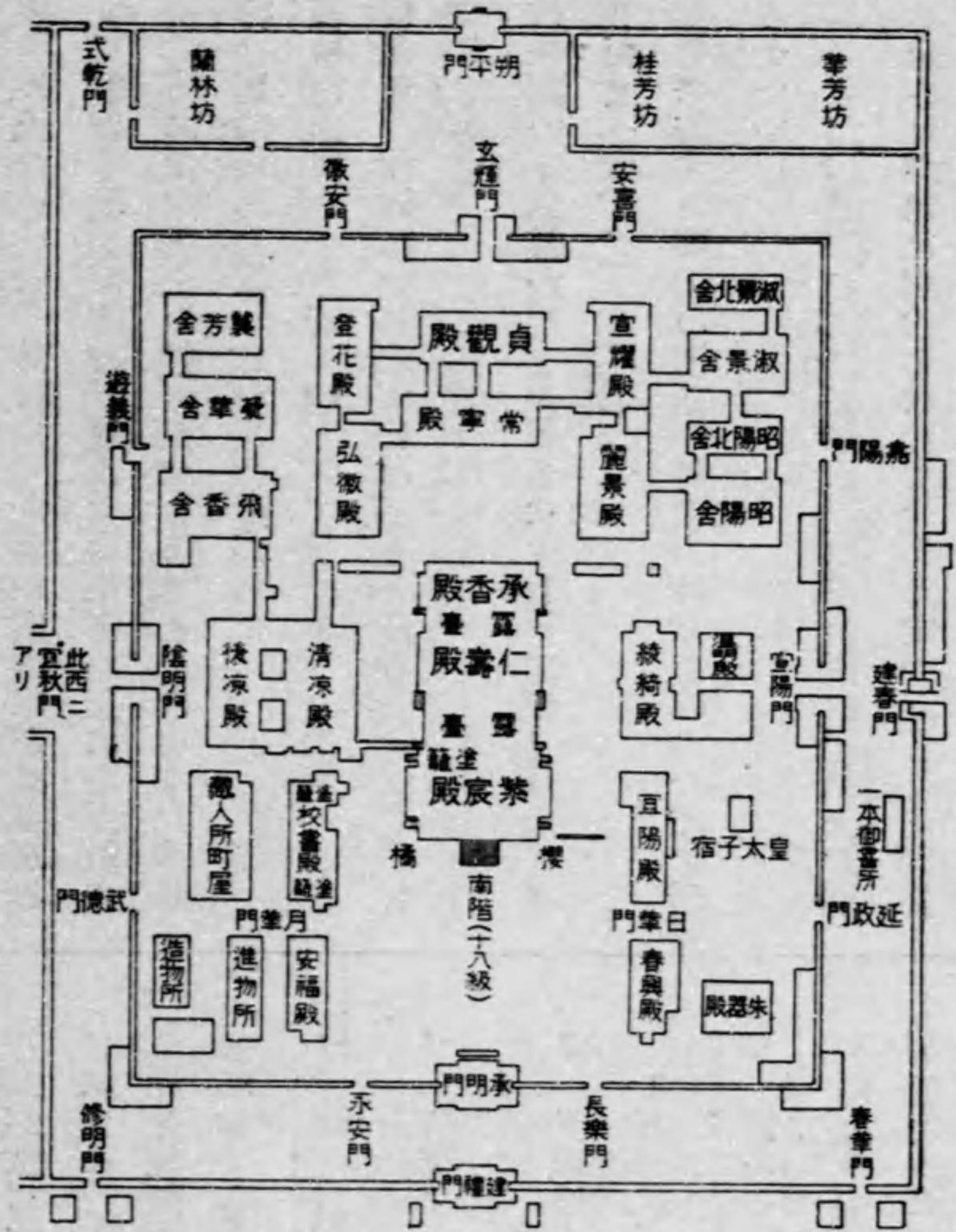
6 設問

- 1 光頼卿の豪膽な態度は、何が然らしめたのであらうか。
- 2 光頼卿といふ人物は、一言でいへば何と評したらよいであらうか。
- 3 文章として見るとき、どういふ點がよく出来てゐると思ふか。
- 4 この文の中から副詞を拾ひ出して見よ。
- 5 次の語句の意義を問ふ。
イ さき高らかに追はせて入りたまふ。
ロ 悪しう参つて候ひけり。
ハ 壁に耳、天に口といふことあり、恐し恐し。聞か

じ。
ニ 傳へ承るときは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。

7 釋義

【光頼】 ミツヨリ。藤原光頼。權中納言顯頼の長子。大治五年修理亮に、長承中、藏人に拜せられ、後その頭となつた。保元中参議に陞り、正三位に叙せられ、權中納言となり、左衛門督を兼ね、平治元年更に檢非違使別當を兼ねた。時に甥信頼が兵を擧げて大内に據つた。この時の進退宜しきを得たことは、本文に詳記されてある。永曆元年權大納言に轉じ、應保の初正二位に進んだ。寛長二年致仕して剃髮し、名を光然と改め、桂の里に住み、承安三年(一八三三)薨じた。年五十。世に桂大納言と稱し、又葉室大納言とも稱した。亞紀・月中記等の著作がある。本文は光頼卿三十六歳の時のことである。



示 今はかくごさんなれ。
へ 英雄。さしもどく。王道。先蹤。宿業。

左にその略系圖を示す。



【参内】 サンダイ。内裏にまゐること。朝廷に出仕すること。

源平盛衰記卷二十二、朝敵追討の條に「大將軍先づ参内して節刀を賜はる。」

【さる程に】 前を受けて後をおこす語。

平家物語には、本課の前に「六波羅より早馬を紀州に立てらるゝ事」の一篇がある。平治元年、藤原信頼源義朝が叛亂を企てた當時、平清盛はその子重盛等と共に紀州熊野参詣の途上にあつた。信頼等はその虚に乘じて兵を擧げたのである。六波羅なる清盛の留守宅より、急使が紀州に飛び、清盛一行は途中から引きかへして、こゝに待賢門の戦が始まり、戦亂は愈々クラ

イマックスに達するのである。

本課は、清盛一行がまだ京都へかへりつかぬ前の出来事なのである。(なほ平治物語の原文を参看せられたい。)

【同じき十九日】 信頼が二條殿を襲うて御所を焼き拂ひ、少納言入道信西の邸をも焼き拂つたのは平治元年(一八一九)十二月九日の夜である。本文はそれをうけていたのである。

【公卿會議】 クギヤウセンギ。大臣以下公卿が参内して會議すること。「愈」は皆・悉くの意。

【催(モヨホ)されたり】 會議をとりおこなはせられた。「催す」は、設けおこすこと。設け行ふこと。企てること。とり行ふこと。

【勸修寺】 クンジュジ。藤原高藤より出た一家の稱。勸修寺は、もと寺の名、山城國宇治郡醍醐村大字勸修寺に在る。この地はもと宇治郡の大領宮道彌益の邑であつた。高藤はその女を娶り、生む所の女胤子は宇多天皇の妃となつて醍醐天皇を生み奉つた。昌泰三年太后胤子の御願

により、承俊律師に勅して、伽藍を創立し、勸修寺と號した。

【左衛門督】 サエモンノカミ。左衛門府の長官。衛門府は宮城の外門を守る職で、諸將の禁衛出入を管し、時を以て所部を巡検して不法の徒を戒め、禮儀並に隼人・門籍・門榜の事を掌る。嵯峨天皇の弘仁二年十一月、左右衛士府を左右衛門府と改めた

【信頼】 ノブヨリ。藤原信頼。忠隆の第三子。庸愚で何の才もなかつたけれども、後白河上皇の嬖幸を蒙り、累進して保元三年參議に任じ、右衛門督を兼ね、正三位權中納言に進み、檢非違使別當となり、寵を恃んで驕恣、藤原通憲（少納言入道信西）と權勢を争うた。

時に信頼は大將たらんことを望んだ。通憲は上皇を諫めてこれを止めた。信頼は大いにこれを怨み、常に病と稱して朝せず、中納言源滿仲と相結び、通憲に報いようと謀つた。時に通憲は、平清盛と婚を通じて、勢力が甚だ熾んであつた。會、義朝は孤立して援なく、平氏の勢に及ばぬのを不満

に思つてゐた。信頼はこれを察し、引いて與黨とし、平治元年（一一八一）清盛が熊野に赴いた不在に乗じて兵を擧げ、三條殿を焼き、後白河上皇並に二條天皇を幽し奉り、通憲を殺したが、遂に清盛に敗られ、軍を棄てて遁れ、仁和寺に入つて上皇に哀訴した。上皇はこれを憫み給うて、死一等を宥さうと思召したが、天皇は聽きたまはず、清盛に命じて六條河原に斬らしめ給うた。時に年二十七。

【振舞】 フルマヒ。しわざ。おこなひ。舉動。

萬葉集卷三に「つねなりしをまひふるまひいや日けにかはらふ見ればかなしきろかも。」

【過分】 クワブン。分限に過ぎること。その身の分際に見えること。身分不相應なること。

平治物語、信頼信西不快の條に「過分なりしかども、なほ不足して、家に絶えて久しき大臣大將の望みをかけて。」

【不參】 フサン。まゐらぬこと。こゝは公卿會議の席に出ぬことをいふ。

【束帯】 ソクタイ。朝服をいふ。天皇以下百官、朝廷公事の時に着用する。下に赤大口袴を穿き、次に表袴・單・柏・下襲・半臂・袍と次第に重ね、石帯をつけ、帶劍・平緒を用ひ、冠・靴を着け、笏を持つ。石帯を束ねるゆゑに、束帯といふのださうである。

【引裾ひ】 ヒキツクロヒ。きちんととのへたゞして。修め整へて。

源氏物語の初音の卷に「心ことにひきつくるひ、けさうじ給ふ。」

【蒔繪の細太刀】 装束のときに佩びる儀刀の鞘に蒔繪を施したるもの。たゞ威儀の爲に用ひ、刀を細く作つてあるから細太刀といふ。往々螺鈿を施したるものもある。



「蒔繪」とは漆で圖畫を画き、これに金銀その他の金屬粉又は顔料を蒔いて、みがいたもの。次の三種類がある。

- 一、平蒔繪 粉蒔をなし、摺漆してみがいたもの。
- 二、研出蒔繪 粉蒔をなし、漆を塗り、とぎ出してみがいた

もの。
三、高蒔繪 模様の高く盛りあげ、その上に粉蒔をして、みがいたもの。

【おとなしやかに】 おとならしいさまに。おちついたさまに。いかにもおとなしく、すなほに。

【めのと子】 「乳母の子」の意。乳母の子、即ち乳兄弟の關係にあるもの。

【桂右馬允範能】 カツラウマノジウノリヨシ。傳未明。「右馬允」は右馬寮の判官。大允左右各、一人正七位下、少允左右各、一人從七位上。後世は六位の侍が多くこれに任じた。瀧口に官を賜ふ時、允に任ずる例である。

【腹巻】 ハラマキ。鎧の一種。背で合はせる。障子板・鳩尾板・梅檀板・弦走などがなく、袖のないのが本式で、袖付の緒もない。但し後世は袖を付けることもある。

（綿かみの革に結び付ける）草摺は前後左右合はせて七板あつて、小札・毛引等は



鎧のやうである。

なほ背で合はせる様に作つてあるから、押付の板はあるが、逆板と上巻とはない。但し後世この合はせめの隙を塞ぐために背板を用ひ、それに上巻の總を付けたのもあるが、古圖には更に見えぬ。腹巻の直垂・狩衣の下に着けた装を下腹巻、上に著けた装を上腹巻といふ。また鎧の下にも着けた。

腹巻は平安朝の末に起つた。

【雑色】 ザフシキ。またザツシキ。有位の者は相當の服色があるが、無位のものとは定まつた色が無い。故に位がなくて雑役に従ふものを雑色といふ。但し、伊勢貞丈は、「色は服色の義にあらず、人品の義なり、雑役をつとむる人品をいふ。」といつてゐる。

【出でたゞせ】 身づくろひをさせて。身仕度をさせて。

【出でたつ】とは、よそほふこと。みじたくすること。

狂言、菊花に「都女郎と見えて、花やかに出でたつて。」

【自然の事】 事の成行きから自然に發生する豫期せぬ事を

いふ。萬一のこと。

こゝでは光頼の身が危殆に瀕する事をさす。

【召具して】 メシグして めしつれて。ともなつて。

娥歌加留多に「七月まうでの乗物に、供人少々召具して。」

【大軍陣を張りて】 いかめしい陣立をして。

「軍陣」とは、戦争の陣だて。

史記の李將軍傳に「與人居、則畫地爲軍陣。」

源平盛衰記卷二十二、衣笠合戦の條に「軍陣に酒を送るは禮なり。」

【さき高らかに追はせて】 聲高々と先ばらひをさせて。「さきを追ふ」は、さきばらひすること。

源氏物語の神の卷に「大將の御さきをしのびやかに追へば。」

【弓を平め矢をそばめ】 「平め」は、立てたものを横にすること。「そばめ」は、物を傍へよせること。

弓矢を伏せ、身に近く寄せて、小さくなり、恐れ入つた様をなすにいふ。

【紫宸殿】 シンデン。又シシイデン。内裏の正殿。前殿・南殿・正寝なども申す。朝賀・即位等の公事を行はせられるところ。承明門の内、仁壽殿の南にあつて南面し、南廂(ビサシ)には十八級の際(キザハシ)がある。母舍(モヤ)後面には支那賢聖の像を畫がいた「賢聖の障子」を立て、中央稍、北に偏して玉座を設け、南面額の中に紫宸殿の額をか、げ、階前の左には櫻、右には橘が植ゑてある。現在の紫宸殿は安政二年(二五、五)の御造營にかゝるものである。皇室典範には、御即位の大禮及び大嘗會は必ず京都御所で行はれる事と定まり、随つて御即位の禮は紫宸殿に於て行はれることになつてゐる。

【殿上】 テンジャウ。殿上間の略。清凉殿の南庇に在つて、公卿・殿上人の祇候する處。(挿圖參看)

【一座して】 第一座を占めて。上座して。

【上臚】 ジャウラフ。身分の貴いものをいふ。もと「臚」は臚とも書き、僧家で法臚・僧臚・戒臚などいふより出た。佛語解釋に「出家して受戒し、一夏(夏朝三ヶ月の行)を経るを一の臚とし、二夏を経るを二の臚とす。より

て僧の年を數ふるに生年をいふときは世壽といひ、出家後の年をいふときは法臚といふ。又僧中の座次は、必ずこの臚の多少によりて高下するが定りなれば、これを臚次といふ。さてこの僧中の名が朝廷に移り、上臚・下臚・極臚などいふ目を用ふるに至れるなるべし。」

【右衛門督】 ウエモンノカミ。信賴はこの九日、勝手に除目を行つて大臣大將となつた。されどこれは兼官で、本官は矢張右衛門督である。

【左大辨】 サダイベン。左辨官の長官。辨官は太政官の判官。辨は令聞書に「治むる義にて、宮中の事を治むる故の名なり。」とあるが、説文には「判也」とあるから、宮内の事を判糾するより名づけたのであらう。八省を分掌し、庶事を承つて天下に達し、太政官内を判糾し、文案を著し、稽失を勾へ、被管の諸司の宿直を監する。

これに左右の別がある。左(左辨官局)は中務・式部・治部・民部の四省、右(右辨官局)は兵部・刑部・大藏・宮内の四省を管する。少納言局と合せて太政官の三局といふ。大辨は左右各一人、從四位上、太政官中の重職であるから、名家譜代の輩より選任した。又華族中才名ある人は參議を以てこれを兼ねた。

【宰相】 参議の異名(唐名ではない)。参議は令外官であるが、禁中に在つて諸政を参議し、國治を觀察する故に宰相(大臣の唐名)ともいつた。その定位八人、故に八座ともいふ。参議は正四位下、後には多く三位となつた。諸官の中、四位以上その才ある人を選任する。大臣・納言に就いての重職であるから、藏人頭・左右大辨・近衛中將・左中辨・式部大輔・三位及び五箇國の國守を無事に歴任したものを七道より任ずる。その中近衛中將は多年の勞、式部大輔は天皇の侍讀に限る。

【長方】 ナガカタ。藤原長方。顯長の長子。かつて平清盛に直言して、後白河法皇の幽閉をとき奉らせ、關白基房を備前より還らせた。

清盛が、遷都の可否を問ふや、長方は獨り新都の不便を極言した。源義仲が京師に入り、法皇を擁して將に西海に走らうとするや、長方は出でて義仲に接し、これを諭した。義仲はために期を延ばし、ついで戦死した。これも長方の功である。

源頼朝が總追捕使たらんと請ふに當り、長方は固くその

不可を陳べたが、法皇は従ひ給はず、その請を御許しになつた。程なく長方は剃髮して、名を中印と改めた。右大臣兼實は嘆息して「朝廷の臣を失ふは、公家の巨損、誠に惜しむべし。」といつた。建久二年(或は三年)薨去。年五十三。世に梅小路中納言と稱した。一七八九—一八五一?)

【末座の宰相】 宰相八座中の末席をいふ。(前項「宰相」参看)

参考平治物語に「按ニ公卿補任、平治元年長方僅五位藏人兼丹波權守。至三安元二年一任ニ参議。長方父顯長時爲ニ参議。左大辨班列最下者藤顯時也。然未レ可レ知レ誰、可レ疑耳。」とある。しばらく疑を存しておく。

【今日の御座席こそ云々】 「今日の御座席は、ことのほかにだらしがないやうに見える。」との意。

「よに」は、世の中にとりわけて。ことのほかに。

枕草子卷三に「よにいみじうをかし。」

「しどけなし」とは、亂雑で、紀律のないこと。しまりのないこと。しだらないうこと。

枕草子卷三に「いみじうしどけなう、……直衣・狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせむ。」

源氏物語の末摘花の卷に「御びんつきのしどけなきをつくろひたまふ。」

【色代】 シキタイ。色體・式體などともかく。會釋。揖禮。顔色を改めて禮する意かといふ。

東鑑卷三十四、仁治二年十一月二十七日の條に「前武州不レ可レ然之旨有ニ御色代之故也。」

【むす】 音便で「むんす」ともいふ。(一)急に力をこめて。いきほひつよく。(二)はぐからずおしきつてするさま。こゝは、(二)の意。

【大力の剛の人】 力のたいそうつよい人。

「大力」は、物語文では多くダイチカラとよむ。

剛の人(ガウのヒト)は、つよくたけき人。

【居懸けられて】 すわりかけられて。

【伏目になりて】 うつむいて。下をむいて。

「伏目」(フシメ)は、うつむいて見ること。轉じて、う

つむくこと。

源氏物語の若紫の卷に「をさな心ちにも、さすがにうちまもりてふしめになりてうつぶしたるに。」

【着座の公卿】 チャクザのクギヤウ。その座席についてゐた公卿たち。

「公卿」とは、朝廷の顯官。「公」は攝政・關白及び大臣。

「卿」は大中納言・参議及び散一位並に三位以上。月卿。卿相。

【あなあさまし】 さて／＼あさましいことだ。

「あさまし」は、(一)浅はかなこと。(二)意外のことに驚くこと。肝のつぶれること。(三)あきれかへること。興のさめること。けしからぬこと。(四)いやしいこと。さましいこと。卑劣なこと。こゝは、(三)の意。

源氏物語の帚木の卷に「君たち、あさましと思ひて、そらごととて笑ひたまふ。」

【下襲】 シタガサネ。束帯の時、袍の下着にする衣の名。

小袖の上に着る。その背後のすそを裾といふ。長くのはして袍の下に出し、引いた儘で練り歩くもの。後世は裾



を別に製して用ひ、下襲を略するやうになつた。こゝに「尻」といふのは即ち裾である。

【衣紋繕ひ】 エモンツクロひ。衿(エリ)をきちんとたゞして、「衣紋」とは、衿を胸にあはせたところをいふ。

【笏】 シャク。古昔我が國で、東帯のとき右手に持った木又は象牙などの板。長さ一尺二寸、幅二寸ばかり。位によつて差がある。木の笏は多く一位(イチキ)又は櫻・柘(ヒ、ラギ)でつくる。もとは事をしるしおいて備忘に供するためのものであつたが、後世は全く儀式用のものとなつた。

笏の本音は「コツ」であるけれど、骨(コツ)と音の通じるのを忌み、又笏はもと長さ一尺であつたところから、假りていふに至つたといふ。
和名抄卷十四に、「笏音骨、俗云尺。」

枕草子卷一に、「うしろをまかせて、しやくとりて、御

前のかたにむかひたてるを。」

【氣色して】 キシヨクして。色を正して。面を正して。

「氣色」は、心持をそのかほいろにあらはすこと。又、その様子。

源平盛衰記卷三十六、景高城に入る條に「敵の頭を取るものは、氣色して城戸に出づ。主親を討たせたるものは、涙を流して引退く。」

【衛府督】 エフノカミ。近衛・兵衛・衛門を概稱して衛府といふ。こゝでは右衛門督信頼をいふ。

【御説】 ゴチャウ。御仰せに同じ。貴人の命令をいふ敬語。おことば。御命令。尊命。「説」は「定言」の合字。

源平盛衰記卷四十八、法皇大原入御の條に「一院の御説とて、大勢にて寄すると申ししかば。」

【沙汰】 サタ。こゝでは、官府の指令・指圖などをいふ語。御成敗式條に「若及大破、令言上子細者、隨其左右、可有其沙汰矣。」

【つい立ちて】 つと立ちあがつて。

「つい」は、「つき」の方便。動詞にかむらせて、この語意

をつよめ、又、ちよつと、そのまゝ、或は突然なる意をあらはす接頭語。

【悪しう参つて候ひけり】 わるい所へまゐつた。参朝したのは悪かつた。参る所ではなかつた。

【庭上】 清凉殿の殿上の間の南なる「殿上の小庭」のことであらう。

【大剛の人】 ダイガウのヒト。すぐれてつよい人。

謡曲、籠太鼓に「彼は大剛の者にてある間、番のことかたく仕り候へ。」

【去んぬる十日】 除日の翌日。

【出仕】 シニッシ。一)出でて官に仕へること。仕官。二)つとめに出ること。出勤。こゝは二)の意。

古今著聞集卷三に「小野宮殿・九條殿、御同車にて出仕。せさせ給ひける時。」

【しいだしたることよ】 思ひきつた舉動を評したことは。よくやつたものだ。しでかしたな。

「しいだす」とは、一事を成しとげること。しでかすこと。太平記卷七に「誠に志の程はたけけれど、唯しだした

る事もなくて、若干討たれにければ。」

【臆したる體】 オクしたるテイ。おちおそれたやうす。きおくれたありさま。

「臆す」とは、きおくれすること。おそれること。おちけること。

枕草子卷一に「なごさは臆せしにか、すべて面さへ赤みて、思ひみだるゝや。」

【頼光】 ヨリミツ。源満仲の長子。圓融・華山・一條・三條・後一條の五朝に歴事して、攝津・伊豫・美濃等の國守に歴任し、内藏頭を兼ね、左馬權頭に遷り、内昇殿を聽させられた。人となり英武にして驍勇、射を善くし、將略があつた。部下の土源綱・平貞道・平季武・坂田公時はいづれも勇武を以て知られた。世にこれを頼光の四天王といふ。彼の鬼同丸を斬殺した話や、大江山に酒頭童子を退治した話の如きは、何れもその武勇を稱した傳説である。治安元年(一六八一)卒した。

【頼信】 ヨリノブ。源満仲の子。頼光の弟。剛果明決、兄

頼光と名を齊しうした。一條・三條・後一條・後朱雀の四朝に仕へ、治部權少輔、左馬權頭、伊勢・陸奥・甲斐等の國守を経て上野介となり、鎮守府將軍に拜し、從四位上に至つた。長元二年平忠常の亂を平げた。源氏が武名を東國に揚げたのはこれを以て始めとする。功を以て丹波守となり、尋いで美濃守に任ぜられた。永承三年（一七〇八）卒した。年八十一。

【臆病】 オクビヤウ。わづかなる事におそれること。又、その人。おちけ。きおくれ。

大鏡卷上に「われをくびるとよむなりけりとおぼしけるおくびやうに、やがて絶え入りたまへば。」

【壁に耳、天に口】 「壁に耳あり、天に口あり。」の略。

文徳實錄に「天無口、假入口。」

平家物語卷一、清水炎上に「天に口なし、人を以ていはせよと申す。」

などとあるが、つまるところ同意である。

主従心得草に「あしきこと人は知らぬと思へども、天に口あり、壁に耳あり。」

詩經の小雅、小弁に「君子無言。耳屬于垣。」管子に「古者有三言、墻有耳、伏寇在側。」博聞錄に「壁有耳、墻有縫。」

【忍び笑】 シノビワラヒ。しのびやかに笑ふこと。そつと笑ふこと。

【殿上の小部】 清涼殿の上の戸の方、石灰壇の南壁の上にある小さい窓をいふ。格子がかけてある。天皇が殿上を覽給ふ爲に設けたものであるといふ。

禁秘抄に「上戸有小部、主上覽殿所也。御物忌時下之。」

建武年中行事には、半部と書いてある。

【見参板】 ゲザンノイタ。又、鳴板ともいふ。これを踏鳴らして謁見及び退出などを知らせる用とした。（挿圖參看）

建曆御記に「清涼殿弘廂南切妻板、不釘釘、是號鳴板、又號見参板。」

【荒海の障子】 アラウミのシャウジ。清涼殿の弘廂の北の



はし、南面の御襖。表は荒海のふちに手長（山海經に見えてゐる長臂國）・足長（同長肢國）の居るさまをかき、裏は宇治川に網代をかけて氷魚をとらうとする繪をかき、右上方の色紙に「もみぢ葉の波のよせくる宇治川や、あじろの床も錦さらせり。」といふ歌を書いてある。

【萩戸】 ハギノト。夜御殿の北、弘徽殿上御局の西にある。障子に萩を書いてあるからかく名づけた。主上の常の御殿である。荒海障子の西南に當る。

本文「北」とあるはいかが。荒海障子の北、北階の東面なる戸を脇戸といふから、一本に脇戸とあるのが正しいか。鳴板よりは脇戸の邊は見えるが、萩戸は見えないといふ。

【別當惟方】 藤原惟方。頼頼の第二子、光頼の弟。永治・平治の間、累進して檢非違使別當となり、從三位に進んだ。甥藤原信頼が、その弟信俊の爲に惟方の女を娶つた

ので親密である。信頼は事を擧げたとき、深く惟方と結託した。既にして信頼は、二條天皇及び後白河上皇を幽し奉るに及び、惟方等に命じて二宮の舉動を窺はせた。而して機務は皆惟方と謀つた。會、兄光頼がその不義を詰問したので悔悟し、（本文参照）藤原經宗と謀を合はせ、夜に乗じて乘輿を奉じて大内を出で、平清盛の六波羅邸に幸せしめ奉つた。

亂の平いだ後、その母が天皇の乳母であつた關係で親任を蒙り、漸く政事に參與し、藤原經宗と共に稍、朝權を弄した。時に天皇は、上皇が院政を行はせられるのを見て樂み給はず、兩宮の間が頗る不和であつた。惟方は天皇に昵近して上皇に反抗し奉り、「庶事宜しく聖旨を取るべし、上皇に知らしめ給ふべからず。」と申し上げた。

上皇はこれを知りしめ給ひて大いに怒り給ひ「天皇なほ幼弱なれば、慮此に至らず、これ必ず惟方・經宗等吾が父子を離間するが故なり。」と仰せられて、清盛に勅して二人を捕へさせ、死に處しようとなされたが、藤原忠通の諫によつて中止し給ひ、惟方を長門に、經宗を阿波にお流

したされた。惟方は薙髪して配所に赴いた。仁治元年赦されて京都に歸つた。歿年未詳。

「檢非違使別當」は檢非違使廳の長官。檢非違使廳はふくく左右衛門府の内にあつたが、寛平七年に左右檢非違使廳を定め、天曆元年から右廳を廢して左廳のみとなされた。その長官を別當といひ、その下に佐・尉・志・火長・看督長・案主長・放免等の職員を置いた。

「檢非違使」は、古昔京中の非違の檢察を掌つた職。祭祀・法會などの場に臨み、或は道路・橋梁を巡視し、又糾彈・追捕・斷罪、聽訟等の事をも掌つた。

【承り定めたる事もなし】 君命を承つた事もなく、又何一つ相談してとりきめた事もない。

【誠やらん：人数にてあなる】 「自分も死罪に行はれる人数のうちに加はつてゐるとやらいふが、ほんたうの事かしら。」といふほどの意。

「誠やらん」は、「誠にやあらん」の約。「あなる」は「あるなる」の約。「あなる」の下に「は」を加へ、これを上の「誠にやあらん」につけて文を解すべきである。即ち左の通り。光頼も死罪に行はるべき人数にてあ(る)なる(は)、誠(に)やあらん。

【傳へ承るとききは】 死罪に行はれたると言ひ傳へられて、わが耳に承つてゐる人たちのこときは。

【當時の有職】 現代に於て、學問もあり、識見もある人々。

「有職」(イウシヨク、又、イウソク)は、ものしりの學者。元來有識と書くべきを、後世誤つて有職と書き、専ら故實典例に通ずることをいふに至つた。

宇津保物語に「父こそ下人なれ、子はいうそくにて。」徒然草に「いうそくのふるまひ、かへすく、感ぜさせ給ひける。」

【然るべき人々】 立派な人々。歴々の人たち。身分・家柄などの高い人々。

【面目】 メンボク。世人に對する名譽。ほまれ。めいぼく。めぼく。

枕草子卷四に「かばかりめんぼくあることなかりき。」

【先日】 この月十四日。同じき十四日に、別當惟方と(信頼卿が)同車して光保の宿所神樂岡に行き向つて、この首を實檢す。」と、平治物語「信西の首實檢の事」の條に出て

ゐる。

【車の尻】 車の後方。

「尻」は、あと。うしろ。後方。

枕草子卷九に「男車……たゞの人もしりのすだれあけて。」

【少納言入道】 藤原通憲。入道して圓空と號し、後信西と改めた。實兼の子。高階經敏の養子となつた。鳥羽・崇徳・近衛の三朝に歴仕し、正五位下、日向守に任ぜられた。宏才博覽、典故に練達し、兼ねて經學・天文・算道・佛教に通じ、詩歌・管絃にも堪能であつたが、その家が南家の儒流であるために榮達の望がなかつたので、怏々として樂しまず、又自ら劍がその首を貫く相あることを知り、遂に意を決して僧とならうとした。しかし日向入道と稱せられるのがいやさに、屢々鳥羽法皇に請うて少納言に任ぜられ、程なく薙髪した。

その後、妻が白河天皇の乳母であつた關係で、天皇の親任を蒙つた。保元の亂に策を獻じて用ひられた。爾來天下の事興り聞かざるはなく、權勢が日に隆んであつた。

二條天皇受禪の後も、政は上皇に出で、通憲の權威は益々振つた。時に權中納言藤原信頼も亦上皇に親眷せられた。しかし、通憲は信頼と仲が悪しく、信頼の近衛大將たらん事を望むや、上皇を諫めてその不可を陳じ、唐の安祿山の事實二卷を圖してこれを諷した。信頼は聞いてこれを銜み、つひに通憲を除かうと圖つた。平治元年(一八一九)信頼が兵を擧ぐるや、通憲は俄に大和の田原に奔つた。信頼はさりとは知らず、通憲の宅を焼き、多く婢妾を殺した。通憲は田原に赴き、穴を穿つてその内に隠れたが、やがて義朝の將源光泰に捕へられた。信頼は命じてその首を斬り、これを獄門に梟した。

著書に本朝世紀・法曹類林・日本紀註等がある。

【首實檢】 首の主の當人であるかどうかを實際についてしらべること。

【神樂岡】 カグラガヤカ。今の京都市上京區吉田町の東方、新黒谷の西方にある小丘。歌の名所。俗に吉田山といふ。山麓には官幣中社吉田神社があり、附近には京都帝國大學・第三高等學校等がある。

【以ての外】 思ひの外なること。意外。案外。想像外。

保元物語、官軍方々手分の條に「以ての外狼藉。」

【重職】 チユウシヨク。重責を負ふべき職務。おもいやくめ。大役。

山濤の文に「河南尹、京輦重職。」

王獻の文に「中書重職、掌詔命。」

【先蹤】 センシヨウ。既往の事蹟。先例。前例。

保元物語、新院御所各門々固の條に「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば。」

【穩便】 ヲンビン。事の便宜にしたがつておだやかなこと。おだやかでかどだたぬこと。

保元物語、新院御所各門々固の條に「大勢にてまかりのぼらんこと、上聞穩便ならず。」

【天氣】 テンキ。天皇の御氣色。天皇の御意旨。天機。勅諭。

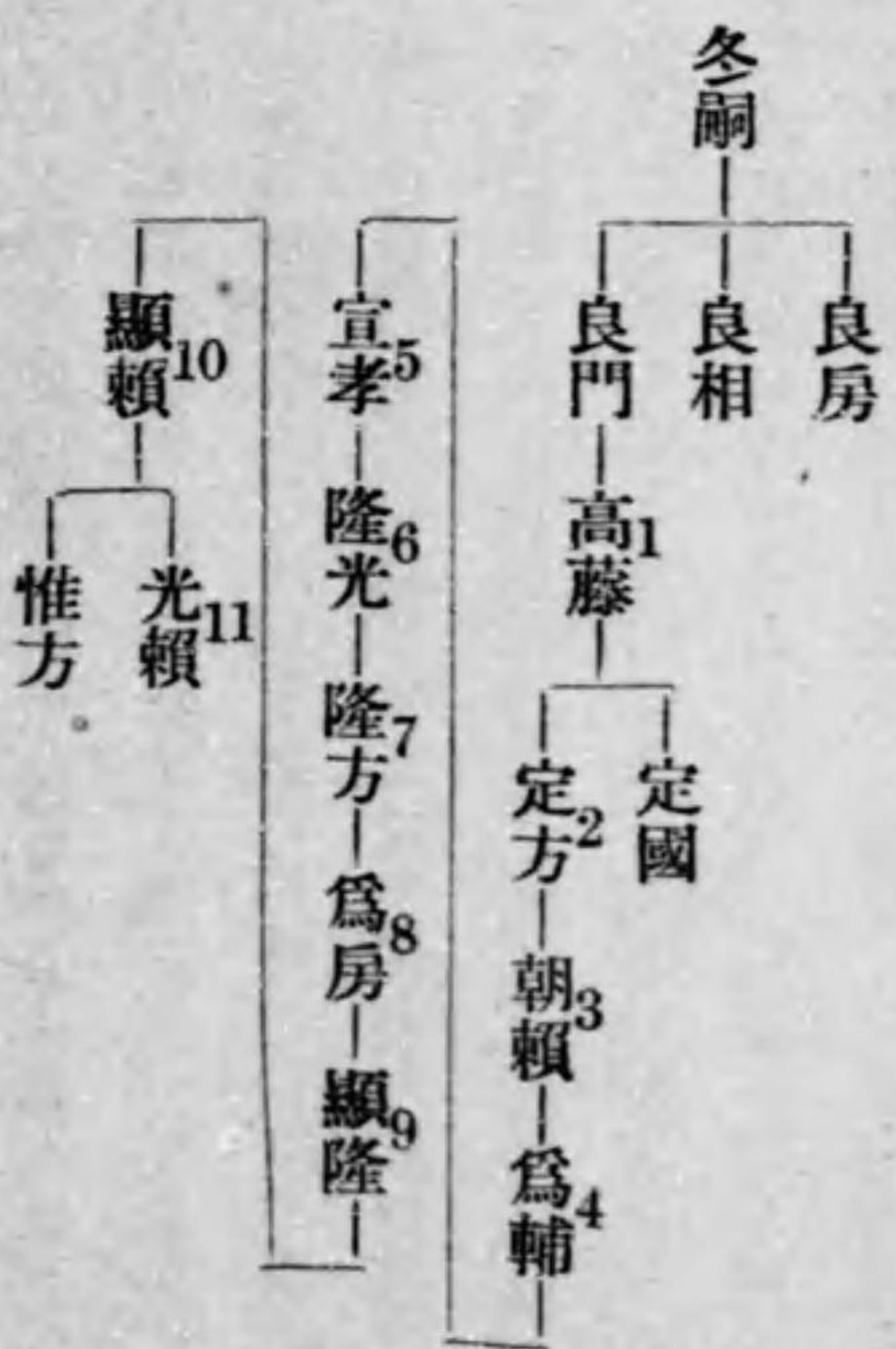
平治物語、信頼・信西不快の條に「君はなほげにもとおぼしめしたる御事もなく、天氣他に異なり。」

【一議】 一意見。一言。異論。

【曩祖】 ナウソ。先祖。「曩」は「サキ」(先)の意。

【勸修寺内大臣】 クワンジユジナイダイジン。藤原高藤。太政大臣良門の子。寛平・昌泰の間、累進して正二位内大臣となつた。世に勸修寺内大臣といふ。年六十三で薨じた。醍醐天皇の朝、その外祖たる故を以て正一位太政大臣を贈られた。(勸修寺)の條參看)

【三條右大臣】 サンデウウダイジン。藤原定方。高藤の子。延長中從一位右大臣に任ぜられ、右近衛大將を兼ね、大納言に至つた。世に泉大將といふ。延喜六年(一五六六)薨じた。年四十。



【延喜の聖代】 醍醐天皇の御代。延喜は同天皇の御代の年

號。(一五六一—一五八三)

醍醐天皇は、第六十代の天皇。御諱は敦仁(アツヒト)。

世に小野帝又は延喜の帝とも申す。宇多天皇の長子。仁和元年御降誕。寛平九年御即位。藤原時平と菅原道真とが左右大臣として輔佐し奉つたが、道真が太宰権帥に左遷された後は、時平が専ら政務に當つた。御治世の間に、三代實録・延喜格式並に最初の勅撰たる古今集が撰進された。延長八年(一五九〇)崩。壽四十六。

天皇は勵精治を圖りたまひ、百姓をあはれみたまうた、嘗て寒夜に御衣を脱して民の凍餒をしのばせたまうた御仁徳は今なほ人口に膾炙してゐる。

「聖代」とは、聖天子の天下を治めたまふ御代。ひじりのみよ。聖世。

陸雲の文に「照光聖代。」

保元物語、後白河院御即位の條に「忠あるものを賞しおはしますこと、聖代、聖主の先規にたがはず。」

【君既に十九代】 醍醐・朱雀・村上・冷泉・圓融・花山・一條・三條・後一條・後朱雀・後冷泉・後三條・白河・堀河・鳥羽・崇

徳・近衛・後白河・二條の十九代。

【臣又十一代】 前の「三條右大臣」の條參看。

【徳政】 恩徳を下民に施す政治。善政。

左傳の隱公十一年に「既無徳政、又無威刑。源平盛衰記卷十一、靜憲と入道との問答に「通三の主、明一の君、いかでか御徳政に私を存じおはすべきなれども。」

【させる】 さしたる。これぞとさしていふべきほどの。和泉式部集卷上に「われもさぞ思ひやりつる夜もすがら、させるつきなき宿はいかにと」

【英雄】 公卿の家格の名。又、清華ともいふ。

攝録につぐ家柄で、三公及び太政大臣に任ぜられ、又大將とはなれるが、攝政・關白を兼ねることは出来ぬ。はじめは轉法輪・三條・菊亭・徳大寺・西園寺(以上閑院家)・花山院・大炊御門(以上花山院家)及び久我(久我家)の三流七家で、之を七清華・英雄三家・清華三家等と號したが、のち醍醐・廣幡の二家を加へて九家となつた。

【有道の臣】 イウダウのシン。正しい道を行ふ臣。

「有道」は道義のあること。又、その人。正しい道にかなつてゐること。又、その人。「無道」の對。

書經の武成に「惟有道曾孫周王發、將有天下、大正于商。」禮記の禮器に「昔先王尙有德、尊有德、任有能。」

【讒佞の輩】 ザンネイのトモガラ。佞辯を弄して他を讒言するともがら。人を讒言して長上にへつらふともがら。論衡に「讒以口害人、佞以事危人。」

後漢書の傳變傳に「速行讒佞放殛之誅。」

【さしもとがる】 非難せられること。「さし」は接頭語。

【御邊】 ゴヘン。同輩に用ひる對稱の代名詞。そこもと。そなた。貴殿。貴所。尊公。

平家物語卷一、鶴川合戦の條に「今度御邊をば一方の大將にたのむなり。」

【暴惡の臣】 バウアクのシン。無理非道の事を行ふ臣。こは藤原信賴をさしていふ。

【累家】 ルキカ・ルキケ。父祖代々つゞいてゐる舊家。歴代の舊家。

【佳名】 カメイ。よい評判。令名。美名。嘉名。

謡曲、八島に「弓矢を取つて私なし。然れども佳名は未だ半ばならず。」

【大貳清盛は云々】 十二月四日、太宰大貳平清盛は、宿願があるとして、子重盛を具して熊野参詣に出かけた。十日の夜、紀州切目の宿で六波羅の早馬が清盛に追ひ付き、九日の夜の三條殿焼討の事を注進した。清盛は重盛の勸に従ひ、直に都へ引き返した。

【熊野参詣】 クマノサンケイ。紀州の熊野三山におまゐりすること。

「熊野三山」とは、和歌山縣(紀伊國)東牟婁(ムロ)郡に鎮座する熊野坐(クマノニマス)神社・熊野速玉(ハヤタマ)神社・熊野夫須美(フスミ)神社即ち那智神社の總稱。古來熊野三所權現・熊野三社・三熊野などと稱せられた。そのうち熊野坐神社と熊野速玉神社とは共に官幣大社で、熊野夫須美神社は官幣中社である。而して熊野坐神社即ち謂はゆる熊野本宮は、家津御子(ケツミコ)神即ち素戔鳴命を奉祀した式内社で、崇神天皇の御代の創始にかゝり、古來屢々上皇・女院等の御幸があり、大臣以下庶民に至るまで、参詣するものが引きもきらなかつた。大祭は四月十五日。攝社や末社も頗る多い。これらを總稱して九十九王子といふ。中でも、秦の徐福の祠が最も名高い。

【切目の宿】 キリベのシク。今の和歌山縣日高郡切目(キリベ)村。こゝに、熊野参詣九十九所王子の一なる切目王子の社がある。

【家人】 ケニン。武家の臣下をいふ。家の子。家臣。始めは一族の人を單に家人、又は家子と稱したのが、後には一般にその家に仕へる人を稱するやうになり、家臣・家士をも、しかとなへるに至つた。

【そこばくならじ】 いくらもあるまい。「そこばく」は、數量を明らかに指し示さないでいふ語。いくらか。いくつか。そこばく。若干。

伊勢物語に「そこばくのさげものを木の枝につけて。」

【平家大勢にて攻めん】 この下に「信頼卿の滅されん」となどの句が省略されてゐることに注意させたい。

【時刻をやめぐらすべき】 多くの時間がかゝらうか(反語)たちまちにうちほろぼされるであらう。

【安穩】 アンワン。普通アンノンと發音する。やすくおだやかなこと。無事。無難。安泰。

晉書の顧愷之傳に「行人安穩、布帆無恙。」

古今著聞集卷十二に「われその用途を取らんと思はば、汝一人あんをんにあらせてむや。」

【灰燼の地】 クワイジンノチ。焼けて灰や燼(モエサシ)のちらばつてゐる地。焼野原。

「灰燼」は、はひともえさし。はひぼこり。

平治物語、三條殿發向の條に「烈しき風に吹立てられて、灰燼地に迸りければ。」

【朝家】 テウケ。朝廷。皇室。

保元物語、新院御謀叛思召立の條に「朝家の重臣、攝籙の器量なり。」

【自然の事もあらば】 自然意外の椿事でもあつたら。

【天下の珍事】 天下の一大事。

「珍事」は、「椿事」とも書く。思ひがけなき出來事。變事。一大事。

保元物語、白河殿義朝夜討の條に「先陣を争ひて既に珍事に及ばんとす。」

【王道】 ワウダウ。仁義をもととして國を治めること。王

者の民を治める正道。「霸道」の對。

書經の洪範に「無偏無黨、王道蕩々。無黨無偏、王道平々。」

【相構へて相構へて】 必ずく。

「構へて」は、必ず。きつと。決して。

生玉心中に「構へて人の名をいふな。」

【玉體】 帝王又は貴人の身體の敬稱。

漢書の王吉傳に「以稟弱之玉體、犯勤勞之煩勞。」

保元物語、後白河院御即位の條に「玉體も恙なくおはしませども。」

【思案せらるべし】 考慮せられよ。

「思案」とは、考へをめぐらすこと。かんがへ。思考。分別。考慮。

陸士衡の文に「思按之愈深。」〔按は「案」に通じる。〕

保元物語、爲朝鬼島渡の條に「最期の矢を手淺く射たらんも無念なりと思案したまふ。」

【主上】 シュジャウ。天皇の尊稱。かみ。うへ。至尊。

保元物語、三條殿行幸の條に「主上は御引直衣にて、腰輿に召さる。」

こゝは二條天皇を申す。

「二條天皇」は第七十八代の天皇。御名は守仁。後白河天皇の皇長子。康治二年（一八〇三）御降誕。久壽二年立皇太子。保元三年即位。永壽元年（一八二五）御位を六條天皇にゆづらせられて、二條の宮に崩御。壽二十三。その大御代を通じて、父上皇が院政をお執りになつてゐた。

【黒戸御所】 クロトノゴシヨ。清涼殿の北、黒戸上御局ともいふ。（挿圖参看）

徒然草に「黒戸は小松帝（光孝）位につかせ給ひて、昔ただ人にておはしましたし時、まさなごとせさせ給ひしを忘れ給はで、つねに營ませ給ひける間なり。御かま木にすすけたれば黒戸といふとぞ。」

【上皇】 ジャウクウ。天皇のその位を譲らせられた後の御稱。おりのみかど。太上天皇。太上皇。

こゝは後白河上皇を申す

後白河上皇は第七十七代の天皇。御名は雅仁。鳥羽天皇の第四皇子。即位の翌年保元の亂が起つた。在位二年にして御位を皇子二條天皇に譲つて院政を聽きたまひ、後、入道して法皇とな

らせられた。その御院政は後鳥羽天皇の御代まで、五朝三十餘年に及んだ。

延應元年（一八五二）崩。壽六十三。

【一本御書所】 イッポンノゴシドコロ。内裏の東門建春門を入つて南、侍従所・御書所の次にある。

大内裏圖考證六に「大内抄云一本御書所（在侍従所南）。……異本拾芥抄曰、御書所、建春門内、在侍従所南。」普通行はれてゐる書一本を別に寫して、天皇に進めまつる書を納め置く所であるから、かやうに名づけた。

【内侍所】 ナインドコロ。こゝでは神鏡を指す。これを内侍所といふは、その奉安の殿名による。朝廷の温明殿内に天照大神の御靈代として模造の神鏡を齎き祭つた所がある。そこは畏敬すべき所であるから賢所（恐所・尊所・畏所）といひ、又、内侍がこれを守護するから内侍所とも稱する。今は皇居に別殿を設けて奉安せられ、舊賢所は樞原新宮の神殿となされた。

【温明殿】 ウンメイデン。舊内裏の東側、綾綺殿と相並び、馬道を以て母屋に二分してある。その南部は即ち内侍所である。

【劍壘】 ケンジ。三種の神器の一なる天叢雲劍（草薙劍）と八尺瓊曲玉。

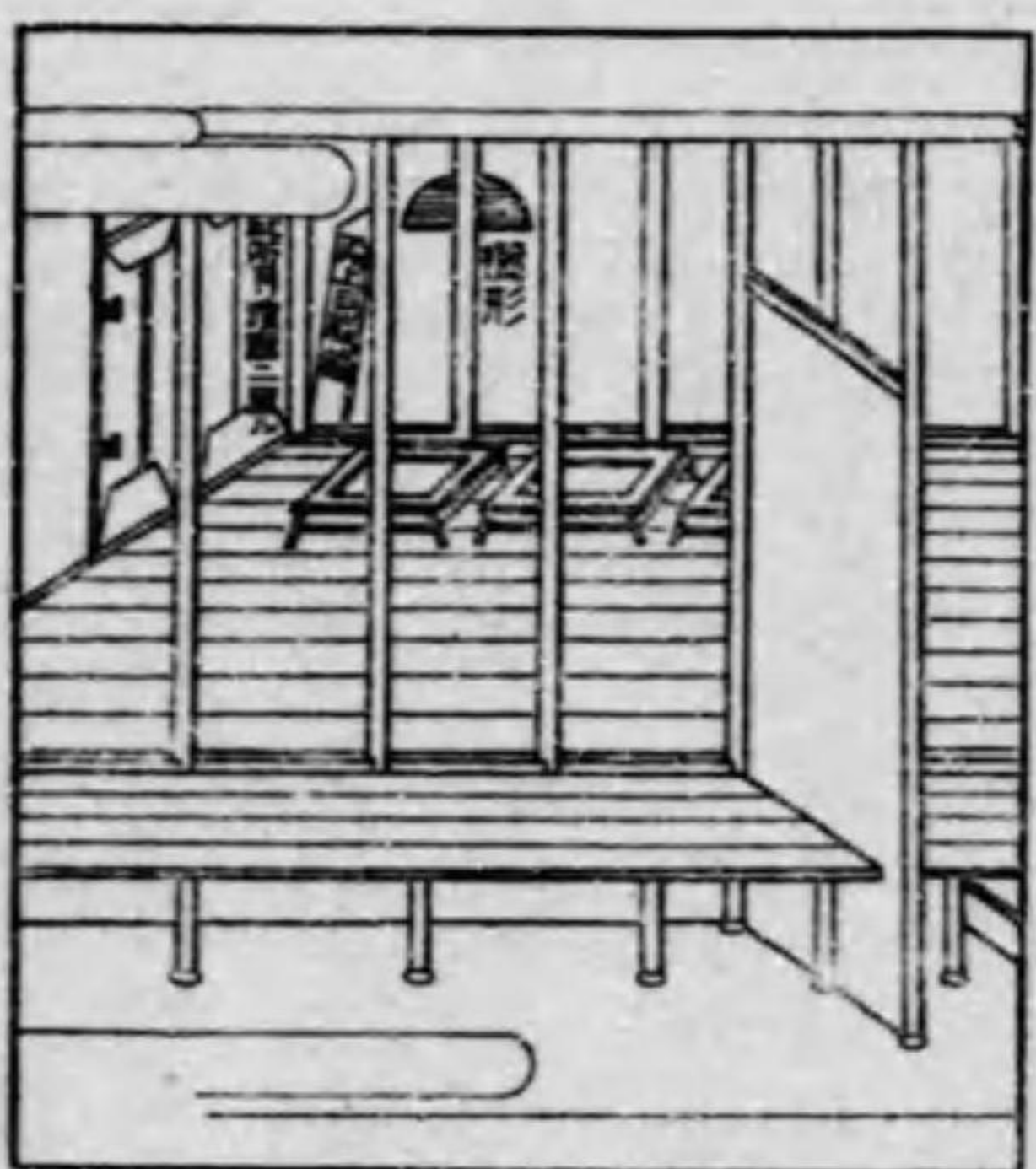
【夜の御殿】 ヨルのオトド。又、ヨンのオトド。又、夜御所。塗籠・塗藏。夜大臣。夜御殿とも書く。天皇の御寢所。清涼殿内の御間で、朝餉間の東、二間の西に在る。（挿圖参看）

源氏物語の桐壺の卷に「よるのおとどに入らせたまひても、まどろませたまふことなし。」

【朝餉】 アサガレヒ。「朝餉の間」の略。朝夕主上に御食事をする間。朝干飯間とも書き、御装物所ともいふ。清涼殿の西隅に在る。禁秘抄に「朝餉御膳（朝夕夜共）」とあるか

ら、「朝」は朝夕の意でなく、朝廷の朝で「みかど」の意であらう。枕草子卷一に「あさがれひのまに、うへはおはします。」

【楯形の穴】 古製の楯の



背の形をした穴。晝御座と鬼の間との間にある。女房などが殿上の事をのぞき見るために設けた穴である。(挿圖参看)

徒然草に「閑院殿の櫛形の穴は丸く、ふちもなくてありし。」

【その方様】 そのおかたたち。

「方様」は、人を敬つて呼ぶ稱。おかた。

【女房】 ニヨウバウ。(一)禁中・院中などで、一房を賜はつて住む官女の稱。(二)貴人の家に仕へる女の稱。(三)妻の稱。(四)轉じて婦人の稱。こゝは(二)の意。

枕草子卷一に「粥の木ひきかくして、家のごたち、女房などのうかゞふを。」

【かげろひ候ふらん】 ちらついでるのでございませう。

「かげろふ」は、「影」をはたらかせた語。ちらつくこと。

ほのかに見えること。

保元物語、義朝幼少の弟悉く失はるゝ條に「只今の御姿まぼろしにかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。」

【聞きもあへず】 聞きもをはらす。まだ聞きもをはらぬう

ちに。

【今はかくごさんなれ】 今は、このやうになつてしまつたかなあ。「かくごさんなれ」は「かくこそあるなれ」の約。

【末代】 マツダイ。降りおとろへた時代。末世。

源平盛衰紀卷五に「國は粟散邊土なり、時は濁世末代なり。」

【さすがに】 さうはいふものの。さはさりながら。

【正八幡宮】 安齋隨筆、武藏鏡卷に「古き軍談の冊子等に、武士の誓詞に正八幡宮も照覽あれといふ。八幡の本地は阿彌陀なりとて八幡大菩薩と號するに依つて、神と佛入り交り紛はしき故、本地を除き去り、正體の八幡大神宮といふ意なるべし。観音は三十三身に變化すといふに依つて、變化せざるとき正體を正觀音と號するに同じ。」

八幡宮の祭神。栗田寛博士は「神祇拾遺、神書鈔に正八幡神は即ち彦火々出見尊、比賣神はその妃豐玉姬也とあるが正説なるべし。」といつた。八幡神を應神天皇としたのは宇佐八幡の社家大神比義の假託に出で、宇佐託宣集に

【のろ／＼しげに】 忌々しげに。人を呪咀するやうにいまましくいふ義。

榮華物語、花山の卷に「久しからぬものなりなど、聞きにくく、のろ／＼しき事ども多かり。」

【人もや聞くらんと】 自分が兄光頼にの／＼しられてゐることを、はたの人が聞いてゐるであらうとおもつて。

【よにすさまじけにて立たれども】 惟方は大いに面目を失つて、實に不興げに立たれたけれども。この句の下に、「人に聞こえて惟方が面白を失することなど頓著なく」といふ程の意を加へ見るがよい。

【かつは悲しくて】 (一方には腹だたく)一方には又悲しくて。

「かつは」は、この事とかの事と二つにわたつたときにいふ語。

萬葉集卷三に「世の中し常かくのみとかつは知れどいたき心はしぬびかねつとも」

【宿業】 シツクゴフ。前世に犯した悪事。宿世の因業。保元物語、新院御遷幸の條に「十善の君、萬乗の主、

見えてゐる。平安朝の初期までは朝廷ではこれを認められなかつたが、貞觀年中、大安寺の僧行教が、武内宿禰の裔たる故を以て八幡神を石清水に奉遷し、公然祖先武内の仕へ奉つて應神天皇を祭つたのであると言つてから、その説が朝野に傳播するに至つた。しかし、朝廷では、なほ應神天皇とはせられなかつた。されど、世人は之より八幡神を以て應神天皇となすに至り、莊園や御厨を獻するものが漸くその數を加へ、郷土に八幡宮を勧請奉祀するやうになつた。これに加ふるに、清和源氏の諸將が弓矢の神として厚くこれを尊崇したので、終に日本全國に八幡宮が多く奉祀されるやうになつた。

【王法】 ワウボフ。佛教に於て佛法に對する語。帝王の執行はせたまふべき正法。國王の施したまふ政治、法令。平家物語卷一、殿下乗合の條に「世末になりて、王法の盡きぬる故なり。」

【前代未聞(ミモン)の不思議かな】 前代にまだ聞いたことがないほど奇怪千萬なことかな。

先世の宿業を遁れ給はず。」

【許由】支那堯時代の高士。史記の伯夷列傳に「堯讓天下於許由。許由不受。恥之逃隱。」

註に「正義曰、皇甫謐高士傳云、許由字武仲、堯聞下致天下而讓焉、乃退而遁於中嶽潁水之陽、箕山之下。堯又召爲九州長。由不聽。洗耳於花水濱。時有巢父牽犢欲飲之。見由洗耳問其故。對曰、堯欲召我爲九州長。惡聞其聲、是故洗耳。巢父曰、子若處高岸深谷、人道不通、誰能見子。子故浮游、欲聞其求其名譽。汚吾犢口。牽犢上流飲之。」

【上の衣】ウへのキヌ。束帶用の上着。袍。(挿圖參看) 和名抄卷十二に「袍、字倍乃岐沼。」

宇津保物語の吹上の卷下に「御供の人、例のうへのきぬ、櫻の下襲など着たり。」

【さしも】あれほど。これほど。

平治物語、義朝六波羅に寄せらるゝ事の條に「さしもの兵を、敵に首を取らすな。」

【ゆゝし】いみじくめでたいこと。けなげなこと。をゝし

いこと。あつばれなること。

古今著聞集卷十八に「誠にゆゝしかりける上手なり。」砂石集卷六上に「器量ゆゝしく見えければ。」

【打萎れてぞ云々】しをくとして出てゆかれた。

「しをる」とは、気がくじけはむこと。いきほひがおとろへよわること。

源氏物語の椎本の卷に「泣きしを。れておはするも。」

8 挿圖

光頼卿の参内

平治物語國會所載による。清涼殿上に於ける公卿會議の場面。右下に儼然として立ち、威容あたりを拂つて見えるのは、いふまでもなく光頼卿、上段に坐してゐるのは、信頼である。諸公卿が惶惑の狀、庭上に充滿した兵どもが驚嘆のさま、さながら目睹の思がある。

清涼殿

内裏圖所載の清涼殿の平面圖である。本文を讀ましむるに當つて参考とさせられたい。

一七 人臣の道

北 畠 親 房

1 解題

北畠親房著「神皇正統記」からその一節を採つた。

「神皇正統記」は全六卷。北畠親房が延元四年常陸の關城で筆を執り、興國四年更にこれに加筆したものである。神代から後村上天皇踐祚までの神系・皇統の由來を敘して史實を評し、吉野朝が正統である所以を明らかにし、神器の所在を論じたものである。なほ卷五「秋霧」の備考を參看せられたい。

2 作者

北畠親房 キタバタケ チカフサ。

吉野朝の忠臣。伏見天皇から後村上天皇に至る六朝に歴仕し、最も後醍醐天皇に信任せられた。その子鎮守府將軍顯家及び顯信を輔けて東北を經營し、又常陸の小田城・關城に在つて能く大敵に抗し、孤軍奮闘、朝威の恢復を圖つた。正平九年(二〇一四)大和の賀名生に薨じた。年六十三。

左に大日本百科辭典から引用して、稍、詳細な傳記を示さう。

「北畠親房は村上天皇の皇子具平親王の後、權大納言師重の子な

り。正應五年に生れ、從五位下より累進して、延慶三年正三位に敘せられ、參議に任じ、同四年十二月權中納言に轉じ、檢非違使別當、左兵衛督を兼ね、正和四年從二位に、同五年正二位に進む。

後醍醐天皇御即位の後、その徳望を以て深く信任せられ、吉田定房・萬里小路宣房と共に三房と稱せらる。元亨三年權大納言となり、淳和・養學兩院の別當を兼ね。同四年後醍醐天皇の第二皇子世良親王の傅となる。然るに元徳二年世良親王薨じ給ふ。親房慟

哭の餘り、髮を削り、官を罷めて宗玄と號す。時に天皇北條氏に快からず、竊に幕府を倒して王政を恢復せんと志あり。親房亦この議に與りしなるべきも、史闕けて詳ならず。尋いで元弘の變となり、天皇笠置に行幸あり。それより隱岐に遷され給ひしかど、諸

國の官軍起りて、元弘三年車駕再び京都に還り給ふ。親房また出仕し、從一位に敘せられ、大臣に准ぜらる。子顯家陸奥守に任ぜられ、義良親王を奉じ、出でて陸奥・出羽を鎮す。これ蓋し親房の策略にして、東方を經營しその根據を固めんとすの計畫に外ならず。足利尊氏の叛するや、新田義貞これを撃ちて利あらず、西走せしが、尊氏追撃して京に上る。天皇乃ち比叡山に幸す。親房・顯家共に義良親王を奉じて尊氏の軍に抗す。爾來義貞・正成等と共に畫策これ努む。天皇が吉野に行幸し給ひ、南北兩朝の分立を

見るに至りたるは、親房等の竊に計畫せしところにして、その根據地を伊勢・紀伊の間に据ゑ、吉野朝廷を擁護し、以て足利氏に對抗せしものなり。爾來親房伊勢に在りて、京都恢復の計畫を廻らし、顯家の陸奥に在るを促して上京せしむ。顯家、足利氏の軍と戦ひ、遂に和泉の石津浦に戦歿す。親房憂愁の間になほ遠大の策を畫し、伊勢大湊を中心として、力を水軍に致し、伊勢・紀伊の船主をして、北軍を牽制せしめたり。やがて義貞も戦死し、南軍愈々振はざるにより、自ら出でて東國の將士を糾合し、大いに北軍を惱ましんとし、懷良親王を九州に、宗良親王を東海道に、義良親王を東國に奉じ、自ら義良親王に従ひ、子顯信と共にこれに赴かんとす。偶々途上颯風に遭ひ、船四散し、義良親王は伊勢に着し給ひ、やがて皇太子に立たせられ、親房の船は常陸に着したり。常陸の南軍小田治久・關宗祐・下妻政泰等これを迎へ、小田城に入る。その後小田氏叛きしかば、關・下妻兩氏に依りて關・大寶の二城に入る。高師冬來り攻む。親房東奥に赴かんとするも、師冬これを重圍せるを以て、通じ難し。時に結城宗廣の子親朝、奥州の白河城に在り。親房忠孝の二道を以てこれを諭し、官職を與へてこれを招くも、應ぜず、却つて足利氏に款を納れたり。興國四年十一月兩城遂に陥り、關・下妻等戦死し、親房遁れて海路吉野に還る。親房吉野に在りて、後村上天皇を輔け、或は九州に懷良親王に通じ、或は楠木正行を立たしめ、或は瀬戸内海海賊を用ひて水軍を編成し、種々の策を策したるが如し。正平五年足利直義、師直と隙あり、吉野に歸順を乞ふ。親房假に和すべき

を主張す。爾來専ら兩軍の操縦につとめ、京都の恢復を圖る。勅して三后に准じ、輦車宮に入るを聽さる。七年天皇崩山に幸し、足利義詮を撃ちて之を走らしめ、親房及び子顯能をして、まづ京都に入りて諸事を決せしむ。九年四月十七日賀名生に薨す。年六十三。親房和漢の學に精しく、又佛典に通ず。小田在城中職原抄を著して、官職の由来を解説し、關在城中神皇正統記を草して、皇統の正閏を明らかにし、神器の歸するところを辨じ、以て勤王の軍を鼓舞せり。その史眼の卓抜なる、その文章の謹嚴なる、その評論の公平なる、後世史家の定論たり。その他古今集註等の著あり。元元集・東家秘傳の如きも亦親房の著なりと稱せらる。吉野朝が六十年の久しきを保ち、克く足利氏に抗するを得しは、實に親房の功にして、一世の盡忠苦心は他に比類なしといふべし。

3 編纂の用意

前課(光頼卿の参内)は日本臣道の眞髓的史實であり、本課はこれが理論的敍説である。しかも臣民の典型たる親房卿の血と涙とを以て綴られたる靈筆である。宜しくこれを熟讀玩味せして、日本臣道の眞髓を十二分に了得せしむべきである。

4 要旨

作者が抱懐する大義名分の大精神から、特に人臣たる者

のその分を自覺すべきことを切言した。即ちその分とは、こゝには忠節を盡くすは、人臣の道であり、分であるのに、その分に對して行賞を希望する如きは、臣下として假初にもあるべからざる義なることを大體の道理の上から、又、歴史の上の善惡方面の側から諄々反復して論じたのである。就中、言語が君子の樞機なることに留意し、世の中の衰ふるといふ事實が、人心の微妙なる動きの裡に醸されつゝあることを警めてゐるのは、最も重要視すべき點である。

5 概説

本課は、人臣としての本分を論じ、随つて人臣としての謹慎、行賞の際に於ける態度のあるべきやうをのべたものであるが、次の三節から成つてゐる。

第一節(一二五頁—一二六頁五行) 忠君は人臣の當然の道である。故に功名に誇り豪強を望むやうなことはなすべきではない。

第二節(一二六頁六行—一二八頁二行) 人臣として慎みの忘れてはならぬこと。殊に功にほこり、行賞について

輕々しい言語を發すべからざることをいふ。

第三節(一二八頁二行—一三〇頁) 論功行賞の際に於ける古人の慎みの例をあげ、今の世を嘆じ、後來を憂へた。

6 取扱上の注意

吉野朝時代の戦亂の渦中にあり、しかも正統の天皇に仕へてゐた親房卿が、親しく眺めた當時の武士の態度について、我が國體の基底の上に立つて、人臣としてのあるべきやうを批判したもので、その所論の正當なことはいふまでもなく、その烈々として燃えるところの、正義を顯し邪惡を破るの念をもつて、憚る所なく論斷して行つた忠君の熱情の紙面に溢れてゐる文である。我が文學の一系列に「試論」の文學を立てることが出来るが、その系列中また特に「嚴肅崇高な試論」の一體がある。その中ではこの神皇正統記の如きものが最も顯著なもので、かやうな文學の見地からも見逃してならない作品である。またこの論斷は我が國體を擁護し、國民精神を振起せしめるもので、國家的國民的文學として有する使命について

ては今更贅言を要しないであらう。それらの特色を十分理解するやうに導かれたいものである。

【本文には作者の筆癖といふべきか、文法的に一種の特徴が認められる。例へば

争ひ申すべきにはあらぬにや。
あしくなり行くを末世とはいへるにや。
この世はよく衰へぬるにや。
賞をも行はしめんがためにや。

これらの「や」は疑問の助詞である。疑問で結んだといふことは、讀者に對して省察を要求したのである。問題を提供して批判を促してゐるのである。随つて文勢は頗る重く、また作者が特に力を入れてゐるところである。これ等を見逃さぬやう吟味させたい。

あるべからぬことにこそ。
賢かりけるをのここにこそ。

これらは、その末に「あれ」などの語のあるべきを省略したのである。この省略も亦文勢を強めるためのものである。

その他

「けむ」「なむ」「らむ」等の推量を用ひて批判を促し、「けり」を用ひて詠嘆とし、
「ぞ」「かし」「こそ」を用ひて語勢を強める等、その烈々たる氣魄が、文の形によく見えてゐる點に注意させねばならぬ。

7 設問

- 1 この文では、「思ふ」と「言ふ」との関係がどんな風に考へられてゐるか。
- 2 「堅き氷は霜を履む」の故事を、今日、文章の上でも口語の上でも用ひられた例を知つてゐるか。
- 3 この作者の物事を洞察する力はどこで窺はれるか。
- 4 次の語について、今日とどんなに意義が變つてゐるかを言へ。

有りがたし。諺。賜はる。をかし。

8 釋義

【王土】ワウド。王者の統治する領土。

詩經の小雅に「溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。」

こゝでは、特に萬世一系の天皇によつて治められてゐる我が國を呼んだのである。

【忠を致し命を捨つ】 忠をその君に致し、一命を捨てて奉公の誠をつくす。

「忠」は、君に事へてその誠をつくすこと。

書經に「爲下克忠。」

孝經に「君子之事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、高才救其惡。」

【必ずこれを身の高名と思ふべからず云々】 忠君のために死を致すは、人臣としての當然の道であるから、これを身の高名であると思ふべきではない。併しその當然のつとめに對して、君の御政としては、後人を勵まし、また高名のあつた者の子孫をあはれみ給ふ思召しから賞を行はれるのである。だから、臣下としては、忠君の行爲に對する行賞を張合うて、不足など言ふべきことではないであらう。

【後の人】 後世の臣民たち。

【その跡】 人臣たる道をつくした人々の子孫。

【きほひ争ふ】 互にはりあつて、行賞を求めること。

「きほふ」は、互にはりあつて勇み立つこと。互にまけまといとはりあふこと。きそふこと。

宇津保物語の梅花笠の卷に「風にきほひて、ちどの物の音まじりてきこゆ。」

【あらぬにや】 この下に「あらむ」などの語を補つて見よ。

【させる功(イサヲ)】 さしたるてがら。これぞとさしていふべきほどの功績。

【過分の望をいたす】 身分不相應の望をかける。わが功に過ぎた賞を希望する。

【自ら危むるはし】 われとわが身を危うするはじめ。

「はし」は、はじめ。端緒。

【前車の轍を見ることは云々】 前を行く車が顛覆したその轍(ワダチ)を見て、後から行く車がそれに鑿み、顛覆をまぬかれるやう注意することは、誠になし難い事であらう。即ち先人の失敗を見て後輩がこれを再びせぬやう

に自らいましめることは、餘程困難なことであると見えると言つたのである。

「前車の轍云々」は、史記の「前車覆、後車戒。」より取つた句である。これと同意の語は左の諸書にも見えてゐる。

晏子春秋に「諺曰、前車覆、後車戒也。」

賈誼の新書五に「前車覆而後車戒。」

文選卷十六に「瞻前軌之既覆、知此路之良難。」

【有りがたき習】は「あることがむづかしい世のならひ。」といふ意味の「有りがたき」で、「辱い」といふ意味の「有りがたき」ではない。

【中古】歴史上の時代区分の一。上古と近古との間の時代。我が國では、孝徳天皇の大化の改新から源頼朝が幕府を鎌倉に開くまでをいふ。

【さのみ】そのやうにむやみと。さうばかり。

古今集の俳諧歌に「ねぎごとをさのみ聞きけむやしこそはてはなげきの森となるらめ」

【豪強】ガウキヤウ。たけくつよいこと。剛強。

【理】コトワリ。すぢみち。道理。

堀河百首、雜に「山がつの蘆の八重垣八重むぐらことわりなれや人のわけこぬ」

【鳥羽天皇】トバテンワウ。第七十四代の天皇。御諱は宗仁。堀河天皇の第一皇子。康和五年正月十六日御降誕。

嘉承二年七月踐祚。保安四年正月崇徳天皇に御讓位。同年二月太上天皇の尊號を受けさせられた。在位十六年。

爾後院中で政を聽き給ひ、御落飾（法諱空覺）の後、保元元年（一一八二）七月二日崩御。御壽五十四。

【制符】セイフ。禁制の旨を記した公文書。

侍所沙汰篇に「右博戯之科、禁制惟重、而近年非管背制符、剩以三田地爲賭之由有、其間、自今以後可被停止。」

元來「符」とは、唐の制から出たもので、主務省又は監督官廳からその被管の下級官廳へ下す公文書をいふ。我が國では、（一）太政官から八省又は諸國に下す太政官符（略して官符といふ）と、（二）八省又は彈正臺等から諸國へ下す省符と、（三）國から郡などの被管へ下す國符との三種がある。

【宣旨】センジ。勅旨を宣へ傳へること。又、天皇の口勅を宣へ傳へる公文書。内侍が勅旨を承つて藏人に傳へ、藏人がこれを上卿に告げ、上卿が外記に命じてその旨を記させて宣下するのが常である。

【召具す】召しつれること。つれてゆくこと。

娥歌加留多卷五に「七日まうでの乗物に、供人少々召具して。」

【肩を入れる、族（ヤカラ）】こゝでは、源平二家への肩をもつものども、即ち源平二家をひいきする兵士どもをいふ。

一本には「語らはる、族」とある。これによれば、「宣旨を受けて兵を召すといふやうな手續によらず、直接に源平二家に誘ひこまれてその部下につくやうな兵士ども」といふ意となる。

【いふかひなきこと】言つても甲斐のないやうな、あさましいこと。

源氏物語の夕顔の巻に「心のうちにいふかひなく悲しきことをおぼすに。」

【諺】コトワザ。こゝは、いひぐさ、慣用語、常套語などの意。

【軍にかけあひ】軍におもむいて、敵とたゝかつて。

「かけあふ」とは、駈けて行つて、敵と出合つてたゝかふこと。對手となつて戦ふこと。

保元物語、白河殿攻落の條に「片桐小八郎大夫に、手取の與次ぞかけあひける。」

【家子】イヘノコ。私家の奴。家僮。

當流小栗判官卷三に「譜代の家の子鬼王を招き。」

【郎従】ラウジュウ。家臣。家來・従者。郎等。郎黨。

保元物語、白河殿攻落の條に「一家の郎従。」

古今著聞集卷十五に「源の有治が郎従なりけり」

【節に死ぬる類（タグヒ）】忠節のために一命を捨てたやうなものども。

「節」はみさを。忠節・節操・節義・貞節などと熟する。

左傳の成公十五年に「前志有之、曰、聖達節、次守節、次失節。」

史記の吳世家に「君子曰、能守節矣。」

【わが功におきては】 わが功に對しては。

【もしは】 「もししくは」に同じ。或は。又は。

源氏物語の明石の巻に「つれづれなる夕ぐれ、もしはものあはれなるあけぼの。」

【足るべからず】 「足るべくもあらず」の約。「足りさうにもない」といふ意で、「不足でござる」といふことを強くいつたのである。

【誠にさまで思ふことはあらじなれど】 本心からそれほどまでに思ふことはないであらうけれど。

【これより亂るゝはしともなり】 臣民どものかやうな態度（恩賞をきほひ争ふ態度）が、やがて世のみだれるいとぐちともなり。

【朝威】 テウキ。朝廷の御威光。朝廷の御威力。

保元物語、主上三條殿行幸の條に「朝威を輕しめ奉るもの、豈天命に背かざらんや。」

【言語は男子の樞機なり】 言語は男子にとつては最も肝要大切なものである。

易の繫辭上傳に「言行者君子之樞機。樞機之發、榮辱

之主也。言行君子所_レ以_レ動_レ天地也、可_レ不慎乎。」註に「樞謂_レ三_レ戸樞機謂_レ三_レ弩牙。」

樞は「戸のくるゝ」で、戸の開閉を掌り、機は「弩（イシュミ）のかけがね」で、張弛を掌るもの。

轉じて、一般に物事の肝要なところをいふ。かなめ。要點。樞要。

【あからさま】 かりそめ。ついちよつと。

古今著聞集卷五に「あからさまと思ひけるに、その年も空しく暮れにければ。」

【君をないがしろにし】 君をかるんじあたり奉つて。

「ないがしろ」は、あれどもなきが如くすること。かるんじあなどること。蔑如。侮蔑。輕蔑。

宇津保物語の藏開の卷、中に「たび／＼文やりなどするは、いとないがしろにはあらぬなめり。」

【あるべからぬことにこそ】 あるべからざることである。あるべきことではない。

「こそ」の下に「あれ」などいふ語が省かれてゐる。

【堅き氷は云々】 厚く堅い氷は突然に出来るものではない。

い。先づ霜のおりる寒さを経て、次第々々に嚴寒に到つて、はじめて氷も厚く堅くなるのである。物事が漸次に進行して遂にその極に達することを譬へて言ふ。

易經の上經に「初六、履_レ霜_レ堅_レ氷_レ至。」

【亂臣賊子】 國を亂す臣、親をそこなふ子。不忠不孝の人をいふ。

孟子の滕文公下に「孔子成_レ春秋_レ而亂臣賊子懼。」

【末世】 マッセ。末代或は末法の世。末法時などといふ。もと佛教の語で、釋迦の滅後を三つの法時に分ける。

佛滅後五百年は佛弟子たちも生存し、教の正しく行はれる正法時である。

次の千年は、佛弟子は既にないが、未だ佛の教は盛に行はれる象法時である。

次の萬年は佛の教が漸く行はれず。諸惡事の充滿する末法時である。

末法時を末世・末の世・末代などと呼ぶ。

源平盛衰記卷三十九、重衡請_レ法然坊_レ條に「末代末世の重罪のともがらも、唱へば必ず來迎に預るべし。」

【許由・巢父】 キ・イウ・サウフ。共に支那太古の隱逸。

帝堯は許由の賢を慕うて帝位を譲らうとしたが、もとより名利の念が無いので、穢ららしい事を聞いたとて、潁川で耳を洗つた。巢父は牛を牽いてその川に來て水を飲ませようとして、許由が耳を洗つたことを聞いて、汚れたものとしてゐたが、牛にも飲ませなかつたといふ。

【帝堯】 テイゲウ。支那太古の王。五帝の一。名は放勳。

帝嚳の子。陶唐氏と號した。帝嚳に繼いで位に即き、山西の平陽に都した。人格が極めて高く、世に聖人と稱せられた。

その治世と次の舜の治世とは、天下泰平、萬民鼓腹、世に理想的治世として仰がれてゐる。

【潁川】 エイセン。今の河南省許州府臨潁縣治。

【五臟六腑】 ゴザウロップ。漢方醫の語。五臟とは、心臓・肝臓・肺臓・腎臓・脾臓をいひ、六腑とは、大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱をいふ。

漢書の藝文志に「五臟六腑之病方、凡_レ三家。」

澁鯉出世瀧徳卷上に「おためにならうと存する一念、

五臟六腑にしみこんで。」

【能く思ひならはせる故にこそあらめ】よく思慮をめぐらして、なるほどと合點したからであらう。

「思ひならはす」とは、思ひ得ること。思ひさとること。伊勢物語に「君によりおもひならひぬ世の中の人ほこれをやこひといふらむ」

【百姓】ヒヤクセイ。天下の人民。衆民。

詩經、小雅に「群黎百姓、偏爲爾德。」

【六十六人にて塞がりなむ】昔の日本は六十六國二島に分たれてゐたから、かやうにいつたのである。

【五百九十四郡】延喜の民部省式には五百九十郡、和名抄には五百九十三郡、拾芥抄には六百三郡とある。

【日本の半ばを志し】日本國の半分をわが領地にしたいと志し。

【みながら望まば】日本全部をわが手に入れたいと望んだならば。

「みながら」は、みなながらの意。残らず。悉く。悉皆。

古今集、雜上に「むらさきのひともとゆるに武藏野の

草はみながらあはれとぞ見る」

【帝王は何處を知らせ給ふべきにか】天子は、いつたい、どこを御統治あそばさるべきであらうか。

「知らず」は、治めたまふこと。領したまふこと。統治したまふこと。

萬葉集卷十八に「神のみことのみよかさね、天の日つぎとしらしくる君のみよ〜。」

【謀反】ムホン。君國を危うすることををはかること。君主にそむいて兵を起すこと。

史記の高祖本紀に「人有上變事告楚王信謀反」と

源平盛衰記卷十九、文覺頼朝に對面する條に「疾く疾く謀反をおこし、平家を討ちほろぼして父の恥をも雪ぎ、又國の主ともなりたまへ。」

【將門】マサカド。平氏。上總介平高望の孫。鎮守府將軍

良將の第三子。嘗て京都に出て攝政藤原忠平に仕へ、檢非違使たらんことを請うたが、顧みられなかつたので、下總に歸つて暴動をおこし、承平五年(一五九五)伯父常陸大掾平國香を攻めてこれを殺し、又、事を以て相怨め

る平良兼と戦つてこれを破り、近隣の諸國を略した。天慶二年(一五九九)武藏權守興世王と謀つて偽宮を下總の猿島に建て、百官を設けて自ら新皇と號した。翌三年朝廷では藤原忠文を征夷大將軍に拜してこれ討たしめたが、その到らざるさきに、國香の子貞盛及び下野の押領使藤原秀郷に攻められて誅に伏した。

【比叡山】ヒエイザン。京都府(山城)と滋賀縣(近江)とに跨る名山。略して叡山ともいふ。山路は概ね古生層より成り、京都市東面の諸山中最も人目を惹く。山上に著名な延曆寺がある。近年京都方面からも坂本方面からも鋼索鐵道が設けられて登山が容易となつた。山上には空中ケーブルカーもある。この山は小禽類の蕃殖地として名高く、天然記念物に指定されてゐる。

【大内】オホウチ。又ダイダイ。大内裏。皇居。禁中。禁闕。

千載集、賀に「二條院の御時、大内におはしまして、はじめて花有喜色といへる心をよませたまひけるに。」

【漢の高祖】カンのカウツ。支那前漢の第一世。姓は劉、名は邦、字は季。沛の人。秦末の騷亂に乗じて兵を擧げ、咸陽を陥れて秦を滅し、楚の項羽から漢王に封ぜられたが、次いで項羽と天下を争ひ、蕭何・張良・韓信の三傑の力によつて項羽を破り、帝位に即いて國を漢と號した。在位八年。

【蕭何】セウカ。支那前漢開國の功臣。沛の人。高祖起るに及んでこれに従つた。やがて高祖の咸陽に入るや、秦の圖籍を收めて天下の險夷、戶口の多少等を知り、高祖の漢王となるや、丞相に拜せられ、韓信を薦めて大將に拜した。高祖が楚の項羽と戦ふや、常に關中を守つて、その民を安んじ、兵員・糧食を高祖に送り給して後顧の憂なからしめた。天下平定するや、論功第一を以て鄼侯に封ぜられた。景帝の二年卒。漢の律令は多くその制定に係るといふ。

【張良】字は子房。父祖以來韓の五世の相であつたが。韓が秦に亡された後、良は私財を投じて客を招き、力士滄海君を得、百二十斤の鐵椎を作り、始皇帝の東遊の時、

博浪沙でこれを狙撃したが、中らなかつた。始皇帝は大いに怒つてその犯人を嚴重に搜索した。そこで、良は姓名を變じて下邳に匿れた。その際、偶然にも黄石公から太公の兵法を傳へ得た。後十年を経て陳勝等が叛するや、良は少年百餘人を集めて楚の假王の景駒に従はうとしたが、途中留の地で沛公に會してこれに屬し、屢々太公の兵法を以てこれを説いて用ひられた。沛公が項梁と相談して楚の懷王を擁立した時、良は梁に説いて韓の公子成を立てて韓王となし、自らその申徒となり、韓の故城を攻略し、又沛公にも従つて秦の地を略し、遂に咸陽に入つた。漢の元年沛公が漢王となるや、良をして項伯を介して項籍に漢中の地を得んことを請はしめた。項籍がこれを許したので、漢王は直に漢中に都した。良はこれを機會に韓に歸らうとして、王の許を辭した。辭去の際良は王に告げ、王をして蜀の棧道を燒かしめ、東して天下を争ふ心の無いことを示し、以て項王の意を安んぜしめた。ついで項王が韓王を殺したので、良は間行して再び漢王に歸した。漢王は三秦の地を定めた時、良を封じ

て成信侯とした。ついで王は良の計によつて黥布・彭越を招き、韓信と呼應して楚軍を破つた。やがて漢王は終に籍を抜下に屠つて天下を統一し、帝位に即いて功臣を封じた。良は直接戰闘には與らなかつたが、帝は、籌策を帷幄の中に運らして勝を千里の外に決するは子房が功であると言つて、齊の三萬戸を與へようとした。良は之を辭して、留の地に封ぜられたい旨を請うて許された。帝をして雍齒を封じて人心を安んぜしめ、劉敬の言を用ひて洛陽に都させたのも皆良の獻策である。後、帝が太子を廢して戚夫人の所生たる越王如意に代らしめようとした時、良は呂后をして商山の四隱士の東園公・用里先生・綺里季・夏黄公を聘し、太子に扈從せしめて事無きを得た。ついで良は人事を厭ひ、赤松子に従つて遊ぼうとしたが、呂后が切にこれを止めたので果さなかつた。孝帝の八年卒。文成侯と諡した。

【三傑】 サンケツ。三人の豪傑。漢の高祖に仕へ、拜せられて大將軍となつた。爾來屢々戰功を立て、高祖の天下統一に與つて大いに力があつた。はじめ齊王に封ぜられ、次いで楚王に封ぜられた。後讒に逢つて淮陰侯に貶せられ、やがて呂后の爲に誅せられた。少時家貧しくして漂母に食を惠まれ、又屈辱を忍んで少年の胯下をくぐつた逸話は人口に膾炙してゐる。

【三傑】 サンケツ。三人の豪傑。

漢書の高祖紀に、「子房、蕭何、韓信、三者皆人傑也。」

【萬人に勝れたるを傑といふ】

白虎通に「賢萬人曰傑。」

淮南子、秦族訓に「智過三百人者、謂之豪、千人者謂之傑。」

【籌を帷帳の中にめぐらして云々】 幕の中にあつて作戰計畫をめぐらして勝を遠きあなたの戰場に得ること。

「籌」は、音チウ。はかりごと。籌略。籌謀などと熟する。

「帷帳」(キチウ)は、とばり。まく。たれぎぬ。

急就篇に「自上下而下覆、謂之帳、帳者張也。在旁蔽繞、謂之帷、帷者圍也。」

史記の高祖本紀に「夫運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如下子房。」

【留】 今の河南省開封府陳留縣治。

【あらゆる功臣云々】 韓信をはじめ、漢の高祖の功臣中、晩節を全うしないで、滅亡したものが甚だ多かつたことをいふ。

【頼朝】 源氏。鎌倉幕府第一代の將軍。義朝の第三子。平治の亂のとき年十三。父兄に従つて頗る戦功があつた。軍終に敗れて平宗清に捕へられたが、池ノ禪尼によつて死を免れ、伊豆の蛭ヶ島に流された。蟄居實に二十餘年。治承四年(一一八四〇)以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、伊豆を略した。やがて石橋山に敗れて安房に逃れ、再び勢を得て間もなく關東を服し、居を鎌倉に構へた。後弟範頼義經をして義仲を滅さしめ、尋いで平氏を一ノ谷・屋島に攻め、遂にこれを長門の壇の浦に滅した。幾もなく弟義經と隙を生じた。乃ちこれを機として諸國に

守護地頭をおき、自ら天下の總追捕使となつた。文治五年（一八四九）奥州に藤原泰衡を討滅して天下を統一した。建久元年入京して權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねたが、間もなくこれを辭して鎌倉に歸つた。同三年征夷大將軍に任ぜられ、正治元年（一八五九）正月薨じた。世に鎌倉殿、又は鎌倉右大將といふ。その墓は鎌倉町法華堂址の背後の丘陵にある。

【文治の頃】ブンヂのコロ。後鳥羽天皇の文治五年（一八四九）

【奥の泰衡】アウのヒデヒラ。みちのく即ち陸奥の豪族藤原泰衡。

「泰衡は」後鳥羽天皇の御代。陸奥押領使。秀衡の子。文治三年（一八四七）父の卒するや、その後をうけて陸奥押領使となり、兼ねて出羽を管した。當時義經は泰衡のもとにゐた。源頼朝は屢、泰衡に命じて義經を害しようとした。泰衡は父秀衡の遺命によつてこれを躊躇してゐたが、文治五年遂に意を決して義經を衣川に襲ひ、その首を鎌倉に送つた。頼朝はその命を聽くの遲きを辭として

その功を賞しないのみか、却つて兵を進めて陸奥・出羽を攻めた。泰衡は戦ひ敗れ、その叛將河内次郎に殺された。時に年三十五。

【追討】ツキタウ。賊徒をおつかけてうつこと。討手をさしむけて征伐すること。

後漢書の光武紀に「郡國追討、到則解散、去復屯結。」保元物語の三條殿行幸の條に「早く凶徒を追討して、逆鱗を休め奉らば。」

【平重忠】畠山次郎重忠。本姓は平氏。故に平重忠といふ。鎌倉時代初世に於ける幕府の武臣。武藏の人。父は重能。始め源頼朝の擧兵に應ぜず、三浦氏を衣笠城に攻めたが、後頼朝に降り、義經に従つて木曾義仲及び平氏を攻めた。又奥州征伐には頼朝の先鋒となつて功を樹てた。資性忠亮、頼朝に信任せられ、頼家を輔佐すべき遺命を受けた。たま／＼その子重保は、事を以て平賀朝雅と争つた。朝雅はこれを妻の母牧の方（北條時政の後妻）に訴へた。これが爲に重忠は遂に重保と共に北條氏の毒手に斃れた。時に年四十二。

【先陣】センヂン。(一)本陣の前にある隊伍。先鋒。さきぞなへ。さきて。(二)さきがけ。先登。

保元物語、義朝白河殿夜討の條に「官軍すでに寄せ候と申しもはてねば、先陣すでに馳せ來る。」

源平盛衰記卷十五、宇治川合戦の條に「唯今宇治川の先陣渡せるは、昔朱雀院の御宇承平に將門を討ち、勳賞に預りし下野國の住人倭藤太秀郷が五代の苗裔、足利太郎俊綱が子に又太郎忠綱、生年十七歳。」

【五十四郡】陸奥國五十四郡。

【長岡の郡】吾妻鑑には葛岡郡とある。

今の宮城縣(陸前國)玉造郡葛岡。

【直實】ナホザネ。熊谷直實。通稱二郎。平貞盛の裔。武藏の熊谷に住し、よつて氏としたといふ。源頼朝の擧兵に際し、大庭景親に従つてこれと石橋山に戦つたが、後頼朝に降つた。壽永三年（一八四四）源義經に従つて宇治川に木曾義仲と戦つた。又、一の谷に平氏と戦ひ、平敦盛の首を斬つた。戦後頼朝にふくむところあり、遂に意を決して京都黒谷の源空のもとに走つてその弟子とな

り、名を蓮生と改めた。承元二年（一八六八）寂。

【下文】クダシブミ。中古以來、宣旨の様式を倣うて、院・宮・權門・寺社・幕府の政廳、又は檢非違使廳・雜訴決斷所などから、その被管又は被攝の官衙・土地・人民等に下した公文書。

【剛の者】ガウのモノ。すぐれてつよいもの。剛勇な武士。

保元物語、白河殿夜討に「又なき剛の者。」

【奏聞】ソウモン。天子にきこえあげる。天皇に奏上すること。

太平記卷三十、吉野殿、相公羽林と和睦の條に「聖主萬歳の寶祚を仰せ奉るべしと、頻に奏聞をぞ經られける。」

【いみじき事と】「いかにも感心な事だ」となどの意。

「いみじ」は、はなはだし、すぐれたり、いちじるし、などの意。善惡に通じていふ。

中古文には、この語のみ用ひて、下にあるべきはずの「うれし」「かなし」などいふ語を省き、前後の文のいき

ほひによつてこれを知らせる場合が多い。本文も亦その例である。

【いかに心得てほめけむいとをかし】「どういふ考でほめたのであらうかと、本人どもの心のそこをはかりかねて、たいそうをかしい。」との意。本人どもが本気でほめてゐるのか、それとも口さきばかりほめてゐるのか、そのへんがわからぬので、かやうに書いたものとおもはれる。

【これまでの心こそなからめ云々】重忠や直實ほどの心は無からうとも、それに近い人が今の世に居たなら誠によいのであるが、さうでは無くて、機會があれば君を陥れ奉り、身の榮えを思ふやうな輩ばかりが多くなつた。

【ありし世】前あつたとき。昔。往時。

續後撰集、雜下に「照る月の雲居の影はよそながらありし世をのみこひわたるかな」

【東國の風儀】トウゴクのフウギ 關東地方の淳朴な風儀。

【東國】とは、關東地方。あづま。

宇津保物語の俊蔭の卷に「東國より都に、かたきある人むくいせんとおもひて。」

【風儀】は、ならひ、ならはし、行儀、作法。

【公家(クゲ)のふるき姿もなし】在京の公卿たちも、昔のけだかい氣風を失つてしまつた。

【公家】は、(一)おほやけ。朝廷。朝家。(二)公家衆(武家出仕の人々に對して、直に公家に仕へる人々の稱。)の略。堂上家。

こゝは(二)の意。

保元物語、官軍召集の條に「公家には關白殿下、内大臣實能。」

【いかになりぬる世にかと云々】世の中は、この末どう成りゆくのであらうかと、たいそうなげいてゐた連中もあらんと聞いてゐたが。

【中一年ばかり】北條氏が滅びてから、足利尊氏の謀叛にいたるまでの約一年間。この間政令は朝廷から出た。所謂建武中興である。

【一統】 イットウ。一つにすべ治めること。統一。

史記の始皇本紀に「今海内賴陛下神靈、皆一統爲郡縣。」

謠曲、調伏會我に「ことさら當時一統の、道もすぐなる文武の二つ。」

【天の下舉り集りて】 天下の萬民が悉く都に集つて。

【舉(コゾ)る】とは、ことごとく集ること。のこらすそふこと。

保元物語、新院御所各門々固の條に「音に聞ゆる爲朝見んとて舉りたまふ。」

【都の中はえくしくこそ侍りけれ】 都の中が、光りかゞやいてゐた。都の中に生氣が満ちてにぎやかであつたことをいふ。

「はえくしく」とは、たいそう映えて見えるさま。まことに光りかゞやいて見えるさま。

榮華物語、松下枝に「例の内わたりにも、墨染にて、はえくしくしきこともなし。」

9 挿圖

北島鶴房

先進繪像、玉石雜誌所載のものを寫した。

北島鶴房繪

七夕同詠 七夕契久和歌

雲のうへに年のあきをかぞふれば契もひさしほしあひの空
七月七日、七夕祭の日、他の人々と同じく「七夕久しきを契る」といふ題でよんだ歌。

一首の意は、「そのむかし牛星と織女星とが、遠い雲居の空で千年の契を結んだその秋を指折り數へて見れば、その契も、もはや随分と長く久しいことであるだらう。」

一八 俚諺論

大西 祝

1 解題

「大西博士全集」中の俚諺論の一部を採つたものである。この「俚諺論」はもと二篇あつて、(其一)が明治三十年一月の「太陽」に、(其二)が同年二月の「太陽」に載せられたが、後には併せて「大西博士全集」第七卷「論文及歌集」に收められた。本諺に採つたところは、(其二)の後半のみで、しかも、そのうち處處が省略されてある。こゝでは即ち俚諺の内容を研究すれば、その國民の歴史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等が知れるといふことを實例を擧げて説いたものである。(原文では、更に廣く俚諺についての問題が取扱はれてゐる。)

「大西博士全集」は大西祝博士の遺稿を、早稻田哲學會員である金子馬治外數氏の編纂したもので、第一卷論理學、第二卷倫理學、第三・四卷西洋哲學史、第五卷良心起源論及論集、第六卷思潮評論、第七卷論文及歌集の七卷にわかれてゐる。明治三十七年十二月、警醒社發行。

2 作者

大西祝 オホニシ ハジメ。
 哲學者。文學博士。元治元年(二五二四)備前岡山に生れた。操山と號したのは、蓋しその郷里なる操山の名に取つたのである。始め京都同志社に學び、後帝國大學文科大學に入り、哲學を専攻した。卒業後東京專門學校(今の早稻田大學)講師となり、専ら哲學・倫理・論理等を教授して令名を馳せ、門下に材をなすものが多かつた。

後高等師範學校教授となつた。三十一年獨逸に留學し、病を獲て歸つた。ついで京都帝國大學教授に任ぜられ、三十二年七月文學博士の學位を受けた。同年十一月卒した。行年僅に三十六。

氏は實に頭腦の明晰と、學殖の富贍と、人格の高潔とを以て推され、學界の重鎮、論壇の雄將として一世に重んぜられてゐた人である。

3 編纂の用意

古來人口に膾炙してゐる俚諺の内容に關する諸般の知識を與へ、兼ねて各自の反省修養の資たらしめたいとおも

4 要旨

俚諺は民衆の哲學であり、詩である。しかも所謂哲人・詩人の思索的所産と異なつて、多くは民衆の體驗を基とし、その表現は、又永く廣く一般民庶の口にされ、洗煉されて來たものである。その國民の性情、理想、日常生活上のいろ／＼の事がらの機微を穿つてゐるものがあるのは全くこれが爲である。又時には古聖賢の語にも劣らぬ眞理と教訓とを含むものがあるのも亦これが爲である。本課は冒頭に於て、その俚諺の内容的價值を提言し、順次實例についてその提言を立證してゐる。その實例によつては、直に一々の俚諺の價值・本質を考察せしめ、延いては、一般に俚諺に對する意識を覺まし、これに對する研究的興味を深めるやうにすべきであり、又文章そのものについては、その論旨を透徹せしめる爲に自在に俚諺を引證しながら、しかも一種の典雅と流暢とを保たしめてゐるところに、學術的論文としての長所を認めさせたものである。

5 概説

第一節（一三二頁—一三三頁二行） 歴史上の事實・社會制度及び家族制度・宗教思想及び因果思想などを伺ふに足りる俚諺について。
 第二節（一三三頁三行—末行） 親子の關係をいつた俚諺について。
 第三節（一三四頁一行—二行） 自利の念を表した俚諺——一般に俚諺に於ける教訓について。
 第四節（一三四頁末行—一三五頁八行） 俚諺はよく物事を両面から見ていふものである。これが俚諺の警句と諷刺とに富む所以である。
 第五節（一三五頁九行—） 俚諺研究に關する作者の希望について。

6 取扱上の注意

■藤井乙男博士には「俚諺論」といふ一冊の書があり、又「諺語大辭典」の著もある。しかし、それらは、よほど後に出されたもので、この論文のものされたのは、「解

題」にも記したやうに明治三十年であつたことを先づ注意せねばならぬ。勿論、この論も「トレンチの小冊子」

(Trench, Proverbs and Their Lesson) から刺激されてもされたものであることは、作者自らの口吻でも知られるが、それにしても、作者が學者として常に我が文化の進展の爲にいろ／＼の問題を提供して、自ら卓見を示されたことには敬意を表さねばならぬ。

■俚諺そのものについての外に、尙、この文章から學ばしめることは具體的個々の事がらから、一般的抽象的斷言を導き出すといふ論理の作用についてである。といつても、論理學を授けることではない。つまり、具體的のことに抽象的の眞理の存在することを洞察させたいのである。個々の事實のうちに、一般的の思想の含まれてゐることを發見させたいのである。本文の作者は、その獨得の哲學的頭腦を以て、いかに屢、又いかに自由にその抽象作用、歸納作用を試みて、われらの前に示して呉れたことか。さういふ頭の働きがあればこそ、かういふ論文が書けるのである。一言半句の俚諺にも、無限の興趣が

働くのは實にその哲學的洞察があるからである。さういふ點に特に着眼させて見たいものである。

7 設問

- 1 こゝに擧げられたより外に各自が知つてゐる諺をあげよ。
- イ、武士に關しては、
- ロ、家庭に關しては、親子に關しては、
- ハ、利害に關して言つたものでは、
- ニ、すべて極端な言ひ方によつた例は、
- 2 次の諺の意義を問ふ。
- イ、鬼に鐵棒。
- ロ、瓜の蔓に茄子はならぬ。
- ハ、腐つても鯛は鯛。
- ニ、馬子にも衣裳。
- ホ、地獄で佛。
- ヘ、蛇蜂取らず。等々。

8 釋義

【俚諺】リゲン。普通にいふ「ことわざ」である。「ことわざ」は「言葉」の義であるといふ。普通一般に用ひられる比較的短い警句・秀句の類をいふ。俚諺は世界各国到處に存在し、多くは通俗の訓戒又は俗間の格言として使用せられる。その起源についてラッセル (John Russell) は「もと或人の頓才によつて起り、一般に眞理として認められ、遂に傳播するに至るもの」といひ、ジェローム (Saint Jerome) は「必要の徳義を作るために起つたもの」と述べてゐる。現今俚諺の最も多いのはイスパニヤで、その数は三萬を超えるといはれる。

我が國の俚諺の發生は頗る古く「雉子の頓使」の如きは既に古事記に見え「切削に鹽」重荷に小づけの如きは萬葉集に見え「一升瓶に二升は入らぬ」といふは枕草子に「死にし子みめよし」飯粒して鯛釣るの如きは土佐日記に見えてゐる。平安朝の貴族は俚諺を賤しみ、漢土の俚諺を轉用したが、鎌倉時代より室町時代に及んで大いに俚諺の數を増し、佛經・漢籍中ものを國語に譯出したものも多く出來た。江戸時代に至つて、我が國固有

の世事故談を基とし、種々の俚諺を生じた。明治維新後は更に西洋の俚諺を入れ、又世態に基く新俚諺も多く生じた。(百科大辭典に據る)

【聖賢】聖人や賢人。「聖人」とは、智徳が最もすぐれて萬事に長じた人。萬世の師表とあふぐべき智徳のある人。孔子・釋迦・クリスト・ソクラテスは世界の四聖と稱せられてゐる。

【賢人】とは、かしこき人。特に聖人に次ぐ徳のある人。顔淵や孟子の如きは支那の賢人と稱せられてゐる。

易經の下經に「大亨、以養聖賢。」
左傳の文公二年に「躋聖賢、明也。」

【大詩人】すぐれた詩人。

【詩人】とは、詩歌にたくみな人。

宋玉の九辯に「竊慕詩人之遺風兮。」

太平記卷一、三位殿御局の條に「關雎は楽しんで淫せず、哀しんで傷らず、詩人採つて后妃の徳とす。」

【アリストートル】Aristotle. 又アリストテレス (Aristoteles) といふ。ギリシャの大哲學者。マケドニヤの小邑

スタギラに生れた。父ニコマクスは有名な醫師である。幼時から父の教をうけ、十七歳の時プラトンの門に入り、親しく指導を仰いだ。



後、マケドニヤ王フィリッポに聘せられ、その世子アレキサンドルの師傅となつた。随つて研究上にも便宜を得、汎く當時の學説を涉獵し、終に廣大なる哲學系統を組織することが出來た。アレキサンドルの東征後、アテネに歸り、徒を集めて學を講じたが、大王の歿後、彼に快からざる徒輩に逐はれてアテネを去り、流浪中エウボイア島のカルチスに客死した。年六十三。

【希臘】ギリシャ。(Greece) バルカン半島南部の半島國。西はイオニヤ海、東はエーゲ海に面し、沿岸は出入に富んでゐる。もと歐洲最古の文明國で、實に歐洲文明の搖籃地である。

【ソロモンの箴言】ソロモン王の作にかゝるいましめのことば。舊約全書の中にある。勿論ソロモン王自身の作も

あらうが、その多くはイスラエル民間の俚諺であらうといはれてゐる。

【ソロモン】(Solomon) はヘブライ第三代の王。ダヴィツテ王の子。その治世は約西紀前九七〇年にはじまり、九三〇年に至る。非常な智者として知られ、「ソロモンの智慧」といふ語は今なほ傳はつてゐる。王は又諸國と通商して富を集め、文化を輸入し、頗る豪華な生活を營んだので、「ソロモンの榮華」といふ諺が、今に残つてゐる。王は又敬神の念に富み、イエルサレムに壯麗な神殿を築いた。南アラビヤのシエバ (Sheba) の女王がその盛名を聞いておとづれて來たことは、有名な話である。

【箴言】(シンゲン) は、訓戒となるべき金言。教訓となるべき格言。

【往古】ワウコ。いにしへ。むかし。上古。

漢書の武帝紀に「稽諸往古制宜于今。」
【イスラエル人民】太古パレスチナ (Palestine) 地方に榮えたセム (Sem) 族の一派。もとバビロニア地方に住んだが、西紀前二〇〇〇年頃酋長アブラハムに従つてカナ

アン (Canaan) 即ちパレスチナの地方に移住した。創世紀の傳説によれば、アブラハムの孫なるイスラエル即ちヤコブに十二人の子があつて、この民族が十二派に分れたといふ。その一派をユダヤといつたので、又この民族をユダヤ人とも呼んだ。

この民族は西紀前一五五〇年一たびエジプトに移住したが、同一三二〇年頃モーセ (Moses) に従つてその地を去り、久しく漂泊した後、カナアンの故郷に歸つた。ダヴィッド及びソロモンの相ついで王となつた頃、一時國勢は大いに榮えた。西紀前九五三年、十族はイスラエル王國を建設し、他の二族はユダヤ王國を創めた。後アッシリヤ及びエジプトの侵略を被り、西紀前七二二年、首都サマリヤは陥落した。かくて、イスラエル王國は遂にアッシリヤの屬州となり、二萬餘人の住民は悉くアッシリヤに幽囚の憂目を見るに至つた。

【蒐む】 アツむ。蒐は音シウ。集める義。「蒐集」などと熟する。

【内容】 ナイヨウ。内部に包含せられ又は存在してゐる實

質。なかみ。

【氣質】 天賦の性情。氣性。きだて。心だて。

【人情】 ニンジャウ。(一)人類の本能としてそなへてゐる情愛。なさけ。いつくしみ。(二)人心自然の情狀。こゝは(一)の意。

禮記の奔喪に「思慕之心、孝子之心也、人情之實也。」

【學術】 學問と藝術。又、學問。

唐書の杜暹傳に「其爲人少學術。」

【宗教】 シウケウ。人間が無限者、絶對者、永久なるもの、神的なるものに對して取る態度。かくの如き超絶的實在に歸依し、これを自己のうちに體驗する生活を宗教といふ。而してこの超越者を如何に解釋するかによつて種々の現實的宗教が生ずる。世界におけるおもな宗教は、佛教(信仰者一億五千萬)・基督教(信仰者六億八千二百萬)・ムハメッド教(信仰者二億九百萬)・ユダヤ教(信仰者一千五百萬)・印度教(信仰者二億三千万)・儒教及び道教(信仰者三億五千萬)・神道(信仰者二千五百萬)等である。(「ワールドオルマナック」に據る。)

【社會制度】 社會の階級又は財産に關する制度。

「社會」は英語 (Society) の譯語。形式的には意思による人類の結合をいふ。この定義に従へば、一般社會の外、學生社會・役人社會等、特殊な社會を含めることが出来る。社會學では、普通に人類の協力關係であると説明される。即ち共同生活をなす人類の團體及び組織の謂である。

近思錄に「鄉民爲社會、爲立科條、旌別善惡、使有勸有恥。」

【生活の理想】 生活の最高目標。

「理想」は、英語 (Ideal) の譯語。意志が努力して到達すべき最高目標をいふ。眞・善・美等は即ち是である。理想は意志に従つて行爲により實現さるべきものであるが、その完全な實現は人間には許されない。但し普通にはより具體的に解せられ、具象的模範の意に用ひられる。

【花は櫻木人は武士】 又「花は櫻に人は武士」ともいふ。花の中では櫻が一ばんめでたく、人の中では武士が一ばん立派だといふ意の諺。

一休の狂歌に「人は武士柱は檜の木魚は鯛小袖は紅梅

花はみよしの」

假名手本忠臣藏に「花は櫻木、人は武士と申せども。」

【武士は食はねど高楊枝】 武士は衣食に窮しても、なほ高尚に構へてゐるといふ意の諺。その氣品の高きをいふ。

和訓栞に「たかやうじ」は鷹楊枝の義。手一束にして水を吹く時に用ふといへり。世諺に「くはねどたかやうじ」といふこれなり。「鷹は飢ゑても穂を啄まず」といふに同じ意なり。」とあるが、意味がよくわからぬ。

普通には高く楊枝をつかふ意に用ひてゐる。

和歌民のかまどに「さむらひ食はずと高楊枝。」

孟子の滕文公上に「無恆産而有恆心者、惟士爲能。」

水滸傳、第一回到「大蟲不喫腐肉。」

【武士は相見互】 プシはアヒミタガヒ。武士は相互に同情の念を有せよとの意。

弓勢智勇湊に「あゝこれ氣の短い、いかさま武士は相見互、さやうならばとさし出す背中。」

「相見互」とは、互にたすけあふこと。

心中天網島、卷中に「女は相見互の事。」

【大光彩】ダイクウサイ。大きな光彩。大きなひかり。

「光彩」は、うるはしい光。きらびやかな光。光輝。

【階級】カイキフ。地位の高下。しな。くらゐ。等級。

舊幕時代、我が國民は士・農・工・商の四つの階級に分れてゐた。そして、士はその階級の最上位を占めてゐた。

【泣く子と地頭には勝たれぬ】我儘横暴な者には敵しがたといふ意。往時地頭の壓制我儘と、嬰兒の泣き號ぶこととは、いかにともし難きより起つた諺。

「地頭」は、土地の頭領の意。後、鎌倉幕府の職名となり、莊園を管領して租税を徴收し、守護の指揮に従ひて軍役をつとめ、兼ねて兇徒・盜賊等を追捕して守護に交付することを掌つたもの。源頼朝平氏を滅すや、平氏の例に倣ひ、文治元年（一一八四）奏請して全国各地この職を置き、一族並に武勳ある家人を選んてこれに補した。承久の亂後、新補地頭の名稱が起り、之に對して以前ものを本領地頭と稱した。なほ數人で分領したところの地頭を總轄するものを總領地頭といひ、土地分領の割合によつて半分地頭・三分一地頭・一分地頭等の名稱が生じた。應仁の亂以後は多くこの所領を失つて、守護の家人となり、織豊時代以後は僅に郷村の主たるに止つた。

【歴史的敘述】レキシテキジジョジュツ。次第を追うて歴史

をのべいふこと。こゝは地頭の勢力の強盛であつたことを、歴史にもとづいてのべたててゐることをいふ。

【察知】サッチ。おしはかり知ること。推察して知ること。

【女に家なし】「女に定まる家なし。」女は三界に家なし。など、いづれも同工異曲の諺。

これは支那の儒教思想や印度の佛教思想から出てゐるらしい。

禮記の儀禮に「婦人有三從之義、無專一之道。故未嫁從父、既嫁從夫、夫死從長子。故父者子之天也、夫者妻之天也。」

超日明三昧經に「不可下以女身得成佛道。所以者何。女人有三事隔、五事礙。三事者、少制父母、嫁制、夫不自由、長大難。子。五礙者、一曰、不得作天帝釋、二不得作梵天、三不得作魔天、四不得作轉輪聖王、五不得作佛。」

【貞女は兩夫に見えず】貞節のある女は二人の夫をもたぬとの意。

説苑に、「王歎曰、忠臣不事二君、貞女不見二夫。」

義經記に「貞女兩夫に見えずといふ語にもはづれ、又世の謗をも思はれけれども、只三人の子を助けたため云々。」

【固有】コイウ。もとより有ること。

孟子の告子上に「仁義禮智、非由外鑠我也。我固有之也。」

【嫁が姑になる】今までいぢめられたものが、今度はいぢめる者となる意。

一休和尚の水鏡に「世の中の嫁が姑にはやなれば人も佛になるは程なし。」

狂言、成上りに「まづ媳が古うなると姑になると申しました。」

尤の雙紙に「よめが姑になるぞ程なき。」

【老いては子に従へ】年取つてからは、子のいふことを聞いて行動せよとの意。

心中二つ腹帯に「これ半兵衛、夜の短いに八つ立、くたびれもつゞいた。くつろいでお寝やれ。はあ、これ

は勿體ない。若い時の辛勞は買うてもせいと申します。御老體の養ひが大事、まづお休みなされませ、ほう、老いては子に従へとは得手勝手な諺、しからばいつて寝る程に、おつつけまどろみめされい。」

大智度論卷九十九に「一切女身、無所繫屬、則受惡名。女人之體、幼則從父母、少則從夫、老則從子。」

なほ、前の「女に家なし」の項なる「禮記の儀禮」の文を見よ。

【家族制度】國家の組織の單位として家族を認め、個人は家の構成分子として認められるに過ぎない制度。この制度を主張する立場を家族主義といふ。我が國は折衷主義で、家は法人でなく、隨つて權利義務の主體となることなく、自然人たる戸主が家の權利義務を代表する。

【さはらぬ神に祟なし】餘計なる事にみだりに手出しすな。つとめて係累を避けよとの意。こゝの神は、その氣に障れば祟があるなどいふ荒ぶる神をさす。土佐では「さはらぬ神に罰あたらぬ。」といふ。